伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

面縄（おもなわ）貝塚群

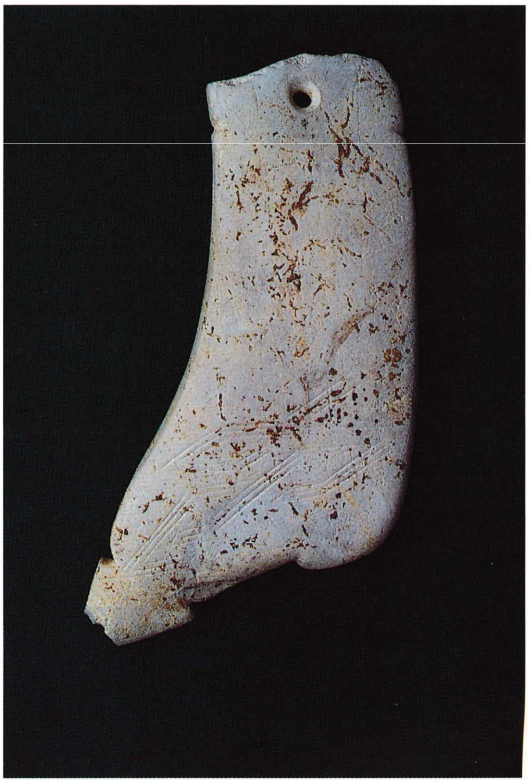
第１貝塚
第２貝塚
第３貝塚
第４貝塚

１９８５年３月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

面縄貝塚周辺（航空写真）

貝　輪



貝　製　品

序　　文

本町における埋蔵文化財の発掘調査は，昭和57年度に始まり，今回で３年目を迎えました。

面縄貝塚群は，「面縄式土器」を検出した貴重な埋蔵文化財包蔵地であります。

光の調査では，面縄第１・第２貝塚の範囲などその概要を公表してきたところであります。

今年度は面縄第３・第４貝塚を調査し，その概要をまとめると共に，第１・第２貝塚と合わせて総括的にまとめたものであります。

本報告書が今後の調査，研究の資料として活用されることを念願いたします。

おわりに，調査にあたっては文化庁，県文化課，土地所有者，地元作業員はじめ多くの方々の御協力をいただきましたので，ここに記して謝意を表します。

昭和６０年　３　月

伊仙町教育委員会

教育長　寛山成男

例　　言

1. 本報告書は，伊仙町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を得て，昭和57年度に実施した面縄第１・第２貝塚，昭和59年度に実施した面縄第３・第４貝塚の重要遺跡確認緊急調査報告である。

2. 調査の組織は，調査の経過の中で記した。

3. 本書で用いたレベル高は第２貝塚の地表面であり任意である。

4. 本書の遺物番号は，各貝塚の名称を先に後は通し番号とした。遺物番号と本文番号・図版番号は全て同一である。

例）　１○○１　通し番号

第１貝塚

5. 出土品は，伊仙町歴史民族資料館に保管・展示している。

目　　次

序　　文 …… 1
例　　言 …… 2
第１章　調査の経過 …… 7
　第１節　第１次調査 …… 7
　第２節　第２次調査 …… 9
第２章　位置と環境 …… 12
第３章　第１貝塚 …… 18
　第１節　調査の概要 …… 18
　第２節　層　　序 …… 18
　第３節　遺　　構 …… 23
　第４節　遺　　物 …… 24
　第５節　小　　結 …… 42
　第６節　自 然 貝 …… 43
　第７節　面縄貝塚出土の動物骨について …… 45
　第８節　第１貝塚出土の弥生時代人骨 …… 53
第４章　第２貝塚 …… 68
　第１節　調査の概要 …… 68
　第２節　層　　序 …… 69
　第３節　遺　　構 …… 69
　第４節　遺　　物 …… 70
　第５節　小　　結 …… 73
第５章　第３貝塚 …… 74
　第１節　調査の概要 …… 74
　第２節　層　　序 …… 74
　第３節　遺　　構 …… 75
　第４節　遺　　物 …… 77
　第５節　小　　結 …… 87
第６章　第４貝塚の調査 …… 88
　第１節　調査の概要 …… 88
　第２節　層　　序 …… 88
　第３節　東洞部の遺物 …… 95
　第４節　西洞部の遺物 …… 107
　第５節　小　　結 …… 125

挿　図　目　次

第１図　面縄貝塚と周辺遺跡…… 15
第２図　面縄貝塚地形図…… 16
第３図　第１貝塚トレンチ配置図…… 17
第４図　Ａ・Ｂトレンチ土層図…… 19
第５図　Ｃ・Ｄトレンチ土層図…… 20
第６図　第１洞穴遺構と土層図…… 22
第７図　人骨出土状況…… 23
第８図　第１洞穴出土土器…… 25
第９図　供献土器…… 26
第10図　Ａトレンチ出土土器(1)…… 27
第11図　Ａトレンチ出土土器(2)…… 28
第12図　Ａ－０区出土土器…… 29
第13図　Ｃトレンチ出土土器(1)…… 30
第14図　Ｃトレンチ出土土器(2)…… 31
第15図　Ｃ－５区出土土器…… 31
第16図　土製品…… 31
第17図　貝輪(1)…… 35
第18図　貝輪(2)…… 36
第19図　貝製品(1)…… 37
第20図　貝製品(2)…… 38
第21図　貝製品(3)…… 40
第22図　石斧…… 41
第23図　古銭拓影…… 41
第24図　第２貝塚トレンチ配置図…… 67
第25図　第２貝塚土層図…… 68
第26図　Ａ－２区住居跡…… 69
第27図　第２貝塚出土土器(1)…… 70
第28図　第２貝塚出土土器(2)…… 71
第29図　第２貝塚出土土器(3)…… 71
第30図　第３貝塚トレンチ配置図…… 76
第31図　第３貝塚平面及び土層図…… 77
第32図　Ａ－１区出土土器…… 78
第33図　Ａ－２区出土土器(1)…… 79
第34図　Ａ－２区出土土器(2)…… 80
第35図　Ａ－４区出土土器…… 81
第36図　第３貝塚出土石器(1)…… 83
第37図　第３貝塚出土石器(2)…… 84
第38図　第３貝塚出土貝製品…… 85
第39図　螺蓋製貝斧…… 86
第40図　第４貝塚地形図及トレンチ配置図 89
第41図　第４貝塚土層図…… 90
第42図　第４貝塚東洞部遺物出土状況…… 93
第43図　第４貝塚西洞部遺物出土状況…… 94
第44図　第４貝塚出土土器（東洞部１）… 97
第45図　〃　（〃２）… 98
第46図　〃　（〃３）… 99
第47図　〃　（〃４）… 100
第48図　〃　（〃５）… 101
第49図　〃　（〃６）… 102
第50図　第４貝塚出土石器（東洞部１）… 103
第51図　〃　（〃２）… 104
第52図　第４貝塚出土貝製品（〃１）… 105
第53図　第４貝塚貝製品(2)・骨格製品…… 106
第54図　第４貝塚出土石器（西洞部１）… 108
第55図　〃　（〃２）… 109
第56図　〃　（〃３）… 110
第57図　〃　（〃４）… 111
第58図　〃　（〃５）… 112
第59図　〃　（〃６）… 113
第60図　〃　（〃７）… 114
第61図　〃　（〃８）… 116
第62図　第４貝塚出土石器（西洞部１）… 121
第63図　〃　（〃２）… 122
第64図　〃　（〃３）… 123
第65図　第４貝塚出土貝製品（西洞部）… 124

表　目　次

第１表　面縄貝塚と周辺遺跡 …… 13
第２表　第１貝塚出土土器一覧表 …… 32
第３表　第２貝塚出土土器一覧表 …… 72
第４表　第３貝塚出土土器一覧表 …… 82
第５表　東洞部出土土器一覧表 …… 96・103
第６表　東洞部出土石器・貝製品・骨製品一覧表 …… 106
第７表　西洞部出土土器一覧表 …… 115・117・118・119・120
第８表　西洞部出土石器一覧表 …… 120
第９表　西洞部出土貝製品一覧表 …… 125

図　版　目　次

図版１　1.　第１貝塚より東を望む。　2.　Ｂ区調査風景 …… 129
図版２　Ａトレンチ西を望む。（発掘前）　2.　発掘風景 …… 130
図版３　1.　Ａ－０区鉄製品出土状態　2.　Ａ－Ｏ区古銭（開元通宝）出土状態 …… 131
図版４　1.　第１洞穴発掘風景　2.　第１洞穴測量中 …… 132
図版５　1.　第１洞穴兼久式土器出土状況　2.　第１洞穴石斧出土状態 …… 133
図版６　1.　蓋石　2.　蓋石と供献土器 …… 134
図版７　1.　箱式石棺墓　2.　供献土器 …… 135
図版８　1.　貝輪出土状況 …… 136
図版９　1.　貝輪出土状況 …… 137
図版10　1.　供献土器 …… 138
図版11　1.　Ａ－０区出土土器（兼久式・面縄前庭）　2.　Ｃトレンチ出土土器（兼久式）… 139
図版12　1.　Ａ－３区出土土器（兼久式）　2.　Ａ－５区出土土器（兼久式）…… 140
図版13　1.　貝輪　2.　螺蓋製貝斧 …… 141
図版14　1.　貝容器　2.　貝匙 …… 142
図版15　1.　貝製品・鉄製品・パイプウニ・有孔貝　2.　古銭「開元通宝」…… 143
図版16　1.　Ａ－４区断面　2.　住居址 …… 144
図版17　1.　住居址　2.　等２貝塚出土土器（嘉徳Ⅱ式）…… 145
図版18　1.2.　第２貝塚出土土器 …… 146
図版19　1.　第３貝塚遠景（南から）　2.　第３貝塚近景（南から）…… 147
図版20　1.　第３貝塚近景（東から）　2.　作業風景 …… 148
図版21　1.　第１洞穴作業風景　2.　４－２区作業風景 …… 149

図版22　1.2.　第3貝塚東側洞穴 …… 150
図版23　1.2.　遺物出土状況 …… 151
図版24　1.2.　穿孔貝製品 …… 152
図版25　1.　貝匙出土状況　2.　貝容器兼久式土器底部 …… 153
図版26　1.2.　第3貝塚A－1区出土土器 …… 154
図版27　1.2.　第3貝塚A－2区出土土器 …… 155
図版28　1.2.　第3貝塚A－2区出土土器 …… 156
図版29　1.2.　第3貝塚A－4区出土土器 …… 157
図版30　1.　兼久式土器木葉痕底部　2.　第1貝塚穿孔貝 …… 158
図版31　1.2.　第3貝塚出土石器 …… 159
図版32　1.　穿孔貝製品　2.　螺蓋製貝斧 …… 160
図版33　第4貝塚，遠・近景 …… 161
図版34　第4貝塚発掘風景・東洞部土層 …… 162
図版35　第4貝塚西洞部土層 …… 163
図版36　第4貝塚遺物出土状況 …… 164
図版37　第4貝塚西洞部遺物出土状況 …… 165
図版38　第4貝塚東洞部出土遺物（1） …… 166
図版39　第4貝塚東洞部出土遺物（2） …… 167
図版40　第4貝塚東洞部出土遺物（3） …… 168
図版41　第4貝塚東洞部出土遺物（4） …… 169
図版42　第4貝塚東洞部出土遺物（5） …… 170
図版43　第4貝塚東洞部出土遺物（6） …… 171
図版44　第4貝塚西洞部出土遺物（1） …… 172
図版45　第4貝塚西洞部出土遺物（2） …… 173
図版46　第4貝塚西洞部出土遺物（3） …… 174
図版47　第4貝塚西洞部出土遺物（4） …… 175
図版48　第4貝塚西洞部出土遺物（5） …… 176
図版49　第4貝塚西洞部出土遺物（6） …… 177
図版50　第4貝塚西洞部出土遺物（7） …… 178
図版51　第4貝塚西洞部出土遺物（8） …… 179
図版52　第4貝塚西洞部出土遺物（9） …… 180
図版53　第4貝塚西洞部出土遺物（10） …… 181
図版54　第4貝塚西洞部出土遺物（11） …… 182

第1章　調査の経過

第1節　第1次調査

1.　調査に至るまでの経過

面縄貝塚は，昭和3年発見され，その後，昭和5年から昭和31年まで数回に及ぶ発掘調査が行われ，土器の編年等南島の文化を解明する上で貴重であると評価されているが，奄美大島のサウチ遺跡，宇宿貝塚等の本格的発掘調査によって新しい事実が判明しつつあり，南島における重要遺跡の見直しのなかで，面縄貝塚は現在では，滅失状態にあるといわれていた。

このような経過の中で，面縄貝塚の取り扱いについて，遺跡の概要を把握するために確認調査を実施したらとの意向がでてきた。

伊仙町は，県教育委員会の指導もあって，貝塚の稀少さもふまえ確認調査として実施することを計画し，昭和57年度から，国，県の補助事業として，伊仙町教育委員会が実施した。

調査期間は，昭和57年10月4日より11月9日まで行い，その後の遺物の整理作業と報告書の作成は，県文化課に依頼した。

2.　調査の組織

調査主体者	伊仙町教育委員会	
調査責任者	教　育　長	樺　山　吉　郎
	社会教育課課長	勇　　宗　夫
	〃　主事	稲　村　忠　彦
	〃　〃	中　山　忠　良
	〃　〃	中　村　勝　憲
調　査　員	鹿児島県文化課主事	牛ノ浜　　修
	〃	堂　込　秀　人
	伊仙町歴史民俗資料館	四　本　延　宏
調査指導者	鹿児島県考古学会会長	河　口　貞　徳

なお調査企画において，鹿児島県教育委員会文化課長　猿渡侯昭，課長補佐　本田武郎，主幹　吉井浩一，主任文化財研究員　諏訪昭千代等の他管理係の指導・助言を得た。

また，確認調査の際，肥後考古学会会長　三島格氏，前九州歴史資料館考古課長　渡辺正気氏，九州大学助教授　西谷正氏，鹿児島大学助教授　上村俊雄氏には来島いただき，指導・助言を得た。梅光女学院大学　国分直一教授には収蔵庫で遺物の指導・助言を得た。

地元，徳之島高校の成尾英仁氏，天城町役場の吉岡武美氏，鹿児島県文化財保護指導委員　義憲和氏には，連日調査を手伝ってもらい，また指導・助言を得た。

地形測量は，中村勝憲，四本延宏が行った。

3. 調査の経過

発掘調査は，昭和57年10月４日から同年11月９日まで行ったが，経過は日誌抄により以下略述する。

10月４日（月）　９：30　亀徳港着　教育委員会へ。現地にて調査個所検討。用具点検。

10月５日（火）　発掘調査開始（第１貝塚）。遺跡周辺伐採，草払い。道具運搬。午後トレンチ設定（Ａトレンチ）。Ａ－１・３・５区調査。

10月６日（水）　雨の為作業中止。町立歴史民俗資料館にて遺物の確認。

10月７日（木）　Ａトレンチ調査。貝層検出（Ａ－１区）。Ｂトレンチ設定後調査。

10月８日（金）　Ａ・Ｂトレンチ調査。Ｃ・Ｄトレンチ設定後調査。

10月９日（土）　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。Ｂトレンチ終了。断面実測。Ｃ・Ｄトレンチ風葬骨検出，作業進まず。

10月10日（日）　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。

10月11日（月）　Ａ・Ｄトレンチ調査。Ｄ－１区Ⅱ層サラサバテイの貝輪検出。Ｄ－６区設定後掘り下げ。

10月12日（火）　Ａ・Ｄトレンチ調査。馬根小（５・６年），面縄小（６年）見学。

10月13日（水）　第１貝塚入口付近，Ｅトレンチ設定後調査。Ａ・Ｄトレンチ調査。文化庁岡本東三調査官，町長，泉県議員，青崎和憲主事来跡（14日まで）。

10月14日（木）　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。午後雨の為作業中止。資料館にて図面整理。

10月15日（金）　雨の為作業中止。資料館にて遺物整理。午後，三島格，渡辺正気，西谷正，上村俊雄氏来訪。資料館と遺跡にて指導・助言をうける。

10月16日～10月18日　休み

10月19日（火）　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。平板実測。

10月20日（水）　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。面縄小（３～５年）見学。

10月21日（木）　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。Ａ－３区拡張。

10月22日（金）　Ａ・Ｃ・Ｄトレンチ調査。第１洞穴トレンチ設定後調査。平板実測。

10月23日（土）　Ａ・Ｃ・Ｄ，第１洞穴調査。洞穴前庭部貝層検出。

10月24日（日）　第１洞穴，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。Ｃ－５区Ⅲ層山）口式土器出土。堂込主事本日まで。

10月25日（月）　第１洞穴，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。第１洞穴２区東側隅人骨出土。Ｃ－５区砂層より人骨，市来式土器，貝輪（オオツタノハ）出土。本日より河口先生調査に参加。義名山神社神主による御祓い。

10月26日（火）　第１洞穴拡張（人骨出土地を中心として）Ｃ－５区貝輪４点，Ｄ－６区調査。昭和初期調査の隣接地に２m×２mのトレンチ設定（Ａ－０区）。第２貝塚発掘調査のトレンチ設定。伐採。

10月27日（水）　第１洞穴の珊瑚礫に囲まれて人骨あり。Ｃ－５区瑚珊礫の間に貝輪出土。Ａ－０

区貝層より土器，貝製品出土。第２貝塚Ａ－２，Ａ－４区より嘉徳Ⅱ式土器出土。

10月28日（木）　雨の為作業中止。資料館にて土器の分類・復元。

10月29日（金）　Ｃ－５区貝輪とりあげ。Ａ－０区貝層調査。第１洞穴人骨脚部先端まで検出（保存状態極めて良好なり）。第２貝塚平板実測。河口先生「面縄貝塚について」講演（東部公民館）

10月30日（土）　第１洞穴人骨検出作業。Ａ－０区，Ｃ－５区，Ｄ－６区調査。第２貝塚Ａトレンチ調査。平板実測。河口先生今日まで。

10月31日（日）　Ａ－０区２貝層中より鉄製品，丸底出土。Ｃ－５区Ｕ層貝輪出土。Ｄ－６区調査。第２貝塚，嘉徳Ⅱ式土器出土。

11月１日（月）　第１貝塚人骨検出。Ｃ－５区貝輪出土。Ｄ－６区Ⅲ層調査。Ａ－０区２貝層下部より「開元通宝」出土。第２貝塚嘉徳Ⅱ・Ⅰ式土器が間層を狭んで出土する。

11月２日（火）　Ｃ・Ｄ・第２貝塚調査。平板実測。第１洞穴内の人骨検出の為，長崎大学医学部，松下孝幸講師，石田肇助手来跡。検出作業。

11月３日（水）　第１洞穴人骨取りあげ。Ｃ－５区平板実測。Ｄ－６区Ⅲ層調査，第２貝塚Ａ２区Ⅴ層嘉徳Ⅰ式土器出土層より住居跡検出。

11月４日（木）　Ｃ－５区調査。平板実測。断面実測。Ｄ－１区断面実測。第２貝塚トレンチ調査。

11月５日（金）　Ａトレンチ断面図。埋戻し用砂運搬。埋戻し。第２貝塚住居址清掃。

11月６日（土）　Ａ－０区調査。開元通宝出土。第２貝塚断面実測。埋戻し。

11月７日（日）　第１洞穴の石棺実測。断面実測。第２貝塚断面実測。埋戻し。

11月８日（月）　第１貝塚・第２貝塚とも断面実測後埋戻し。義名山神主による御祓い。発掘作業終了。

11月９日（火）　地形測量。遺物の搬出。発掘用具整理。
深い眠りから覚めた遺物と共に鹿児島へ。

11月10日より，収蔵庫にて整理作業。

第２節　第２次調査

1.　調査に至るまでの経過

面縄貝塚の調査に至るまでの経過は第１節のなかでも述べられており，第３・４貝塚についても国・県の補助を受けて伊仙町教育委員会が実施することとなった。なお調査については県教育委員会文化課に依頼し，昭和59年11月12日から12月９日まで実施し，その後の整理作業及び報告書作成は昭和59年12月20日から同３月まで行った。

2.　調査の組織

調査主体者　伊仙町教育委員会

調査責任者　伊仙町教育委員会　教　育　長　　寛山　成男
社会教育課長　　関　　昌弘（昭和59年８月まで）

調査責任者	伊仙町教育委員会	社会教育課長	米田　博重（昭和59年９月から）
	〃	社会教育主事	尾辻　輝男
	〃		稲村　忠彦（昭和59年８月まで）
	〃		中山　忠良（　〃　）
	〃		寿元　一美
	〃		国沢　健祐（昭和60年１月まで）
	〃		重田　吉明（昭和60年２月から）
	伊仙町立歴史民俗資料館	館長	義山　正市
	〃		郷　　久志（昭和59年８月まで）
			永久　圭司（昭和59年８月から）
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課		
		文化財研究員	吉永　正史
		主事	牛ノ浜　修
調査指導者	文化庁	調査官	佐久間　豊

なお，調査・企画において，県教育委員会文化課長　桑原一廣，同課長補佐　坂口肇，同主幹中村文夫，同主任文化財研究員　諏訪昭千代（昭和59年９月まで），同主任文化財研究員　向山勝貞（昭和59年９月から）の各氏のほか，同管理係の指導・助言を得た。

また，遺物については，鹿児島県考古学会長　河口貞徳氏の指導を受けた。調査中は町文化財保護審議会委員　義憲和氏，徳之島高等学校教諭　成尾英仁氏の協力・教示を得た。

3. 調査の経過

発掘調査は昭和59年11月12日から昭和59年12月９日まで実施し，出土遺物の整理作業を昭和59年12月から昭和60年３月まで実施した。発掘調査の経過は以下日誌抄で略述する。

11月12日（月）　教育委員会にて打合せ。現地にて調査地打合せ。
11月13日（火）　雨の為作業中止。資料館にて打合せ。用具点検。
11月14日（水）　第４貝塚周辺の伐採，西洞部トレンチ設定後掘り下げ。
11月15日（木）　第４貝塚東洞部トレンチ設定。
11月16日（金）　第４貝塚西洞岩陰にトレンチ設定。東洞掘り下げ。
11月17日（土）　遺物出土状況平板実測。
11月19日（月）　第３貝塚　遺跡周辺伐採。
　　第４貝塚　東洞Ｂ－３区拡張。西洞，嘉徳式土器出土。
11月20日（火）　第３貝塚　伐採
　　第４貝塚　東洞・西洞掘り下げ。平板実測。
11月21日（水）　第３貝塚　伐採　東部洞穴トレンチ設定。
　　第４貝塚　西洞Ａ－２・３区，面縄東洞式・面縄前庭式が混在している。
11月22日（木）　第３貝塚　東部洞穴前庭部掘り下げ。

第４貝塚　Ａ－２・３区Ⅲ層掘り下げ。平板実測。

11月26日(月)　第３貝塚　第１洞穴トレンチ設定，第２洞穴トレンチ設定。

第４貝塚　西洞穴，獣骨出土。

11月27日(火)　第３貝塚　第３洞穴トレンチ設定，洞穴下の貝殻散布地に２ｍ×２ｍのトレンチ設定後掘り下げ。（Ａトレンチ）

第４貝塚　Ａ－３区Ⅲ層，面縄東洞式，面縄前庭式の混在。

11月28日(水)　第３貝塚　Ａトレンチ，貝混土層あり，貝匙・兼久式土器出土。Ａトレンチ北側に拡張トレンチ。（１区・２区と名称）

第４貝塚　Ａ－２・３区，Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層になると前庭式が中心に。

11月29日(木)　第３貝塚　遺構（掘り込み）検出，土層断面実測。Ａ－１区Ⅳ層，面縄前庭式と嘉徳Ⅰ式Ａが共伴する。平板実測。貝塚の範囲確認のため，Ａトレンチを２ｍ×８ｍのトレンチに拡張し，Ａ－４区を掘り下げる。

第４貝塚　Ａ－２・３区，Ⅳ～Ⅶ層掘り下げ。

11月30日(金)　第３貝塚　Ａ－１区Ⅳ層掘り下げ，チャート片多し。

第４貝塚　西洞Ａ－０区掘り下げ。東洞Ｂ－３区掘り下げ。

12月１日(土)　第３貝塚　Ａトレンチ，洞穴部掘り下げ。

第４貝塚　Ａ－２・３区，Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ。東洞平板実測。

12月３日(月)　第３貝塚　Ａ－４区，混貝土層掘り下げ。平板実測。

第４貝塚　Ａ－６・７区　断面実測。

文化庁　佐久間豊調査官，文化課　向山勝貞主任文化財研究員来跡。現地指導（４日まで）

12月４日(火)　第３貝塚　Ａトレンチ貝層掘り下げ。

第４貝塚　Ａ－２・３区，Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ，平板実測。Ａ－６・７区埋め戻し。

12月５日(水)　第３貝塚　東部洞穴埋め戻し。

第４貝塚　Ａ－２・３区，Ⅶ層より鯨骨出土。平板実測。

12月６日(木)　第３貝塚　第３洞穴人骨出土のためトレンチ拡張。

第４貝塚　Ａ－０区獣骨実測，Ａ－６・７区埋め戻し。

12月７日(金)　第３貝塚　貝層掘り下げ。平板実測。

第４貝塚　西洞Ａ－０区埋め戻し，東洞断面・平板実測後埋め戻し，第４貝塚周辺地形平板測量。第４貝塚調査終了。

12月８日(土)　第３貝塚周辺地形平板測量。第１～第３洞穴実測終了。東部洞穴埋め戻し，Ａトレンチ平板実測。

12月９日(日)　Ａトレンチ断面実測。平板実測，埋め戻し，発掘作業終了。

12月20日より，収蔵庫にて整理作業。

第2章　位置と環境

面縄貝塚群は，鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在し，面縄川が兼久浦の浅い小湾に注ぐ，袋状地形の隆起珊瑚礁の崖下に形成された貝塚である。現在第1～第4貝塚まで報告がなされている。その他，伊仙町東公民館横の道路断面に貝層が，面縄東浜で県道横の窪田実喜祐氏宅には，貝層がみられ石器や土器，螺蓋製貝斧等の出土がみられる。

遺跡の所在する伊仙町は，徳之島の南に位置し，徳之島町と天城町とに境を接している。

徳之島の地形は，高さ200m付近を境として，山地と隆起珊瑚礁に大別される。この山地を取巻くように，海岸に向ってゆるやかに傾斜した段丘が広がり島の東南から南部西南にかけて，隆起珊瑚礁が発達して，広大な海岸段丘を形成している。隆起珊瑚礁より生成が古いので琉球石灰岩とよばれ厚いところでは100mを越えている。海岸線は天城町の南部から伊仙町にかけて，島の西岸がほとんど20～100m程の断崖で海に落ち込んでいるのに対し，島の東岸はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚礁が発達している。[2)]

第1貝塚は，面縄小学校より西約200mの南東に開口する隆起珊瑚礁で形成される狭小な谷状地形にある。遺跡周辺には海砂があり，以前は面縄川の袋状地形まで海が来ていたものと思われる。隆起珊瑚礁崖状テラス部には，貝の散布状態があり貝塚の可能性があった。以前より土器片，磨石等の遺物も採集され，貝塚の広がりが予想された。

第2貝塚は，下面縄集落のほぼ中央を流れる面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に堆積する標高6m程の砂丘上にある。面縄小学校東隣で，第1貝塚の東約250mに位置する。周辺採集の結果，土器片や自然貝殻等がみられた。

第3貝塚は，第2貝塚の北東約230mの傾斜地，隆起珊瑚礁の崖地にある。通称東兼久バルの北側にある小さな貝塚である。隆起珊瑚のテラス部の洞穴3ケ所と崖下の平地で土器片や自然貝等がみられた。

第4貝塚は，面縄小学校の北約120mの伊仙町西兼久661番地に所在し，隆起珊瑚礁崖の洞穴とその前方に続く棚状の前庭部から成っている。

遺跡の周辺には，多くの遺跡が研究者等により確認されている。貝塚としては，本川貝塚，貝札の表採がある喜念貝塚，佐弁貝塚や鹿の角が発掘された犬田布貝塚，貝輪や人骨が検出された洞穴遺跡喜念原始墓，また近年砂丘地以外でも遺跡の発見がなされ，標高235mの喜念上泉袋には，土器や石器が多くみられる喜念上原（ウエンバル）遺跡や陶・磁器を多く出土するミンツキ集落跡[3)]，完形の青磁碗12点が出土した面縄按司城（通称ウガンウスジ）などが知られている。また，1983年には南西諸島でナゾとされていた類須恵器の古窯跡が阿三で発見され，1984年11月からカムィヤキ古窯跡の発掘調査が行われた。

このように徳之島での多くの遺跡は伊仙町に属し，しかも南海岸に集中している。特に面縄貝塚群は，昭和初期より多くの研究者によって調査，報告がなされ土器型式等南西諸島の考古学研究の基礎となっているところである。

<参考文献>

1) 窪田氏は，昭和10年の三宅博士の調査にも参加された方で，第１次，第２次調査の際に調査区域設定等の助言を得た。

2) 義憲和「伊仙町の自然・社会環境」『伊仙町誌』1978

3) 義憲和「伊仙町の歴史」『伊仙町誌』1978

第１表　面縄貝塚と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1	喜念上原	伊仙町喜念上泉袋	土器・石斧・磨石	①
2	喜念貝塚	〃　兼久	宇宿上層式	②
3	佐弁貝塚	〃　佐弁東ミヤド	土器・石器・貝塚	①③
4	面縄第１貝塚	〃　面縄	貝塚・洞穴遺跡・石棺墓・貝輪	④
5	〃　第２〃	〃　〃	住居跡，嘉徳Ⅰ・Ⅱ式	④
6	〃　第３〃	〃　東兼久原	兼久式土器	⑤
7	〃　第４〃	〃　兼久６６１	面縄東洞式，西洞式，前庭式	⑥
8	面縄按司城	〃　上面縄	青磁完形碗	⑦
9	カムィヤキ古窯跡	〃　阿三亀焼	古窯跡（類須恵器）	⑧⑨
10	ヨヲキ洞穴	〃　〃	洞穴遺跡，曽畑式，兼久式	⑩
11	ミンツキ集落跡	〃　伊仙	陶器・磁器	①
12	犬田布貝塚	〃　犬田布連木竿	貝塚，面縄西洞式，犬田布式	⑪

（参考文献）

① 義憲和「伊仙町の歴史」『伊仙町誌』　1978

② 三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学雑誌第11巻第５号　1940

③ 白木原和美・義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」南日本文化第９号　1976

④ 牛ノ浜修・堂込秀人「面縄第１・第２貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1983

⑤ 河口貞徳「南島先史時代」　鹿児島大学南方産業科学研究所報告第１巻２号　1956

⑥ 九学会連合「徳之島面縄第四貝塚調査報告」『奄美その自然と文化』　1959

⑦ 伊仙町歴史民俗資料館展示

⑧ 現在報告書作成中　1985年３月　刊行予定

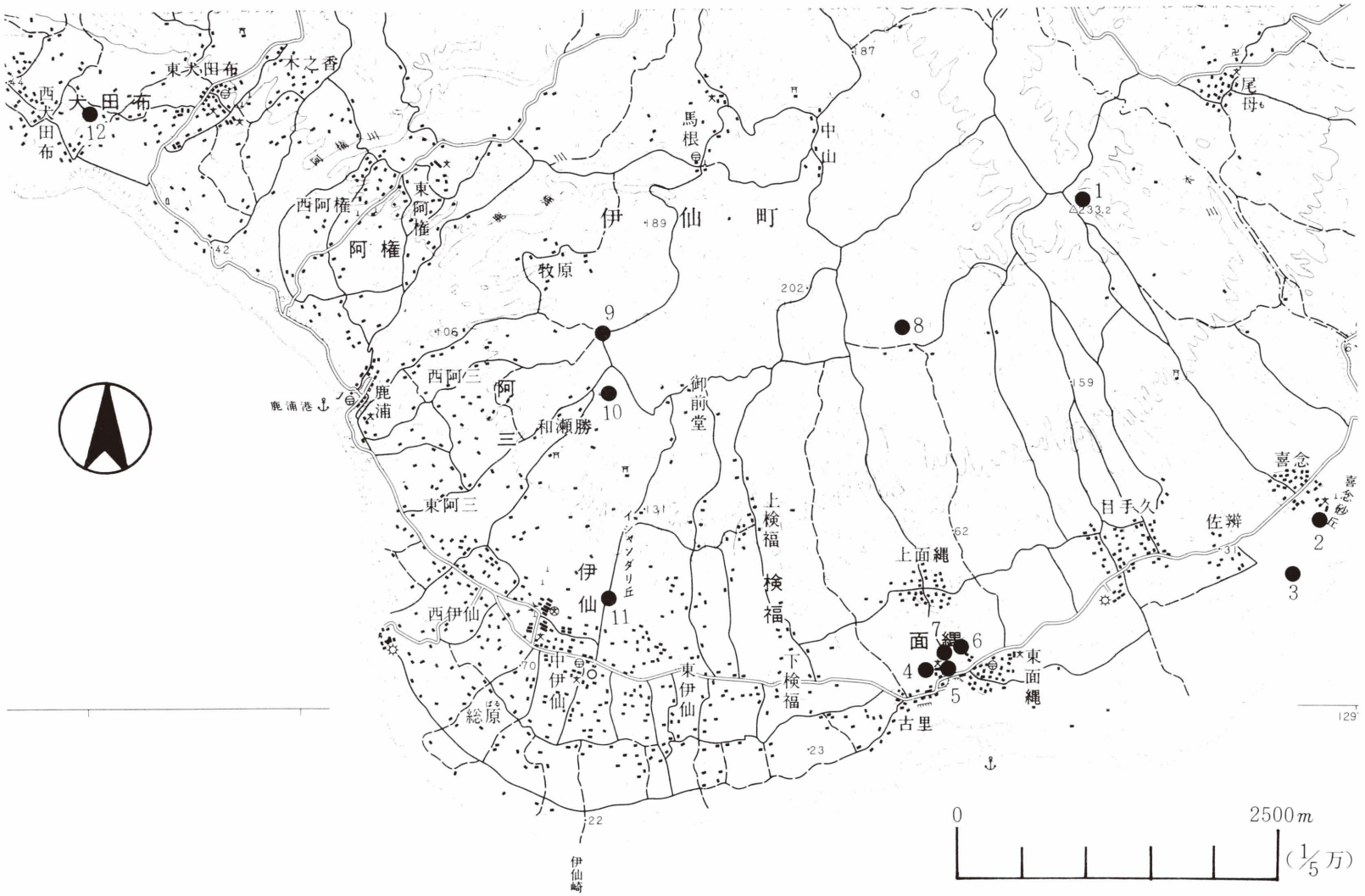
⑨ 義憲和・四本延宏「亀焼古窯」鹿児島考古第18号　1984

⑩ 1984年６月発見　1985年調査予定

⑪ 吉永正史・宮田栄二「犬田布貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　1984

＜面縄貝塚関連文献＞

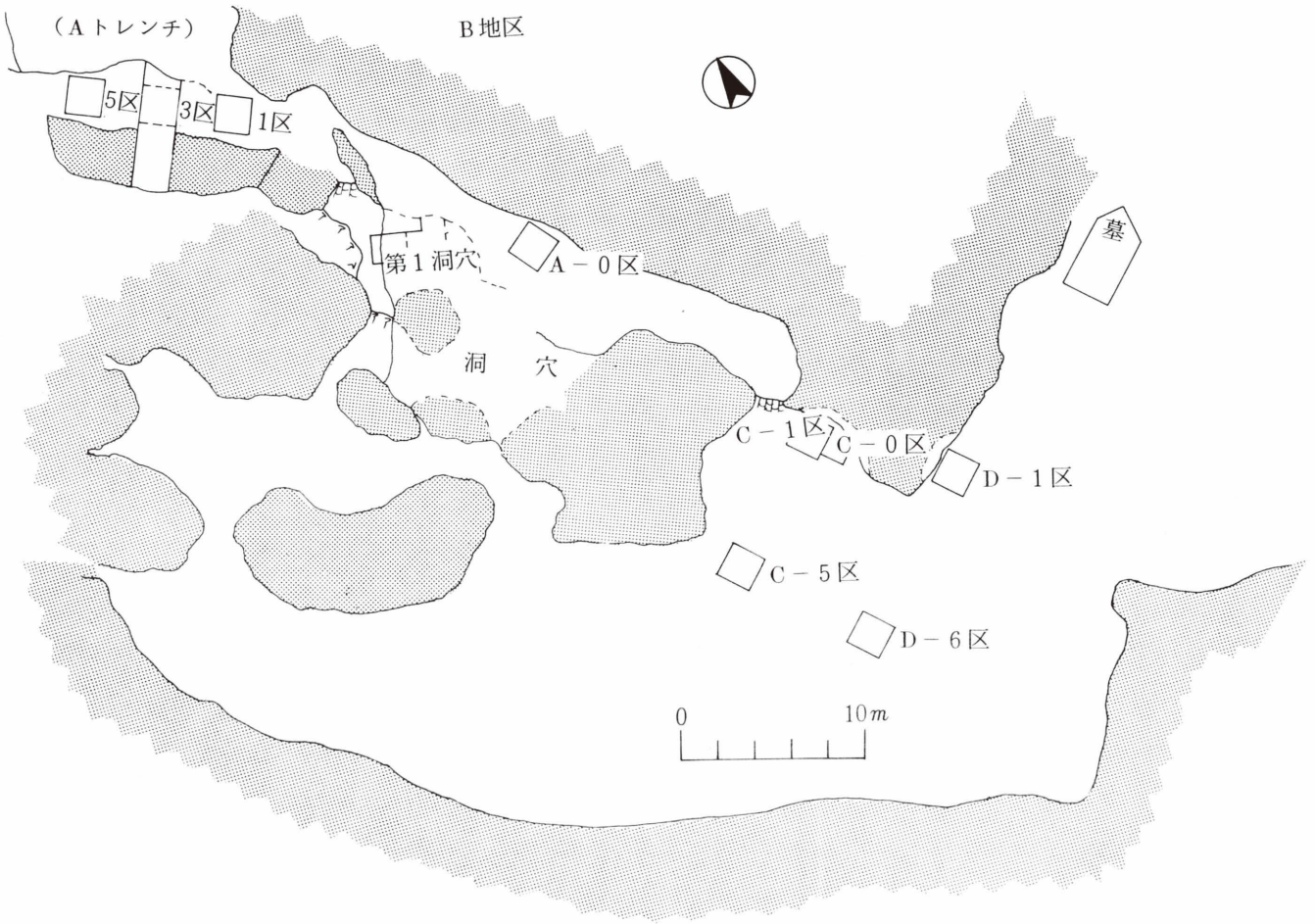
山崎五十麿「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」　考古学雑誌第20巻10号　1930
小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」史前学雑誌　第４巻３，４号　1932
大山柏・小原一夫「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」　史前学雑誌第５巻第５号　1933
三宅宗悦「南島の石器時代に就いて」　ドルメン第４巻６号　1935
三宅宗悦「南島の先史時代」人類学先史学講座第16巻　1940
三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」　考古学雑誌第11巻第５号　1940
河口貞徳「南島先史時代」　鹿児島大学南方産業科学研究所報告第１巻２号　1956
河口貞徳共著「徳之島の先史遺跡調査報告」　人類科学第10集　1958
河口貞徳「鹿児島県大島郡兼久貝塚」　日本考古学年報７　1958
国分直一「鹿児島県大島郡面縄第二貝塚」　日本考古学年報７　1958
河口貞徳「奄美の先史諸遺跡」　人類科学第11集　1959
三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告　面縄第２貝塚と付近の貝塚」　古代学第８巻２号　1959
九学会連合「奄美その自然と文化」　1959
三友国五郎・国分直一「鹿児島県大島郡徳之島面縄第二貝塚，およびその附近の遺跡調査概報」日本考古学年報８　1959
河口貞徳「南島先史時代の文化交流」　アジア文化第11巻３号
河口貞徳「南島先史時代」　南島文化第２号
国分直一「南島先史時代の技術と文化」　東京教育大学文学部史学研究第66号　1966
白木原和美「徳之島の先史学的所見」　南日本文化第３号　1970
国分直一「南島先史時代の研究」　考古民俗叢書(10)　1972
河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第９号　1974
白木原和美・義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」　南日本文化第９号　1976
牛ノ浜修・堂込秀人「面縄第１・第２貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1983



西犬田布
犬田布
東犬田布
木之香
西阿権
東阿権
阿権
伊仙町
馬根
中山
尾母
牧原
西阿三
阿三
和瀬勝
鹿浦
鹿浦港
東阿三
御前堂
上検福
検福
下検福
伊仙
西伊仙
中伊仙
東伊仙
総原
伊仙崎
上面縄
面縄
東面縄
古里
目手久
佐辨
喜念
喜念砂丘
イシャンダリ丘
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
2500m
(1/5万)

第２図　面縄貝塚地形図

注．九学会連合刊「奄美その自然と文化」所載の地形図を参考にして作図した。



第3図　第1貝塚トレンチ配置図

第3章　第　1　貝　塚

第1節　調査の概要

第1貝塚は，昭和3年，大村行長氏によって発見され，昭和5年夏広瀬祐良氏が，同年秋に小原一夫氏，昭和10年には三宅宗悦氏が発掘調査され，現在では遺跡は壊滅していると思われていた。第1貝塚は，面縄小学校西方約200m付近の南東に開口する狭小な谷状地形内にある。雑草・樹木が密林化し，昼なお薄暗き地である。以前調査された個所の西側隣接地に同じ珊瑚礁崖のテラス状の地に10m×2mの東西に長いトレンチを設定し，Aトレンチと名称した。2m間隔で区割を行い，東から1……5区と名称し，1・3・5区を調査した。この棚状台地のA－1，A－3区より兼久式土器を包含する貝層を確認した。貝を破棄する地点を上の隆起珊瑚礁台地に求め，台地縁辺部に2m×2mのトレンチを設定しBトレンチと名称して調査を行ったが遺物はなく，包含層の確認はできなかった。

昭和初期の以前調査された同テラスの貝の散布がみられる地点に2m×2mのトレンチを設定しA－0区と名称した。A－0区は表層から約80cm，石灰岩風化土層まで貝層であり，貝層最下部より開元通宝が3点出土した。

A－0区登り口付近の岩陰に1.5m×1.5mのトレンチを設定。表層の貝の散布状態の把握に努める。風葬骨と明らかに区別できる人骨が砂層より散布状態で出土，北西部隣接地に2m×2mのトレンチを設定C－1区と名称し，南西部7mに2m×2mのトレンチC－5区を設定する。C－1区砂層では線刻のある貝製品が人骨と，C－5区では砂層から市来式土器と貝輪が，その下層からは爪形文土器が出土した。

第1洞穴入口の岩陰に2m×2mのトレンチを設定し（D－1区），南西8mに2m×2mのD－6区を設定した。D－1区砂層からは山ノ口式系統の土器が出土し，また陶器を共伴する土坑が検出され，人骨が埋葬された形で検出されたが，拡張しての調査が困難な為，写真撮影，断面実測後埋め戻した。D－6区は，3m程掘り下げたが谷間の一番深いところであり，C－5区の砂層が検出されないまま調査をやめた。広い面積で効率よく調査すれば，爪形文やそれよりも古い時期のものが包含されている可能性は十分考えられたが，今回の確認調査では無理なところも多かった。

第2節　層　　序

層位は各地区ごとに紹介したい。

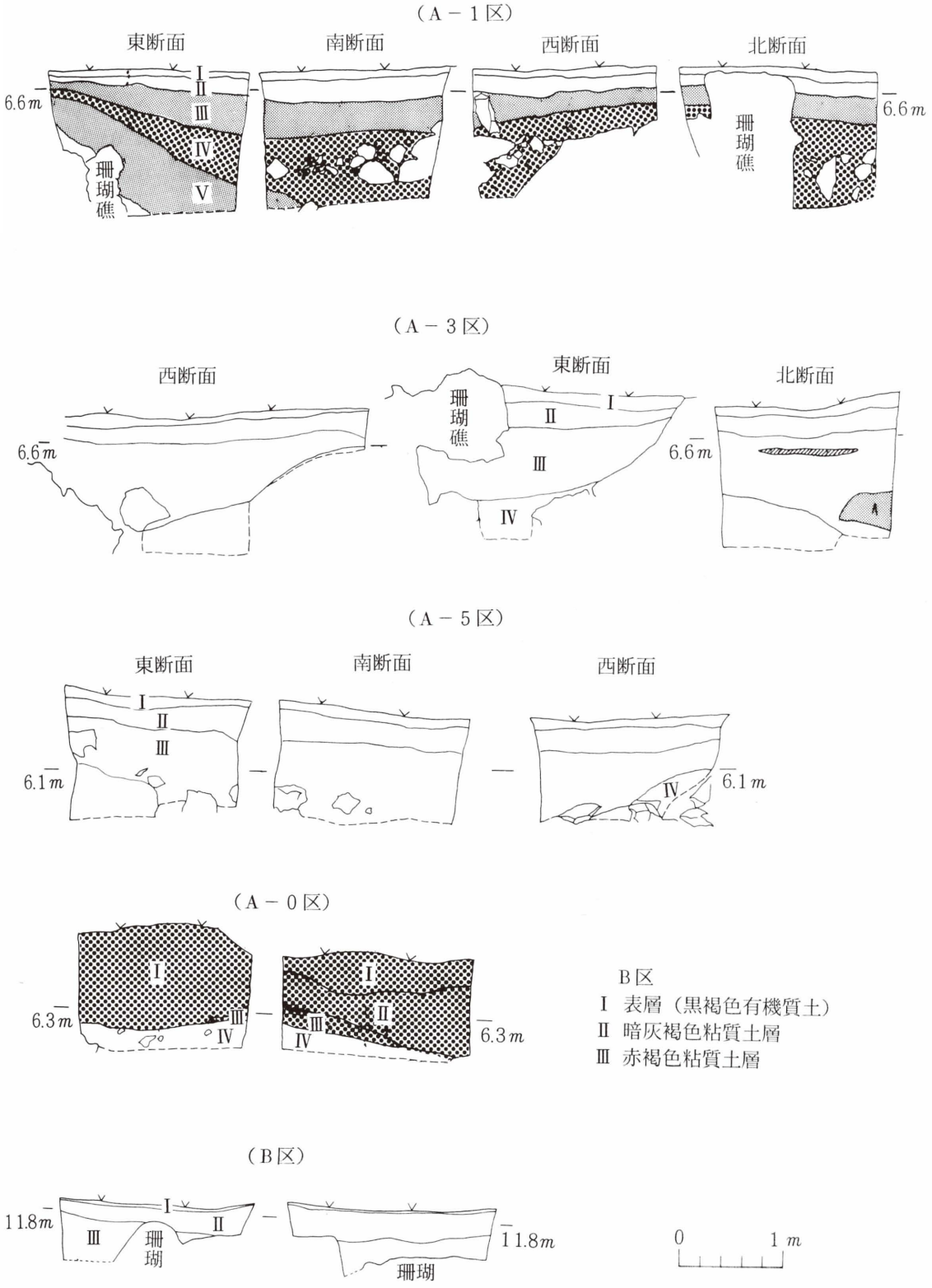
Aトレンチ（第4図）

第Ⅰ層　表土（黒褐色有機質土）10～20cmの厚さを有し，南側でやや厚い。

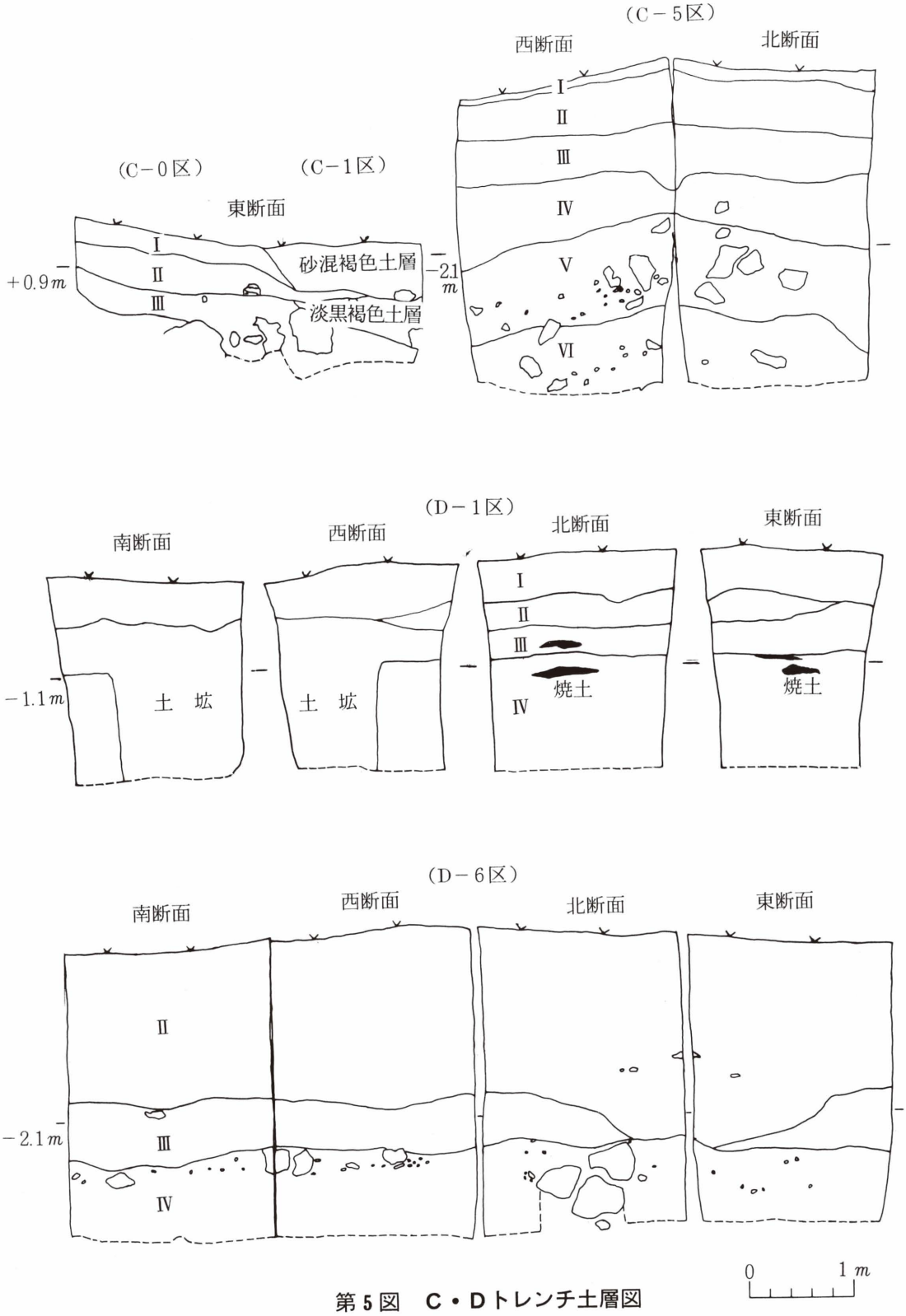
第Ⅱ層　暗灰褐色土層で，ほぼ水平に堆積し厚さは20～30cmである。青磁・陶器を出土。

第Ⅲ層　黒色混貝土層であるが，A－3，5区では貝を含まず黒褐色土層である。上部では青磁・土器片がみられ，下部の混貝土層では兼久式土器がみられる。

第Ⅳ層　A－1区にみられ，暗茶褐色純貝層である。兼久式土器と貝製品が出土する。中間部南側で珊瑚礫の堆積がみられる。



第4図　A・Bトレンチ土層図



第5図　C・Dトレンチ土層図

第Ⅴ層　暗茶褐色混貝土層で東から南部へ傾斜している。

第Ⅵ層　暗茶褐色石灰岩風化土層であり，遺物は出土していない。いわゆる地山である。

A－0区（第4図）

第Ⅰ層，第Ⅱ層，第Ⅲ層，純貝層である。北断面では黒褐色，褐色，灰色と色別出来るが西断面では判別出来なかった。兼久式土器と貝製品が出土した。下層に開元通宝が3点出土した。

第Ⅳ層　暗茶褐色石灰岩風化土層で，上部から面縄前庭式が出土した。

C－0・1区（第5図）

第Ⅰ層　表土（茶褐色土層）で20㎝の厚さを有し，C－1区では風葬跡のため撹乱されている。

第Ⅱ層　黒褐色混貝層で南に傾斜し，消滅している。A－0区の貝層の混入と思われる。兼久式土器が出土する。

第Ⅲ層　明茶褐色砂層で珊瑚礫が混入している。人骨が散在し，線刻のある貝製垂飾品の出土がある。

C－5区（第5図）

第Ⅰ層　表土（黒褐色土層）で5～10㎝の厚さである。

第Ⅱ層　茶褐色粘質土層で40～50㎝の厚さで南東部へ傾斜している。

第Ⅲ層　暗茶褐色粘質土層で40～50㎝の厚さを有する。

第Ⅳ層　黄茶褐色粘質のある砂層で50～70㎝の厚さを有する。遺物は含んでいない。

第Ⅴ層　淡茶褐色粘質のある砂層で70～80㎝の厚さを有し南東部へ傾斜し，珊瑚礫が混入している。出土遺物は，市来式土器とオオツタノハ製貝輪等である。

第Ⅵ層　黄茶褐色粘質のある砂層で珊瑚礫と人骨が散在し，爪形文土器が出土した。

D－1区（第5図）

第Ⅰ層　表土（粘質赤褐色土層）で40～50㎝の厚さを有する。

第Ⅱ層　褐色土砂混粘質土層で岩陰の方に厚くなり南部では消滅する。風葬骨を検出。

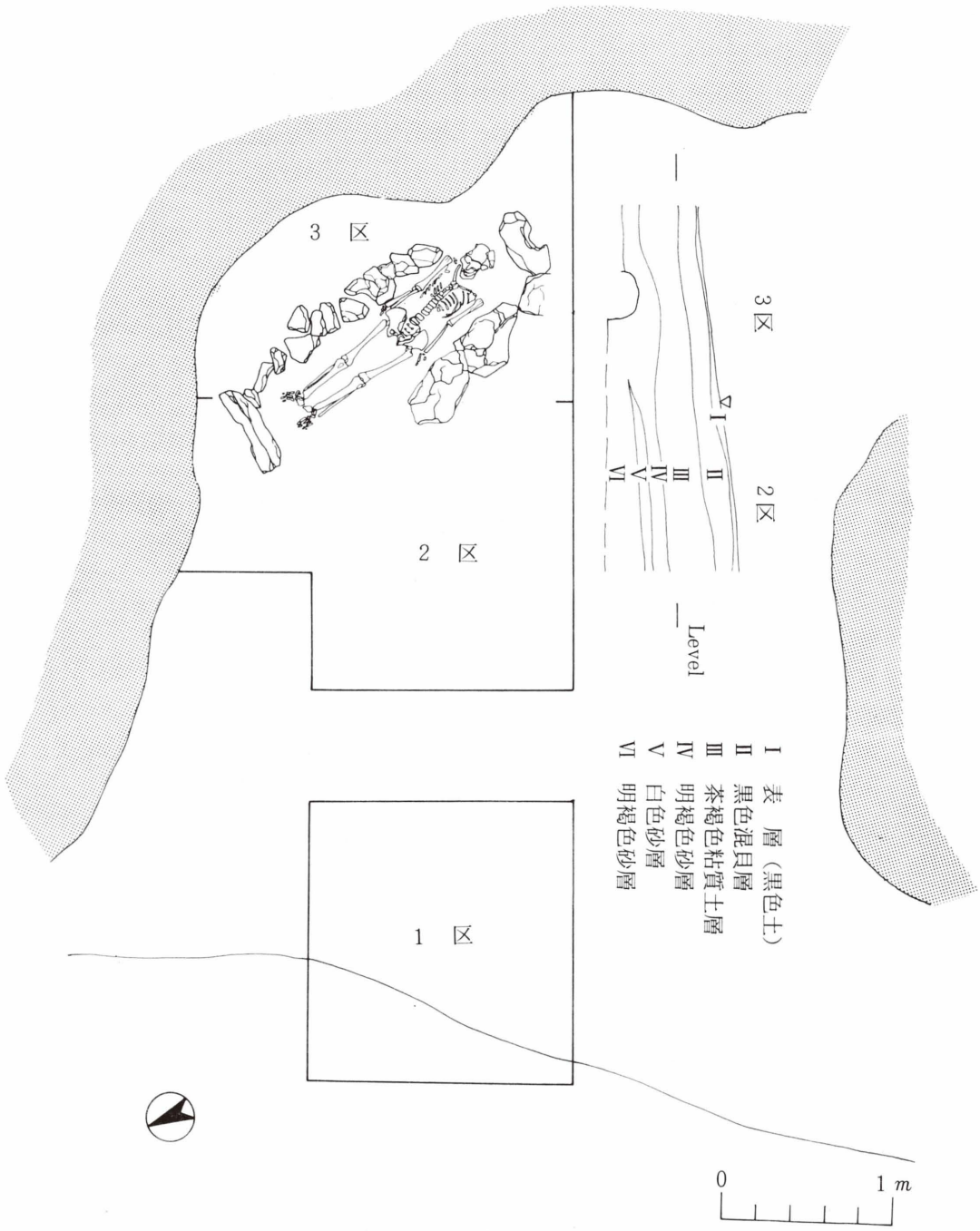
第Ⅲ層　褐色土砂混粘質の強い層で，青磁，陶器を含み土坑内の埋土でもある。

第Ⅳ層　褐色粘質層で山ノ口式系統の土器が出土した。

D－6区（第5図）

第Ⅰ層　表土は薄く，Ⅱ層との境目がはっきりわけられなかった。

第Ⅱ層　茶褐色粘質土層で180～200㎝の厚みを有する。石灰岩風化層が谷に堆積したものと思われる。



第 6 図　第 1 洞穴遺構と土層図

第Ⅲ層　暗茶褐色粘質土層で40～50cmの厚みがある。

第Ⅳ層　黄茶褐色小礫混砂層で，土器片の磨耗の厳しいものが２・３点出土したが型式等は不明である。

第３節　遺　　構

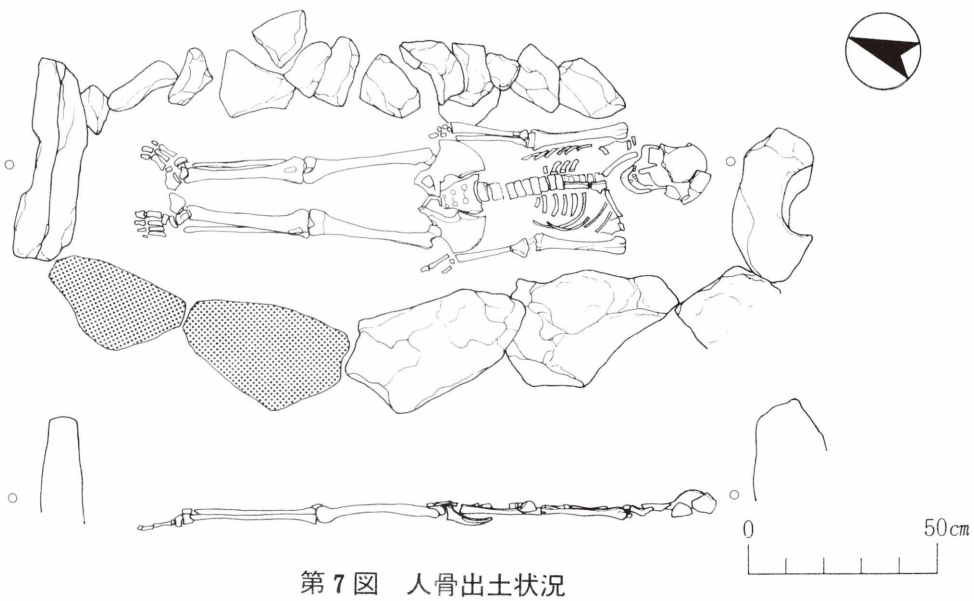
第１貝塚は，貝塚・洞穴・開地の遺跡である。２m幅のトレンチ調査を行ったのであるが，遺構は，第１洞穴に埋葬施設が検出された。その他のトレンチにおいても人骨の散布状態があり埋葬跡等の遺構も相定される。

第１洞穴の遺構は，箱式石棺墓である。当初，１・２区の調査中，第Ⅳ層（明褐色砂層）の掘り下げを行い，トレンチ東側に石灰岩礫が出土し，２個ほど取り上げた後，人骨の出土をみた。そのため，洞穴壁面まで拡張し，人骨検出にかかる。洞穴壁面側は，石灰岩塊の落石がみられ１点ずつ確認し取り上げた。この石灰岩塊の間にも人骨が散布していた。

石灰岩を取り除いていくと，２個の大形石灰岩塊と第９図の1009・1010・1011の土器が出土した。それをとり除き，約20cm程掘り下げると第７図の様な箱式石棺墓の検出をみた。

石棺は，第Ⅵ層に埋葬され，左側石に４個の大形石灰岩塊を，右側石には14個の石灰岩塊を使用し，両小口には扁平な石灰岩塊を使用し，頂部は中央部を削りとった状態である。頭骨右の側石はみられなかった。被葬者は仰むけの伸展葬で棺内には遺物等はみられなかった。棺内には白砂が埋土され，遺跡外よりの搬入も考えられる。頭位は，S－23°－W注)である。人骨についての詳細は，松下孝幸氏の所見を別掲に記載した。

注）概報の数値はまちがいである。



第７図　人骨出土状況

第4節　遺　　物

1. 土器

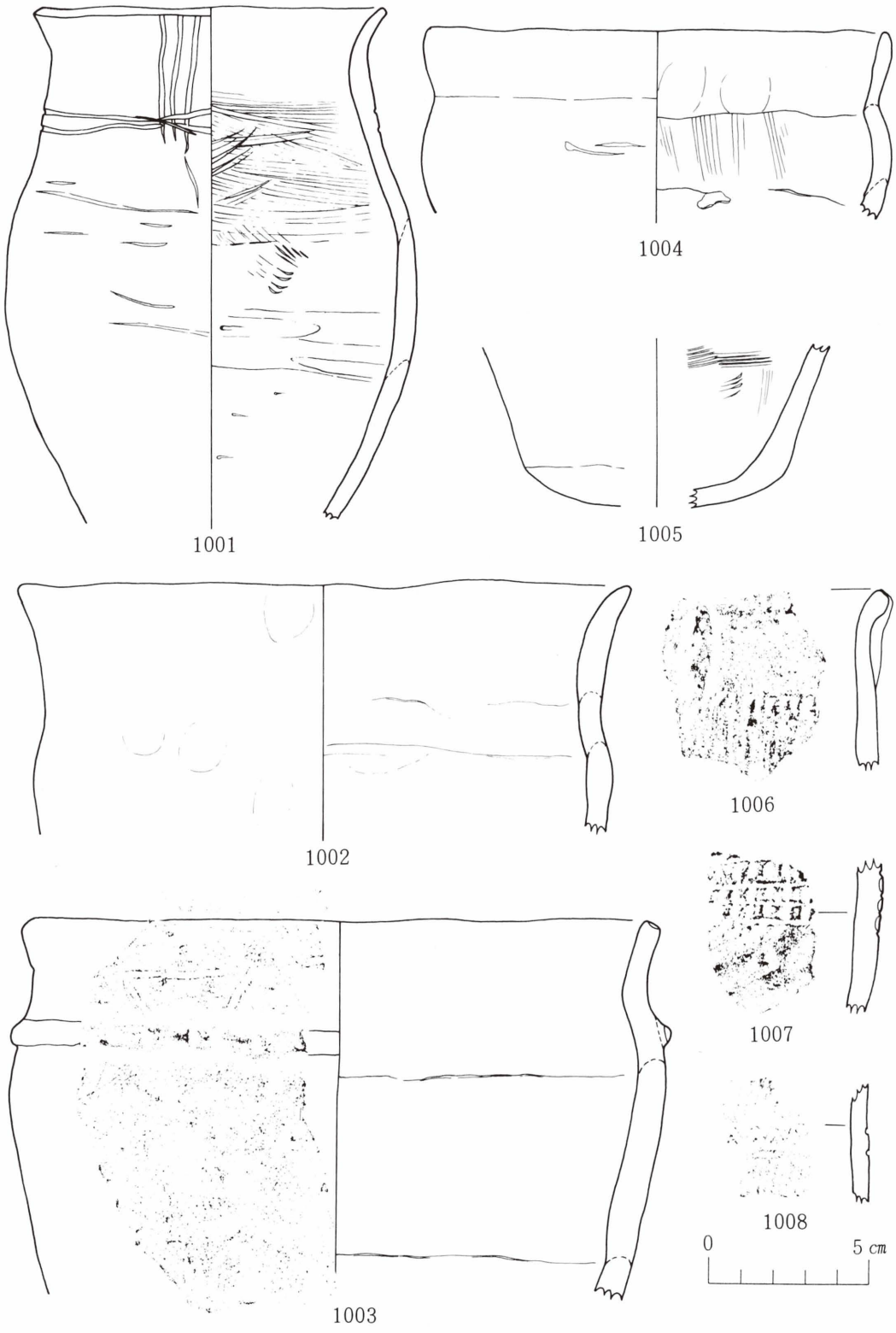
第1貝塚は地点ごとに様相が異なり，関連対比して述べることがむずかしい。そこで，第1貝塚出土の土器を分類し，良好なもの，特徴的なものを出土地点，層位ごとにまとめて掲載した。個々の土器は表2にまとめた。

1001～1007は，第1洞穴前庭部出土の土器である。第1洞穴の前庭部は，上のテラス（Aトレンチ）から落ちてきた遺物である。甕（1001～1004・1006・1007）と壷（1005）にわかれる。1001は頸部がしまり外反する口縁をもつもので，頸部に沈線を二条巡らし，口縁部と頸部にも縦位に三条ある。1003は口縁部がやや外反し，頸部に一条の貼り付け突帯を有し，突帯から口縁にかけて鋸歯状に近い文様を施している。また，輪積の際のつぎ目が明瞭な境目を形成している。1005は壷形土器の底部である。1004は頸部がややしまり，口縁部は外反する。内面には指頭圧痕がみられる。1007・1008はやや薄手で，口縁部から胴部にかけて細い沈線による文様体を施している。

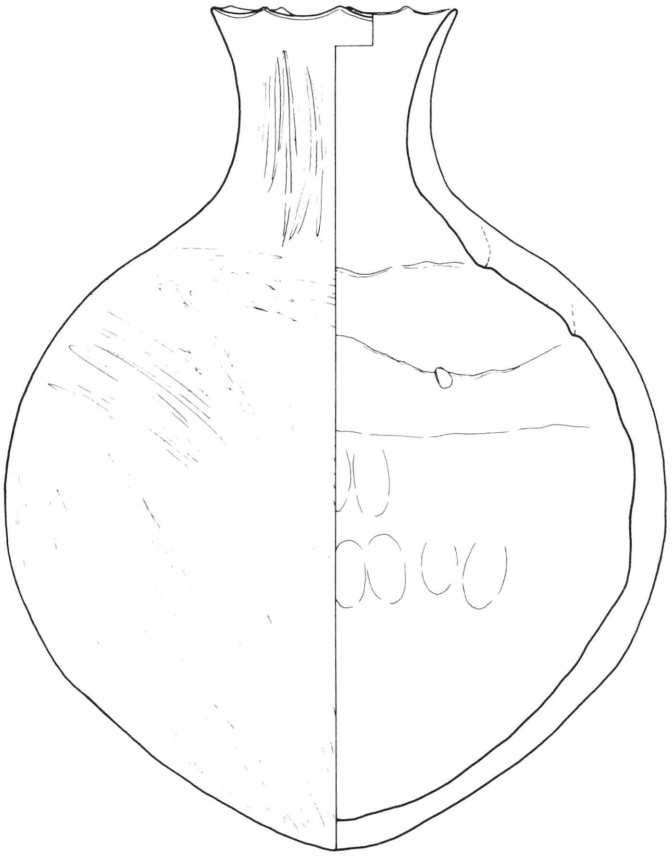
1009～1011は洞穴3区の石棺上部より出土し，供献土器と思われる。いずれも外表面をていねいに研磨し，丸底もしくは尖り気味の丸底を呈す。1009は波状口縁をなし，突出は8ケ所である。1011は，一ケ所明確に突出し，二対称にゆるやかな波状をなす。壷と鉢のセットとおもわれる。なお，同一層より，抉りのある石斧（1083）が出土している。1012～1031はAトレンチより，1032～1045はA－0区より出土した土器である。1045を除き，すべて兼久式土器の範疇に属するものである。胎土には，石英と細砂をわずかに含み，よく精選されたもので，色調は褐色をベースとし，焼成は良好である。調整ハケ目は貝殻の使用が考えられる。文様は頸部に断面三角形の刻目突帯，あるいは連続刺突，沈線を組み合わせたものを中心として，またそれぞれ単独に文様をなすこともある。その他，縦位に，突帯，刻目突帯，突帯に刺突を施したものを貼りつける。無文の口縁破片も多くあるが，個体としてまったくの無文とは断定できないが，図示した以外にも多くの無文の土器片を共伴している。文様で，型式分類を試みたが，A－1区においては，Ⅲ・Ⅳ層，A－0区においてはⅠ・Ⅱ層，A－3区においてⅢ層と，それぞれ統計上の差はみられなかった。底部は平底が圧倒的で，例外としても，脚台をなすもの（1030），やや角のとれたもの（1044）があるのみである。木葉痕をもつものは4点（1031・1041・1042・1053）出土しているが第1貝塚出土の兼久式土器の底部は，木葉痕をもたないものが主である。

1045は，第1貝塚共通の基盤層である石灰岩風化土の赤褐色粘質土層上部から出土したもので突帯沈線文土器で面縄前庭式である。A－0区の貝層下の層位より出土した。

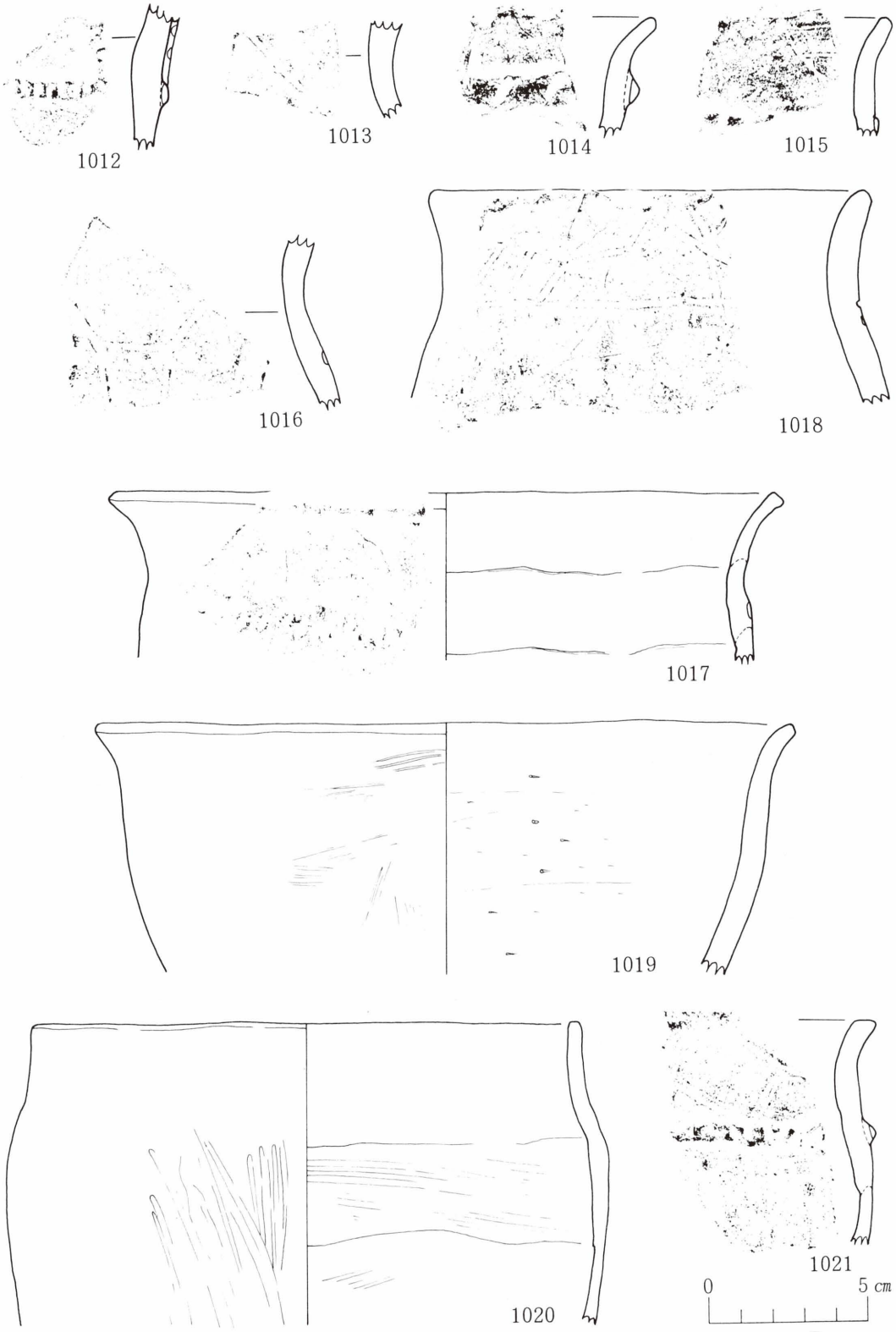
第13・14図は，C－1区出土の土器である。1046～1053は兼久式土器でⅡ層の黒褐色混貝土層から出土している。1054・1055・1057は壷形土器である。1056は，羽状に細い沈線を施すもので喜念Ⅰ式であり，1958は口縁部に突帯，頸部にも凸帯を施し，縦位突帯で結び，突帯にそれぞれ半載竹管状施文具で連続刺突文を施し，突帯間にも横位に同様の刺突文を施している。



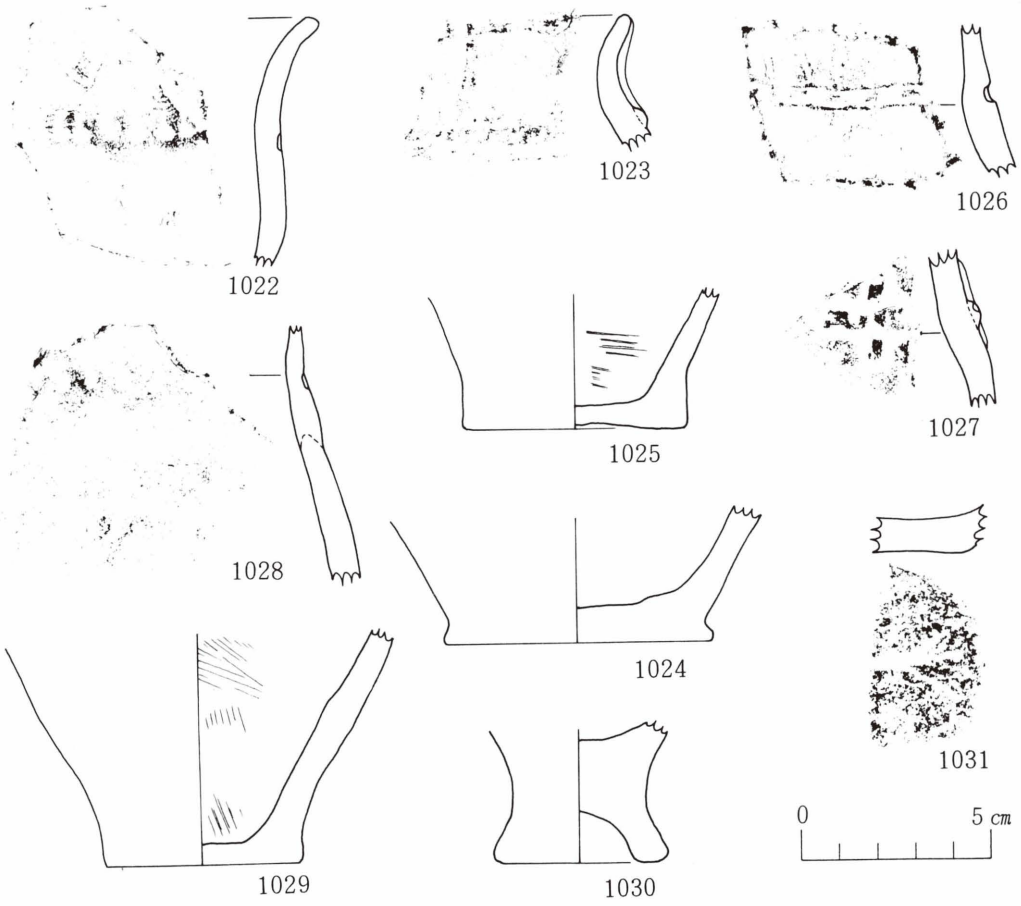
第 8 図　第 1 洞穴出土土器



第9図　供　献　土　器



第 10 図　A トレンチ出土土器(1)

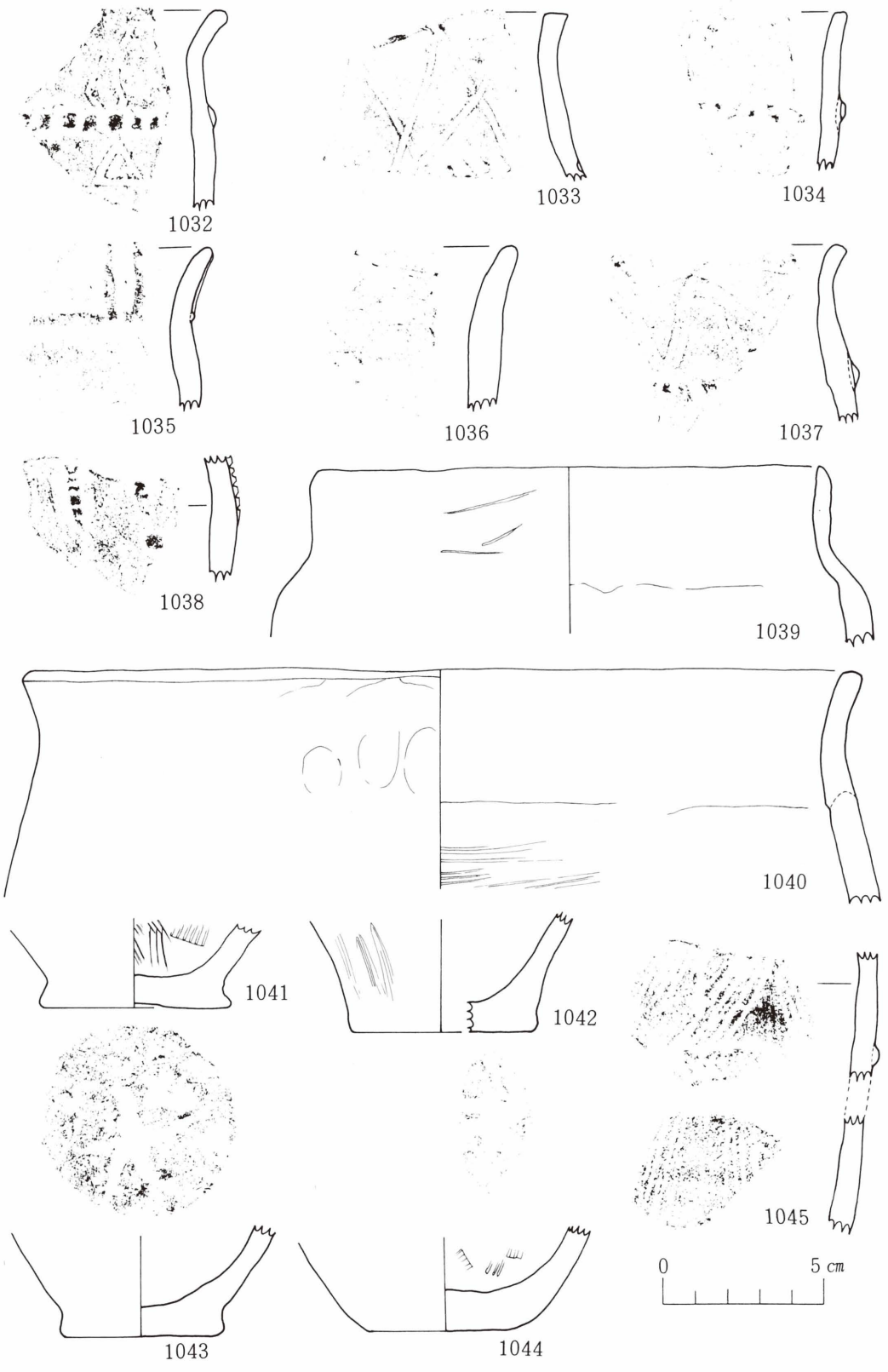


第11図　Aトレンチ出土土器(2)

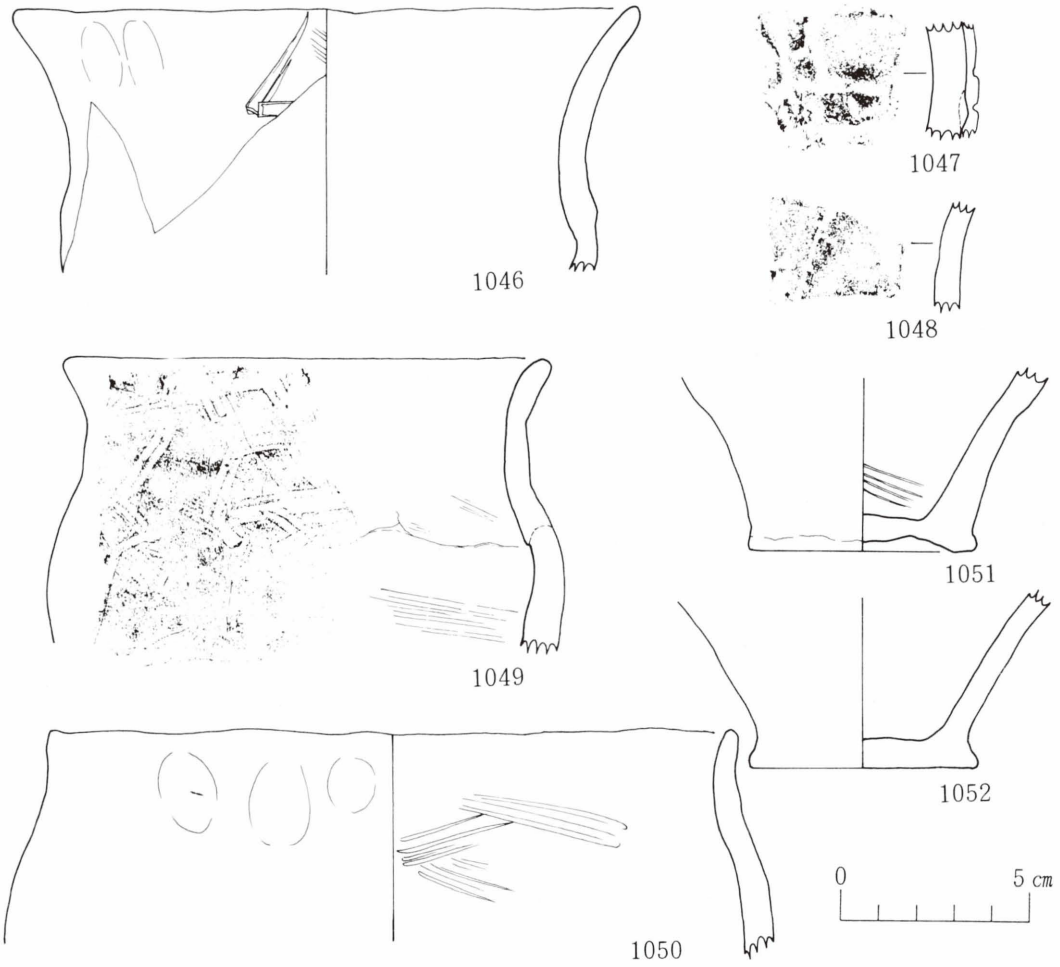
1058は，D－1区，Ⅳ層上部で出土した土器で山の口式系統の土器である。

第15図 1060 は，D－5区Ⅴ層，淡茶褐色砂質層出土の市来式土器で，貝輪・人骨と共伴するものである。また同区，Ⅵ層の黄茶褐色粘質のある砂層からは爪形文土器系の指頭押圧文土器2点（第15図 1061・1062）がやはり人骨と共伴した。C－5区は，隆起珊瑚礁崖の下にあり，転石と流水作用で層位が形成されている。

これらの遺物等から，各トレンチの層位を照合すると，C－5区，Ⅵ層（黄茶褐色粘質のある砂層）は縄文時代早・前期，Ⅴ層（淡茶褐色粘質のある砂層）は，縄文時代後期が推定される。C－0，1区のⅢ層（明茶褐色砂層）と，C－5区の砂層，D－1区のⅣ層（粘質のある砂質褐色土層）の層位は同時期と比定される。層位の色調に若干差異がみられるのは，トレンチの位置の関係と思われる。時期としては，縄文時代後期から弥生時代中期と推定していたい。このことは，洞穴内の遺物に関しても時期のきめてになることと思われる。洞穴内の層位の堆積状況と，岩陰あるいは平地での堆積状況は異なるかもしれないが，箱式石棺墓（第6図）及び供献土器（第9図）は，砂層の上部であり，また抉りのある磨製石斧の共伴，壺形土器・小



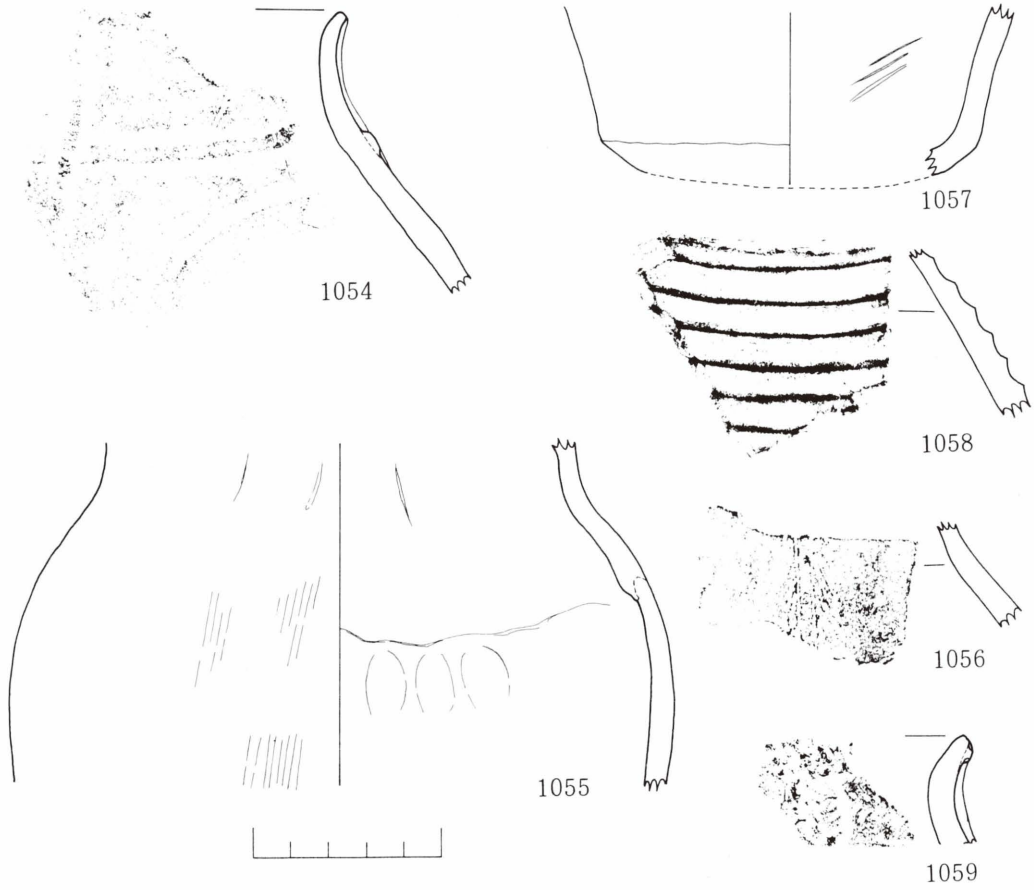
第12図　A－0区 出土土器



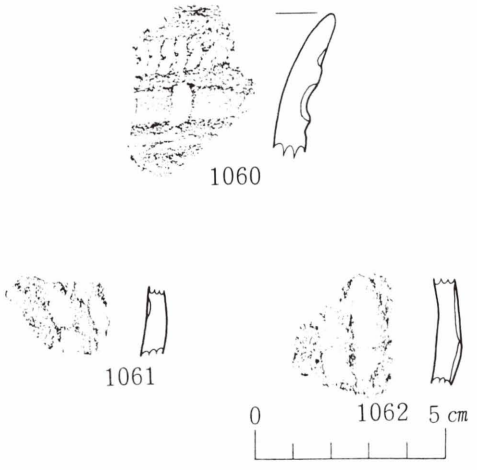
形鉢等から弥生時代前期から中期に推定して，今後同様の類例が増加して時期の設定ができることを望む。

第16図の土製品は，最大幅 3.8 ㎝，厚さ 0.65 ㎝，現存最大長 3.5 ㎝の中央部に線刻のあるものである。貝札に類似したもので，何らかの影響があるのではなかろうか。A－0区，2層出土で赤褐色を呈す。

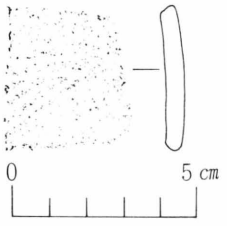
第13図　Cトレンチ出土土器(1)



第 14 図　C トレンチ出土土器(2)



第 15 図　C－5 区 出土土器



第 16 図　土 製 品

第2表　第1貝塚出土土器一覧表

挿図番号	出土地点層位	調整（土器上部より順に記述）	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
1001	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目，ヘラナデ	暗赤褐色	淡赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1002	洞穴3区Ⅰ層	ナデ	淡赤褐色		良好	細砂を多く含む	指頭圧痕が目立つ
1003	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	暗褐色		良好	石英砂を多く含む	
1004	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，一部ヘラ痕 内～ナデ，縦ハケ目，後ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1005	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～ハケ目	灰褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
1006	洞穴1区Ⅱ層	外～ナデ，内～不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	連続刺突は貝殻
1007	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
	洞穴1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1008	洞穴3区Ⅲ層下部	不明，文様は鋸歯状沈線の上下に，ヘラ連続刺突	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1009	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き，内～ナデ	赤褐色	黄褐色	良好	細砂をわずかに含む	波状口縁
1010	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き，内～ナデ	暗赤褐色	淡赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
1011	洞穴3区Ⅲ層下部	外～ヘラ磨き（縦），内～ヘラナデ	黒色	淡黄褐色	良好	細砂をわずかに含む	ヘラ接着面不明瞭
1012	A－1区Ⅲ層	不明	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1013	A－1区Ⅲ層	ナデ	黄褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1014	A－1区Ⅳ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1015	A－1区Ⅳ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1016	A－1区Ⅳ層	ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1017	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目後ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1018	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ハケ目後ナデ	褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1019	A－1区Ⅳ層	外～ハケ目一部，内ナデ	黒色	褐色	良好	細砂をわずかに含む	ナデはヘラか貝殻で行なわれた
1020	A－1区Ⅳ層	内～ナデ，カイガラナデ 内～ナデ，ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
1021	A－3区Ⅲ層	不明	赤褐色		良好	砂粒を多く含む	
1022	A－1区Ⅱ層	外～ハケ目，内～ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1023	A－1区Ⅱ層	ナデ	赤褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1024	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～不明	暗褐色	赤褐色	良好	細砂をわずかに含む	
1025	A－1区Ⅳ層	外～ナデ，内～ハケ目後ナデ	暗褐色		良好	細砂をわずかに含む	
1026	A－3区Ⅲ層	外～ハケ目，内～不明	赤褐色		やや軟質	細砂を若干含む	
1027		不明	黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1028	A－3区Ⅲ層	外～ナデ，内～ナデハケ目	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部
1029	A－3区Ⅲ層	外～不明，内～ハケ目	黄褐色		良好	よく精選．細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部

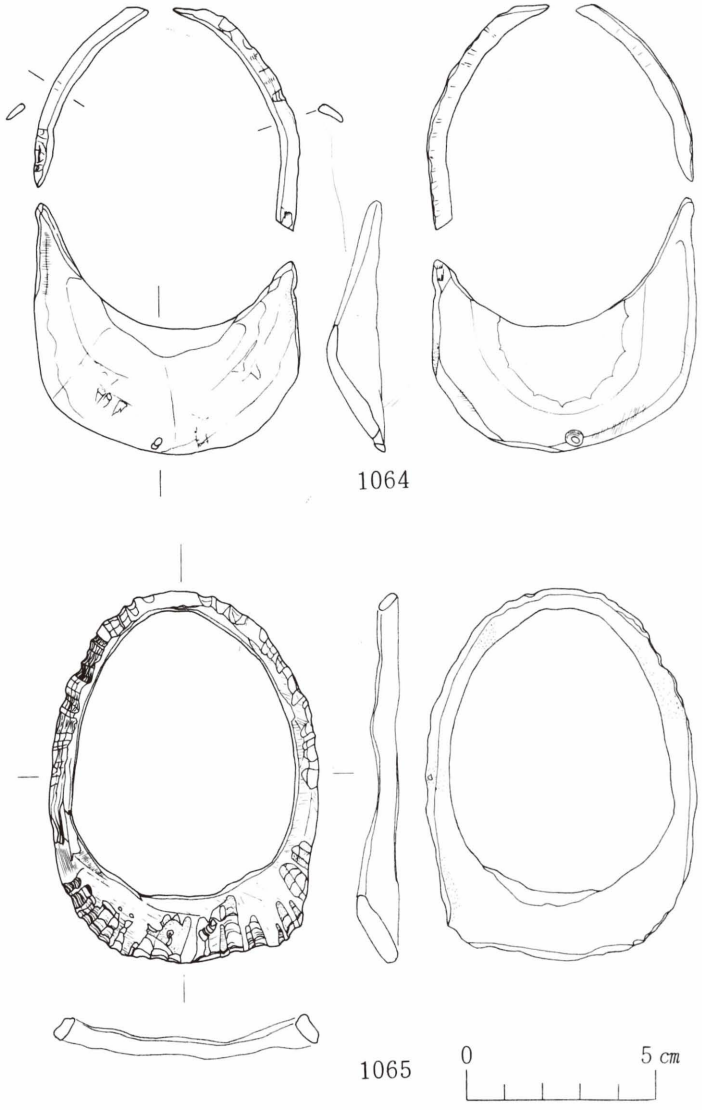
挿図番号	出土地点層位	調整（土器上部より順に記述）	色調 外	色調 内	焼成	胎土	備考
1030	A－3区Ⅲ層	不明	淡褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	Ⅲ層最下部
1031	A－3区Ⅲ層	不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕
1032	A－0区Ⅰ	外～ナデ，内～不明	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1033	A－0区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1034	A－0区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目	暗赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1035	A－0区Ⅱ	外～ハケ目（縦），内～ナデ，ハケ目	明赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1036	A－0区Ⅱ	ナデ	褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1037	A－0区Ⅱ	ナデ	褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1038	A－0区Ⅱ	外～不明，内～ハケ目	暗褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1039	A－0区Ⅰ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目（縦）	赤褐色	黄灰色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1040	A－0区Ⅱ	外～ナデ，内～ナデ，ハケ目後ナデ	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1041	A－0区Ⅰ	外～ナデ，内～ハケ目	褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕か？
1042	A－0区Ⅱ	外～ヘラミガキ，内～不明	褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に不明痕
1043	A－0区Ⅱ	外～ナデ，内～不明	暗黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1044	A－0区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1045	A－0区Ⅳ	不明	赤褐色		やや軟質	細砂を多く含む	面縄前庭式
1046	C－1区Ⅰ	ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	文様は半載竹管状用具による施文
1047	C－0区Ⅱ	外～不明，内～ハケ目	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1048	C－0区Ⅱ	不明	黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1049	C－1区Ⅱ	外～ナデ，ハケ目後ナデ 内～ナデ，ハケ目	黄褐色	赤褐色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	浅い沈線（2～3条）
1050	C－0区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1051	C－0区Ⅱ	外～ハケ目，後ナデ，内～ハケ目	暗黄褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	あげ底
1052	C－0区Ⅱ	不明	暗赤褐色	黒色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1053	C－0区Ⅱ	外～ナデ，内～ハケ目	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	底に木葉痕
1054	C－0区上	外～ナデ，ハケ目後ナデ 内～ナデ，ハケ目後ナデ	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1055	C－0区Ⅱ下	外～ハケ目，内～不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1056	C－0区Ⅲ	外～ヘラミガキ，内～不明	赤褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	羽状に沈線
1057	C－0区Ⅲ	外～不明，内～一部ハケ目	黄褐色	黒色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	
1058	D－1区Ⅳ	外～ナデ，内～不明	暗黄褐色	黒色	良好	よく精選，細砂をわずかに含む	山ノ口式土器
1059	C－0区Ⅲ	不明	暗褐色		良好	よく精選，細砂をわずかに含む	半載竹管状工具による連点

貝製品（第17図～第21図）

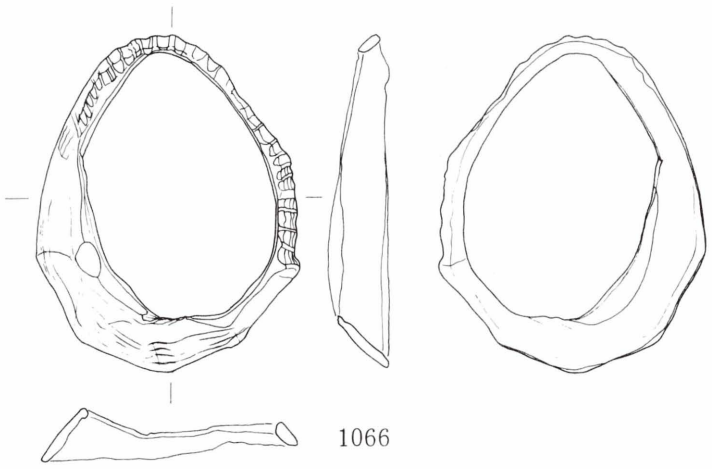
面縄第１貝塚から多量の貝製品が出土した。特徴的なものを選び出し図示した。貝製品は，それらの用途によって装飾品と実用品に大別でき，前者は貝輪・垂飾品・有孔貝製品などで，後者は，螺蓋製貝斧・貝匙・貝容器・穿孔貝などがある。

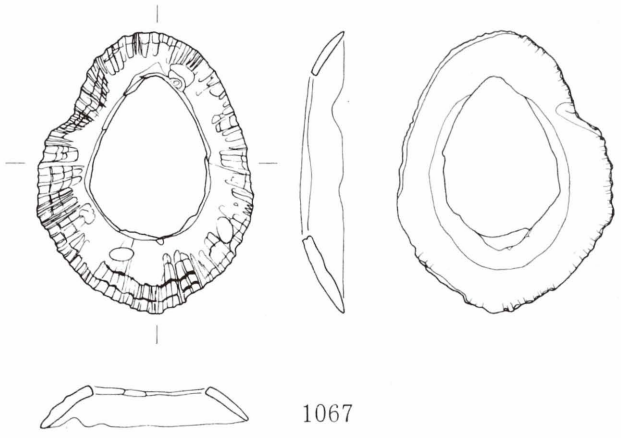
貝輪は９点出土し，オオツタノハを素材として用いたもので，殻頂部を除去して環状に外縁部を有するものが主で，完全輪になっているものと，半月形の穿孔を施したものとに分けられる。素材はオオツタノハ（８点）とサラサバテイ（１点）の二種に大別できる。オオツタノハの８点は全て，Ｃ－５区，Ｖ層の出土である。珊瑚礁塊の転石が多く，散在した人骨の間に貝輪が出土した。人骨は散在していたので，貝輪と人骨との関連は得られなかった。共伴遺物に市来式土器がある。

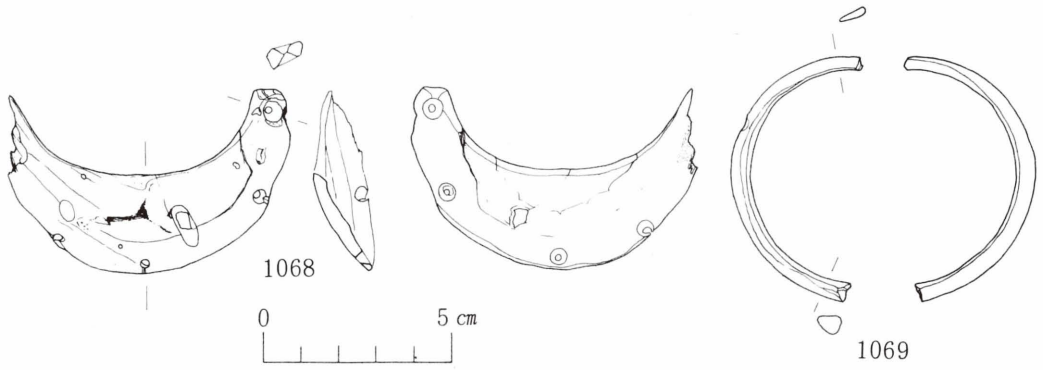
1064と1065は重なって出土した。1064は研磨により放射肋の凸凹を削り取っている。完全輪の貝輪でなく，三つに分かれ，両端にヒモずれ痕等がわずかに見られることより，三つの部分を繋いで貝輪の用途をなすものと思われる。腹縁部の広いものには，腹縁中心部に内側から穿孔している。重量は２９.４ｇである。1065は完全輪で，殻長9.9㎝，幅７.２㎝，孔長７.６㎝，幅５.６㎝，幅５.９㎝で重量は２３.７ｇであり，局部的に研磨がみられる。1064と1065は，出土状態より2点で一対の役割をはたしていたものと思われる。二つの貝輪の接触部分が研磨等によって放射肋の凸凹を削り取り，より密着の状態になることやヒモずれ痕のある組合せ貝輪は音を発する打楽的な用途が考えられるのではないだろうか。1066もオオツタノハの殻頂部を除去して環状に外線部を有し，広挟の部分がある。殻長８.９㎝，幅７.０㎝，幅４.８㎝で重量２２.３ｇであり，やはり研磨され，放射肋の凸凹を取りさっている。1067も同じくオオツタノハを素材とし，外套線の内側の殻長部を除去した。殻長７.５㎝，幅５.８㎝，孔長４.２㎝，幅３.０㎝の小形の貝輪である。1068は，オオツタノハを素材とし，内側より２ケ所，外側より２ケ所，両側から穿孔が２ケ所認められる。放射肋の凸凹は研磨により完全に削りとられ，縁部の穿孔にはヒモずれ痕がみられる。これも1064と同様完全輪でなく，最初から半月形として作ったものであろう。類似品が，犬田布貝塚[1]，喜念原始墓[2]から出土していて貝製装身具とされているが，1064の貝輪同様，貝輪としての用途も考えられよう。重量は２０.４ｇである。1069は，唯一のサラサバテイを素材にし，殻の体層部を横に切断して内部を敲打により取り去り，その後研磨したもので半円形を呈している。完全輪であったのか不明であるが，両端は破損している。殻長６.５㎝，孔長５.４㎝，重量６.１ｇで現在でも真珠膜がみられる。Ｄ－１区，Ⅳ層上部より出土したもので，共伴遺物には山ノ口式系統の土器がみられ，また，同区のⅡ層には陶器を共伴する土坑があった。人骨の出土をみたが，拡張できずすぐ埋め戻し，将来の調査にゆだねた。1070は，ゴホウラの外唇部を切り取り，研磨によって形を整え，両端に内外からの穿孔を施こし上唇部の先端は欠損している。穿孔の近くに抉りがみられ，また，表面には三本の線が幾何学的に線刻されたものである。貝符的意味あいを持つ垂飾品とも考えられる。Ｃ－０区，Ⅲ層より出土し，人骨の散在した層位であった。重量は，１２３.５ｇである。1071は，夜光貝の体層部を素材とし，曲部を中心に敲打整形したもので，一端は欠落しているがほぼ完形品である。縁部は研磨により整形されている。重量は３４.２ｇである。Ａ－１区，Ⅲ層中より出土し，貝容器としてとりあげた。３点出土した（図版15）。1072



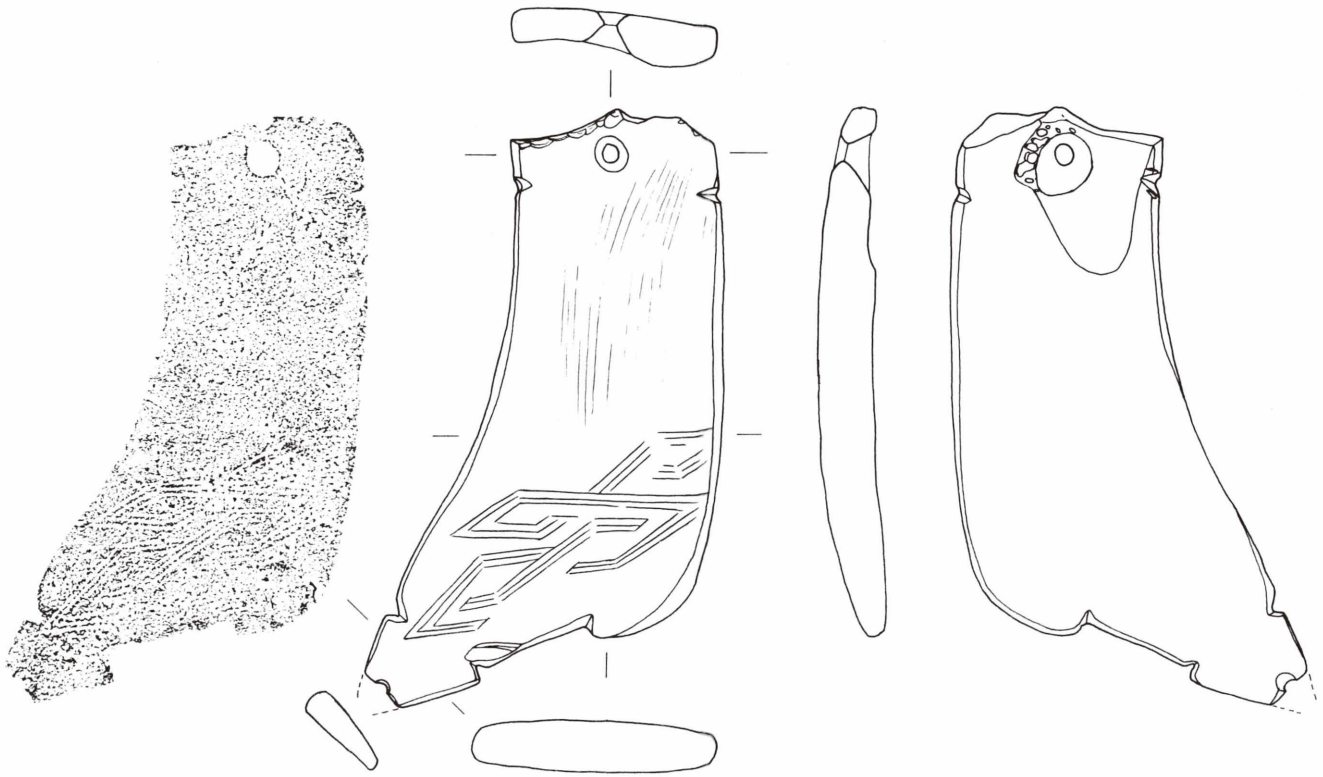
第17図　貝　輪　(1)



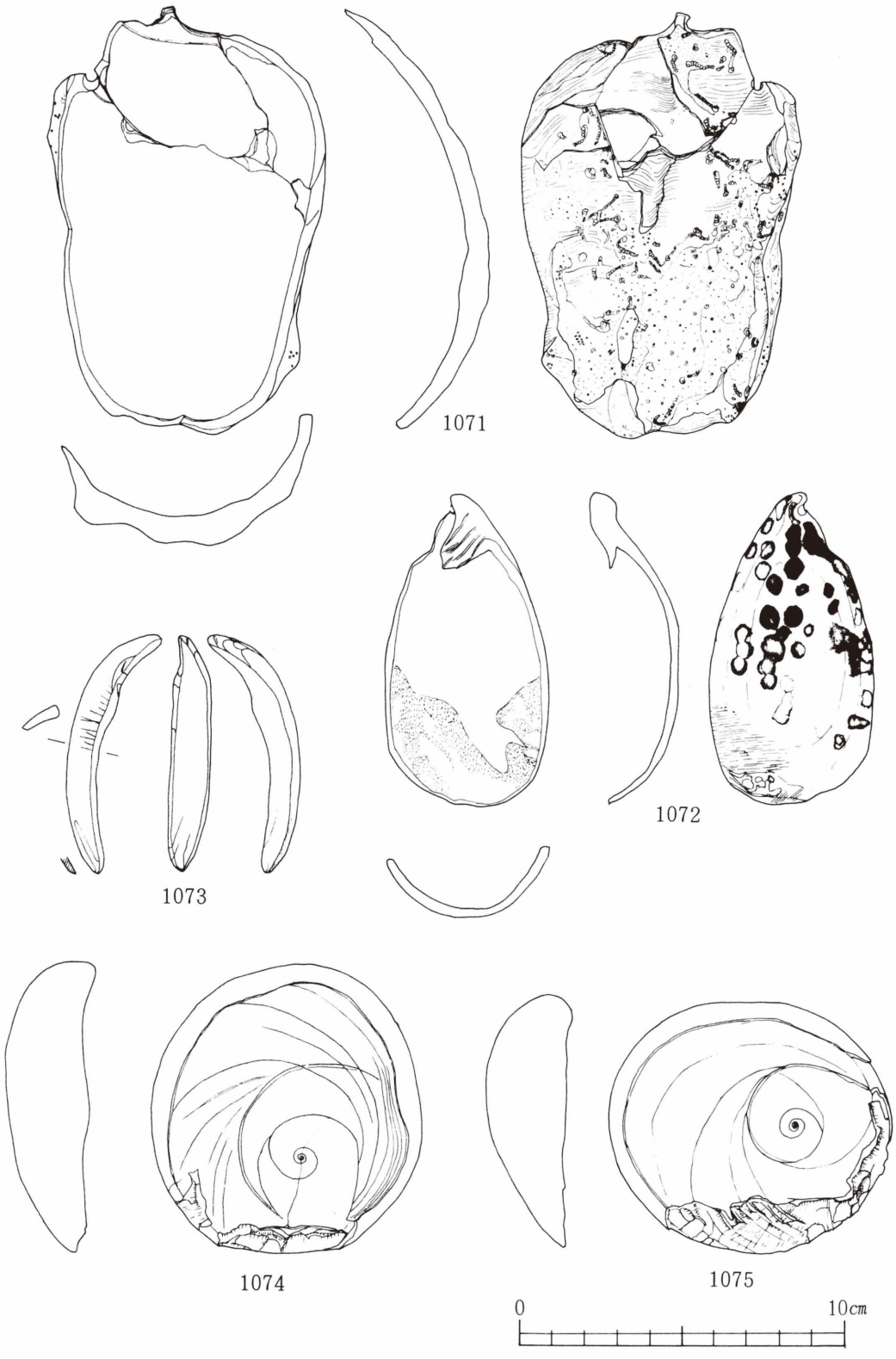




第18図　貝　輪　(2)



第19図　貝　製　品　(1)



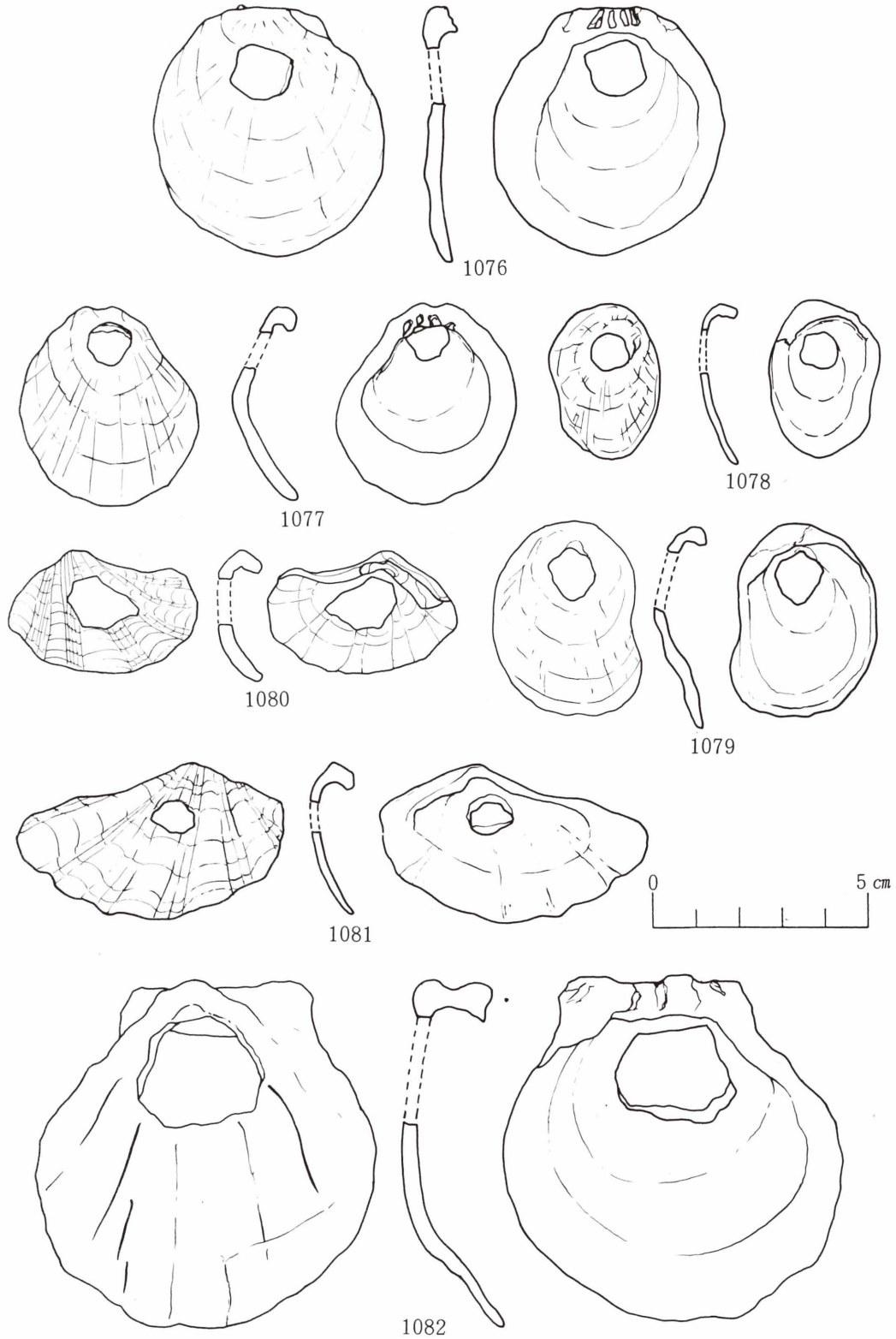
第20図　貝　製　品　(2)

は，ムラクモタカラガイの体層部を半分に切り取り，敲打整形したもので，一端の歯状刻を取手部に利用している。入念な調整はみられない。重量は9.4ｇである。Ａ－１区，Ⅰ層で出土している。1073は，ヘラ状貝器である。貝の腹縁部を切り取り，研磨によってヘラ状に仕上げたものである。Ａ－１区，Ⅲ層の貝層中からの出土である。1076～1082は穿孔を有する貝製品である。総数14点出土した。利用した貝はメンガイ類（1076・1077・1082），ケイトウ（1078），キクザル（1079），シラナミ（1080・1081）である。1076～1079は，メンガイの殻頂近くに１㎝内外の粗孔を有するもので，他に加工痕は認められない。各々長径5.7㎝，4.6㎝，3.6㎝，4.5㎝，短径5.4㎝，4.2㎝，2.6㎝，3.2㎝，重さ１８ｇ，９ｇ，３ｇ，１０ｇ，1080・1081はシラナミの殻頂部近くにやはり１㎝内外の粗孔を有するもので長径4.5㎝，6.2㎝，短径2.8㎝，3.8㎝，重さ６ｇ，６ｇを測る。1082は長径8.0㎝，短径7.8㎝，重さ５４ｇを測る。1074，1075は螺蓋製貝斧である。最初，名称を貝斧で統一していたが，諸文献にも統一性がなく，貝斧のみでは誤解を生むおそれもあるため，三島格氏の螺蓋製貝斧の名称[3)]を使用することにした。

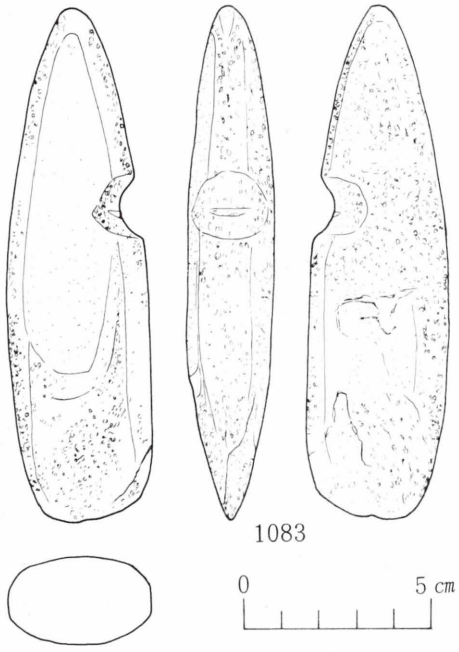
総数10点出土する。夜光貝の蓋の薄い緑部に敲打により刃部をつくり出している。いずれも刃部は鋭い。1074・1075ともＡ－０区，Ⅱ層の貝層中より出土した。また，その他の螺蓋製貝斧は，出土地は別々であるが，全て貝層中よりの出土である。

＜参考文献＞

1）白木原和美「徳之島の先史学的所見」　南日本文化第３号　1970
2）三宅宗悦「大隅国徳之島喜念原始墓花出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就いて」　1941
3）三島格「螺蓋製貝斧」賀川光夫先生還暦記念論集　1982



第21図　貝　製　品　(3)



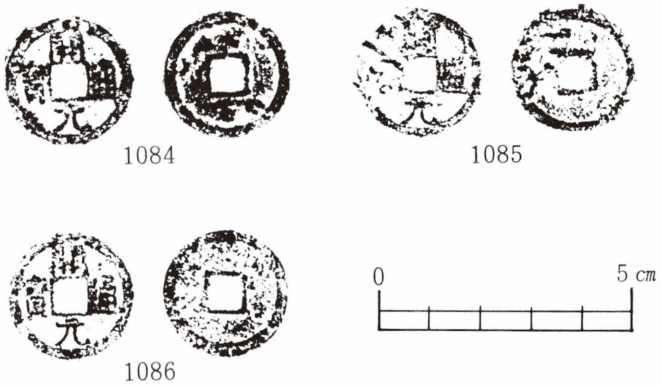
第22図　石　斧

石器

1083は，第1洞穴，Ⅵ層より出土したもので最大長13.6㎝，最大幅3.8㎝，厚さ2.3㎝重量184ｇを測る，軟弱な砂岩を石材に用いた抉りのある石斧である。敲打によって全体を整形し，抉りを一ケ所作っている。刃部と抉り部の位置が，今までの抉入石斧と逆である。抉入部に使用による研磨部がみられる。

古銭

古銭は3点出土した。A－0区貝層下部からの出土であり全て「開元通宝」である。昭和5年の小原一夫氏の発掘(注)の際も貝層下部は111点出土している。貝層は兼久式土器の単純層であり，兼久式土器の編年上貴重な資料といえる。



第23図　古銭拓影

＜注＞

小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」　史前学雑誌　第4巻3・4号　1932

第5節　小　　結

発掘調査の結果，面縄第１貝塚は滅失どころか遺跡の範囲拡大と，縄文時代早期から歴史時代までの複合遺跡であることが判明した。地点ごとに若干まとめておきたい。

第１貝塚は，貝塚，洞穴及び開地からなる遺跡である。今回は確認調査であり，基本的に２ｍのトレンチ調査を行ったのであるが多くの成果があった。

貝塚は隆起珊瑚礁のテラス部にあり，兼久式土器を包含するものである。貝殻は別掲に紹介したがウニ，ヒバリガイを主とし，47種類を確認できた。今回は種を分類しただけであったが詳細に分析していけば食性，生息状況等も推定できるのではなかろうか。貝層中の遺物は，兼久式土器が主である。Ａ－０区の下層部にて「開元通宝」が３点検出された。「開元通宝」は小原一夫氏の調査[1)]においても一点出土している。このように，兼久式土器は編年上，一概に結論を出すのはむずかしいが，Ａ－０区の貝層（約80㎝）の堆積に変化はみられなく，１片出土した弥生後期土器片も他に類例はない。Ａトレンチにおいても混在した根拠はない。貝層下部のマガキガイによるカーボン測定の結果1355±60B.P.[1)]という数価が与えられ，年輪年代に換算するとＡ.Ｄ.650年という結果が検出されている。このため，面縄第１貝塚の兼久式土器の編年は一概に結論を出すのはむずかしいが，７世紀を基準とすることができるのではないだろうか。また，兼久式土器に関しても形態等分類できるものがある様である。まだ詳細に分析する必要があるのではないだろうか。

洞穴遺跡では，箱式石棺墓が検出され，完全人骨の埋葬形態が判明したのであったが，砂層の分類と石棺内での遺物が出土しないため時期的なものが判明しなかった。唯，供献土器と同層より出土した抉りのある石斧等より弥生時代前期の相前後するころと推定したのであるが，今後の調査によってより完全なものにしたい。

Ｃ，Ｄ区は，堆積層が厚く岩盤まで調査することは出来なかったが，６層下部より指頭圧痕の爪形文土器が二点出土した。南西諸島に爪形文土器が出土するのは以前より知られていたが沖縄県野国貝塚Ｂ地点より[2)]大量の爪形文土器が発見され分析されている。沖縄における爪形文土器の発見は，1960年ヤブチ洞穴[3)]の発見以来５ケ所を数える。奄美地方においても３ケ所が確認されているが，九州本土における細石器に伴うものであるのか結論がまだ見出されていない。野国貝塚では，生活形態の違いなどによる石器組成の違い，すなわち地域差として捉えられると述べているが時期等については今からの課題と思われる。

このように第１貝塚は複雑な様相を示す遺跡であり，多くの貝製品，土器等の整理によってより確かな事実をつかんでいきたい。

＜参考文献＞

１）京都産業大学　山田治氏測定

２）岸本義彦他『野国』　沖縄県文化財調査報告書57　1984

３）国分直一・三島格「ヤブチ式土器―琉球と奄美大島における文化交流の一証跡」
水産大学校研究報告人文科学篇第10号　1965

第 6 節　自　然　貝

植之原　道　義

全般的に色彩が抜け，それによる特徴が薄れたもの，破片等，種名まで同定するには無理なものもあった。中には逆に驚くほどの色彩を保っていたものもあった。……貝塚の貝殻にはよくみられる。

当時の住人が貝を利用する目的は，食用，容器，道具，装飾用具と推察される。食用の場合肉が食用にたえて，しかもたやすく大量に採ることのできるものであろう。それには一般に二枚貝がむいている。そして内海の砂浜が適地である。ところが徳之島にはそのようなところは少ない。喜念の浜ぐらいである。

採集されたもので砂浜に生息するものは，ウズラガイ，トミガイ，ニシキノキバフデガイ，イソハマグリ，リュウキュウマスオガイのものぐらいで，他は（陸貝除）岩礁性のものである。食用貝としてはもっと多くの種が考えられる。食用以外の用途については，大型，殻が堅い，美しいもので限られた種類である。

大量の貝殻が出土するわけであろうが，それ等をつぶさに調査すれば，当時の食性，貝の生息状況，あるいは海岸の景観の推察ができるかもしれない。

軟体動物門

腹足綱

ツタノハガソ科

ツタノハガイ，オオツタノハガイ，オオベッコウカサガイ

ニシキウズガイ科

ギンタカハマガイ，サラサバティ

リュウテンサザエ科

チュウセンサザエ，ヤコウガイ

アマオブネガイ科

アマオブネガイ，イシマキガイ（淡水産），イシダタミアマオブネガイ

ヤマタニシ科

ヤマタニシ（オオシマヤマタニシ？）

オニノツノガイ科

オニノツノガイ

スイショウガイ科

ムカシタモトガイ，クモガイ，ラクダガイ，スイジガイ

タマガイ科

タマガイ

タカラガイ科

ハナビラタカラガイ，ホシキヌタガイ，ヤクシマタカラガイ，ムラクモタカラガイ

オキニシ科

オキニシ，オオナルトボラ

ヤツシロガイ科

ウズラガイ

アクキガイ科

ツノレイシガイ，キイロイガレイシガイ

フデガイ科

ニシキノキバフデガイ

イモガイ科

ニシキミナシガイ，サヤガタイモガイ？，タガヤサンミナシガイ，クロフモドキガイ

ナンバンマイマイ科

オオシママイマイ（陸性）

斧足綱（二枚貝類）

フネガイ科

エガイ，ベニエガイ

タマキガイ科

ウチワガイ

イガイ科

リュウキュウヒバリガイ，シュモクアオリガイ，シロアオリガイ

ウミギクガイ科

メンガイ類，ウミギクガイ類

シャコガイ科

ヒメシャコガイ

チドリマスオガイ科

イソハマグリ，リュウキュウバカガイ

リュウキュウマスオガイ科

リュウキュウマスオガイ

節足動物門

顎脚綱

フジツボ類

棘皮動物門

ウニ綱

ウニ類，パイプウニ

第 7 節　面縄貝塚出土の動物骨について

鹿児島大学農学部　　西中川　　駿

1．はじめに

面縄貝塚は，鹿児島県大島郡伊仙町にあり，昭和３年に発見され，四カ所の貝塚からなる縄文，弥生時代の貴重な遺跡である。今回は，遺跡保存のために，第一，二貝塚の再調査が行われ，出土した自然遺物を調査する機会を得た。ここでは，とくに哺乳類の出土骨を中心に報告する。なお，動物種名や学名は，今泉[2)]に従った。また，魚類の分類は，別項を参照されたい。

2．面縄第一貝塚出土の動物種と出土量

第一貝塚出土の自然遺物は，総重量1170.2 g（貝類を除く）で，その動物別および区画別出土量は，表１に示した。哺乳類が全体の57％を占め，魚類31％，その他が12％である。その他の中には，鳥類やカメ，カエル，カニ類がみられる。陸棲哺乳類は以下に記す３目４種である。

A．偶蹄目（Artiodactyla）

1）イノシシ（Sus scrofa Linnaeus）

2）ウシ（Bos taurus Linnaeus）

B．食肉目（Carnivora）

3）イヌ（Canis Familiaris Linnaeus）

C．齧歯目（Rodentia）

4）ネズミ類（Muridae gen. et sp. sp. indent）

これらのうち，イノシシが605.2 g（112骨片）で，全体の91％を占めている。なお，動物種や骨の種類を同定出来ないものが90.5 gあり，哺乳類総重量からみた鑑定率は，88％である。以下各動物について述べる。

1）イノシシ（P 1. Ⅰの１～28参照）

イノシシのものと同定された骨片は，112個で，区画ではA－１，A－３の３貝層や３層に多くみられ（表１），骨別（表２）では歯（左14，右15），下顎骨（12，４）が多く，四肢骨では，上腕骨（３，４），大腿骨（３，５）が多い。歯や下顎骨の数からみた推定個体数は５体である。一方，ほぼ完全な右第三中足骨長（最大長72 mm）からイノシシの大きさを推定すると現生のリュウキュウイノシシよりも大きく，ニホンイノシシより小さい型のものである。上腕骨，大腿骨などのような長骨は１～２カ所で割断されている。

2）ウシ（P 1. Ⅱの１参照）

ウシはA－１表層からただ１個の右中手骨の出土であるが，表層からの出土であり，これが弥生時代のものであるという確証はない。骨端のとれた遠位部のみであるが，現代和牛と比較すると小さいことから，改良以前の牛であることが推測される。

3）イヌ（P 1. Ⅱの2～4参照）

イヌは胸椎1，上腕骨（右）1，脛骨（左）1，計3個の出土であるが，出土地点がA－0，A－3，C－1と異なることから，それぞれ別の個体であると思われる。ほぼ完全な右上腕骨の最大長は，12.1㎝であり，山内[10]の方法で体高を推定すると約39㎝となり，長谷部ら[1,9]のいう小型犬に属する。

4）ネズミ類（P 1. Ⅱの5～9参照）

ネズミの骨は，大腿骨（左，右），上腕骨（右）など5個の出土であり，骨が大型であることから，おそらくドブネズミかケナガネズミ大のものであろう。また，A－1の3貝層からまとまって出土していることから，同一個体のものと思われる。

以上，3目4種の陸棲哺乳類の出土骨について述べたが，骨格別にみると（表2），頭蓋39.7％前肢骨24.8％，後肢骨24％，胴骨11.5％であり，歯の出土が多い。

なお，海棲哺乳類としてクジラの小骨片もみられ，鳥類はキジバト類の左中足骨1個がみられる。その他，カメ類の甲や指骨など12個，カエルの上腕骨や寛骨，カニ類の鉗脚（22個）などがみられる。

3．面縄第二貝塚出土の動物種と出土量

面縄第二貝塚出土の自然遺物は，総重量252.1g（貝類を除く）で，それからはイノシシ172.7g，クジラ類6.5g，魚類20g，カメ類14.9gである。A－2，A－4区からの出土が多い。細骨片のため同定不能のものが38gあり，総重量からみた鑑定率は84.9％である。陸棲の哺乳類は，イノシシのみで，その骨別出土骨片数は表2に示した。

A．偶蹄目（Artiodactyla）

1）イノシシ（Sus scrofa Linnaeus，P 1。Ⅱの21～28参照）

イノシシの骨と同定されたものは，26骨片で，肋骨や尺骨などが多くみられ，推定個体数3個体と思われる。寛骨や距骨などは現生のリュウキュウイノシシより大きく，ニホンイノシシの雌程度の大きさである。長骨は第一貝塚のものと同様に割断されており，骨髄食が伺われる。

4．考　察

イノシシの出土は，鹿児島県下の共通した現象であるが，シカの出土のないことは，この奄美地方の特徴のようである。笠利町のサウチ遺跡[5]や宇宿貝塚[6]などからもシカの出土に報告されていない。今回の面縄貝塚でも同様にイノシシ中心の狩猟がなされていたことが想像され，当時，この地方にはシカは生息していなかったことがうかがわれる。

イヌの出土は，珍らしく，県下でも黒川，片野洞穴や高橋貝塚などのみからである。[7,8] 今回出土した上腕骨から体高を推定すると，約39㎝であり，現在のサツマビーグル犬大の大きさである。イヌは当時，狩猟犬として飼われていたと云われており，[3,4] 面縄貝塚人もイヌを狩猟犬として飼っていたことが想像される。ウシの出土がみられるが，当時のものであるとは思われない。しかし，

現代和牛より小さいことから，改良以前の在来牛であることが推察される。ネズミ類は，当時の人々が食料として利用したものでなく，おそらく貝塚に入って死亡したものと思われる。この他にクジラ，カメなどの骨もみられたが，これも古代人の重要な蛋白資源であったのだろう。また，カニが多く出土しているが，面縄川の流域に生息していたものを食料として利用したのであろう。

一方，出土したイノシシの骨を現生のリュウキュウイノシシと比較すると，形態的には類似しているが，やや大型のものが生息していたことがうかがわれる。また，イノシシの長骨や頭蓋は，割断されているが，これは金子ら[3,4]が云うように骨髄や脳を摘出して食べていたことがうかがわれる。また，イノシシの出土骨が多いことから，この面縄貝塚を遺した人々は，イノシシを中心とした狩猟を行っていたことが示唆される。

5．まとめ

面縄第一，二貝塚より出土した動物骨について，動物種や骨の種類について同定した。

1. 面縄第一貝塚出土の自然遺物は，総重量1170.2 g(貝類を除く)で，哺乳類668.1 g，鳥類0.2 g，魚類361.0 gその他31.4 gで，それらは，イノシシ，ウシ，イヌ，ネズミ，クジラ，キジバト，カメ，カエルおよび魚類（別項参照）であった。
2. 面縄第二貝塚出土の自然遺物は，総重量257.1 gで，イノシシ，クジラ，カメおよび魚類（別項参照）であった。

参考文献

1）長谷部言人：日本石器時代家犬について，人類学雑誌40巻1号（1925）
2）今泉　吉典：原色日本哺乳類図鑑，P 1－196，保育社，東京（1979）
3）金子　浩昌：動物遺存体，考古学ゼミナール，江上波夫監修，P340−345，山川出版社，東京（1976）
4）金子　浩昌：縄文時代の狩猟，漁撈，歴史公論2，67－71（1979）
5）笠利町教育委員会：サウチ遺跡，65－65（1978）
6）笠利町教育委員会：宇宿貝塚，笠利町文化財調査報告書，95－96（1979）
7）西中川　駿　他4名：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅱ。鹿児島県片野洞穴出土骨の概要，鹿大農学術報告，32，157－166（1982）
8）西中川　駿　他3名：古代遺跡出土の動物骨に関する研究，Ⅳ。鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要，鹿大農学術報告，33，147－157（1983）
9）芸田　清吾：日本古代家畜史の研究，P 1～338，学術出版会，東京（1969）
10）山内　忠平：犬における骨長より体高の推定法，鹿大農学術報告，7，125～131，(1958)

表１　面縄第一貝塚出土の動物別および区画別出土骨量

（g）

区画・層		哺乳類 イノシシ	哺乳類 ウシ	哺乳類 イヌ	哺乳類 ネズミ	哺乳類 クジラ	鳥類	魚類	カメ類	カエル類	カニ類	不明骨	出土区画別骨量
A－0	2貝層	4.2 (1)		2.4 (1)								3.0	9.6
A－1	表層	16.4 (5)	7.3 (1)									1.4	25.1
	3貝層	111.1 (39)			1.2 (5)		0.2 (1)	289.0	13.2 (7)	0.5 (2)	21.1	56.4	492.7
	3層下	86.7 (8)											86.7
	61・314 360	44.1 (3)											44.1
A－3	3層	76.6 (19)						31.0				26.5	134.1
	3層下	167.4 (24)		2.4 (1)								2.6	172.4
	22・361	19.5 (2)											19.5
A－4	表層								3.1 (2)				3.1
A－5	387 388	26.6 (5)										0.6	27.2
C－1	混土貝層	37.0 (4)		16.6 (1)		12.5 (2)			41.0	12.5			119.6
D－1	139	15.6 (2)				20.5 (2)							36.1
動物別出土骨量		605.2 (112)	7.3 (1)	21.4 (3)	1.2 (5)	33.0 (4)	0.2 (1)	361.0	28.8	0.5	21.1	90.5	1170.2
推定個体数		5	1	3	1	－	1	－	－	1	－	－	－

（　）は骨片数を示す。

表 2　面縄第一，第二貝塚出土の陸棲哺乳動物の骨別出土骨片数

	骨名 / 動物種	頭蓋					胴骨							前肢骨							後肢骨								動物別出土骨片数
		頭蓋骨	下顎骨	舌骨	歯	角	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	鎖骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
第一貝塚	イノシシ 左	2	12		14		4	1	1			4			4	3	2	1		1		3	3		1		2	1		112
	イノシシ 右											2				4	3	2		3	4	2	5		1			3	5	
	ウシ 左																			1										1
	ウシ 右																													
	イヌ 左																							1						3
	イヌ 右							1								1														
	ネズミ 左				1																		1		1					5
	ネズミ 右															1							1							
	骨別骨片数	2	16		30		4	2	1			6		4	9	5	3			5	4	5	10		4		2	4	5	121
	骨格別出土率	39.7％(48)					11.5％(14)							24.8％(30)								24.0％(29)								
第二貝塚	イノシシ 左	2	1		1			1				3		1	2	1	3					1			2		1	1		26
	イノシシ 右				1							2		1						1	1									
	骨格別出土率	19.2％(5)					23.1％(6)							38.5％(10)								19.2％(5)								
総出率		36.1％(53)					13.6％(20)							27.2％(40)								23.1％(34)								147

(　　) 骨片数

写真説明

Plate Ⅰ　1～28　イノシシ（面縄第一貝塚）

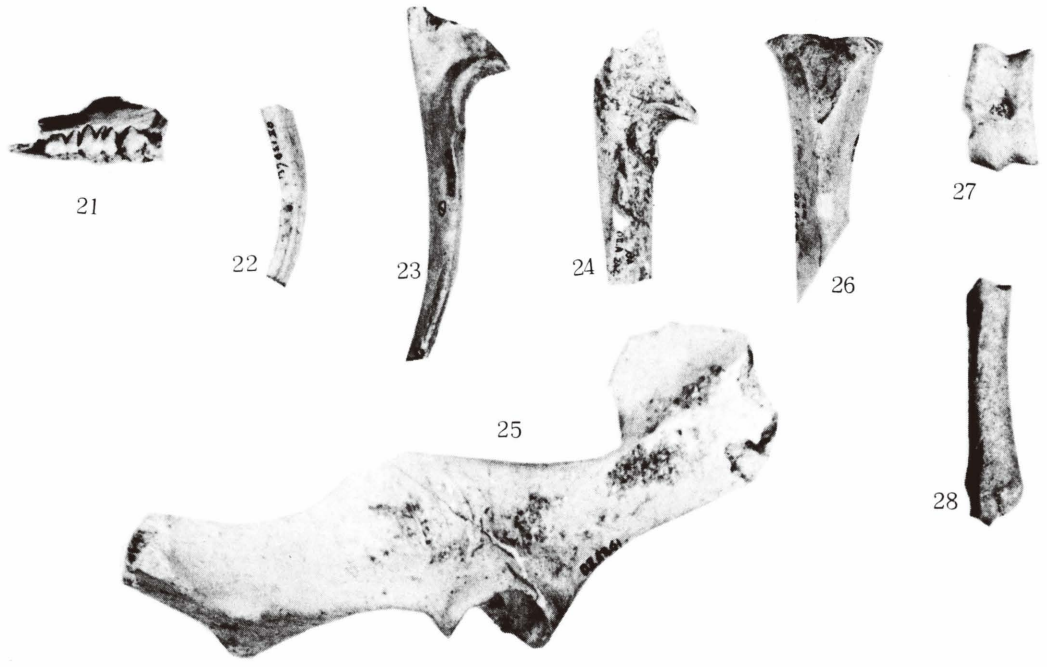
1. 上顎骨（左，第一後臼歯を含む）　2. 犬歯（右，上顎）　3. 犬歯（左，下顎）
4. 犬歯（左，下顎）　5. 第三後臼歯（右，下顎）　6. 第三後臼歯（右，下顎）
7. 第三後臼歯（右，下顎）　8. 下顎骨（左，犬歯を含む）　9. 下顎骨（切歯を含む）
10. 下顎骨（左，歯槽のみ）　11. 環椎　12. 肋骨（左，第一）　13. 肩甲骨（左）
14. 上腕骨（右，前面）　15. 上腕骨（左，後面）　16 橈骨（右，前面）
17. 橈骨（左，後面）　18. 尺骨（右，側面）　19. 寛骨（右）　20. 大腿骨（右，側面）
21. 大腿骨（右，側面）　22. 脛骨（右，前面）　23. 踵骨（左，内側面）
24. 第四足根骨（左）　25. 第三中手骨（右）　26. 第三指基節骨（右）
27. 第四指中節骨（右）　28. 第三趾末節骨（右）

Plate Ⅱ　1　ウシ　11～15　カメ
2～4　イヌ　16～17　カエル
5～9　ネズミ　18～20　カニ
10　キジバト　（以上面縄第一貝塚）
21～28　イノシシ　（面縄第二貝塚）

1. 中手骨（右，前面）　2. 胸椎　3. 脛骨（左）　4. 上腕骨（右，前面）
5. 切歯（左，下顎）　6. 上腕骨（右）　7. 大腿骨（左）　8. 大腿骨（右）
9. 脛骨（右）　10. 中足骨（左）　11. 頭蓋　12. 腹甲　13～15. 指骨
16. 上腕骨（左）　17. 寛骨（左）　18～20. 鉗脚　21. 上顎骨（左，前，後臼歯を含む）
22. 肋骨（左）　23. 尺骨（左）　24. 尺骨（右）　25. 寛骨（右）　26. 脛骨（右,前面）
27. 距骨（右，前面）　28. 第三中手骨（右，前面）

Plate I

Plate Ⅱ



第 8 節　鹿児島県伊仙町面縄第 1 貝塚出土の弥生時代人骨

松下孝幸※・石田肇※※

はじめに

鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）にある面縄第 1 貝塚の 1982 年の調査によって，第 1 洞穴から散乱骨と 1 体の埋葬人骨とが出土した。この埋葬人骨は別項で述べられているように，考古学的所見より，弥生時代（前期～中期）に属する人骨である。人骨の保存状態はきわめて良好なもので，また徳之島から弥生時代人骨が出土したのは今回が初めてであり，薩南諸島の形質人類学の研究資料としてはきわめて貴重なものと考えられるので，計測ならびに形質人類学的観察を行なった。その結果を報告したい。

資　料

第 1 洞から出土した埋葬人骨は 1 体で，埋葬姿勢は仰臥伸展葬であった。この人骨の性別・年令は，下記の所見より，女性・壮年と推定される。

計測方法は Martin-Saller（1957）によったが，一部は Howells（1973）の方法で計測を行なった。また鼻根部については鈴木（1963）の方法と松下（1983）の方法で計測を行なった。

比較資料としては奄美大島の宇宿貝塚出土の弥生人（以下，宇宿弥生人），（松下，1979），西北九州弥生人（内藤，1971），大友弥生人（松下，1981），土井ケ浜弥生人（金関，他，1960，財津，1956）を用いた。

なお，1982 年に第 1 洞から出土した埋葬人骨を「1 号人骨」と番号をつけ，今回はこの人骨についてのみ報告する。

所　見

各骨の計測値は表11～20に示すとおりである。

(1) 頭　蓋

1．脳頭蓋

脳頭蓋はほぼ完全である。外後頭隆起の発達は悪く，乳様突起もあまり大きいものではない。縫合は，三主縫合とも内外両板は開離している。

※MATSUSHITA Takayuki　長崎大学医学部解剖学第二教室
※※ISHIDA hajime

脳頭蓋の主要計測値は，頭蓋最大長が165㎜，頭蓋最大幅は136㎜，バジオン・ブレグマ高は130㎜で，頭蓋長幅示数は82.42，頭蓋長高示数は78.79，頭蓋幅高示数は95.59となり，頭型としては，brach-，hypsi-，metriokran（短・高・中頭）に属している。

頭蓋水平周は486㎜，横弧長は304㎜，正中矢状弧長は352㎜である。

次いで，脳頭蓋の主要計測値について，宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人と比較してみると（表1），頭蓋最大長および頭蓋最大幅はどの比較群よりも小さく，バジオン・ブレグマ高は西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人よりもわずかに大きく，宇宿弥生人の計測値に一致する。頭蓋長幅示数は宇宿弥生人よりは小さいが，西北九州弥生人，大友弥生人および土井ケ浜弥生人よりも小さい。宇宿弥生人は過短頭であり，本例も短頭であるが，宇宿弥生人ほどその短頭性は強いものではない。またバジオン・ブレグマ高がやや大きいため，頭蓋長高示数および頭蓋幅高示数はどの比較資料よりも大きい。

頭蓋水平周および正中矢状弧長はどの比較群よりも小さいが，横弧長は宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人よりも大きく，土井ケ浜弥生人と大差ない。

表1　脳頭蓋計測値（女性）　（㎜）

		面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（金関，地）	
			n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	165	1	170	15	178.07	18	178.11	32	176.0
8.	頭蓋最大幅	136	1	149	15	139.27	17	141.18	32	138.1
17.	バジオン・ブレグマ高	130	1	130	7	128.28	13	128.31	29	128.1
8／1	頭蓋長幅示数	82.42	1	87.65	15	78.23	13	80.30	30	78.5
17／1	頭蓋長高示数	78.79	1	76.47	7	71.22	13	72.92	28	72.8
17／8	頭蓋幅高示数	95.59	1	87.25	7	92.48	13	91.39	29	92.8
23.	頭蓋水平周	486	1	506	14	502.14	18	515.44	27	506.0
24.	横弧長	304	1	317	11	309.09	18	306.00	31	305.1
25.	正中矢状弧長	352	1	368	13	363.08	10	362.90	29	361.2

2．顔面頭蓋

左側の鼻骨と左側の頬骨弓を欠失している以外はほぼ完全である。

眉上弓の隆起は著しく弱く，前頭部は豊かに膨隆している。また鼻骨の隆起は弱く，鼻根部は広くて扁平である。

主要計測値は，中顔幅が98㎜，顔高は96㎜，上顔高は61㎜で，顔面の諸径は小さく，特に高径は著しく低い。頬骨弓幅は計測できないが，復元してその推定値を求めてみると，(134㎜）となり，顔面の高径のわりには幅径は大きいようである。ウイルヒョーの顔示数および上顔示数はそれぞれ97.96，62.24で，両示数値とも小さく，低・広顔の傾向が強い。

眼窩幅は42㎜（右），41㎜（左），眼窩高は30㎜（右），33㎜（左）で，眼窩示数は71.43（右），80.49（左）となり，右側はchamaekonch（低眼窩）に，左側はmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は29㎜，鼻高は47㎜で，鼻示数は61.70となりhyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は表2に示すとおり，前眼窩間幅は18㎜，前頭突起水平傾斜角は102度で，鼻根角は143度，鼻根陥凹示数は13.64となり，前頭突起水平傾斜角，鼻根角は大きく，鼻根陥凹示数は小さく，鼻根部は比較的扁平である。

表2　鼻根部計測値　（㎜，度）

前眼窩間幅	18
鼻眼横弧長	−
鼻根彎曲示数	−
鼻骨最小幅	−
前頭突起上幅（右）	9
（左）	10
前頭突起水平傾斜角	102
グラベラ・ナジオン投影距離	2
鼻根角	143
鼻根陥凹示数	13.64

また側面角は，全側面角は76度，鼻側面角は76度，歯槽側面角は77度で，弱い歯槽性突顎の傾向が認められる。

次いで，脳頭蓋の場合と同様に，他資料との比較を行なってみると（表3），中顔幅は西北九州弥生人，大友弥生人よりも大きく，宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人と大差ない。顔高はどの比較群よりも小さく，上顔高は土井ケ浜弥生人よりも著しく小さく，宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人と大差ない。ウイヒョーの顔示数および上顔示数はどの比較資料よりも小さいが，その中でも土井ケ浜弥生人との差は著しく大きく，比較的宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人に近いが，本例はこれよりも一層低・広顔の傾向が強い。

眼窩幅は宇宿弥生人，大友弥生人よりわずかに小さく，西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人と大差なく，眼窩高は西北九州弥生人より大きく，他の3群の平均に一致する。従って眼示数は宇宿弥生人，西北九州弥生人，大友弥生人より大きく，土井ケ浜弥生人より小さい。

鼻幅はどの比較資料よりも大きく，鼻高は宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，西北九州弥生人，大友弥生人と大差ない。本例の鼻示数は著しく大きく，どの比較群よりも大きく，低鼻の傾向が著しい。

また歯槽側面角は宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，歯槽性突顎はこれらの人骨よりは弱い。

表3　顔面頭蓋計測値（女性）　（㎜，度）

		面縄第Ⅱ貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（金関，他）	
			n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	100	1	93	−		5	97.60	23	94.6
45.	頬骨弓幅	−	1	135	6	130.17	1	125	20	131.9
46.	中顔幅	98	1	99	11	95.91	10	94.90	23	98.5
47.	顔高	96	1	112	9	104.89	5	110.60	23	114.2
48.	上顔高	61	1	63	12	60.92	6	62.17	22	68.3
47／45	顔示数(K)		1	82.96	6	81.70	−		17	86.6
48／45	上顔示数(K)	−	1	46.67	6	47.64			17	51.8
47／46	顔示数(V)	97.96	1	113.13	9	109.50	4	111.82	21	115.9
48／46	上顔示数(V)	62.21	1	63.61	11	63.49	5	64.88	21	69.3
51.	眼窩幅(左)	41	1	43	10	41.10	9	42.67	24	40.3
52.	眼窩高(左)	33	1	33	10	31.20	10	33.30	25	33.3
52／51	眼窩示数(左)	80.49	1	76.74	10	75.92	8	77.60	24	82.6
54.	鼻幅	29	1	25	12	26.58	11	26.73	20	26.0
55.	鼻高	47	1	50	12	46.33	10	46.80	23	49.0
54／55	鼻示数	61.70	1	52.00	12	57.39	9	58.82	20	53.0
74.	歯槽側面角	77	1	69	−		−		22	70.5

3．下顎骨

下顎骨は完全である。径は小さく，筋付着部の発達はあまり良いものではない。筋突起はやや大きく，下顎切痕は浅い。また角前切痕は認められない。

4．歯

上顎骨歯槽突起および下顎骨歯槽部には歯が釘植していた。歯槽の状態と残存歯を歯式で表わすと次のとおりである。

$$\frac{\otimes\ \otimes\ \otimes\ \otimes\ P_1\ C\ \ I_2\ I_1 \mid I_1\ I_2\ C\ \otimes\ \otimes\ /\ /\ /}{\otimes\ \otimes\ \otimes\ P_2\ P_1\ C\ \otimes\ \otimes \mid \otimes\ \otimes\ \otimes\ P_1\ \otimes\ \otimes\ \otimes\ \otimes}$$

［／：不明（破損）
○：歯槽開存
⊗：歯槽閉鎖］

咬耗度はBrocaの3度で，「P_1，　$\underline{I_1}$ を除くすべての残存歯に齲蝕が認められる。また風習的抜歯は跡は認められない。

(2) 四肢骨

1）上肢骨

1．鎖　骨

右側は完全に残存していたが，左側は肩峰端を欠いていた。長さはやや長く，骨体の径はあまり大きいものではない。

2．上腕骨

左右ともほぼ完全である。長さも骨体の大きさも中程度で，三角筋粗面の発達は良くないが，右側の大結節稜の発達は好良である。また両側に滑車上孔が認められる。

計測値は，最大長が271㎜（右），268㎜（左），骨体最小周は57㎜（右），53㎜（左），中央周は63㎜（右），59㎜（左）で，長厚示数は21.03（右），19.78（左）である。中央最大径は21㎜（右），19㎜（左），中央最小径は16㎜（右，左）で，骨体断面示数は76.19（右），84.21（左）となり，扁平性はあまり強いものではない。

次いで，他資料と比較してみると（表4），最大長は土井ケ浜弥生人よりも著しく小さいが，宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人の平均値と大差ない。骨体最小周は土井ケ浜弥生人よりわずかに小さいが，宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人と大差なく，中央周についても宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人に近い。長厚示数は宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人，土井ケ浜弥生人に近いが，その中でも大友弥生人の平均値にきわめて近い。また中央最大径は宇宿弥生人よりも大きく，大友弥生人，土井ケ浜弥生人と大差なく，中央最小径は比較群と大きな差はない。骨体断面示数は宇宿弥生人よりは小さいが，大友弥生人よりも大きく，比較的

土井ケ浜弥生人に近い。すなわち，本例は宇宿弥生人よりも長く，また骨体の諸径も大きく，比較的大友弥生人に近い。

表4　上腕骨計測値（女性，右）　（㎜）

		面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
			n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	271	1	263	5	270.20	18	285.3
2.	上腕骨全長	266	1	259	5	265.40	18	281.9
5.	中央最大径	21	1	18	25	21.68	28	20.6
6.	中央最小径	16	1	15	25	15.48	29	15.5
7.	骨体最小周	57	1	50	20	57.65	30	59.1
7(a)	中央周	63	1	54	23	61.96		−
6／5	骨体断面示数	76.19	1	83.33	25	71.53	29	75.9
7／1	長厚示数	21.03	1	19.01	5	21.18	17	20.4

3．橈　骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや長く，骨体の諸径は中程度である。

4．尺　骨

左右とも遠位端を欠いている以外はほぼ完全である。長さはやや長く，骨体はやや細いが，骨間縁は中央部では良く発達している。

2）下肢骨

1．寛　骨

左右とも恥骨の一部と腸骨粗面部を欠いている以外は良く残存していた。大坐骨切痕の角度は大きく，恥骨下角も大きい。また恥骨結合面には弱い平行隆線が認められる。

2．大腿骨

左右とも内側顆の一部と大腿骨頭の一部を欠いている以外はほぼ完全に残存していた。長径は短かく，骨体は細い。粗線の発達は著しく悪く，骨体は丸くなっており，その断面形は円に近いが，骨体上部は扁平である。

計測値は，最大長が372㎜（右），377㎜（左），骨体中央周は73㎜（右，左）で，長厚示数は19.73（右），19.52（左）と小さく，ややきゃしゃな傾向がうかがえる。骨体中央矢状径は23㎜（右，左），骨体中央横径は23㎜（右），22㎜（左）で，骨体中央断面示数は100.00（右），104.55（左）である。また上骨体断面示数は75.00（右），77.78（左）となり，骨体上部は扁平である。

次いで，他の資料と比較してみると（表5），最大長は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人と大差ない。中央周も西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人よりわずかに大きい。長厚示数は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりもわずかに

小さく，宇宿弥生人と大差ない。骨体中央矢状径および横径はともに西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，比較的宇宿弥生人に近い。骨体断面示数は宇宿弥生人よりは大きいが，西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さい。上骨体断面示数は西北九州弥生人よりやや小さいが宇宿弥生人よりも大きく，土井ケ浜弥生人と大差ない。すなわち，本例は比較群の中では宇宿弥生人に最も近いようである。

表5　大腿骨計測値（女性，右）　（㎜）

		面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
			n	M	n	M	n	M
1.	最大長	372	1	370	5	386.80(左)	14	399.5
2.	自然位全長	370	1	368	4	378.25(左)	14	393.5
6.	骨体中央矢状径	23	1	22	30	26.00	33	25.6
7.	骨体中央横径	23	1	24	30	25.03	33	25.0
8.	骨体中央周	73	1	71	28	80.32	33	79.6
9.	骨体上横径	28	1	28	32	29.06	26	30.4
10.	骨体上矢状径	21	1	20	32	22.75	31	22.8
8／2	長厚示数	19.73	1	19.29	4	20.30(左)	10	20.1
6／7	骨体中央断面示数	100.00	1	91.67	30	104.05	33	102.8
10／9	上骨体断面示数	75.00	1	71.43	32	78.42	31	75.7

3．脛　骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや短かく，骨体もやや細い。ヒラメ筋線の発達は著しく悪いが，右側後面には一稜が認められ，左側には鉛直線が認められる。中央断面型は右側がヘリチカのⅣ型，左側はⅡ型である。

計測値は，最大長が319㎜（右），320㎜（左），最小周は65㎜（右，左）骨体周は68㎜（右），70㎜（左）で，長厚示数は20.83（右，左）で，示数値はやや小さく，ややきゃしゃな傾向が認められる。中央最大径は24㎜（右），25㎜（左），中央横径は19㎜（右），18㎜（左）で，中央断面示数は79.17（右），72.00（左）となり，扁平性は認められない。

次いで，他資料と比較してみると（表6），最大長は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも著しく小さく，宇宿弥生人よりもわずかに大きい。最小周および骨体周はともに西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人よりも大きい。長厚示数は西北九州弥生人よりも小さく，宇宿弥生人，土井ケ浜弥生人よりもわずかに大きい。中央最大径は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも小さく，宇宿弥生人と大差なく，中央横径は比較資料と大差ない。中央断面示数は西北九州弥生人，土井ケ浜弥生人よりも大きく，宇宿弥生人と大差ない。すなわち脛骨は長さが短かく，骨体も細く，また扁平性は認められないもので，比較的宇宿弥生人に近い。

表6　脛骨計測値（女性，右）　（mm）

		面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
			n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	312	1	309	2	311.50	10	327.5
1a.	脛骨最大長	319	1	316	3	323.00	10	332.9
8.	中央最大径	24	1	23	27	27.26	28	26.0
8a.	栄養孔位最大径	28	1	27	25	30.56	26	30.1
9.	中央横径	19	1	18	29	19.48	28	19.0
9a.	栄養孔位横径	20	1	20	25	21.12	27	21.5
10.	骨体周	68	1	65	27	74.74	27	71.8
10a.	栄養孔位周	78	1	73	24	82.13	27	82.2
10b.	最小周	65	1	61	23	68.17	28	67.3
9／8	中央断面示数	79.17	1	78.26	27	71.79	24	71.5
9a／8a	栄養孔位断面示数	71.43	1	74.07	25	69.24	27	73.0
10b／1	長厚示数	20.83	1	19.74	2	21.86	4	19.6

4．腓　骨

左右とも腓骨頭を欠損しているが，その他の部分は完全である。長さは短かく，骨体も細く稜の発達も悪く，溝状形成も弱い。

3）四肢骨比

橈骨，上腕骨，大腿骨，脛骨の最大長についてそれぞれの比を計算してみると表7のとおりである。これを他の資料と比較してみると（表8），橈骨と上腕骨との比および脛骨と大腿骨との比は二塚山弥生人よりも大きく，その他の比は宇宿弥生人，大友弥生人，宮の本弥生人と大差ない。すなわち，二塚山弥生人の上腕骨は橈骨に比べるとやや長いが，本例の上腕骨は他の資料と同じように短かいものである。

表7　四肢骨比

	右	左
橈骨／上腕骨	78.23	77.61
橈骨／大腿骨	56.99	55.17
上腕骨／大腿骨	72.85	71.09
脛骨／大腿骨	85.75	84.88

表8　四肢骨比（女性）

	面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		大友弥生人（松下）		宮の本弥生人（松下）		二塚山弥生人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
橈骨／上腕骨	78.23	1	77.57	2	78.14	1	80.84	1	74.60
橈骨／大腿骨	56.99	1	55.14	1	56.13		−		−
上腕骨／大腿骨	72.85	1	71.08	2	70.64		−		−
脛骨／大腿骨	85.75	1	85.41	2	83.20(左)		−	1	78.09

(3) 軀幹骨

椎骨，肋骨，仙骨が残存しており，椎骨には変形性脊椎症，楔状椎など病的所見が認められた。

この病理学的所見については別の機会に改めて報告したい。

(4) 推定身長値

大腿骨，脛骨，上腕骨，橈骨のそれぞれ最大長からPearsonおよび藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると表9のとおりである。

大腿骨から推定すれば，145.20㎝（Rearson，右），146.17㎝（Pearson，左),144.37㎝（藤井，右），145.68㎝（藤井，左）となり，低身長である。

次いで，右大腿骨最大長からPearsonの式を用いて算出した推定値について,他資料と比較してみると（表10），土井ケ浜弥生人はもとより西北九州弥生人，大友弥生人よりも小さく，宇宿弥生人，宮の本弥生人の推定身長値にきわめて近く，低身長である。

表9　推定身長値　（㎜）

		右	左
大腿骨	Pearson	145.20	146.17
	藤　井	144.37	145.68
脛　骨	Pearson	149.80	150.04
	藤　井	148.05	148.63
上腕骨	Pearson	146.11	145.28
	藤　井	145.80	145.47
橈　骨	Pearson	152.10	150.76
	藤　井	149.29	148.70

表10　推定身長値（右大腿骨より，女性）　（㎝）

	面縄第1貝塚1号人骨	宇宿貝塚弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）		大　友弥生人（松下）		宮の本弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearson	145.20	1	144.81	8	147.91	5	148.08(左)	1	145.78(左)	16	149.97
藤　井	144.37	1	143.92		−	5	147.96(左)	1	145.22(左)	1	−

(5) 性別・年令

性別については，寛骨の大坐骨切痕の角度が大きく，また頭蓋の眉上弓の隆起も弱く，前頭骨も豊かに膨隆していることから,女性と考えられ,年令は，歯の咬耗は強いが，縫合が内板においても開離していることや恥骨結合面に平行隆線が認められることから，壮年と推定される。

総　括

鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）にある面縄第1貝塚の第1洞から，1体の弥生時代人骨が出土した。徳之島から弥生時代人骨が出土したのはこれが初めてであり，また保存状態もきわめて良好

であり，今後薩南諸島の形質人類学的研究の貴重な資料となるものと考えられるので，人類学的観察および計測を行なった。その結果は次のように要約できる。

1. 性別・年令は，女性・壮年と推定される。
2. 頭蓋最大長は 165 ㎜，最大幅は 136 ㎜，バジオン・ブレグマ高は 130 ㎜で，頭蓋長幅示数は 82.42，長高示数は 78.79，幅高示数は 95.59 となり，頭型としては，brach －，hypsi －，metriokran（短・高・中頭）に属していた。
3. 眉上弓の隆起は弱く，鼻根部は比較的広くて，扁平である。
4. 中顔幅は 98 ㎜，顔高は 96 ㎜，上顔高は 61 ㎜で，ウイルヒョー顔示数および上顔示数はそれぞれ 97.96，62.24 で，顔面頭蓋には強い低・広顔の傾向が認められる。
5. 眼窩については，右側は低眼窩に，左側は中眼窩に属しており，また鼻示数は著しく大きく，過広鼻に属している。
6. 風習的抜歯の痕跡は認められない。
7. 上腕骨は短かく，骨体はやや太いが，三角筋粗面の発達は悪く，扁平性は弱い。
8. 大腿骨も長さは短かく，骨体は細く，粗線の発達も著しく悪いもので，ややきゃしゃである。
9. 脛骨も短かく，骨体も細く，ヒラメ筋線の発達は著しく悪く，脛骨もややきゃしゃで，扁平性も認められない。
10. 右大腿骨最大長からの推定身長植は 145.20 ㎝（Pearson）となり，低身長である。
11. 以上の様に，本例は短頭で，低・広顔であり，四肢骨は一様に短かく，比較的きゃしゃなものであった。これを周辺地域の弥生人と比較してみると，頭型，顔面の特徴，大腿骨および脛骨については奄美大島の宇宿弥生人に最も近似しているが，上腕骨は大友弥生人に最も近い。すなわち，四肢骨は全体的にきゃしゃではあるが，その程度は宇宿弥生人ほどではない。

南九州の弥生人については，金関（1966）によって広田弥生人の形質の一部が明らかにされている。金関によれば，広田弥生人の男性は短頭であるといい，松下によれば奄美大島の宇宿弥生人女性（1例）も過短頭である。また佐野（1978）によれば，沖縄の木綿弥生人も男女とも強い短頭型に属しているという。本例も短頭型を呈しており，この短頭性は南西諸島の弥生人の共通した特徴なのかもしれない。しかし顔面の形態や四肢骨の性状についてはまだ不明な点が多く残されている。このような課題を解明するために，本地域での古人骨の収集と研究を今後とも進めていきたい。

＜擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた伊仙教育委員会，鹿児島県教育庁文化課，ならびに人骨研究についてご指導いただいた内藤芳篤教授へ感謝致します。＞

表 11　脳頭蓋計測値　（㎜）

1.	頭蓋最大長	165
8.	頭蓋最大幅	136
17.	バジオン・ブレグマ高	130
8／1	頭蓋長幅示数	82.42
17／1	頭蓋長高示数	78.79
17／8	頭蓋幅高示数	95.59
9.	最小前頭幅	90
10.	最大前頭幅	114
5.	頭蓋底長	95
11.	両耳幅	116
12.	最大後頭幅	107
13.	乳突幅	97
7.	大後頭孔長	32
16.	大後頭孔幅	28
16／7	大後頭孔示数	87.50
23.	頭蓋水平周	486
24.	横弧長	304
25.	正中矢状弧長	352
	Vertex Rad	119
	Nasion Rad	86
	Subsp. Rad	93
	Prosth. Rad	98

表 13　下顎骨計測値　（㎜，度）

65.	下顎関節突起幅	123
65(1).	下顎筋突起幅	98
66.	下顎角幅	93
68.	下顎長	63
69.	オトガイ高	22
69(1).	下顎体高（右）	27
	（左）	－
69(2).	下顎体高（右）	－
	（左）	－
69(3).	下顎体厚（右）	9
	（左）	8
70.	枝高（右）	58
	（左）	58
70(3).	下顎切痕高（右）	12
	（左）	13
71.	枝幅（右）	30
	（左）	28
71 a.	最小枝幅（右）	29
	（左）	29
71(1).	下顎切痕幅（右）	35
	（左）	36
79.	下顎枝角（右）	125
	（左）	130
68／65	幅長示数	51.22
69(2)／69	下顎高示数（右）	－
	（左）	－
71／70	下顎枝示数（右）	51.72
	（左）	48.28
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数（右）	33.33
	（左）	－
	下顎幅示数	75.61
66／65	下顎切痕示数（右）	34.29
70(3)／71(1)	（左）	36.11

表 12　顔面頭蓋計測値　（㎜，度）

40.	顔長	100
41.	側顔長	69
42.	下顔長	109
43.	上顔幅	101
45.	頬骨弓幅	－
46.	中顔幅	98
47.	顔高	96
48.	上顔高	61
47／45	顔示数(K)	－
48／45	上顔示数(K)	－
47／46	顔示数(V)	97.96
48／46	上顔示数(V)	62.24
50.	前眼窩間幅	18
44.	両眼窩幅	97
50／44	眼窩間示数	18.56
51.	眼窩幅(右)	42
	（左）	41
52.	眼窩高(右)	30
	（左）	33
52／51	眼窩示数(右)	71.43
	（左）	80.49
54.	鼻幅	29
55.	鼻高	47
54／55	鼻示数	61.70
57.	鼻骨最小幅	－
57(1)	鼻骨最大幅	－
60.	上顎歯槽長	－
61.	上顎歯槽幅	－
61／60	上顎歯槽示数	－
72.	全側面角	76
73.	鼻側面角	76
74.	歯槽側面角	77

表 14　鎖骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	鎖骨最大長	135	－
2 a.	骨体彎曲高	30	28
2(1).	肩峰端彎曲高	27	－
4.	中央垂直径	8	8
5.	中央矢状径	11	12
6.	中央周	33	34
6／1	長厚示数	24.44	－
2 a／1	彎曲示数	22.22	－
4／5	鎖骨断面示数	72.73	66.67

表 15　上腕骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	上腕骨最大長	271	268
2.	上腕骨全長	266	254
5.	中央最大径	21	19
6.	中央最小径	16	16
7.	骨体最小周	57	53
7 (a).	中　央　周	63	59
6／5	骨体断面示数	76.19	84.21
7／1	長厚示数	21.03	19 78

表 16　橈骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	最　大　長	212	208
1 b.	平　行　長	209	205
2.	機　能　長	197	197
3.	最　小　周	38	37
4.	骨体横径	16	15
4 a.	骨体中央横径	15	14
5.	骨体矢状径	10	10
5 a.	骨体中央矢状径	10	10
5 (5)	骨体中央周	42	39
3／2	長厚示数	19.29	18.78
5／4	骨体断面示数	62.50	66.67
5 a／4 a	中央断面示数	66.67	71.43

表 17　尺骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	最　大　長	－	－
2.	機　能　長	205	－
3.	最　小　周	－	－
11.	尺骨矢状径	12	11
12.	尺骨横径	16	15
S.	中央最小径	11	10
L.	中央最大径	17	16
C.	中　央　周	46	44
3／2	長厚示数	－	－
11／12	骨体断面示数	75.00	73.33
S／L	中央断面示数	64.71	62.50

表 18　大腿骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	最　大　長	372	377
2.	自然位全長	370	374
6.	骨体中央矢状径	23	23
7.	骨体中央横径	23	22
8.	骨体中央周	73	73
9.	骨体上横径	28	27
10.	骨体上矢状径	21	21
8／2	長厚示数	19.73	19.52
6／7	骨体中央断面示数	100.00	104.55
10／9	上骨体断面示数	75.00	77.78

表 19　脛骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	脛骨全長	312	312
1 a.	脛骨最大長	319	320
1 b.	脛　骨　長	307	308
2.	顆　距　長	294	295
8.	中央最大径	24	25
8 a.	栄養孔位最大径	28	30
9.	中央横径	19	18
9 a.	栄養孔位横径	20	20
10.	骨　体　周	68	70
10 a.	栄養孔位周	78	79
10 b.	最　小　周	65	65
9／8	中央断面示数	79.17	72.00
9 a／8 a	栄養孔位断面示数	71.43	66.67
10 b／1	長厚示数	20 83	20.83

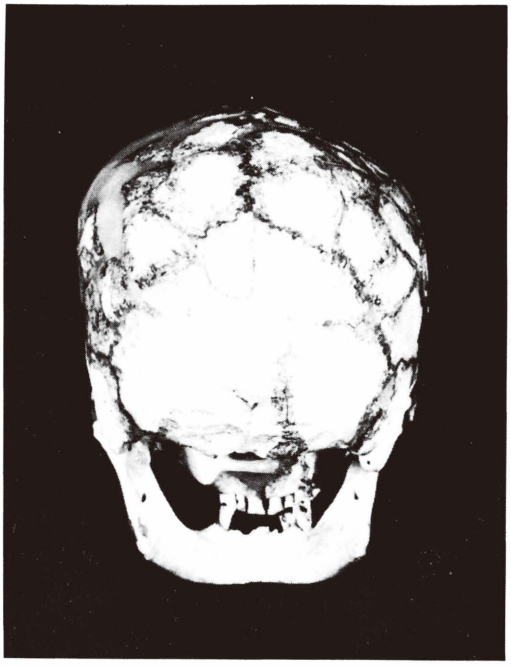
表 20　腓骨計測値　（㎜）

		右	左
1.	最　大　長	－	－
2.	中央最大径	13	12
3.	中央最小径	9	9
4.	中　央　周	37	35
4 a.	最　小　周	33	32
3／2	中央断面示数	69.23	75.00
4 a／1	長厚示数	－	－

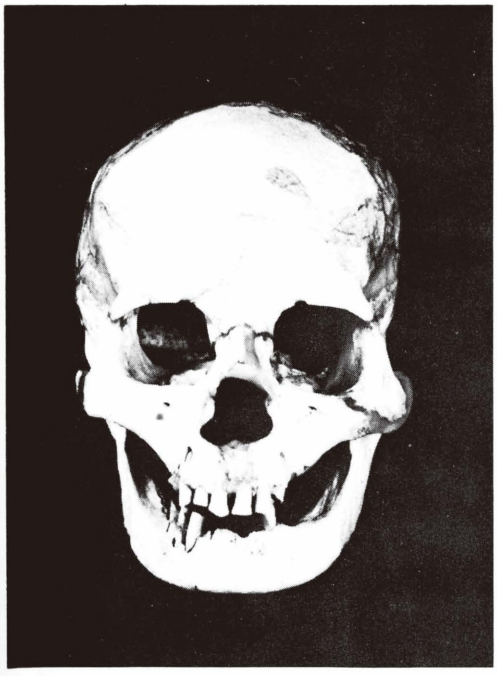
参考文献

1. 金関　丈夫，1955：弥生人種の問題。日本考古学講座，4：238－252。
2. 金関　丈夫，1959：弥生時代の日本人。
   日本の医学－第15回日本医学会総会学術集会記録－，1：167－174。
3. 金関　丈夫，永井　昌文，佐野　一，1960：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究，7：1－36。
4. 金関　丈夫，1966：弥生時代人。日本の考古学，3：460－471。
5. 松下　孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書第46集）：242－255。
6. 松下　孝幸，1979：宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚（鹿児島県笠利町文化財調査報告書）：210－220。
7. 松下　孝幸，内藤　芳篤，1981：「シンポジウム『骨からみた日本人の起源』Ⅳ。弥生時代人骨」。人類誌，199－200。
8. 松下　孝幸，1981：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書。第1集）。
9. 松下　孝幸，1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93－109，145－146。
10. 松下　孝幸，1983：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。
11. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429－597。
12. 永井　昌文，1981：宇宿港遺跡出土の人骨について。宇宿港遺跡（研究室活動報告10）：33－32。
13. 中橋　孝博，永井　昌文，1980：椎ノ木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬趾：24－34。
14. 内藤　芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類誌，79：236－248。
15. 内藤　芳篤，松下　孝幸，1981：弥生時代人骨。季刊人類学，12：27－37。
16. 内藤　芳篤，1981：弥生時代人骨。人類学講座，5：57－99。
17. 佐野　一，1978：木綿原遺跡出土の人骨について。
   木綿原（読谷村文化財調査報告書第5集）：112－114。
18. 財津　博之，1956：山口県土井ケ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。
   人類学研究，3：320－349。

1



2



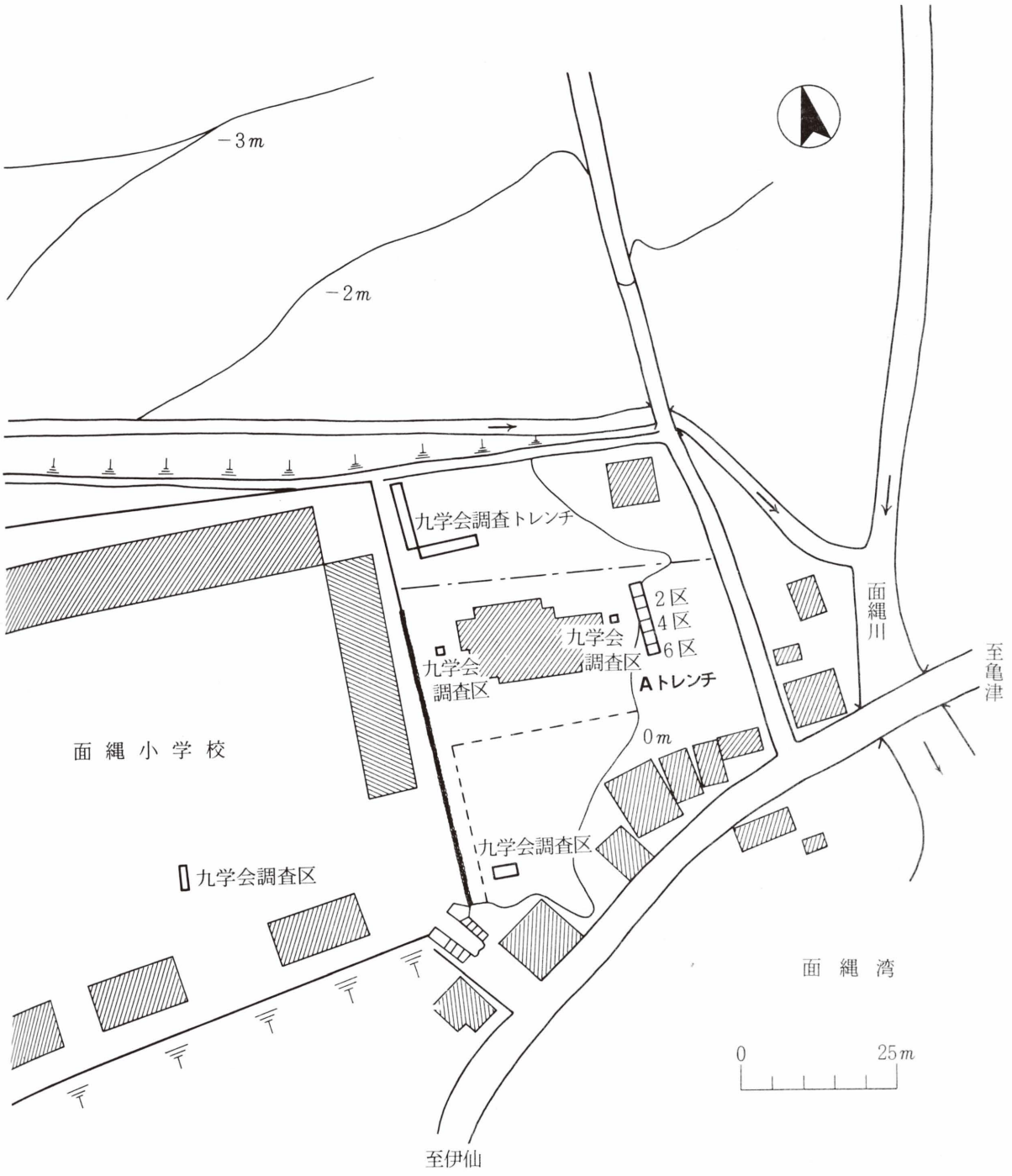
3

4

面縄第１貝塚１号人骨（女性・壮年）　　１＝上面，２＝後面，３＝前面，４＝側面

5

6



第24図　第2貝塚トレンチ配置図

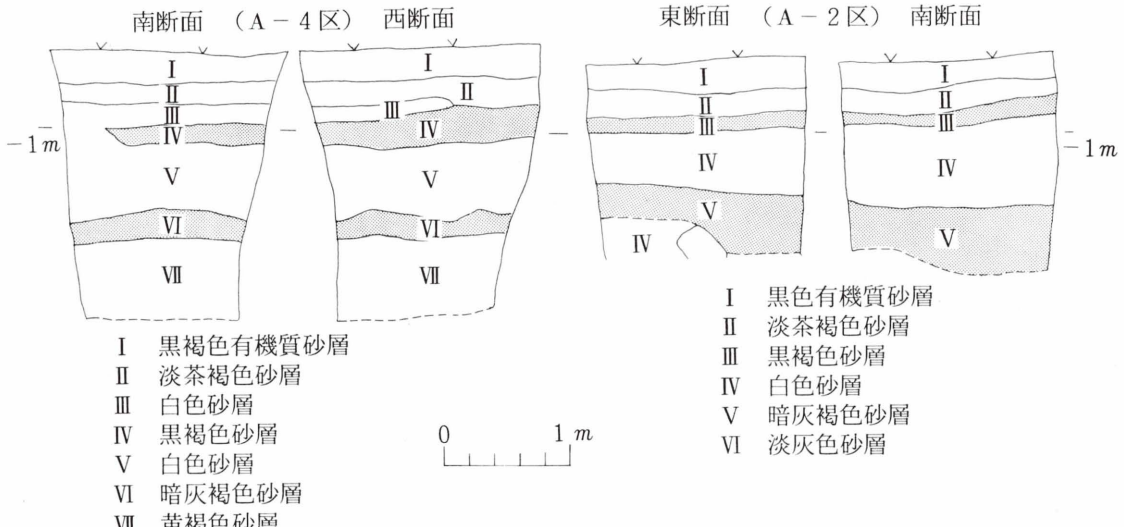
第4章　第　2　貝　塚

第1節　調査の概要

第2貝塚は，昭和5年，小原一夫氏によって発見され[1]，昭和10年三宅宗悦氏の調査によると，第2貝塚は，下面縄集落のほぼ中央を流れる面縄川によって開析された隆起珊瑚上に堆積する標高6mほどの砂丘状にあり，この独立砂丘をとりまくように面縄川の支流が流れている。この流れに接近する砂丘の東縁及び北部は急傾斜をなし，崖状になるところもある。「貝塚は台地の東北部，集落の密集する裏手，珊瑚礁の石垣にとり囲まれて小学校敷地に接する附近にある[2]」とあり，昭和28年8月河口貞徳氏[3]，昭和29年8月三友国五郎，国分直一氏[4]，昭和31年8月九学会調査の試掘の結果からみると，「第2貝塚の範囲は，小学校の石垣に接し，南にある森山信義氏宅を区切る土手に囲まれた，南北25m，東西約40mの区域が中心であったと推定される[5]」とあり，第2貝塚の位置に若干の相違がみられる。このことから，昭和10年発掘地は畑地と面縄川支流の改修工事により滅失したものと思われる。今回の調査区は，昭和31年の九学会調査区の隣接地，森山信義氏宅の東側畑地で12m×2mの南北に長いトレンチを設定し，北から1，2……6区と2mの区割りを行い，2・4・6区の調査を行った。

その結果，A－2区，A－4区は，間層をはさんで嘉徳Ⅱ式土器と嘉徳Ⅰ式土器の包含層が確認され，A－2区のⅤ層（暗灰褐色砂層）からは住居跡と思われる遺構を検出した。A－6区はガラス片，セメント塊等が出土し，撹乱層であった。

1）大山柏・小原一夫「奄美群島徳之島貝塚出土遺物」史前学雑誌第5巻第5号　　1933
2）三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学第11巻第5号　1940
3）河口貞徳　「南島先史時代」鹿児島大学南方産業科学研究所報告第1巻2号　　1956
4）三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告－面縄第2貝塚と付近の貝塚」古代学　第8巻2号　　1959
5）九学会連合『奄美その自然と文化』



第25図　第2貝塚土層図

第2節　層　　序

A－2区

第Ⅰ層　表土（黒色有機質砂層）20～30㎝の厚さを有する耕作土である。

第Ⅱ層　淡茶褐色砂層で20～30㎝の厚さである。

第Ⅲ層　黒褐色砂層で嘉徳Ⅱ式土器を包含し，厚さは10～20㎝である。

第Ⅳ層　白色砂層で40～60㎝の厚さをもち南部へ傾斜している。

第Ⅴ層　暗茶褐色砂層で30㎝ほど掘り下げると珊瑚礁塊を敷いた集石遺構が検出された。嘉徳Ⅰ式土器を包含している。

第Ⅵ層　淡灰色砂層である。嘉徳Ⅰ式土器が出土した。

A－4区もほとんどA－2区と同様である。A－2区のⅡ・Ⅲ層の間にⅣ層の白色砂層が入りこんでいる。基本的には一緒であるが，砂丘地における砂の移動による若干の違いがみられるだけである。

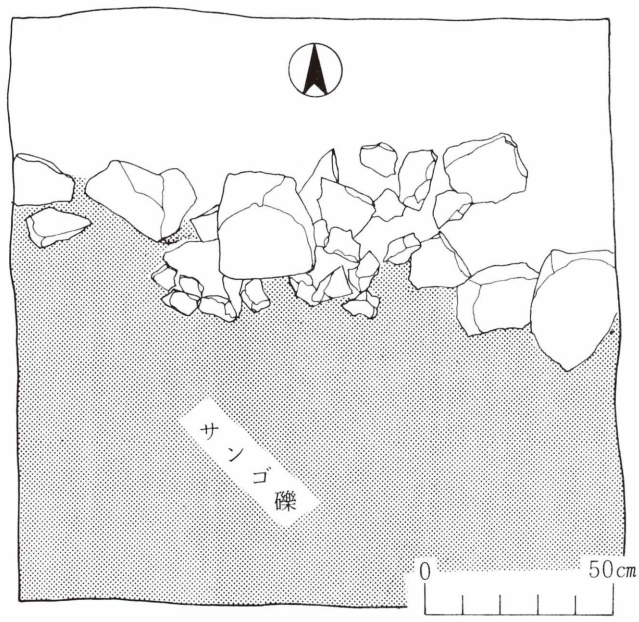
第3節　遺　　構

第26図の遺構がA－2区，Ⅴ層中に検出された。嘉徳Ⅰ式土器を共伴する遺構であり，Ⅴ層（暗茶褐色砂層）をⅥ（淡灰色砂層）に掘り込み，礫が検出された。

砂地を約20～30㎝掘り込み，その周縁に壁の崩壊を防ぐために大形の珊瑚礁塊を立て根石として配列し，さらに根石間に小さな礫を埋め補強している。また遺構内部には拳大から小頭大の礫がぎっしり置かれている。礫の間には嘉徳Ⅰ式土器が出土している。

以前発掘調査された宇宿貝塚，住吉貝塚の住居跡に類似する。

遺構の確認調整が必要であったが，調査期間の問題，また遺構の全体把握及び周辺との遺構確認となると砂地の調査ということも考えあわせ広い面積での拡張が必要であり，今回は確認の段階で埋め戻し，詳細は後日の調査をまちたい。



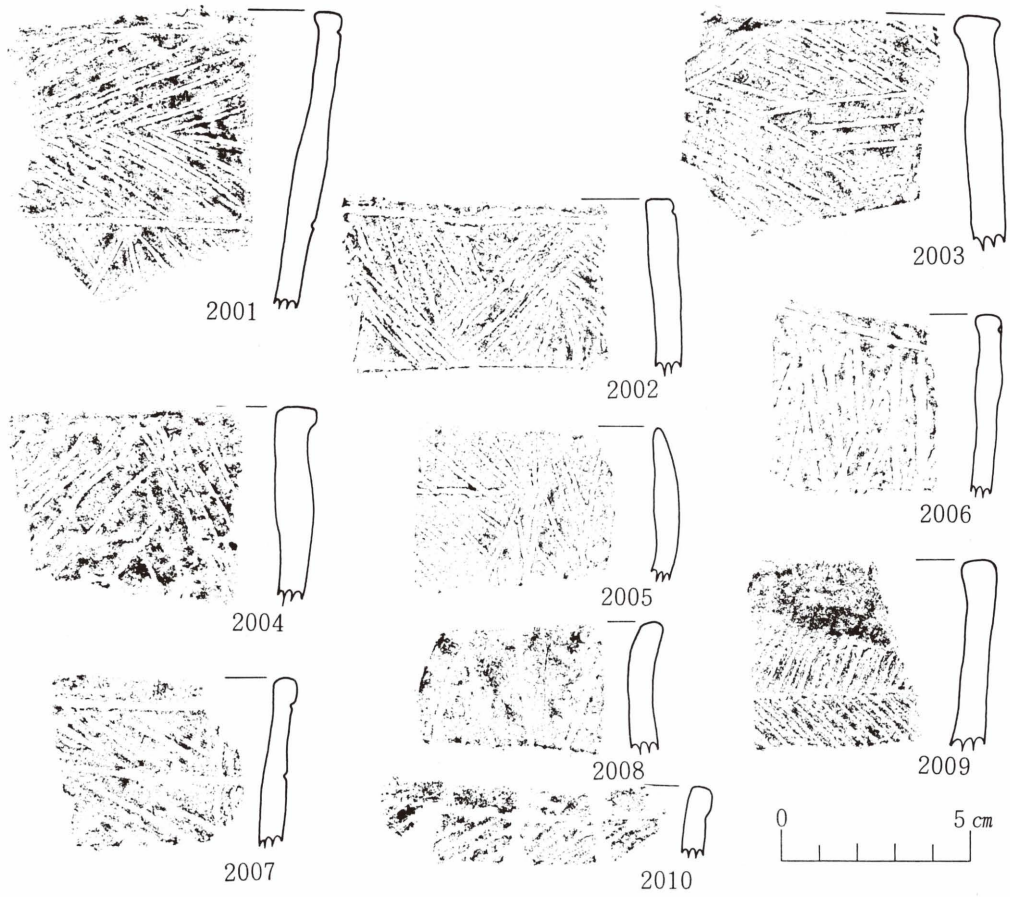
第26図　A－2区住居跡

第4節　遺　　物

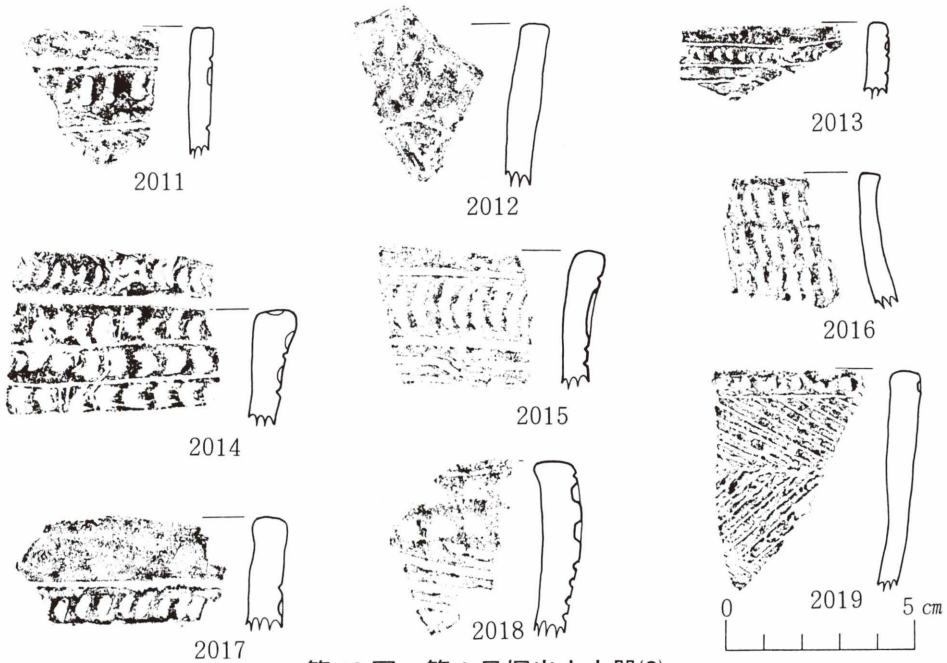
第2貝塚の出土遺物は，自然貝の出土はあったが，石器・貝製品はなく，土器を分類選択して，特徴的なものをとりあげ掲載し，個々の土器は表3にまとめた。

2001～2010は，A－2区Ⅲ層，A－4区N層出土の竹ベラ様な施文具を用い，沈線文様を描写した土器である。2001・2006は波状口縁である。嘉徳Ⅱ式土器に分類されるものである。昭和31年度の九学会の調査報告書での分類では，第二類沈線文土器と分類されるものであるが，編み目状が具象的に表現されたものから形式化したものであり，口唇部に刻点のあるもの，口縁部近くに凸帯をめぐらしたものは出土しなかった。2010は，口縁に不規則な肥厚がみられ，面縄西洞式土器への移行形態とも考えられる。

2011～2017は，爪形文と沈線とを組み合せたもので，嘉徳Ⅰ式土器である。九学会の分類では第三類爪形文・突刺文土器と表現されているものである。2012は，山形隆起のあるもので，2014は口唇部に半載竹管による爪形文が施こされ，爪形による押し引きにヘラ描きの沈刻線で囲ったものである。



第27図　第2貝塚出土土器(1)



第 28 図　第 2 貝塚出土土器(2)

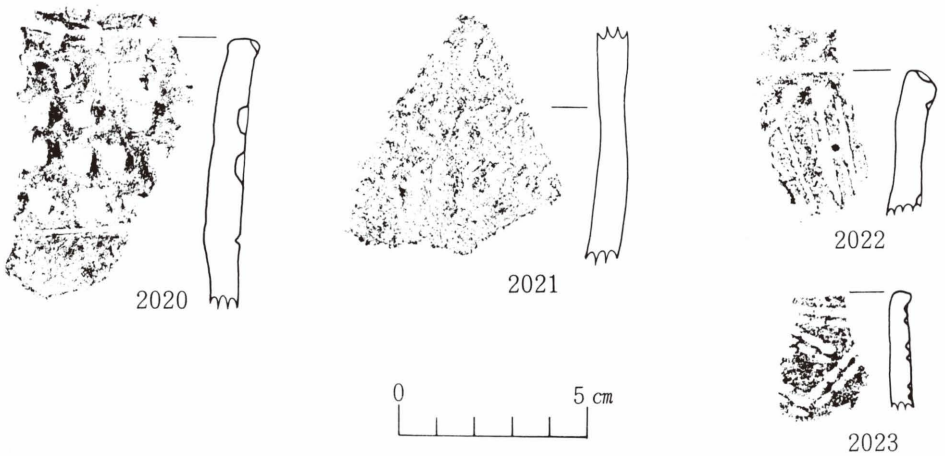
2018は，幅５㎜で先端の平坦なヘラで押し引きして施文したものである。ヘラの先端の細かな刻目が凹線文の中に筋状に印されている。2020も同様と思われる。2017は口縁部に連点文を施すが，下位にヘラ様施文具で，沈線文様を施した，嘉徳Ⅰ式からⅡ式への移行期のものと思われる。

2021は淡赤褐色の石英砂を含む土器で竹管を押圧して文様を構成している。2022は，口唇部に刺突してある嘉徳Ⅱ式土器であり，2023は九学会で第四類（突刺沈線文土器）と分類されたもの。

<参考文献>

河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第９号　　１９７４

九学会連合『奄美その自然と文化』　　１９５９



第 29 図　第 2 貝塚出土土器(3)

表３　第２貝塚出土土器一覧表

挿図	出土地点	調　整	色　調	焼成	胎　土	備　考	
2001	A－4－Ⅳ	外縦ハケナデ	褐色・赤褐色	良好		嘉徳Ⅱ式	波状口縁
2002	A－4－Ⅳ	内縦ハケナデ	赤褐色	良好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2003	A－4－Ⅳ	ナ　デ	赤褐色	良好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2004	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良好	雲母，石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2005	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2006	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	波状口縁
2007	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗褐色	良好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2008	A－4－Ⅳ	ナ　デ	淡赤褐色	良好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2009	A－4－Ⅳ	ナ　デ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅱ式	口　縁
2010	A－2－Ⅲ	ナ　デ	暗褐色	良好	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅱ式	口　縁
2011	A－4－Ⅵ	ナ　デ	暗褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2012	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2013	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2014	A－4－Ⅵ	ナ　デ	赤褐色	良好	石英を含む	嘉徳Ⅰ	口縁口唇部爪形
2015	A－2－Ⅴ	ナ　デ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2016	A－2－Ⅴ	ナ　デ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2017	A－2－Ⅴ	ハケナデ	赤褐色	良好		嘉徳Ⅰ	口　縁
2018	A－2－Ⅴ	ナ　デ	暗褐色	良好	石英を含む	嘉徳Ⅰ	口　縁
2019	A－2－Ⅴ	ナ　デ		良好	〃	嘉徳Ⅰ	口　縁
2020	A－4－Ⅳ	ナ　デ	暗赤褐色	良好	雲母・石英・砂を含む		口　縁
2021	A－4－Ⅳ	ナ　デ	淡赤褐色	良好	石英・砂を含む		
2022	A－6－Ⅰ	ナ　デ	暗褐色	良好	金雲母・微砂を含む		口　縁
2023	A－4－Ⅳ	ナ　デ	赤褐色	良好	微砂を含む		口　縁

第5節　小　　結

第2貝塚は，昭和10年[1]，昭和28・29・31年[2][3][4]と発掘調査がなされ，多くの成果をだしたところである。貝塚は兼久浦の東西に長い，面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に堆積する標高5ｍ程の砂丘状にあり，今回は九学会の調査地域より約30ｍ程東南部の森山氏宅畑地を調査し貝塚の範囲を確認するものであった。

貝塚の範囲は，以前の結果と今回の結果とをふまえて県道の北側で，面縄川の支流までとおもわれる。尚，昭和10年の調査においても，「貝塚は台地の東北部，集落の密集する裏手，珊瑚礁の石垣にとり囲まれて小学校敷地に接する附近にある」[5]と報告され現在の貝塚の位置と一致する。

今回の調査においては，第Ⅲ層（黒褐色砂層）で嘉徳Ⅱ式土器を包含し，白色砂層の50～60㎝の間層をおいて第Ⅴ層（暗茶褐色砂層）に嘉徳Ⅰ式土器が出土した。また嘉徳Ⅰ式を包含する第Ⅴ層中にはサンゴ塊を敷いた住居跡と思われるものが検出された。今回は確認調査の意味より遺構検出をみあわせ，広範囲に遺構検出の可能性を残して後日の調査をまちたい。

土器については九学会の報告を合せて紹介したい。

第一類無文土器（擦痕文土器）　口縁部が外反し，口縁部上に小さな刻目を有し擦痕文土器であるということ，第1層よりの出土ということで兼久式土器と思われる。今回の調査での出土も全て表層よりである。

第二類沈線文土器は，竹ベラ様な施文具を用い，沈線文様を描写した波状口縁の土器ということで嘉徳Ⅱ式土器に分類される。

第三類爪形文・刺突文土器　爪形文と沈線文を組み合せたもので嘉徳Ⅰ式土器である。山形隆起のあるもので，口唇部に半載竹管による爪形文が施され，爪形による押し引きにヘラ描きの沈刻線で囲ったものもある。

第四類（突刺沈線文土器）　突刺文土器の文様を沈線的に施文するもので今回は第Ⅳ層から1点のみ出土である。

第2貝塚は，まだ残りがよく，遺構等貝塚の特徴をよくとらえていると思われる。今回は発掘面積が少なく全体像をつかむには若干心ぼそいが，随時確認等が行われればと思う。

＜参考文献＞

1）三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学11－5　1940
2）河口貞徳「南島先史時代」鹿児島大学南方産業科学研究所報告第1巻2号　1956
3）三反国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告－面縄第2貝塚と付近の貝塚」古代学8－2　1959
4）九学会連合『奄美その自然と文化』　1959
5）1）と同じ

第5章　第 3 貝 塚

第1節　調査の概要

第3貝塚は，昭和29年5月17日より6月1日までの15日間に亘る奄美群島全域の先史遺跡についての調査によって発見されたものである。5月26日からの，面縄第1・第2貝塚の発掘調査の際，河口貞徳氏によって発見され，地名をとって兼久貝塚と名称された。河口氏はその際試掘し，貝層を確認した。そこで出土した特徴のみられる土器（器形は深鉢形平底で，口縁部は外反している。底部には木葉の圧痕を呈す。文様は沈線文を主とし，粘土紐をはりつけた凸帯を頸部に施し，凸帯上に刻目を施している。[1]）を兼久式土器と仮称し，現在面縄第3貝塚は兼久式土器の標式遺跡として著名である。

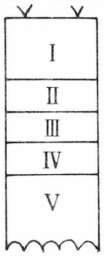
第3貝塚は，面縄兼久浦の海岸より約400ｍの隆起珊瑚礁の斜面に位置し，第2貝塚の北東方230ｍにあたる。珊瑚礁崖と棚状台地からなっている。雑草・樹木が密林化して，昼なお薄暗き地である。以前調査された個所の確認がむずかしく，台地全体を分布調査し，洞穴確認と貝の散布状況を調べた。その結果第30図のような洞穴と，その下位の貝層からなる遺跡であることが判明した。洞穴は東から順に番号を与え，洞穴内の広さに応じて，トレンチを設定した。洞穴の下位に貝の散布がみられ，２ｍ×２ｍのトレンチを設定して確認したところ，貝層の検出をみたので拡張し２ｍ×８ｍの南北に長いトレンチを設定し，北から１，２……４区と２ｍの区割りを行い，１・２・４区の調査を行った。

その結果，洞穴内は遺物の出土は少かったが，兼久式土器の小片が散布していた。また，第3洞穴には人骨が散布していた。人骨は鑑定の結果がまだ得られていないが，兼久式土器の下層よりの出土であることから，貝のC^{14}結果を同時に後日発表の機会を得たい。Aトレンチの貝塚部の結果，兼久式土器を包含する貝層が，またその下部では面縄前庭式土器を主とし，嘉徳Ⅰ式，喜念式が出土した。またチャート石片も多く，石器製作技術をもっていたのではと想定される。

また，第3貝塚の東南部100ｍの洞穴部（東部洞穴）でも，洞穴内，前庭部にトレンチを設定し，確認調査を行ったが，調査中地主さんより前庭部を機械を使って掘り起こし，洞穴内に埋土したとのことであった。洞穴内も風葬跡であり，途中で調査を中止した。

第2節　層　　序

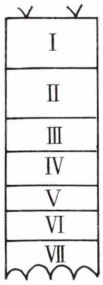
層序は各地区ごとに土層模式柱状図で紹介したい。



第1洞穴

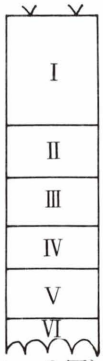
第Ⅰ層　暗茶褐色粘質土で石灰岩（有孔虫岩）の落石がある。
第Ⅱ層　黒褐色粘質土層
第Ⅲ層　有孔虫の石灰岩層
第Ⅳ層　混有孔虫土層
第Ⅴ層　砂岩基盤層（石灰岩）

第3洞穴



第Ⅰ層　暗茶褐色粘質土層（兼久式土器）
第Ⅱ層　茶褐色有孔虫含土層（兼久式土器）
第Ⅲ層　黒褐色粘質土層
第Ⅳ層　明茶褐色粘質土層（下層にて人骨散布）
第Ⅴ層　暗茶褐色粘質土層
第Ⅵ層　混有孔虫土層
第Ⅶ層　砂岩基盤層（石灰岩）

Aトレンチ



（A－2区）

第Ⅰ層　表土（褐色有孔虫混土層）1区ではみられず，南側で厚くなる。
第Ⅱ層　暗茶褐色粘質土層で，厚さは20～30㎝である。
第Ⅲ層　黒褐色土層であり1区では貝を少量出土する。
等Ⅳ層　暗褐色混貝土層であり，兼久式土器と貝製品が出土する。貝は主体となるものがなくタカラ貝，巻貝多種多様の小型貝である。
第Ⅴ層　茶褐色粘質土層
第Ⅵ層　暗茶褐色粘質土層でやはり，北から南へ傾斜しているが，2区，4区では貝層の下部で確認をやめた為厚さは不明である。自然貝の中に面縄前庭式を主として包含している。

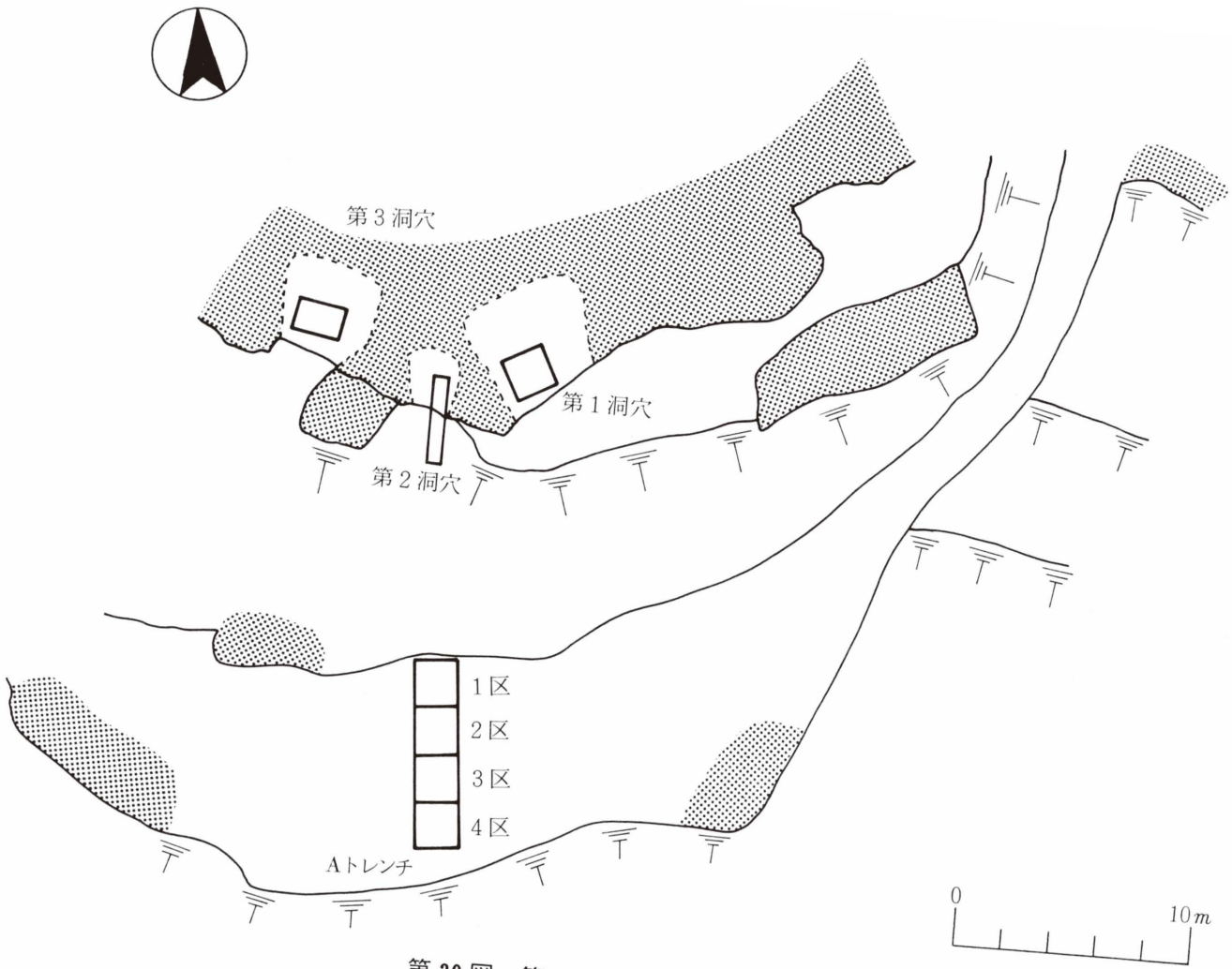
第3節　遺　　構

第3貝塚は，洞穴と貝塚からなる遺跡である。第3貝塚の周辺は，隆起珊瑚礁を基盤とする地域のせいか洞穴が非常に多い。今回もまだまだ分布調査等を行えば洞穴の発見を行えたのであろうが，短い期間と予算のため，前回の確認地の周辺に限った。

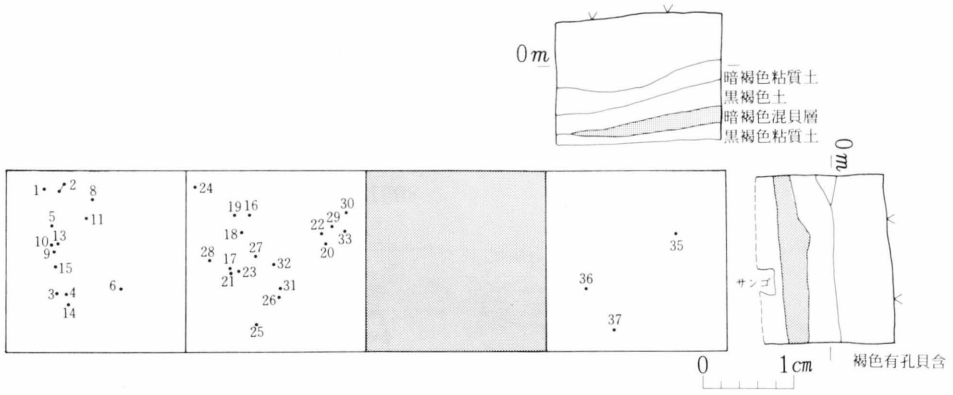
東部洞穴……一応第3貝塚の中でとらえたが，周辺にはまだまだ洞穴が多い。多くは風葬墓となっているため調査は不可能であった。洞穴は有孔虫による石灰岩であるため，加工しやすく，テラス部から奥まで長方形に広く加工を施されている。

第1・第3洞穴も同様の洞穴である。テラス部が狭く多くの人々が生活するには狭すぎる感がある。面縄湾を望む景観はすばらしいものである。

貝塚は，約30～40㎝の混貝土層になっており，南北8m，東西20mの約160m²の貝層の広がりが予想される。貝の種類は，85種であった。



第30図　第3貝塚トレンチ配置図



第31図　第3貝塚平面及び土層図

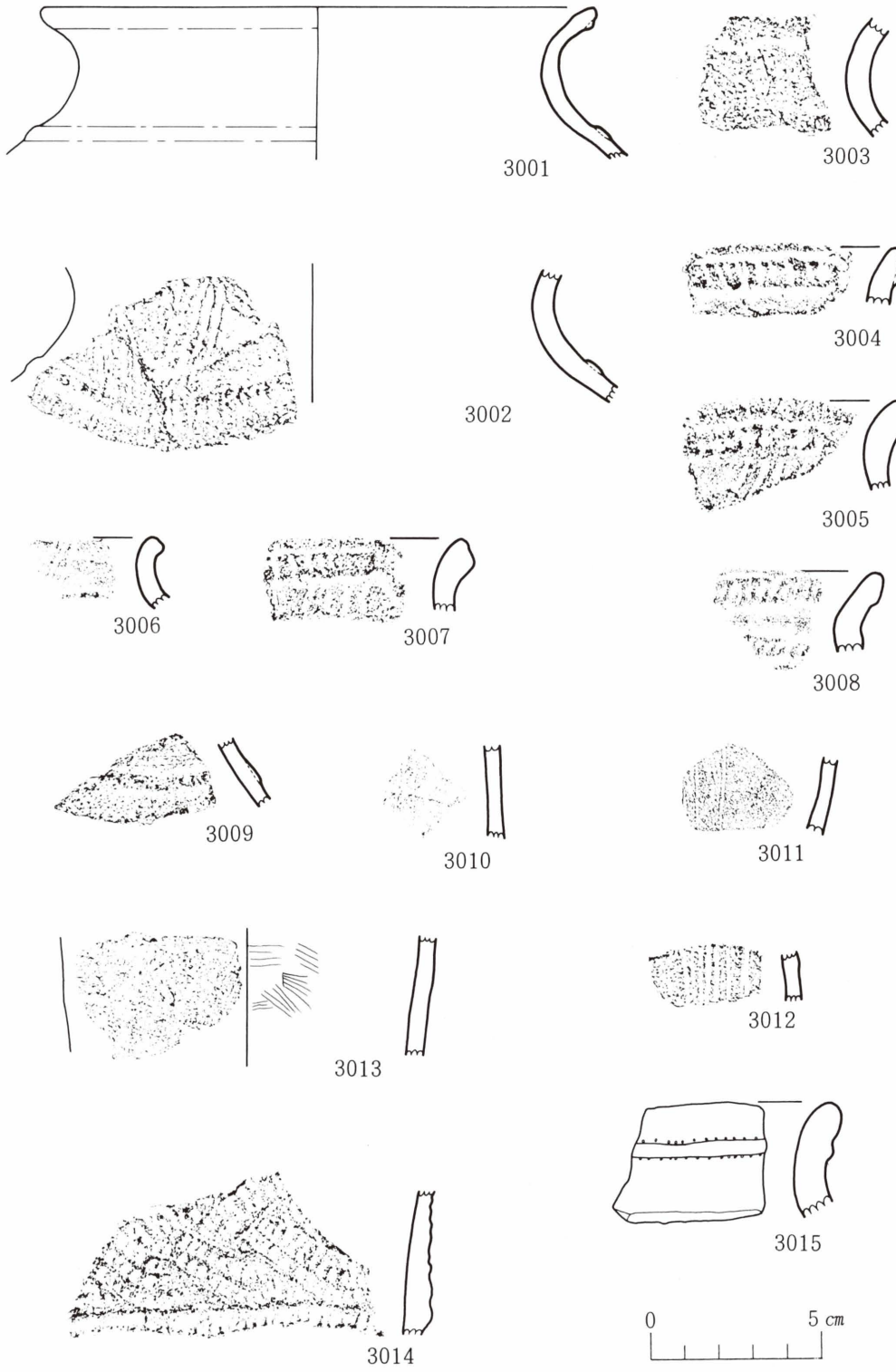
第4節　遺　　物

土　器

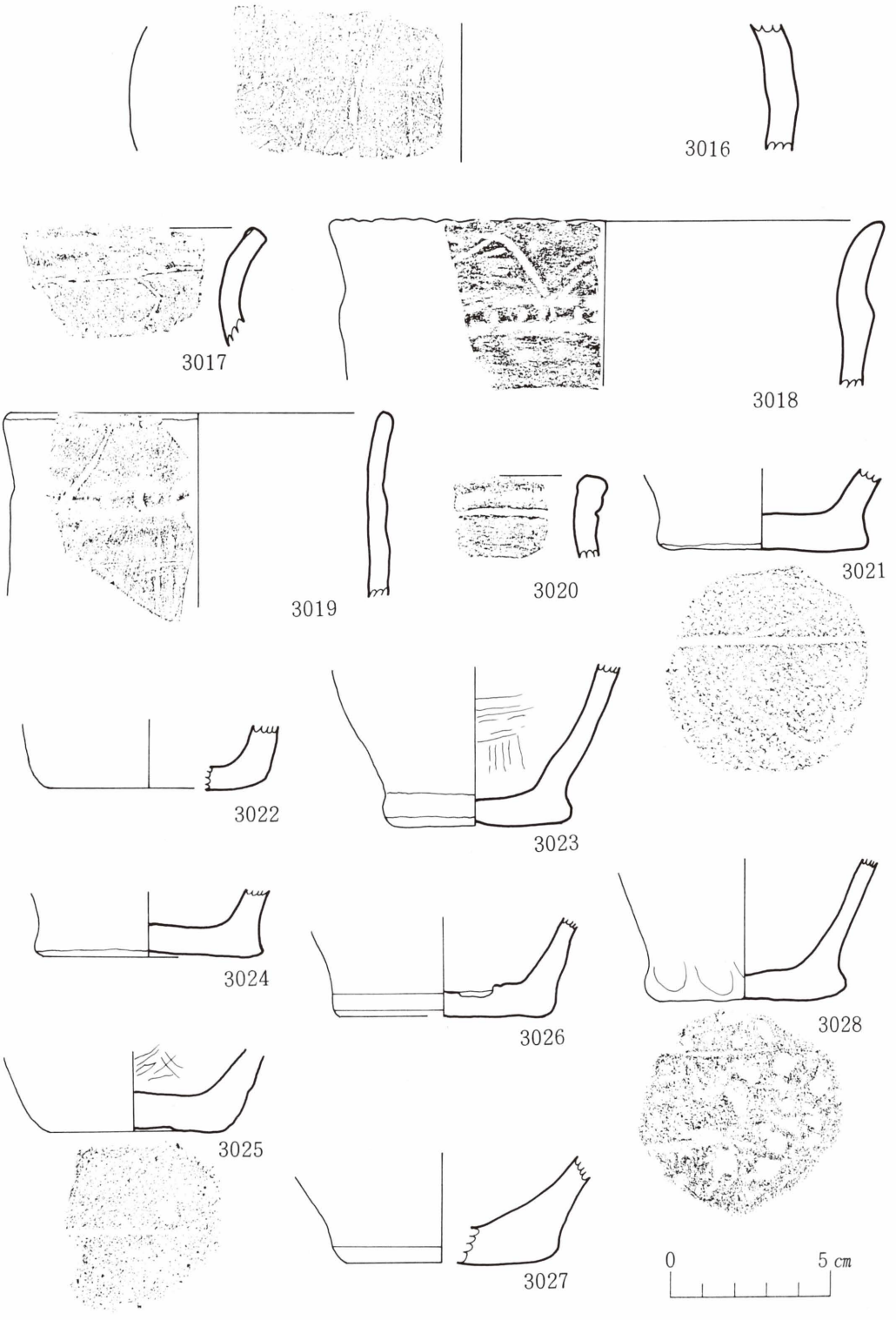
第3貝塚は多くの地点の確認調査を行ったのであるが，土器の出土地は貝層部に集中した。そこで，第3貝塚出土の土器を分類し，良好なもの，特徴的なものを掲載した。個々の土器は表4にまとめた。

3001～3015はA－1区出土の土器である。3001はV層（茶褐色粘質土層），他は全てⅣ層（暗茶褐色粘質土層）出土である。3001～3007は，口縁部と頸部・胴部の堺に，一条の細い刻目突帯をめぐらし，口縁部は外反し，頸部はしまる形の甕形土器である。突帯と突帯間には篦による鋭い刻目が施される。また突帯の下位にも鋭い沈線が施される。3008・3009は突帯と突帯の間に沈線がなくなっている。3010～3013は鋭い沈線のみ施された焼成の良質な薄手の土器である。以上の特徴より面縄前庭式土器である。3014は，A－1区Ⅵ層より出土し，口縁部から頸部にかけて肥厚し，頸部から口縁にかけて鋭い沈線で籠目状にわく囲みし，竹管により爪形文様を施している。焼成は良く雲母・石英を含む。嘉徳Ⅰ式A土器である。3015も，A－1区Ⅵ層より出土した土器で，口縁部はやや外反し，頸部の直上に，細い隆帯を横位に貼り付けめぐらし，その両側に刺突連点文を施している。嘉念Ⅰ式の特徴をもっている。唯一点の出土であり今後検討する必要がある。

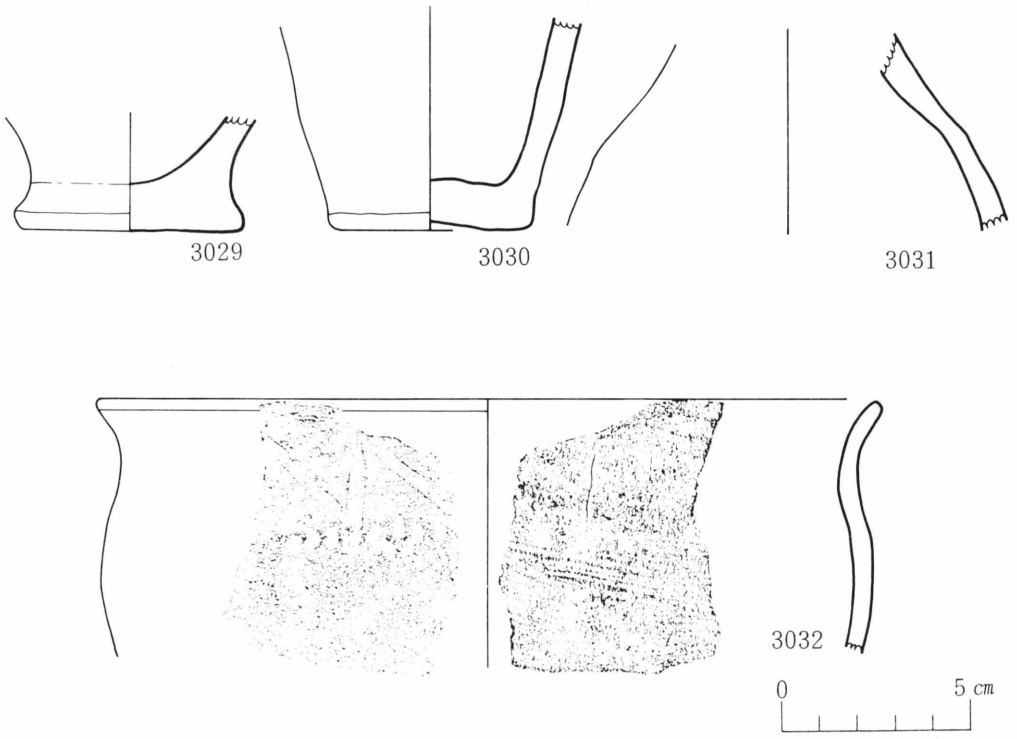
3016～3031は，A－2区Ⅳ層（暗褐色混貝土層）出土の土器である。3016は口縁部が内湾する土器で口縁部にヘラによる鋭い沈線による文様が施されている。3017は，外反する口縁をもつもので，横位に一条の沈線と縦位の沈線がみられる。3018は外反する口縁部で，口唇部には刻目を施し，頸部に一条の貼り付け突帯を有し，突帯から口縁部にかけてヘラ状の施文具で文様を施している。また突帯には刻目を有する。3019も同様であるが口唇部に刻目がみられない。3020は，逆L字状に口縁部が肥厚した甕形土器で，横位へ沈線が施されている。3021～3030は，底部である。底部は平底が圧倒的で，やや角がとれたもの（3022・3025）があるのみである。木葉痕をもつものが大多数である。

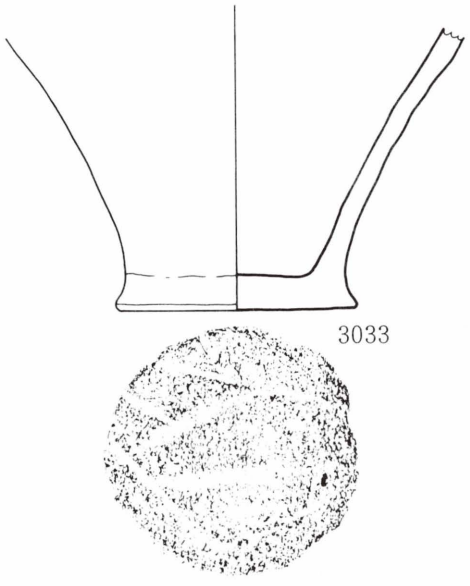


第32図　A－1区 出土土器

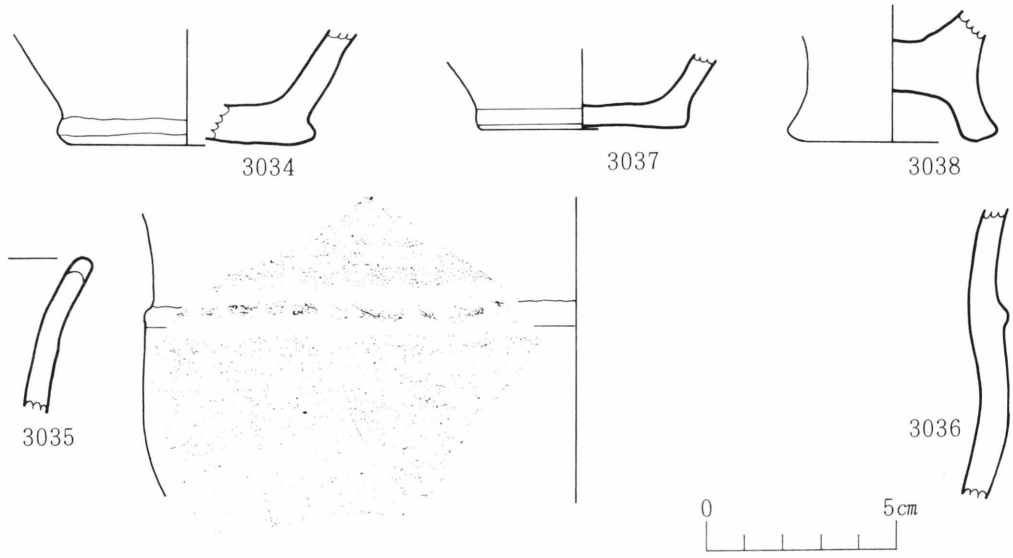


第 33 図　A － 2 区 出土土器(1)





第 34 図　A － 2 区 出土土器(2)



第35図　A－4区 出土土器

3031は，壺形土器である。無文であり輪積の際のつぎ目が明僚な境目を形成している。

3032・3033はA－2区V層から出土したものである。3032は広く外反する口縁部をもつもので刻目突帯の変わりに押圧による刺突で横位にめぐらし口縁部にかけて鋸歯状の文様を施している。3033は木葉痕を呈す底部で平底である。

3034～3036はA－4区出土の土器で，3036は刻目突帯を貼り付け口縁にかけて幾何学文様を施す。3037は採集品である。平底であるがややあげ底で，3038も表採品で脚台をなすものである。

以上のように，A－2・4区混貝土層から出土の土器は，すべて兼久式土器の範疇に属するものである。胎土には，石英と細砂をわずかに含み，よく精選されたもので，調整八ケ目は貝殻の使用が考えられる。文様は頸部に刻目突帯・連続刺突・沈線を組み合わしたもので，それぞれ単独に文様をなしている。

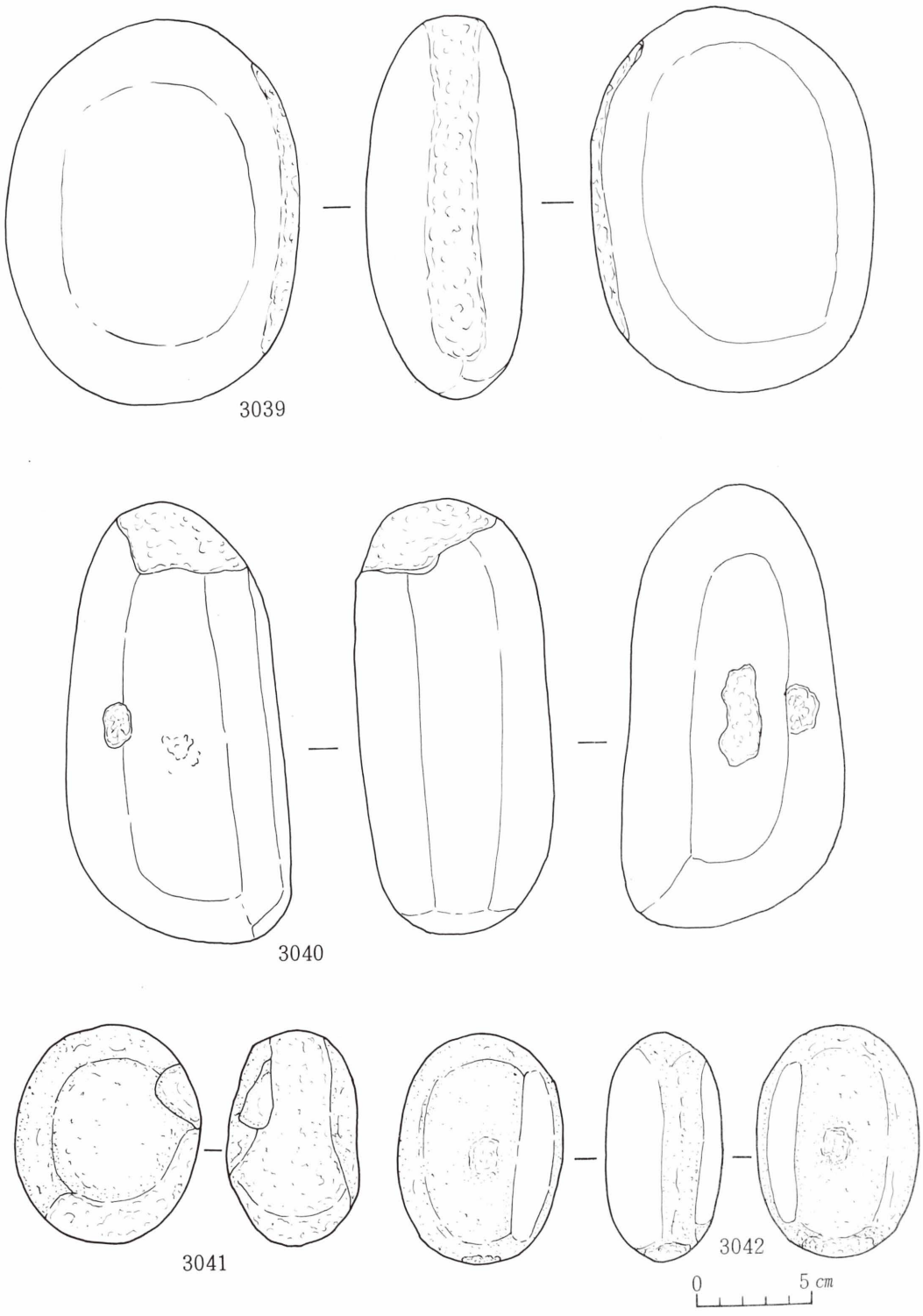
石　器

石器は，円礫を利用した磨石・石皿・チャート剥片が出土した。

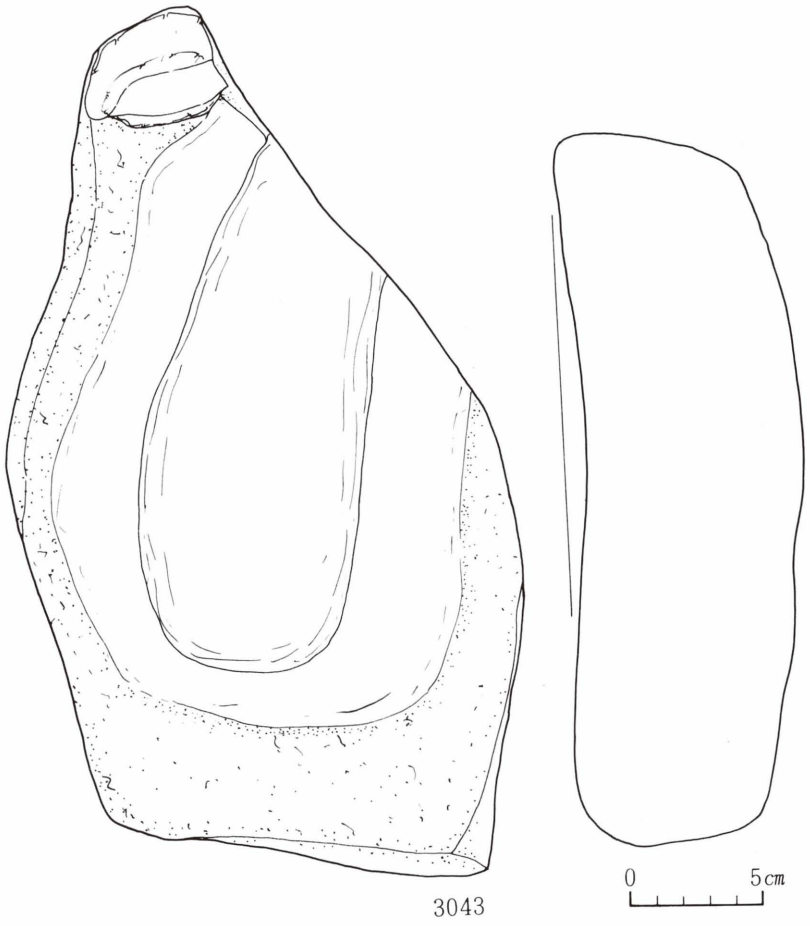
磨石（3039～3042）は，敲打痕・研磨痕・凹のあるものなど多様性のあるものである。3039は，A－2区Ⅳ層出土で片側面の縁辺部に敲打痕がみられ全体は研磨によりよく磨かれている。花崗岩である。3040は，安山岩を用い，先端部に敲打痕がみられ，側面は長軸方向に研磨され稜がはっきりしている。中央部には敲打による凹みがみられる。やはりA－2区Ⅳ層出土である。3041

第4表　第3貝塚出土土器一覧表

挿図番号	出土区層位	調整（土器上部より順に記述）	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	備考
3001	A−1Ⅴ	ナデ	黄褐色	暗褐色	やや軟質	石英　砂粒を含む	面縄前庭式 口縁
3002	A−1Ⅵ	〃	〃	〃	〃	〃	〃
3003	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
3004	〃	〃	赤褐色		良好	〃	〃 口縁
3005	〃	〃	褐色		やや軟質	〃	〃 〃
3006	〃	〃	暗褐色		〃	〃	〃 〃
3007	〃	〃	褐色		〃	〃	〃 〃
3008	〃	〃	〃		〃	〃	〃 〃
3009	〃	〃	黄褐色	暗褐色	〃	〃	〃
3010	〃	〃	赤褐色		〃	〃	〃
3011	〃	〃	暗茶褐色		良好	雲母・石英を含む	〃
3012	〃	〃	〃		〃	〃	〃
3013	〃	〃	〃		〃	石英・砂粒を含む	〃
3014	〃	〃	暗褐色		〃	雲母・石英を含む	嘉徳Ⅰ式A
3015	〃	〃	褐色		やや軟質	〃	喜念式
3016	A−2Ⅳ	外−ヘラ磨き(縦)内−ナデ	赤褐色		良好	石英・砂粒を含む	兼久式
3017	〃	ナデ	暗茶褐色		〃	砂粒を含む	〃 口縁
3018	〃	〃	暗褐色		〃	細粒をわずかに含む	〃 〃
3019	〃	ヘラナデ	〃		〃	〃	〃 〃
3020	〃	ハケ目	褐色		〃	〃	〃 〃
3021	〃		〃		〃	〃	〃 底部
3022	〃	ナデ	〃		〃	雲母・石英・砂粒	〃 〃
3023	〃	外−ナデ，内ヘラナデ	〃		〃	細粒をわずかに含む	〃 〃
3024	〃		〃		〃	石英・細粒を含む	〃 〃
3025	〃	内−ハケ目	〃		〃	〃	〃 〃
3026	〃		〃		〃	〃	〃 〃
3027	〃	ナデ	〃		〃	雲母・石英・砂粒	〃 〃
3028	〃	〃	〃		〃	〃	〃 〃
3029	〃	〃	〃		〃	長石を含む	〃 〃
3030	〃	〃	〃		〃	石英・砂粒を含む	〃 〃
3031	〃	〃	〃		〃	〃	〃
3032	A−2Ⅴ	外−ナデ，内−ハケ目	〃		〃	長石を含む	〃
3033	〃	外→ハケ目後ナデ内→ハケ目	〃		〃	砂粒を含む	兼久底部
3034	A−4Ⅱ	ナデ	〃		〃	〃	〃 〃
3035	A−4Ⅳ	〃	〃		〃	細粒をわずかに含む	〃 口縁
3036	〃	〃	〃		〃	砂粒を含む	〃 〃
3037	表採	〃	〃		〃	〃	〃 底部
3038	表採	〃	〃		〃	〃	〃 〃



第 36 図　第 3 貝塚出土石器(1)



第37図　第3貝塚出土石器（2）

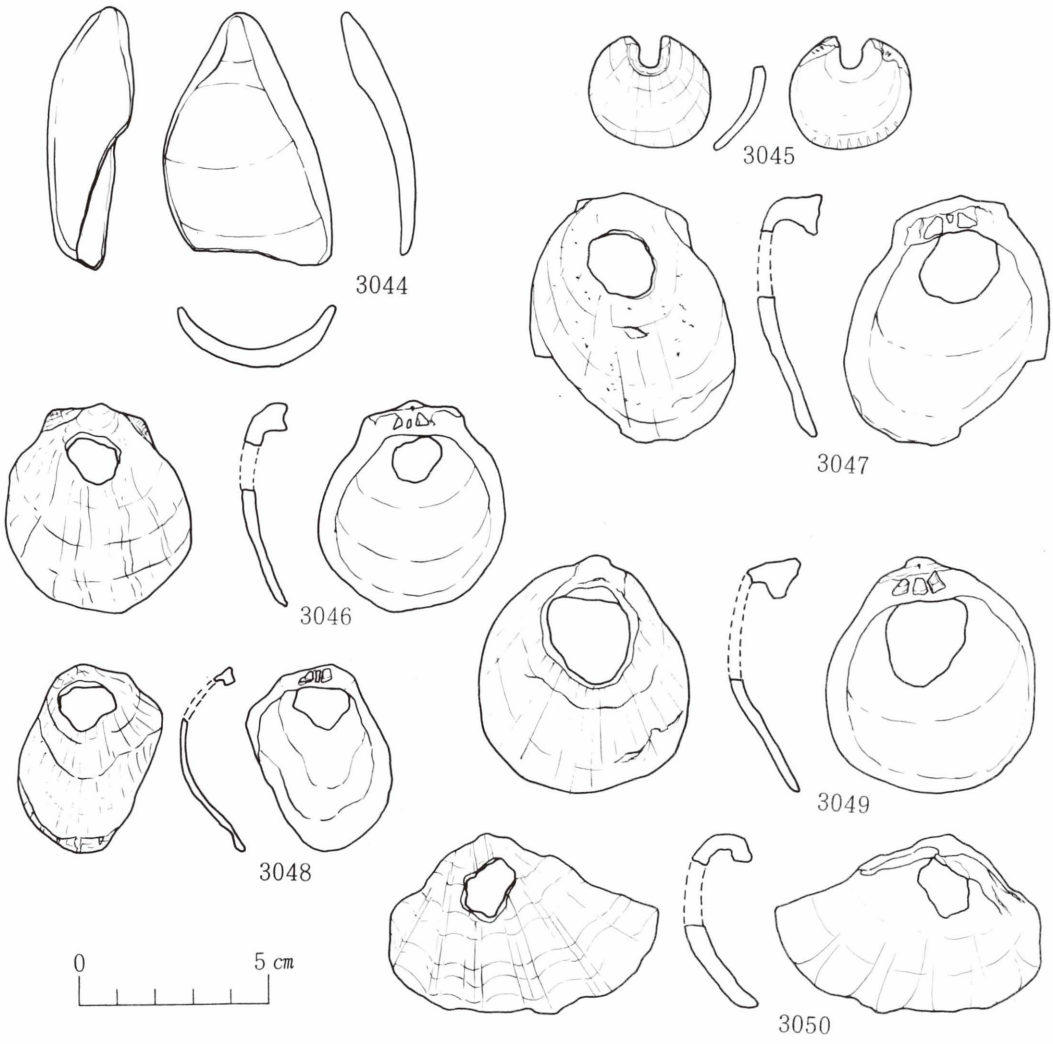
は，約2分の1の側縁部に敲打のみられるものである。3042は先端部に敲打痕が，また3040同様，研磨痕がみられ中央部には凹みがみられる。やはりA－2区Ⅳ層出土である。重量は各々2045，2080，580，490gである。3043はA－4区Ⅳ層より出土の砂岩製石皿である。

貝製品

面縄第3貝塚からは貝層の中から実用品の貝製品（貝匙，穿孔貝，螺蓋製貝斧）が出土した。特徴的なものを選び出し図示した。

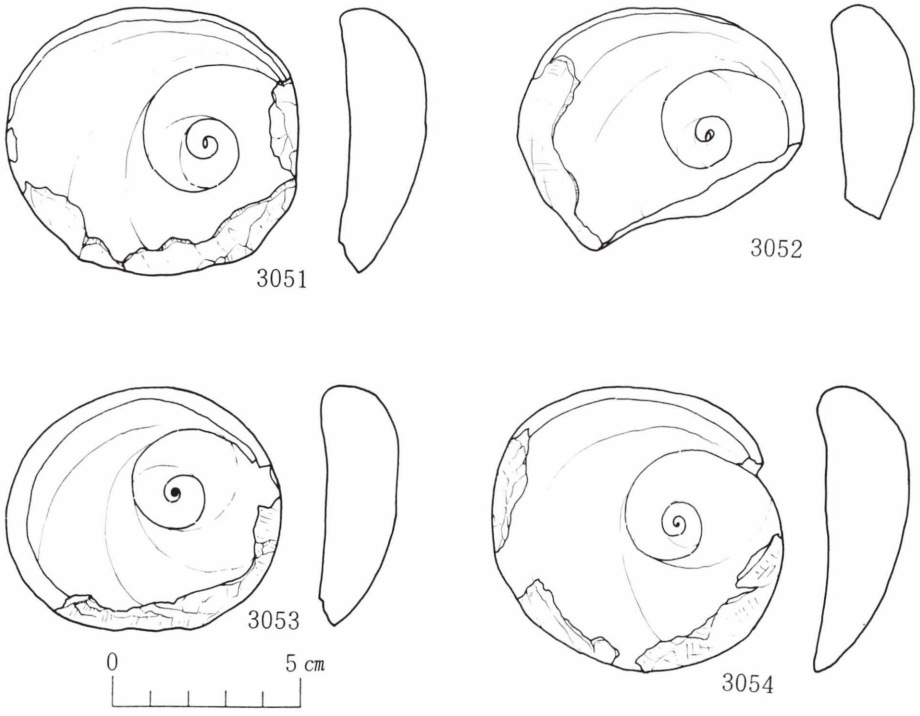
3044は貝匙である。イモ貝の腹部を取り入れて匙状にしたもので，器面は滑らかで貝厚は平均化し一部先端部を欠いているが完成品である。

3045～3050は穿孔を有する貝製品である。利用した貝はメンガイ類（3046, 3047, 3049）キクザル（3048），シラナミ（3050）である。使用した貝の種類に違いはあるが，全て殻頂近くに1㎝内外の粗孔を有するもので，他に加工は認められない。各々長径3.0㎝，1 4.6㎝，6.7㎝



第 38 図　第 3 貝塚出土貝製品

4.8 cm，6.3 cm，4.7 cm，短径 3.1 cm，4.3 cm，5.0 cm，3.3 cm，5.4 cm，7.2 cm，重さ 5.5 g，9.5 g，２1.5 g，７g，２０g，２４gを測る。用途は現在，装飾品から日常用具にいたるまで検討されているが，穿孔のある所や殻長の部分の磨り減り等，やはり漁具としての用途が考えられないものだろうか。



第 39 図　螺蓋製貝斧

螺蓋製貝斧

3051～3054は螺蓋製貝斧である。夜光貝の蓋を利用し，蓋の薄い縁部を数回の打撃によって全周縁の約 2 分の 1 に付刃している。3051・3052はＡ－１区Ⅵ層（暗茶褐色粘質土層）で出土し面縄前庭式土器と共伴し，3053・3054は，Ａ－２区Ⅳ層（暗褐色混貝土層）であり，兼久式土器と共伴するものである。3051・3052は表面にローリング作用をうけている。重量は各々，152 g，110 g，124 g，169 g である。

<参考文献>

河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第 9 号　1974
九学会連合『奄美その自然と文化』　1959

第5節　小　　結

面縄第3貝塚は小貝塚でほとんど掘りつくされた[1]とされていた。しかし発掘調査の結果，第3貝塚は，約160m²の貝層の広がりが想定される貝塚である。

第3貝塚は，洞穴と貝塚からなる遺跡である。第3貝塚の周辺は，隆起珊瑚礁を基盤とする地のせいか洞穴が非常に多い。周辺には今回調査以外にもまだ洞穴があり，面縄貝塚群は，その貝塚と名称だけでなくより多くの広範囲に広がる大遺跡群となるのではないだろうか。

洞穴内は風葬墓に利用したものが多く，調査は困難であったが，将来は風葬骨も調査対象として面縄の歴史を調べなければならないのではないだろうか。

貝塚部は兼久式土器を包含する貝層からなっている。口縁部が外反し，文様は沈線文を主とし，粘土紐をはりつけた刻目突帯を施している木葉圧痕の底部を施す深鉢形土器であるという，兼久式土器の標式遺跡であり，今回も多くの兼久式土器が貝層の中から出土した。貝層は，小型の小貝（シャコ貝，タカラ貝，リュウキュウマスオガイ）で今でもすぐ取ることの出来るものばかりである。これは前回調査した，面縄第1貝塚と貝層の成立がまったく違う[2]。出土する土器は全く同じものであるが，第1貝塚は，ウニとヒバリガイを主として，チョウセンサザエヤコウガイが若干ある位であった。第3貝塚はウニとヒバリガイはほとんどみられない。同時期，同海岸でこれだけの差があるということは，嗜好の問題であるのか。

また，兼久式土器を包含する層位では，石斧の出土がみられなく，螺蓋製貝斧，石皿，磨石穿孔貝等の出土が多く貝輪等の装飾品も少くなる。

今回は兼久式土器出土層より下部に面縄前庭式土器が出土している。V層では嘉徳I式土器と共伴しているが，VI層においては単独の出土である。また前庭式の中に，雲母の含まれるものと含まれないもの，胴部は焼成が良いが口縁部はやや軟質である。貼り付け突帯の位置と突帯間の文様構成等，まだまだ不明なことが多い。

このように第3貝塚は，滅失した貝塚どころでなく，今からも調査の必要な遺跡であり，保存も極めてよい。兼久式土器・面縄前庭式土器とも南西諸島の編年上欠くことの出来ない土器であり，今後詳細に検討を加えていきたい。

参考文献

1）九学会連合『奄美その自然と文化』　1959

2）牛ノ浜修，堂込秀人「面縄第1・2貝塚」　伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　1983

第6章　第4貝塚の調査

第1節　調査の概要

第4貝塚は昭和29年8月に国分直一氏が三友国五郎氏と共に，面縄第2貝塚を調査した折に発見された伊仙町面縄兼久661番地に所在する遺跡である。

昭和31年8月に九学会（国分直一・河口貞徳・原口正三・野口義磨氏等）により調査が行なわれ，その結果それまで宇宿下層式と包括されていたものが面縄東洞式・面縄前庭式・面縄西洞式に細分された。

遺跡は隆起珊瑚礁の洞窟部とその前庭部とからなり，洞窟は東西2ケ所に形成されている。近年西側にある面縄川の支流の河川改修工事が行われ，その際前庭部に土砂を移し，天地返しを行ったため一部撹乱されていると予想された。

今回の調査は，以前の調査と同様西側洞窟部（以下西洞部と略する）と東側洞窟部（以下東洞部と略する）とに分けて実施した。両洞窟部は以前に調査されており，表土のみの堆積であったためその前庭部を中心に調査を実施した。

東洞部では2ケ所の小洞窟からなっており，東側の小洞部の雨垂れラインにほぼ直交するように基準線を設けた。耕作等との関係から耕作道（畦道）の部分と，大きくえぐられた部分との2ケ所にトレンチを設定し，前者をB－3区，後者をB－2区と呼称して調査を行った。その結果，粘質の表土及び覆土の下から砂質層が4枚（Ⅲ～Ⅵ層）確認され，貝殻条痕文を施す土器片・小形石斧大形石斧・凹石・石皿・貝器等の人工遺物の他多量の獣・魚骨が出土した。

西洞部では東洞部と同様雨垂れラインと直交するように基準線を設け，洞窟部と前庭部とにトレンチを設定し，A－0区，A－2・3区，A－6・7区と呼称して調査を行った。その結果，東洞部とは土層及び出土遺物の内容が異なり，粘質土層から面縄前庭式を中心とした土器片，石器等が出土した。

今回の調査では，東洞部の砂層と西洞部の粘質土層にそれぞれ遺物を包含していることが確認でき，西洞部で遺物を包含していなかった下位の砂層と東洞部の砂層との比較・検討するため，両洞の中央部にトレンチを設定して調査する必要があったが，日程等の不足のため断念した。遺構はA－0トレンチにおいて焼土を数枚確認したのみであった。

第2節　層　　序

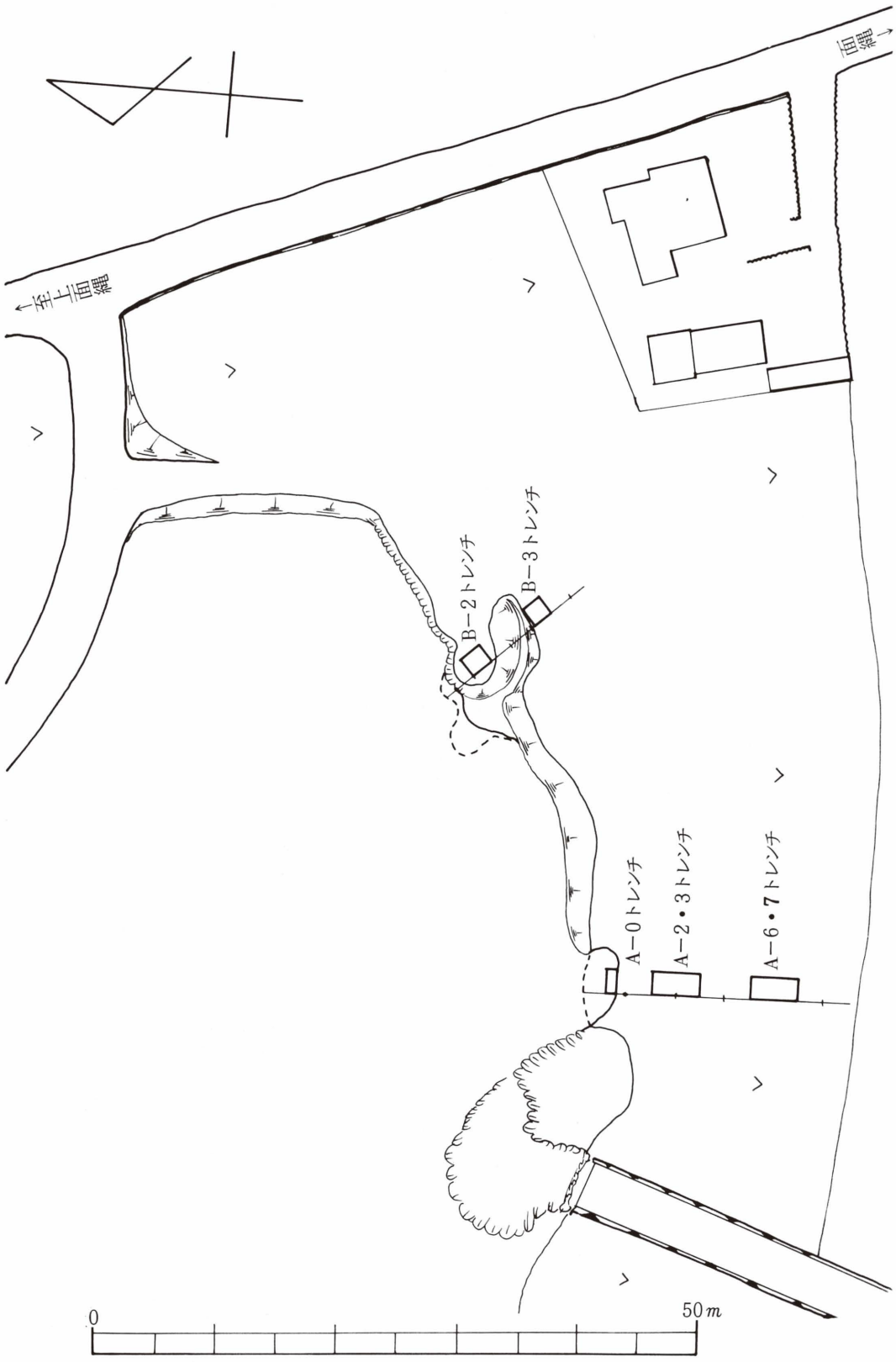
1　東洞部の地層

B－2トレンチ

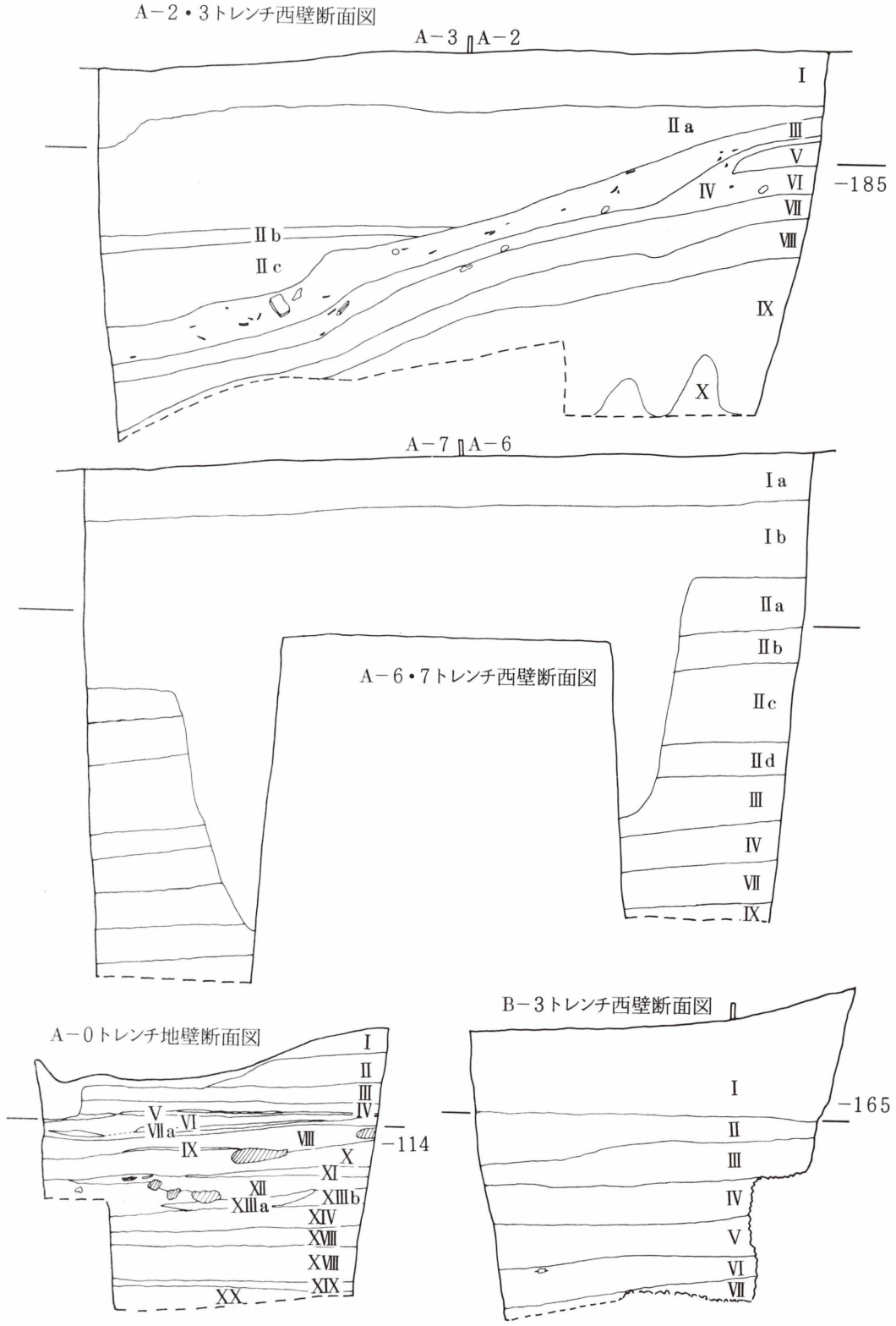
B－2トレンチは削平された部分に設定したもので，表土の下は風化珊瑚礁土であると考えられる黄褐色粘質土（第Ⅱ層）と珊瑚礁岩盤で，遺物は出土しなかった。

B－3トレンチ

第Ⅰ層　表土で茶褐色粘質土である。一部覆土がみられる。



第 40 図　第 4 貝塚地形図及トレンチ配置図



第 41 図　第 4 貝塚土層図

第 Ⅱ 層　茶褐色砂層である。遺物を包含している。
第 Ⅲ 層　黄色砂層である。遺物を包含している。
第 Ⅳ 層　茶褐色砂層で軽石が多く混入している。遺物を包含している。
第 Ⅴ 層　黄色砂層である。人工遺物は出土しなかったが，イノシシ骨を中心とする獣骨・魚骨等の自然遺物が多量出土したので包含層として取り扱った。
第 Ⅵ 層　茶褐色砂層である。遺物を包含している。
第 Ⅶ 層　茶褐色粘質土層である。隆起珊瑚礁の風化土と考えられる。
第 Ⅷ 層　隆起珊瑚礁の岩盤である。この層はＢ－３トレンチにおける基盤層とした。

2　西洞部の地層

Ａ－０トレンチ
第 Ⅰ 層　表土である。暗茶褐色を呈し，遺物が採集された。
第 Ⅱ 層　黒褐色土層である。微細な炭化物が混入している。
第 Ⅲ 層　赤褐色土層である。この層は焼土と灰と考えられるものが互層をなしていたが，薄く，レンズ状で不連続である分層不可能であった。
第 Ⅳ 層　灰褐色土層である。
第 Ⅴ 層　Ⅳ層と同様の灰褐色土層であるが，上部に薄くレンズ状に焼土がみられたため分層した。
第 Ⅵ 層　茶褐色粘質土層である。
第 Ⅶ 層　茶褐色砂質土層である。上部に焼土と灰がレンズ状にある。（Ⅶａ層）
第 Ⅷ 層　茶褐色粘質土層である。
第 Ⅸ 層　赤褐色土層である。レンズ状に薄く存在している。
第 Ⅹ 層　茶褐色土層である。珊瑚礁が混入している。
第 Ⅺ 層　赤褐色土層で焼土である。
第 Ⅻ 層　暗茶褐色土層である。獣骨片が出土した。
第 XIII 層　黄褐色砂質土層である。獣骨片が出土した。下部には焼土がレンズ状にある。（第XIII ｂ層）
第 XIV 層
第 XV 層
第 XVI 層
第 XVII 層　茶褐色砂層土層
第 XVIII 層　暗灰褐色土層
第 XIX 層　茶褐色粘質土層
第 XX 層　暗灰褐色土層

Ａ－２・３トレンチ
第 Ⅰ 層　表土及び覆土である。暗茶褐色を呈する。

第Ⅱａ層　黄褐色土層である。

第Ⅱｂ層　黄褐色砂利混土層である。

第Ⅱｃ層　黄褐色土層である。

第Ⅱ層は水成作用により形成（濫乱等により）されたものと考えられるもので，若干の遺物を包含するが，ローリングを受けている。

第 Ⅲ 層　黒褐色粘質土層である。多量の遺物を包含している。

第 Ⅳ 層　暗茶褐色粘質土層である。多量の遺物を包含している。

第 Ⅴ 層　茶褐色粘質土層である。若干の遺物を包含している。このトレンチでは部分的に存在している。

第 Ⅵ 層　暗茶褐色粘質土層で，第Ⅳ層と同質である。第Ⅵ層及び第Ⅳ層の堆積中に第Ⅴ層が堆積したものと考えられ，第Ⅴ層の下部の部分のみの呼称である。遺物を包含している。

第 Ⅶ 層　茶褐色粘質土層である。遺物を包含している。

第 Ⅷ 層　暗茶褐色土層である。第Ⅸ層と第Ⅶ層の漸移層で，上部で粘質，下部で砂質となる。遺物を包含していない。

第 Ⅸ 層　茶褐色砂層である。第Ⅹ層との漸移層で，下部は波状となる。

第 Ⅹ 層　白色砂層である。

第Ⅸ・Ⅹ層は遺物を包含しない。

Ａ－６・７トレンチ

Ａ－２・３トレンチの土層と同様に扱ったが，傾斜しているためか多少の差異がみられた。

第 Ⅰ 層　表土で耕作土である。

第Ⅰｂ層　天地返しによる覆土である。

第Ⅱａ層　灰茶褐色土層である。

第Ⅱｂ層　灰(茶)褐色砂利層である。

第Ⅱｃ層　灰茶褐色土層である。

第Ⅱｄ層　灰(茶)褐色砂利層である。

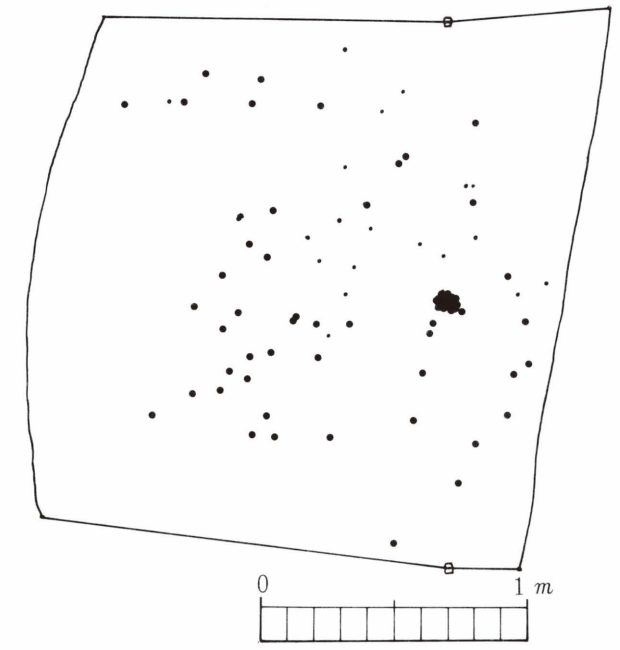
第 Ⅲ 層　黄褐色粘質土層である。

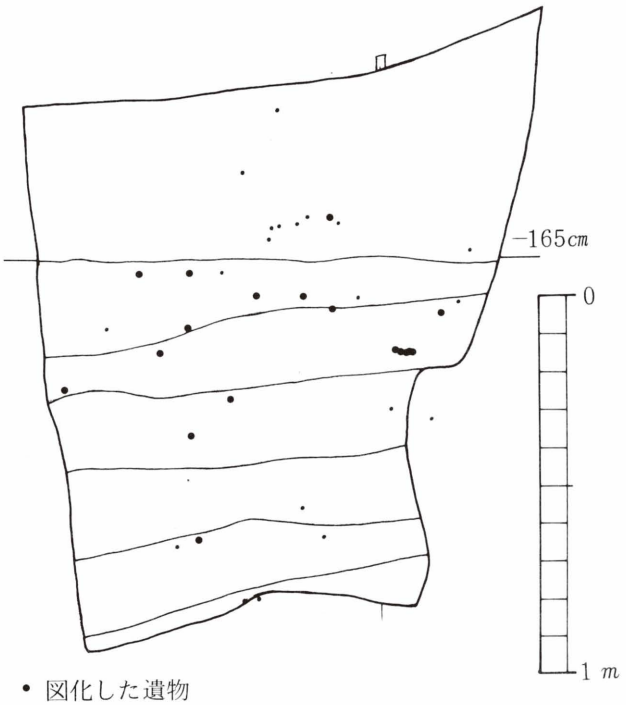
第 Ⅳ 層　暗茶褐色粘質土層で，遺物を包含しているが小破片でローリングを受けたものがほとんどである。Ａ－２・３トレンチでの第Ⅲ～Ⅶ層に対比できる。

第 Ⅴ 層　茶褐色粘質土である。Ａ－２・３トレンチでの第Ⅷ層に対比できる。

第 Ⅵ 層　白色砂層である。Ａ－２・３トレンチでの第Ⅸ・Ⅹ層に対比できる。

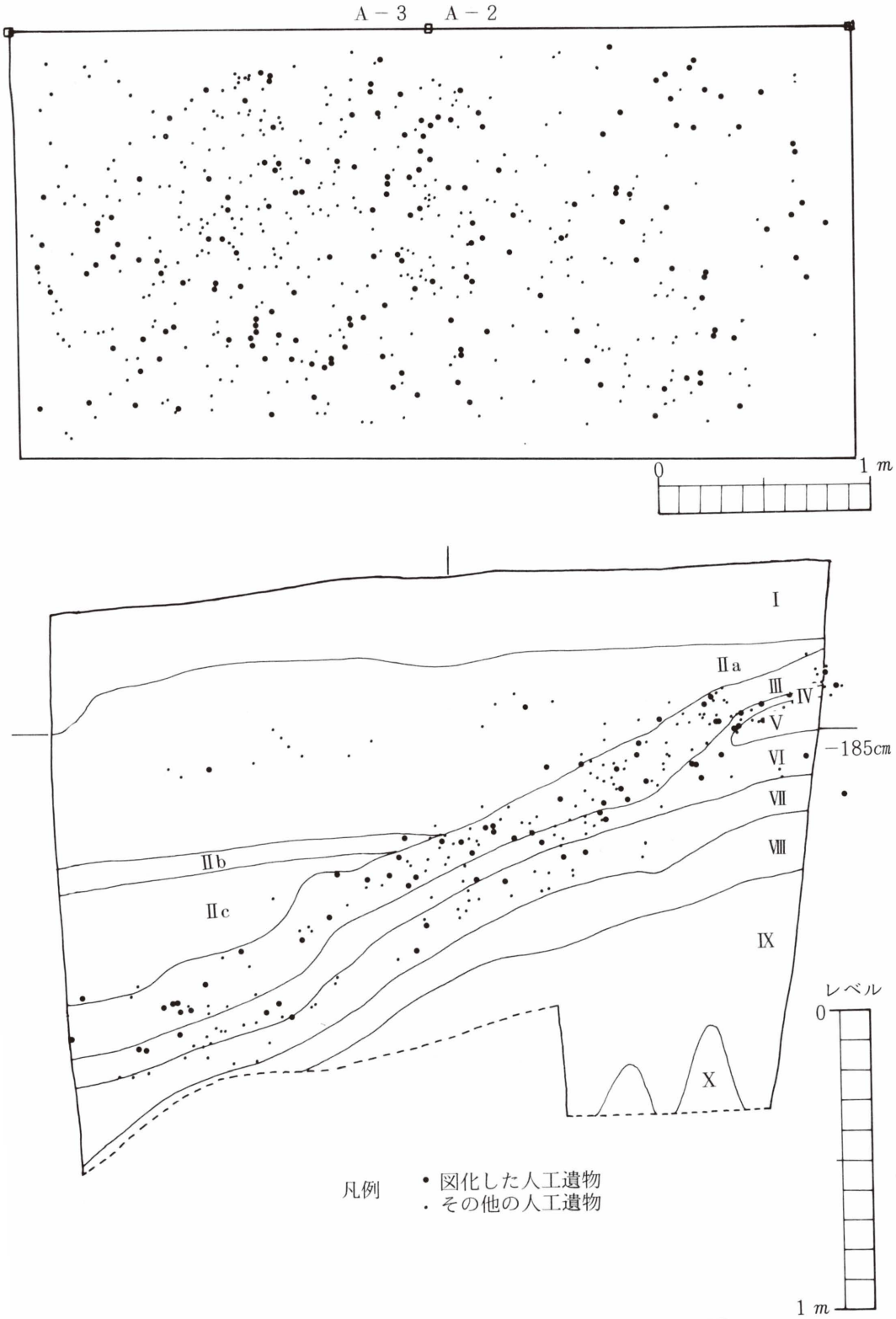
Ａ－０トレンチとＡ－２・３トレンチの層の対比は日程等により明確にしえなかったが，Ａ－０トレンチの全層がＡ－２・３トレンチでの第Ⅲ～Ⅶ層に相当するのではないかと考えられるものである。





凡例　• 図化した遺物
　　• その他の遺物

第 42 図　東洞部人工遺物出土状況及出土トレンチ東側部断面図



第 43 図　西洞部人工遺物出土状況及トレンチ西側部断面図

第3節　東洞部の遺物

東洞部では，Ｂ－３トレンチの第Ⅲ～Ⅵ層を中心に遺物が出土した。土器はⅦ類に分類することができた。石器では小形石斧・大形石斧・凹石・石皿があり，貝器には表採によった螺貝製貝斧，有孔貝があり，骨角製刺突具も一点検出した。自然遺物は，第Ⅴ層から多量検出され，イノシシ骨が中心である。貝類は小形のものが少量，他に魚骨・ウニの棘が出土している。

1　土　器

Ⅰ類　Ⅰ類の土器は器面にヘラ状工具による短沈線を横位に刻むものである。地文に貝殻条痕を施しているものもみられる。4001は直線的に開く口縁部片である。外面には３条の短沈線文を横位に施し，下位には斜位の沈線を施し，その沈線に沿って短沈線文を施す。内面には貝殻条痕文を施し，羽状の短沈線文を横位に３条施している。口唇部にも連点文を刻む。4002は若干内湾気味の口縁部片である。外面に羽状の短沈線文を施し，口唇部には連点文を施す。内外面共なで仕上げである。4003～4005は胴部片である。4003は横位の凹点文を，4004は斜位の 凹点文を，4005は弧状の沈線と斜位に短沈線文をそれぞれ施している。4004の外面と4005の内面には地文に貝殻条痕文を施しており，4005の外面は一部なで消している。

Ⅱ類　Ⅱ類の土器は器面内外に貝殻条痕文を施すもので，条痕文の差異・胎土から　種に細分できた。4006～4018がⅡａ類で貝殻条痕文を器面内外に不規則に施すものである。4006は口縁部片で，ゆるやかに外反しながら口縁部へ開き，屈曲して直口状に立ち上るもので，口唇部は平坦となる。4007～4018は胴部片である。若干肩が張るものである。4017は丁寧な条痕文を施している。4006～4008は同一個体と考えられる。4018は底部片である。尖底に近い形を呈するものと考えられる。外面は条痕が一部なで消されている。

4019～4033がⅡｂ類で，Ⅱａ類同様器面内外に貝殻条痕文を施すものであるが，粗い胎土のⅡａ類とは異なり，微細砂粒を含む胎土のちがいにより細分したものである。4019は口縁部片である。直口状の器形で口唇部は舌状にすぼまる。4020～4033は胴部片で，4025は底部に近い部分のもので，底部は尖底状となると考えられる。全て同一個体と考えられる。

4034～4039がⅡＣ類で，貝殻条痕を施したあと沈線文や数条の条痕を施すものである。4034は外反する口縁部片である。横位の条痕を地文とし，斜位の沈線を浅く２条施す。4305，4306は胴部片で，２～３条の条痕を施すもので，4036では地文が一部なで消されている。4037は弧状の条痕を，4038は縦位の沈線を，4039は斜位の沈線を交錯させている。4034の器厚は薄いが，他は厚く4037は１㎝を超える。4040～4050は貝殻条痕文を施した後に器面の一部又は全面をなで消したものである。4040が口縁部片で他は胴部片である。

Ⅲ類　Ⅲ類の土器はキャリッパー状の器形を呈し，貼り付け突帯に刻みを付すものである。4051がキャリッパー状を呈する口縁部片で，口縁部に波状の突帯を２条，頸部近くに横位の突帯を貼り付け，刻みを付している。4052が頸部，4053～4057が胴部の破片である。

Ⅳ類　Ⅳ類の土器は4058の一点で，斜位の縄文を施しているものである。胎土はⅢ類と同様のもので，器壁も同様薄いものである。

Ⅴ類　Ⅴ類は外反する口縁部に刻み突帯と沈線を施すものである。4060は復元口径15.8㎝のもので，外反する口縁部の口縁端と頸部に突帯を横位に２条，縦位にも貼り付け，刻みを付している。突帯間には複合鋸歯文を施し，頸部以下にもさらに施している。4061は縦位に沈線をやや不規則に施している。4062は斜位の貝殻条痕文を地文とし，縦位の沈線文帯を施しているもので器壁は0.4㎝と薄い。

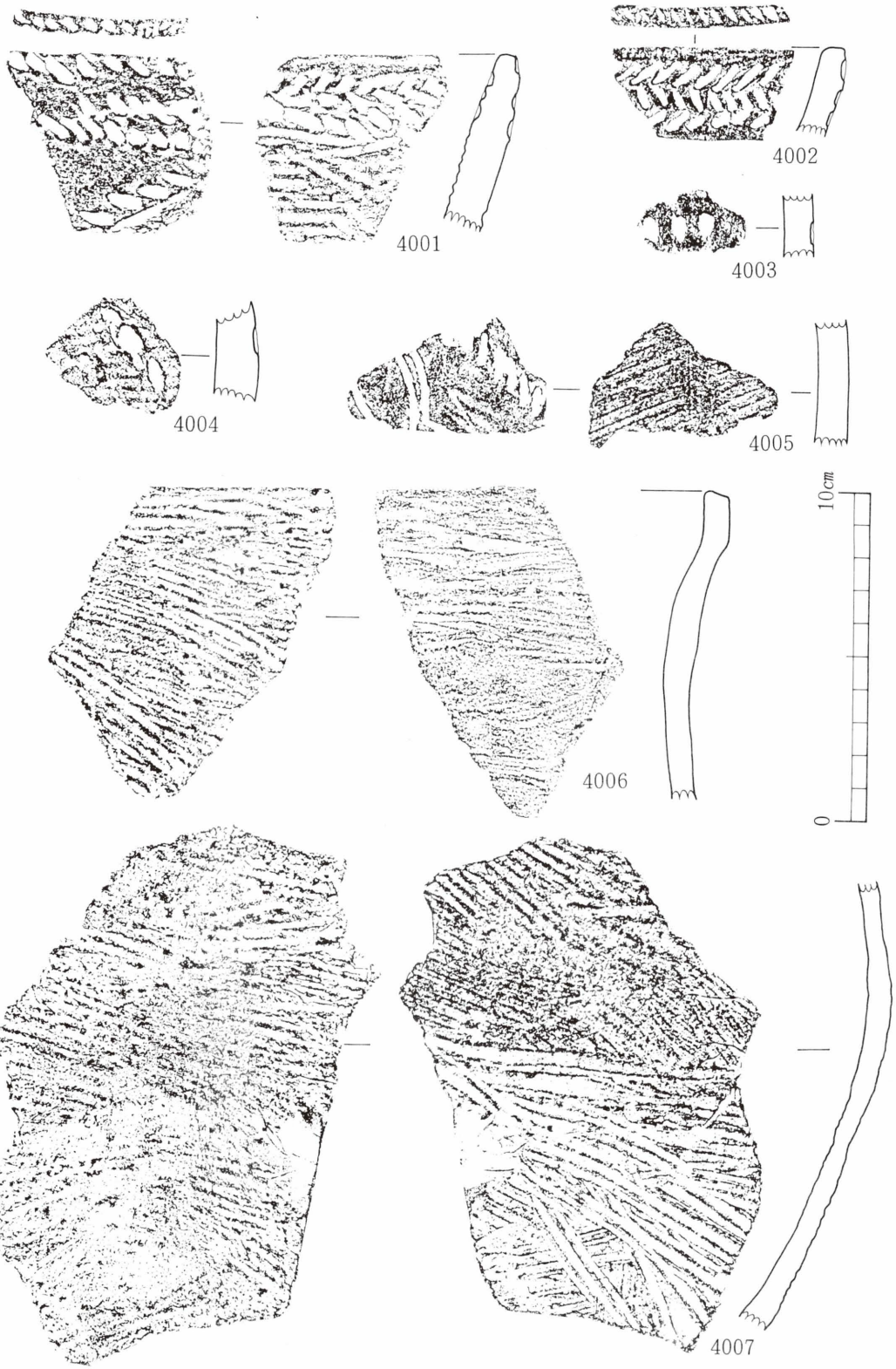
Ⅵ類　Ⅵ類は押し引き文を施すものである。4063，4064は口縁部片で口唇部を欠くが，平行の押し引き沈線文を横位に施している。4064の口縁部文様帯の下位にわずかな段を有する。

Ⅶ類　Ⅶ類は沈線文を施すその他の土器片である。4065は口縁部片で横位の沈線を４条，口唇部には連点文を施している。4066は頸部片と考えられるもので，２条の横位の沈線文を上下に施し，その間に斜位の沈線を施すものである。4067は沈線文を斜位に２条施すものである。内面には貝殻条痕文を施している。

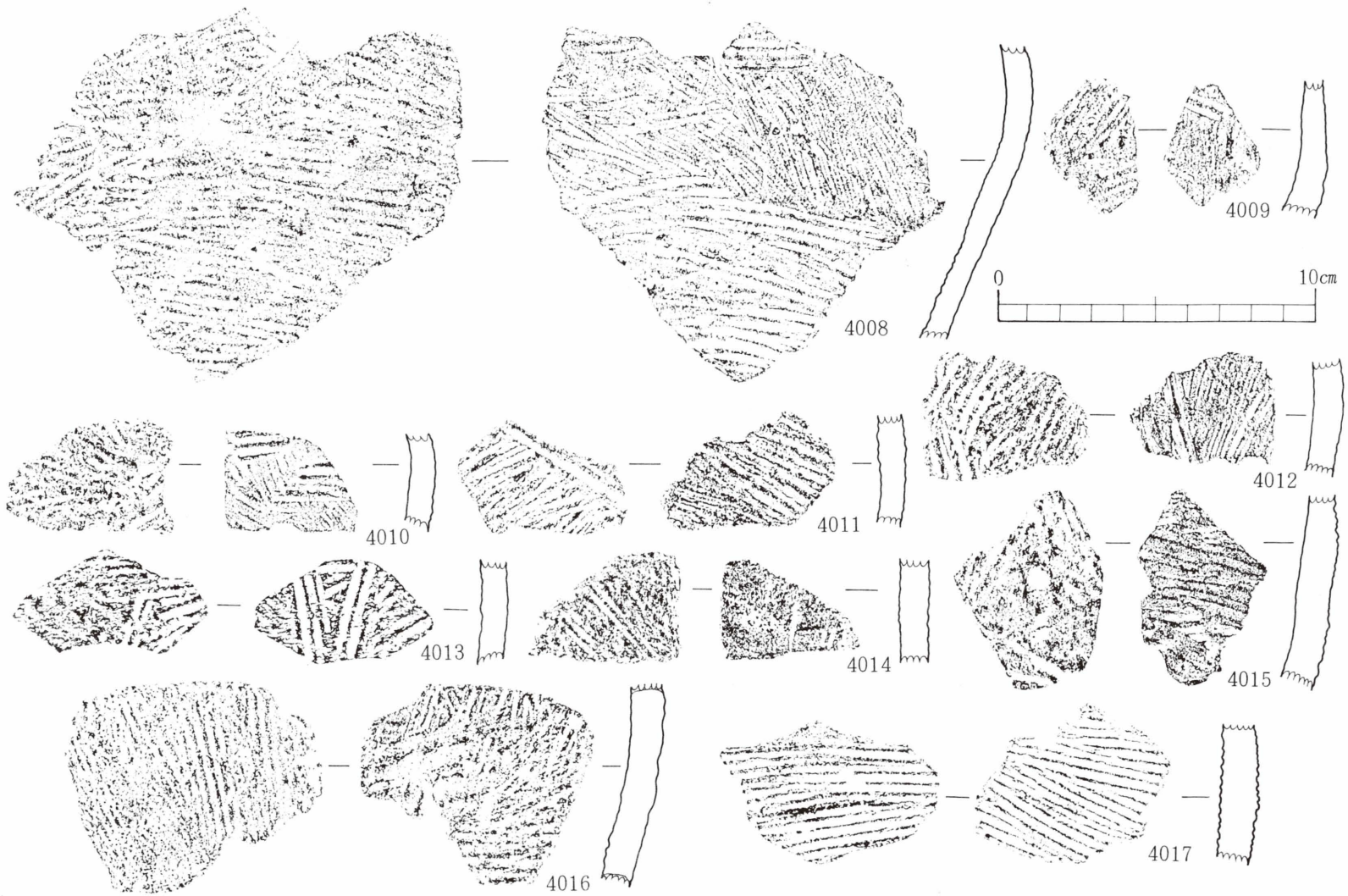
底部　4068は平底の底部片である。縦位の条痕が数条施されているが，他はなで消されたものと考えられる。

第５表　東洞部出土土器一覧表

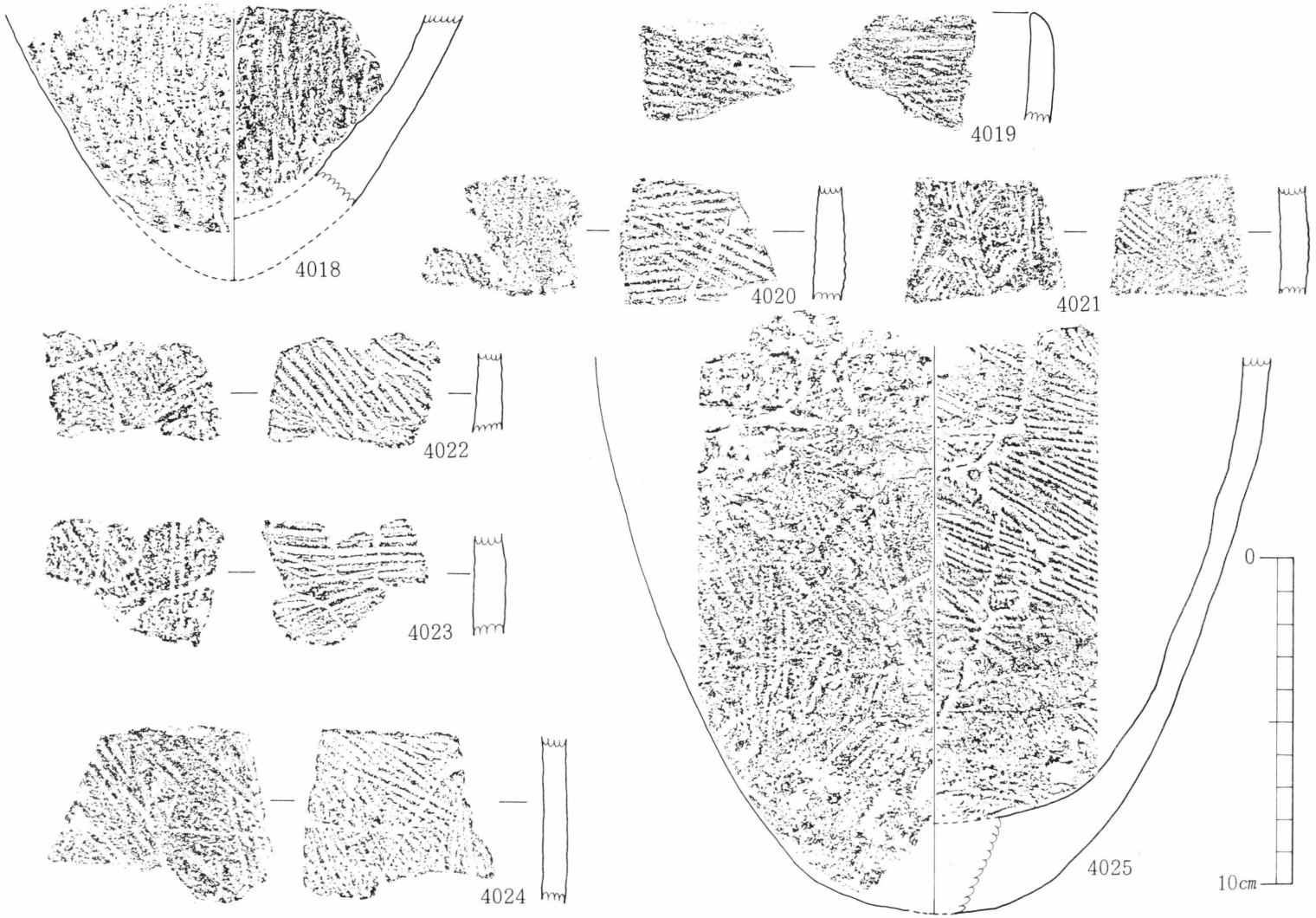
No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調	No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調
4001	E－1	B－3	Ⅳ	砂粒　サンゴ砂	脆弱	暗茶褐色	4020	E－Ⅱb	B－3	Ⅲ	微細少	良	茶褐色
4002	〃	〃	撹乱	細砂　〃	良	暗茶褐色	4021	〃	〃	Ⅱ	〃	〃	〃
4003	〃	〃	Ⅵ	砂粒　〃	脆弱	茶褐色	4022	〃	〃	Ⅱ下	〃　小礫	〃 脆弱	〃
4004	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　小礫	〃	〃	4023	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃
4005	〃	B－2	Ⅰ	〃　〃　〃	良	茶褐色	4024	〃	〃	Ⅲ	〃　〃		〃
4006	E－Ⅱa	B－3	Ⅳ	〃　〃　雲母 小礫	〃	暗茶褐色	4025	〃	〃	Ⅲ	〃　〃	ロえん近く 脆弱	〃
4007	〃	〃	Ⅲ	〃　〃　〃 〃	〃	〃	4026	〃	〃	Ⅲ	〃　〃		〃
4008	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　〃 〃	〃	〃	4027	〃	〃	Ⅱ	〃　〃		〃
4009	〃	〃	Ⅱ	〃　〃　〃 〃	〃	黒	4028	〃	〃	Ⅱ	〃　〃		〃
4010	〃	〃	〃	〃　〃　〃 〃	脆弱	外:茶褐色 内:暗茶褐色	4029	〃	〃	Ⅱ	〃		赤茶褐色
4011	〃			〃　〃　〃 〃	〃	外:黒褐色 内:茶褐色	4030	〃	〃	Ⅳ	〃		淡茶褐色
4012	〃	〃	〃	〃　〃　〃 〃	良	〃	4031	E－Ⅱb	B－3	Ⅳ	細砂　サンゴ砂	良	茶褐色
4013	〃	〃	〃	〃　〃　〃 〃	〃	黒褐色	4032	〃	〃	Ⅱ	〃　〃	良	外:茶褐色 内:灰茶褐色
4014	〃	〃	〃	〃　〃　〃 〃	〃	外:黒褐色 内:茶褐色	4033	〃	〃	Ⅲ	〃　〃 小礫	良	
4015	〃	〃	Ⅰb	〃　〃 〃	〃	茶褐色	4034	E－Ⅱc	〃	Ⅳ	砂粒　サンゴ砂 雲母	脆弱	暗茶褐色
4016	〃	〃	Ⅳ	〃　〃 〃	脆弱	暗茶褐色	4035	〃	〃	Ⅳ	〃　〃 〃	良	〃
4017	〃	B－2	Ⅰ	〃　〃 〃	良	外:暗茶褐色 内:茶褐色	4036	〃	〃	Ⅳ	〃　〃 〃	〃	外:暗茶褐色 内:黒褐色
4018	〃	B－3	Ⅱ下	〃	〃	外:茶褐色 内:灰褐色	4037	〃	〃	Ⅳ	〃　〃 〃	〃	外:黒褐色 内:暗茶褐色
4019	E－Ⅱb	〃	Ⅱ	微 細砂（　）	良	茶褐色	4038	〃	〃	Ⅳ	〃　〃 〃	〃	暗茶褐色



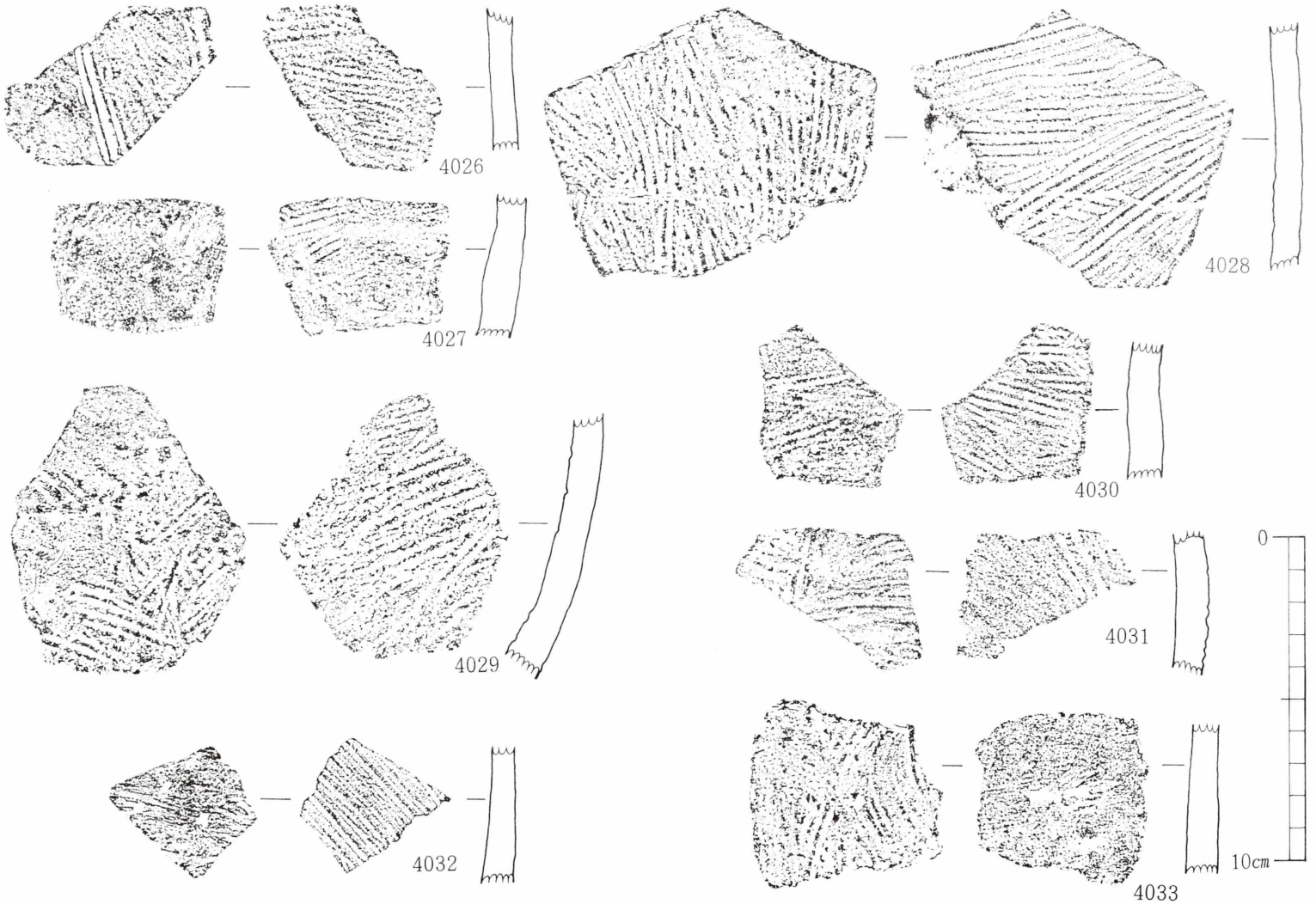
第 44 図　第 4 貝塚出土土器（東洞部－ 1）



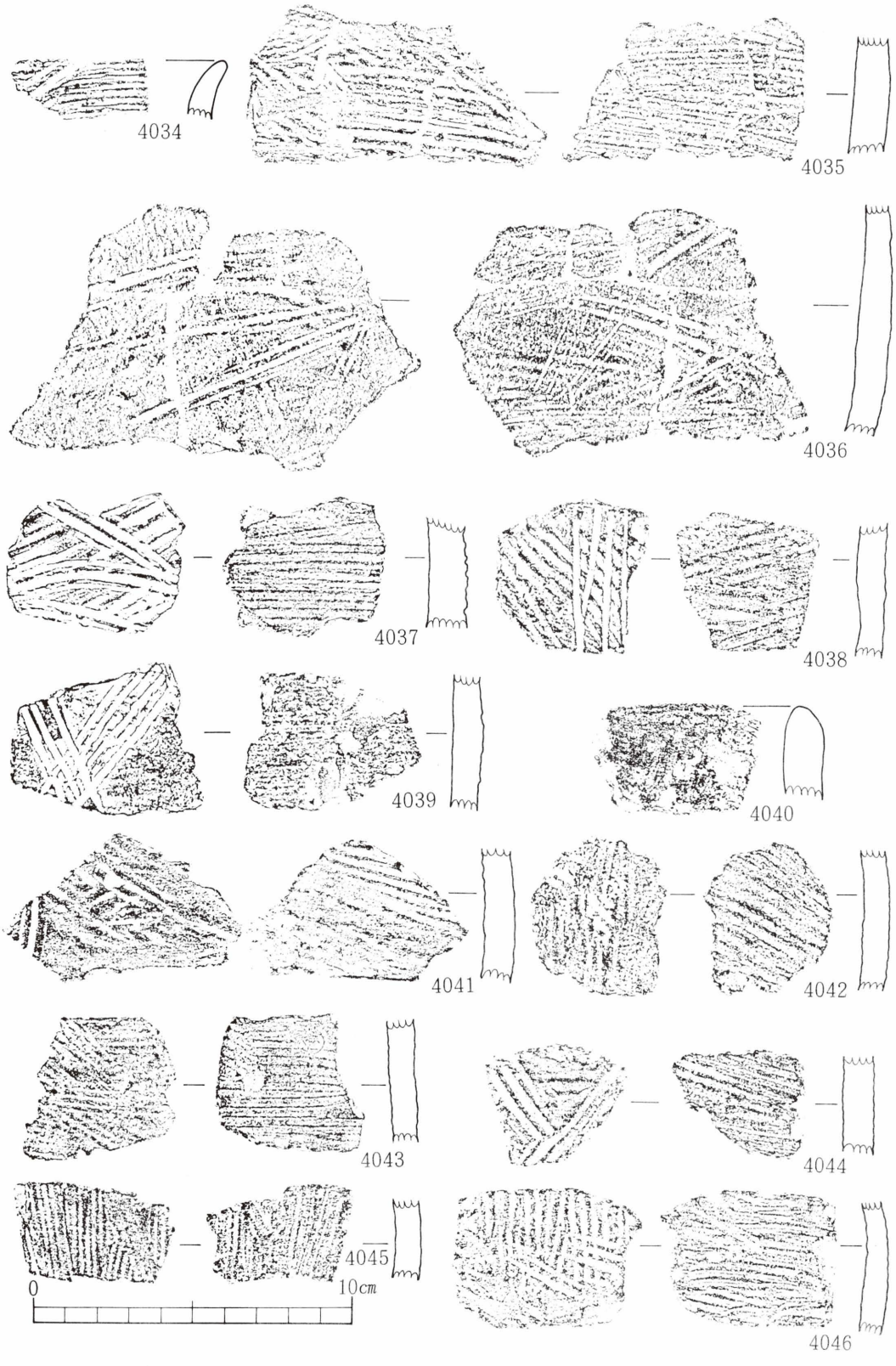
第45図　第4貝塚出土土器（東洞部－2）



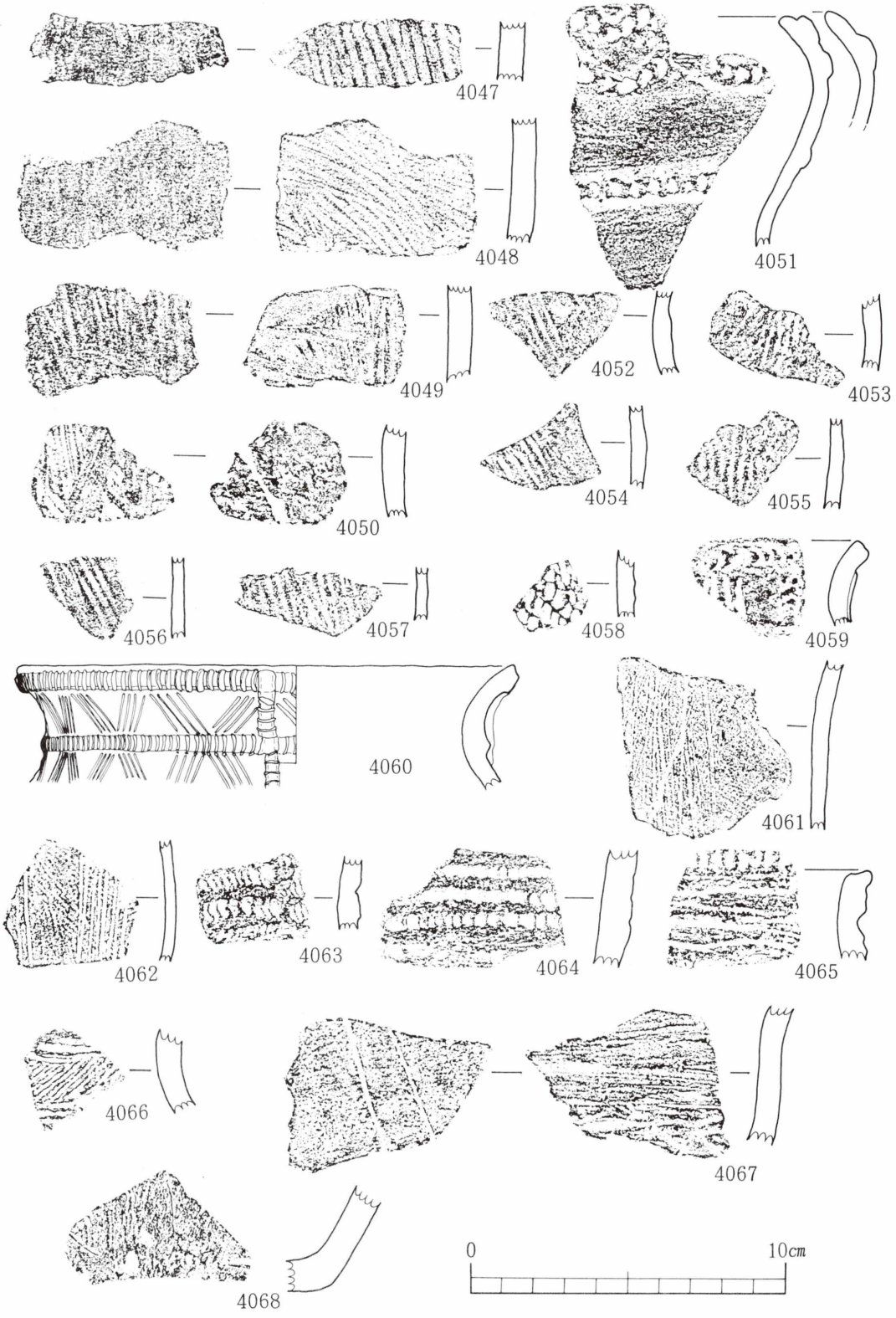
第 46 図　第 4 貝塚出土土器（東洞部－ 3）



第 47 図　第 4 貝塚出土土器（東洞部－ 4 ）



第48図　第4貝塚出土土器（東洞部－5）

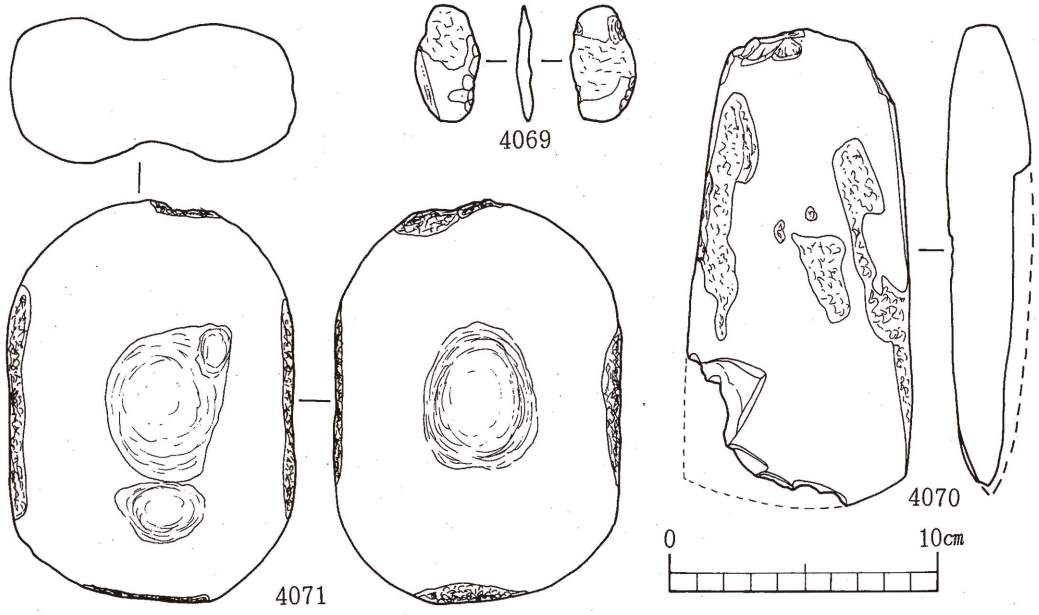


第 49 図　第 4 貝塚出土土器（東洞部－ 6 ）

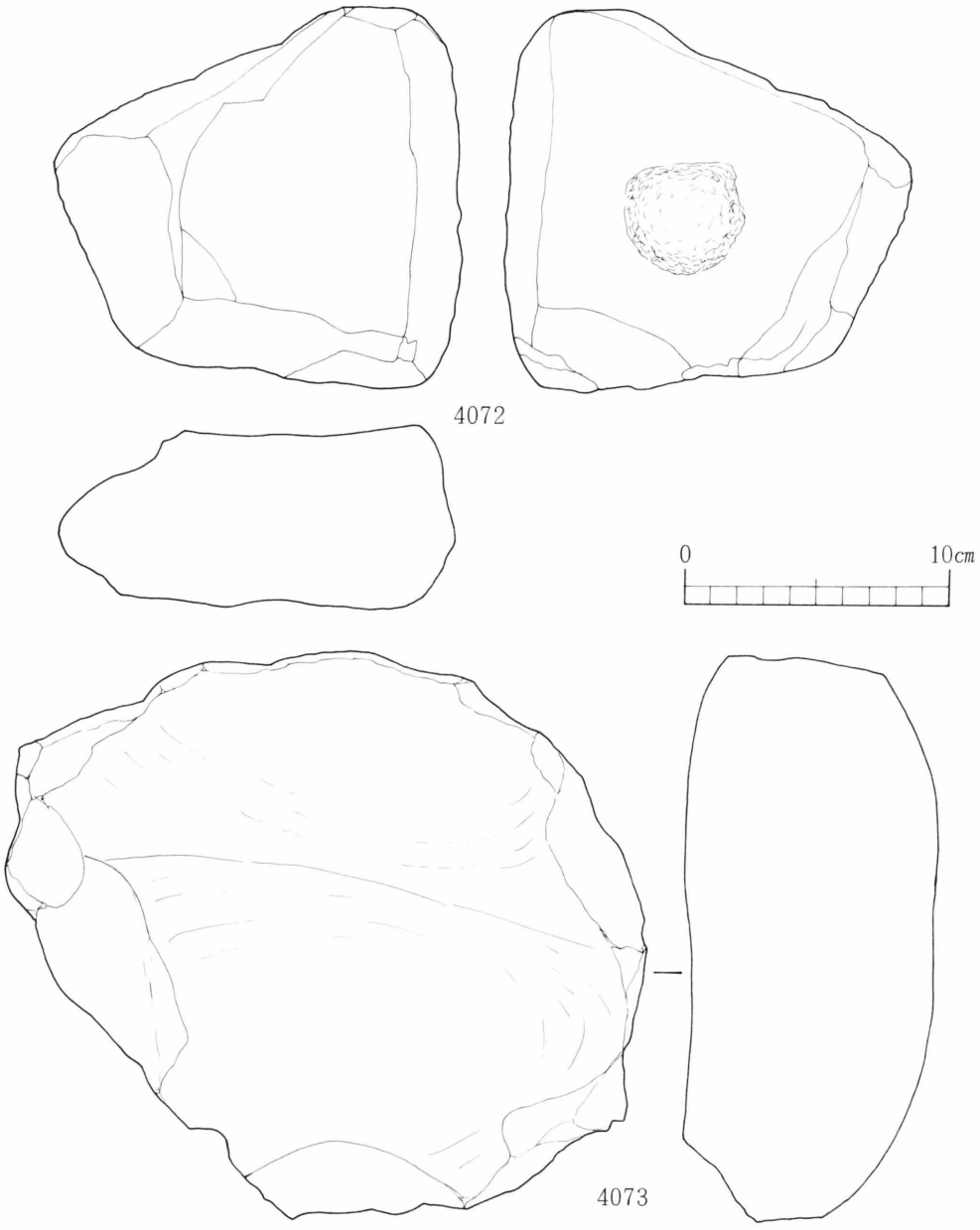
No	類	区	層	胎　　土	焼成	色　調	No	類	区	層	胎　　土	焼成	色　調
4039	E－Ⅱc	B－3	Ⅳ	砂粉，サンゴ，雲母	脆弱	外：黒褐色 内：暗茶褐色	4054	E－Ⅲ	B－3	Ⅳ	細砂	良	黒褐色
4040	E－Ⅱd	〃	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	黒褐色	4055	〃	〃	〃	〃	〃	〃
4041	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　小礫	良	外：茶褐色 内：暗茶褐色	4056	〃	〃	〃	〃	〃	〃
4042	〃	〃	Ⅱ	〃　〃　雲母	〃	暗茶褐色	4057	〃	〃	〃	〃	〃	〃
4043	〃	〃	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃	4058	E－Ⅳ	〃	Ⅵ	〃	〃	〃
4044	〃	〃	Ⅱ	〃　〃　〃	脆弱	〃	4059	E－Ⅴ	〃	Ⅰ	砂粒，サンゴ，小礫	良	〃
4045	〃	〃	Ⅱ	〃　〃	良	〃	4060	〃	〃	Ⅱ	〃　〃　ウンモ	〃	茶褐色
4046	〃	〃	撹乱	細砂，サンゴ，雲母	〃	〃	4061	E－Ⅴ	B－3	Ⅳ	砂粒，サンゴ	良	灰褐色
4047	〃	〃	Ⅱ	砂粒，サンゴ，ウンモ	〃	外：茶褐色 内：黒褐色	4062	〃		Ⅱ下	〃　〃	〃	茶褐色
4048	〃	〃	撹乱	〃　〃　〃	〃	〃	4063	E－Ⅵ		Ⅰ	〃　〃　ウンモ	〃	褐色
4049	〃	〃	〃	〃　〃	良	外：茶褐色 内：灰褐色	4064	〃		Ⅰ	〃　〃	〃	外：茶褐色 内：灰茶褐色
4050	〃	〃	Ⅳ	〃　〃	〃		4065	E－Ⅶ	B－3	Ⅱ・Ⅳ	〃　〃	〃	茶褐色
4051	E－Ⅲ	〃	Ⅳ	細砂	〃	暗灰(茶)褐色	4066	〃	A－洞	Ⅰ	〃　〃	〃	黒褐色
4052	〃	〃	〃	〃	〃	黒褐色	4067	〃	B－3	Ⅳ	〃　〃		暗茶褐色
4053	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4068	底　部	A－洞	Ⅰ	〃　〃		〃

2　石　器

石器は石斧・凹石・石皿が出土，採集された。4069は扁平な小形の磨製石斧である。刃部は弧状となり，研磨は刃部のみで，胴・頭部は研磨が徹底せず，調整剝離面を残している。

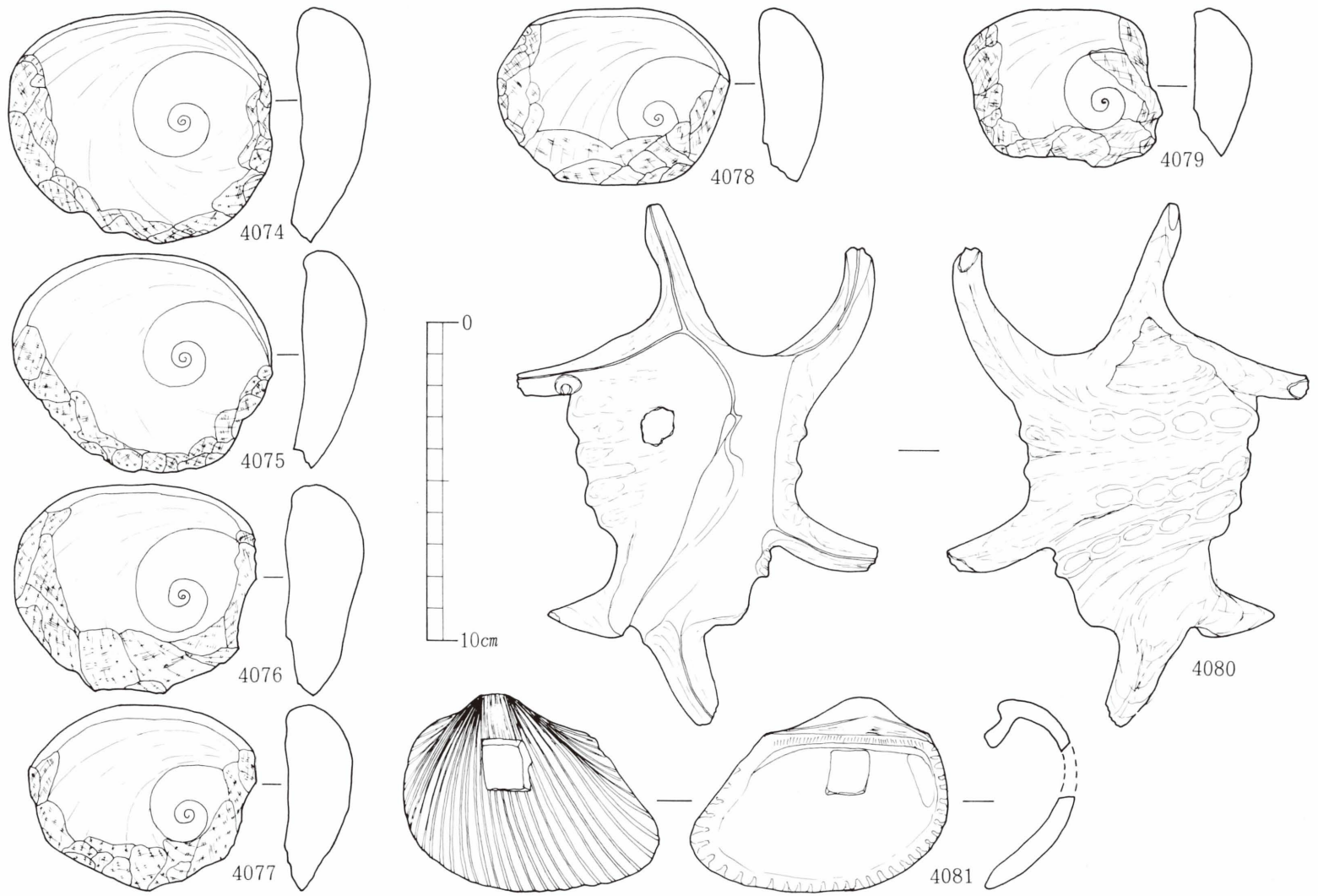


第50図　第4貝塚出土石器（東洞部－1）



第51図　第4貝塚出土石器（東洞部－2）

4070は大形の磨製石斧である。使用による破損か不明であるが節理にそって破損している。全体が研磨され，側辺部も面取りされている。胴部には一部研磨が徹底していない部分もある。4069・4070共に緑泥岩質の石材を用いている。4071は花崗岩製の凹石である。側辺部には敲打痕がみられる。4071は火山岩質の石材を利用した石皿の破片である。裏面には凹みが見られ，破損後凹石として再利用されたものであろう。西側小洞窟での表採資料である。4073は砂岩製の石皿である。

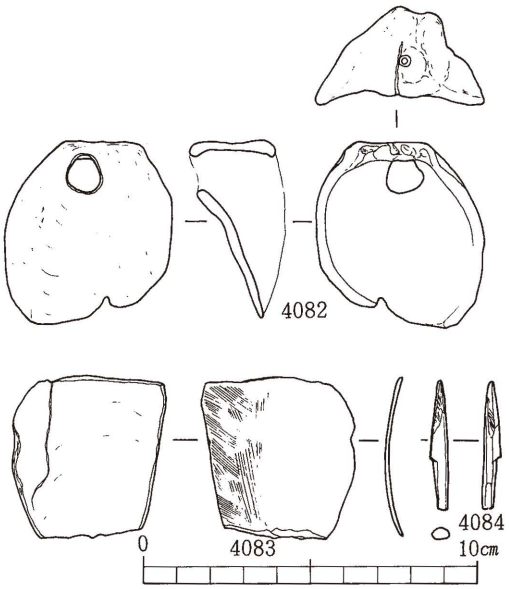

4074
4075
4076
4077
4078
4079
0
10cm
4080
4081

3　貝製品

貝製品は螺蓋製貝斧・有孔貝，貝匙が出土，採集された。

螺貝製貝斧　　4074～4079が螺貝製貝斧で西側小洞窟部での表採資料である。夜光貝の蓋の薄い縁部に刃部がみられる。

有孔貝　4080はスイジガイの腹部に径1㎝の穴を1個穿孔している。又殻頂部の管状棘には研磨痕を残している。4081はリュウキュウサルボウガイの殻頂に近い部分に1.5×1.7㎝の四角形に穿孔している。4082はメンガイ類の殻頂部に径1.0㎝，背面に径0.2㎝の2個穿孔している。縁辺部は使用のためか研磨によるものか不明であるがなめらかである。4083は夜光貝の真珠層を利用した貝匙の破片である。外面には研磨痕がみられる。



第53図　第4貝塚出土貝製品・骨格製品（東洞部－2）

4　骨製品

4084は，骨製の刺突具である。骨針としての名称が適当かと考えられるが破片のため断定しえない。側面部は研磨痕がみられる。材質は不明である。

第6表　東洞部出土石器・貝製品・骨製品一覧表

No	器種	区	層	たて㎝	よこ㎝	厚さ㎝	重量g	No	器種	区	層	たて㎝	よこ㎝	厚さ㎝	重量g
4069	石斧	B－3	Ⅳ	4.3	2.4	0.6	7.7	4077	螺蓋製貝斧	A洞	採集	5.9	7.2	2.1	125.0
4070	〃	〃	Ⅱ	17.1	8.5	3.2	604.2	4078	〃	〃	〃	5.6	7.3	2.0	102.5
4071	凹石	〃	Ⅳ	15.0	10.8	5.2	1,470	4079	〃	〃	〃	5.0	6.2	1.8	68.3
4072	石皿+凹石	採	Ⅰ	14.4	15.5	6.9	1,875	4080	貝製容器	B－3	Ⅵ	16.3	11.3		230.4
4073	石皿	B－3	Ⅳ	21.5	24.4	9.6	6,600	4081	有孔貝	B－3	Ⅱ	5.2	8.0	2.9	83.3
4074	螺蓋製貝斧	A洞	採	7.3	8.2	2.3	184.5	4082	〃	〃	Ⅳ	5.5	5.1	2.8	30.5
4075	〃	〃	〃	6.9	8.1	2.1	152.2	4083	貝匙	採		4.9	4.6	0.2	9.9
4076	〃	〃	〃	6.6	7.6	2.5	144.8	4084	骨製品	B－3	Ⅵ	3.9	0.6	0.4	1.0

第4節　西洞部の遺物

西洞部ではA－2・3トレンチの第Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層を中心に多くの遺物が出土した。土器はⅪ類に分類できた。石器では石斧・凹石・敲石・石皿が出土し，貝製品では螺貝製貝斧・貝匙が出土採集された。自然遺物ではイノシシ骨を中心にカメ・クジラと考えられるものも出土したが，粘質土層のため風化が進みもろいものが多かった。又火を受けて黒化しているものも出土した。

1　土　器

Ⅰ類　4085－4086がⅠ類土器である。4085は胴部片で，短沈線文を施すものである。右側は方向が異なったいわゆる羽状文となっており，左側部は短沈文を連続して施している。4086は凹点文状に施すものであるが，凹点に条がみられ貝殻腹縁を利用して刻したと考えられるものである。

Ⅱ類　Ⅱ類の土器は貝殻条痕文を施すものである。4088−4090は口縁部片4087−4089が胴部片である。4087は外面と内面とで条痕の幅に差がある。4088も同様である。4089は3～4条の条痕を波状に施している。4090は幅広の突帯を付し，貝殻腹縁による刺突文を施す。口唇部部にも連点文を施しており，波状を呈する。

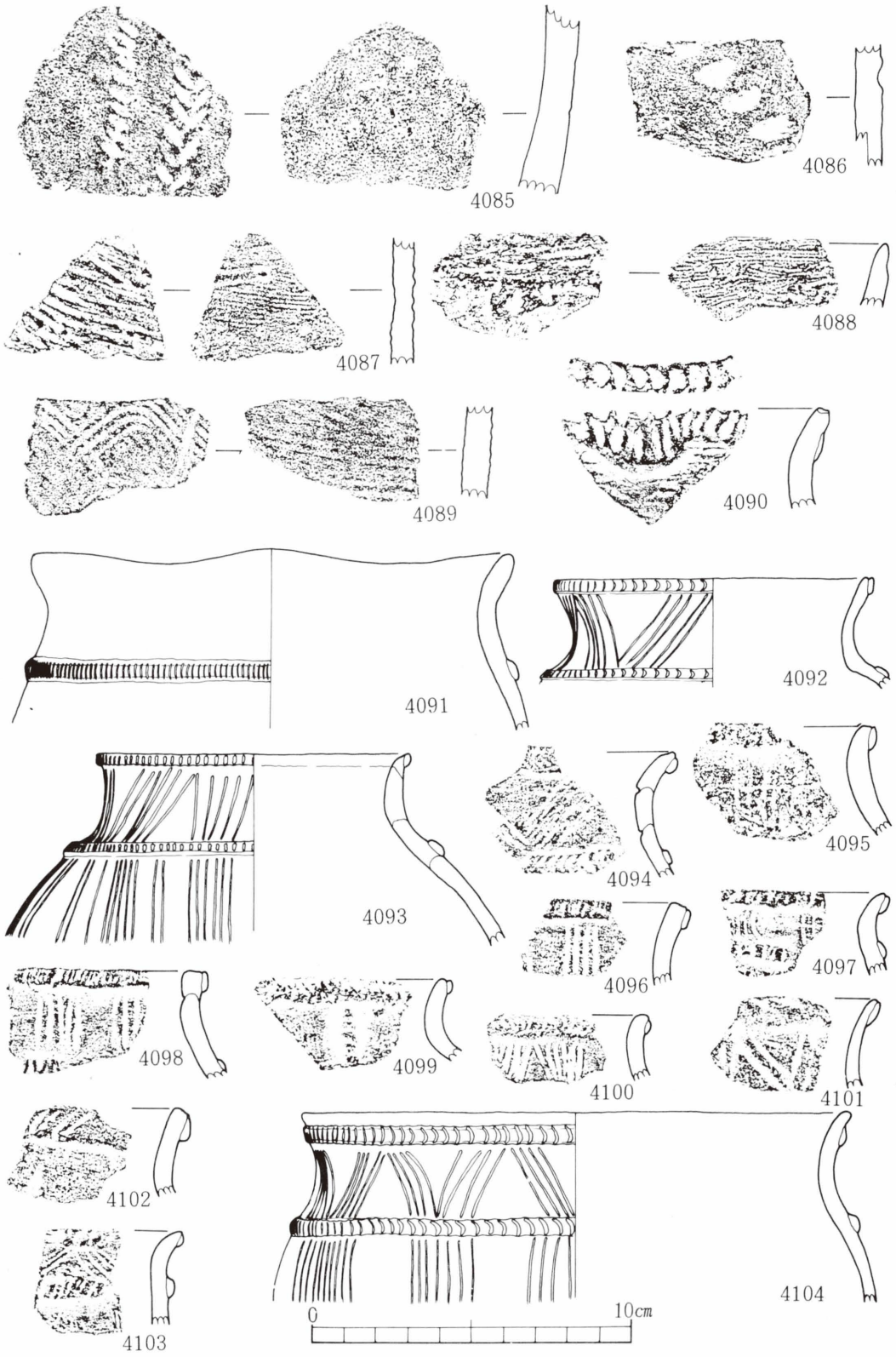
Ⅲ類　Ⅲ類は西洞部において出土量の一番多いものである。刻みを付した突帯と鋸歯状の沈線文を口縁部から頸部に施し，胴部に縦位の沈線文帯を間隔をおいて施すものである。器形は口縁部が外反し，頸部でいったんしまり，肩が膨る形を呈し，底部は乳房状の尖底となるものである。口縁部の突帯の付される位置等からさらに3種に細分できる。

Ⅲa類　4091がⅢa類で，波状口縁をなし，刻みを付した突帯をもつのみで沈線文は施されていない。復元口縁径15.0㎝を測る。

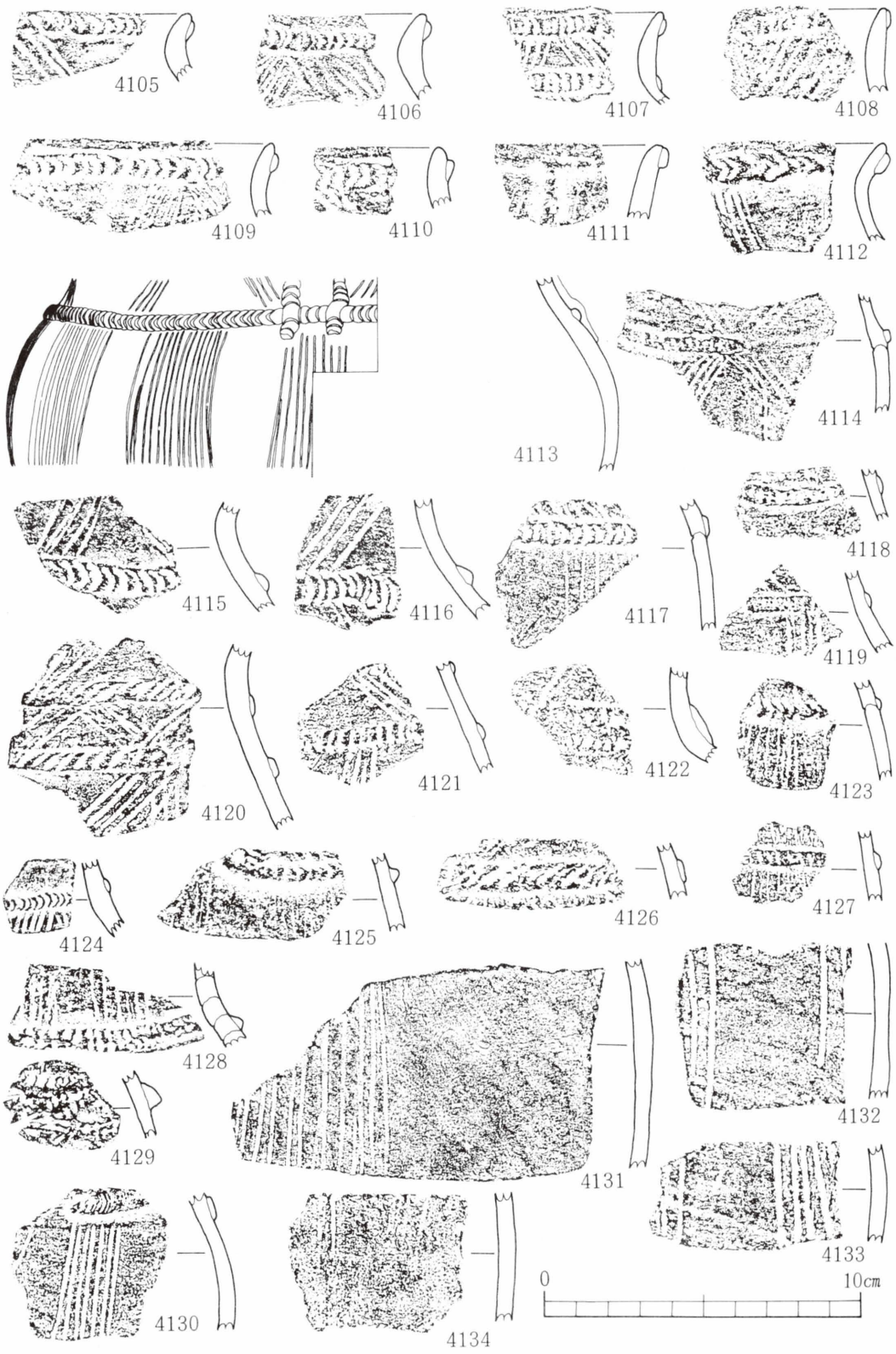
Ⅲb類　4092～4103がⅢa類である。口縁端に刻み突帯を付すものである。4097・4103は肩のあまりはらないものである。4092～4094・4100～4101・4103は刻み突端間の沈線文が複合鋸歯状となるもので他は縦位のものである。又4099の刻み突帯は縦位にも付されている。4102以外の突帯には密に施している。4092の復元口縁径10.0㎝，4093の復元口縁径は8.8㎝である。

Ⅲc類　4104～4112がⅢc類である。口縁の刻み突帯は口縁端よりやや下がった位置に付されているものである。4104は復元口縁径17.1㎝あり，やや広めの刻み突帯を2本付し，突帯間に複合鋸歯文，突帯下位には縦位の沈線帯を間隔をおいて施している。口縁部は外反するのがほとんどであるが，4108はやや直口気味，4110はやや内傾気味，4111はやや外傾気味に開くものである。

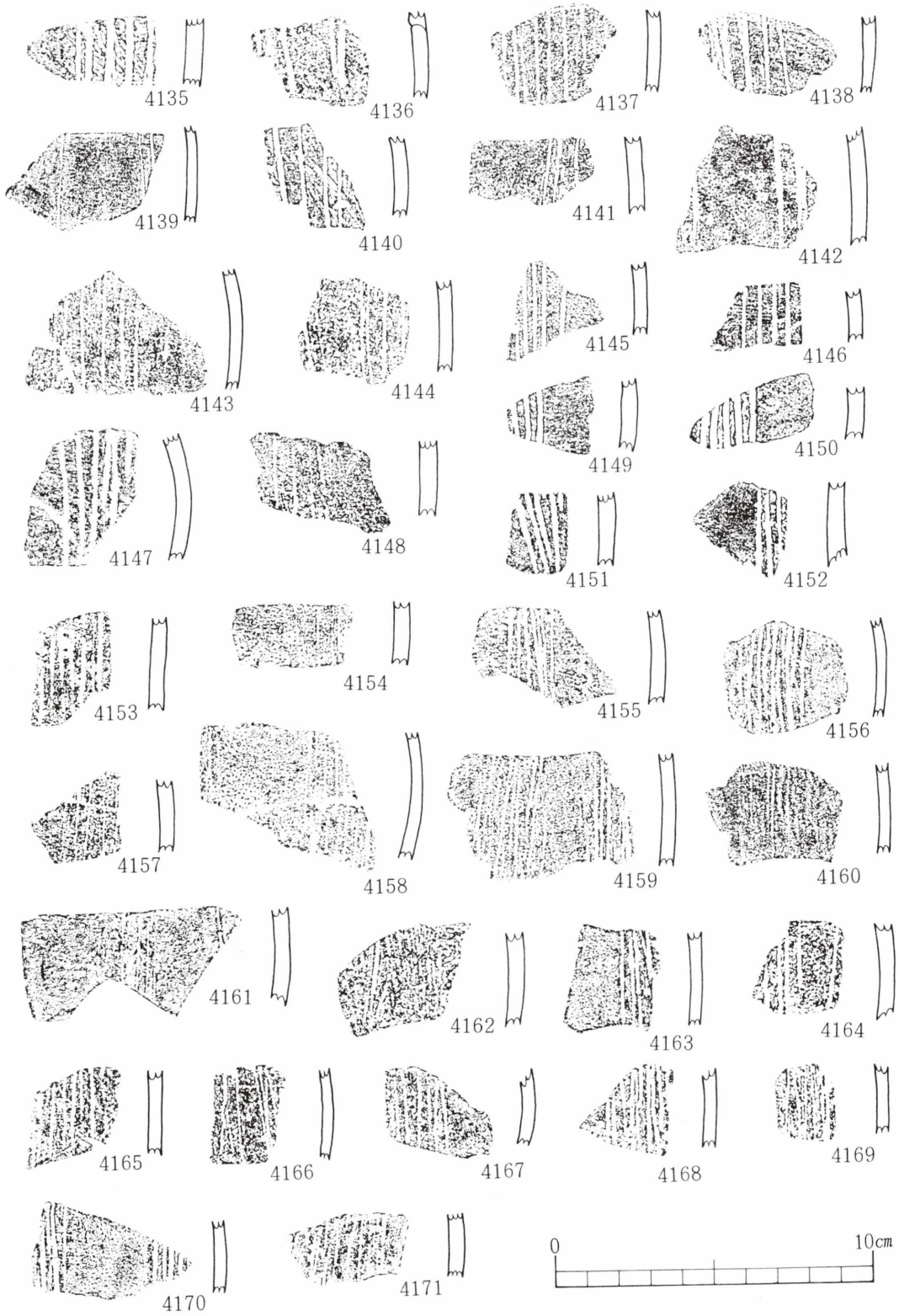
4113～4208はⅢa～Ⅲc類のいずれかに属する頸部から胴部にかけての破片である。4113～4130が刻み突帯を付した頸部から胴部の破片である。4113は刻み突帯が縦位に2本，4120は横位に2本あり文様帯を3段もつ。4129は三角形の突出部を有する。4131～4142は沈線が太く，間隔が広い。4154～4194は沈線が細いもので，4143～4153は両者の中間程度でシャープである。4195～4201は沈線が複合的に交錯したもの，4202～4208はより底部に近いものである。



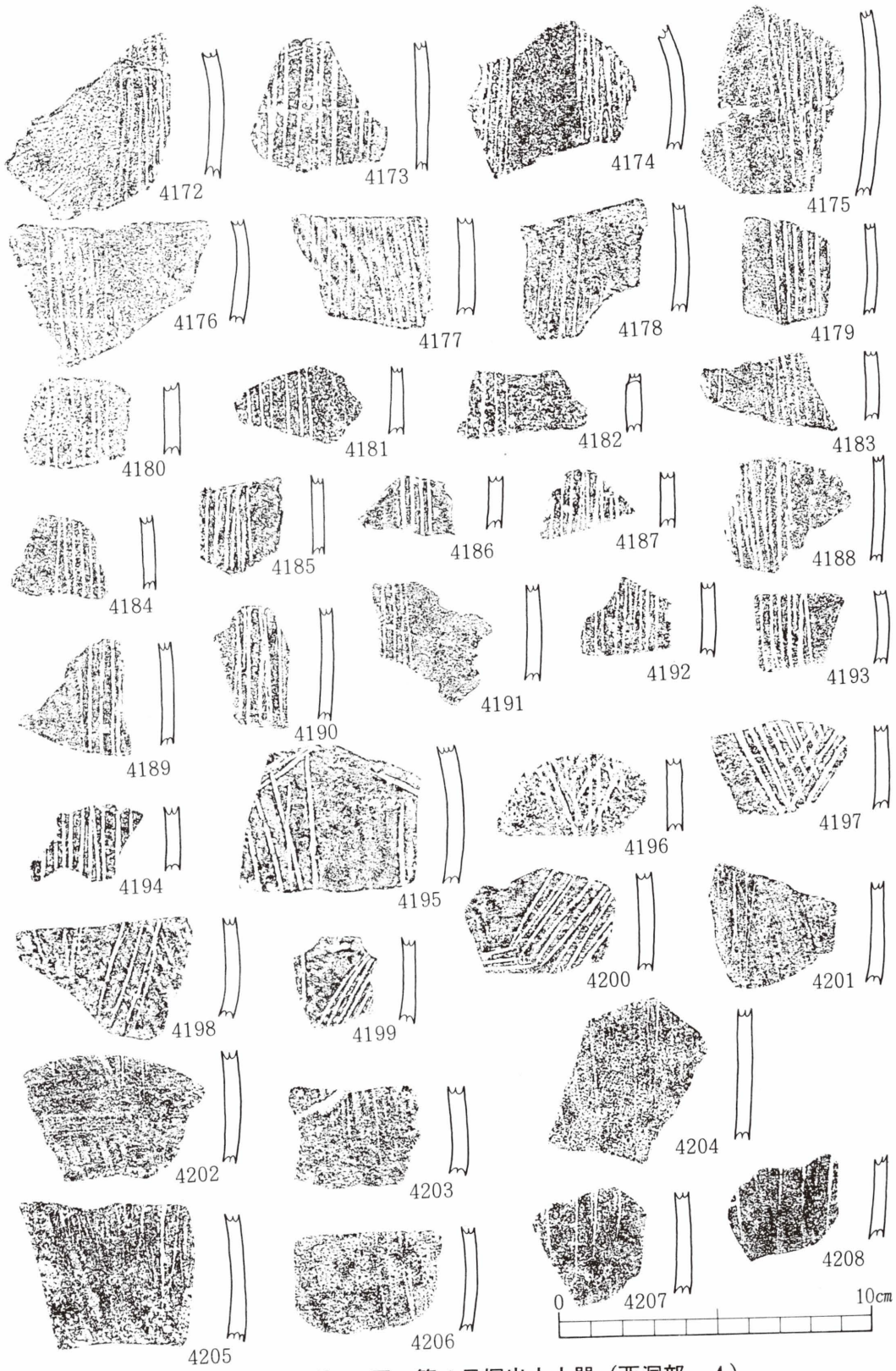
第 54 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 1）



第 55 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 2）

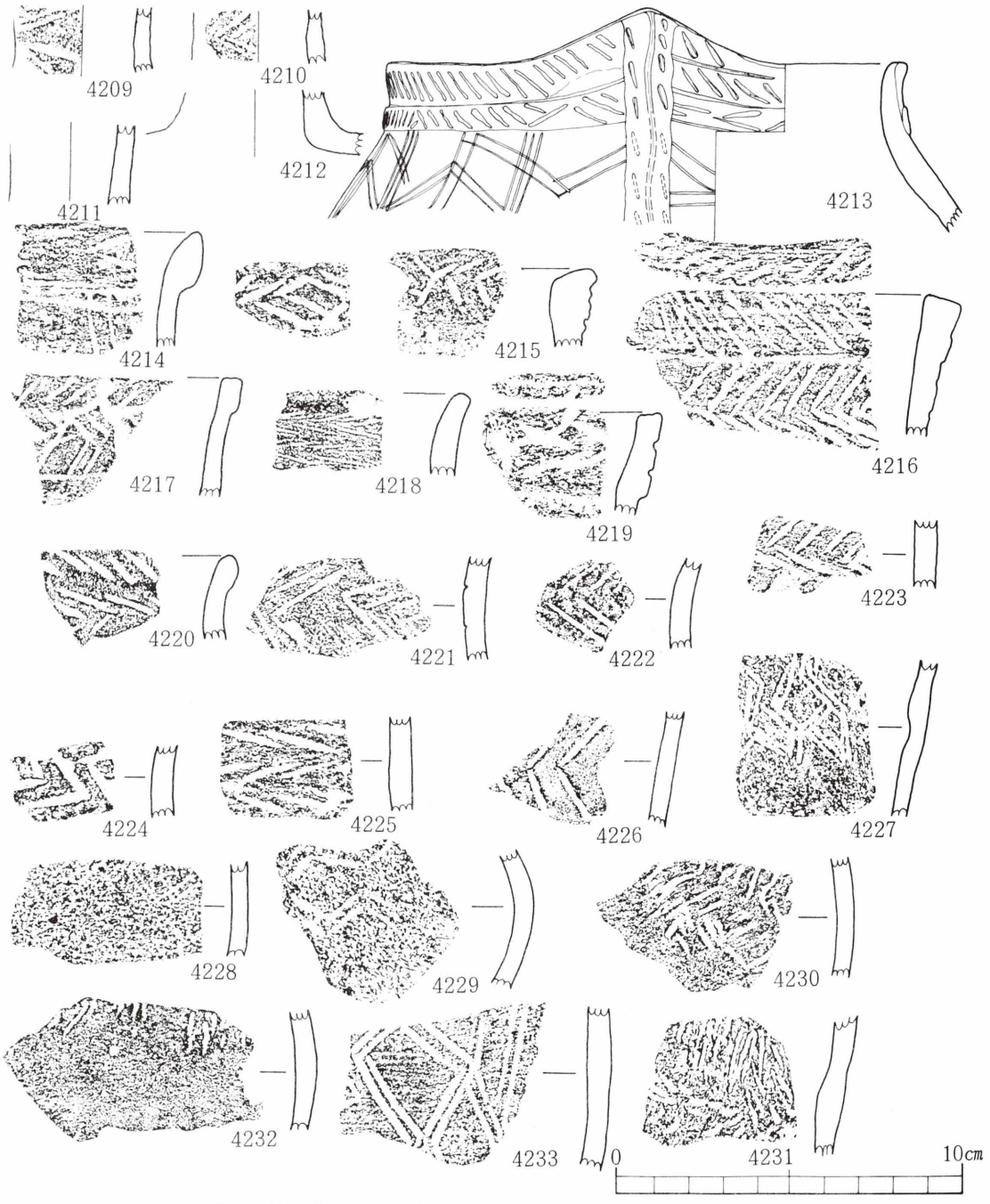


第 56 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 3）



第 57 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 4）

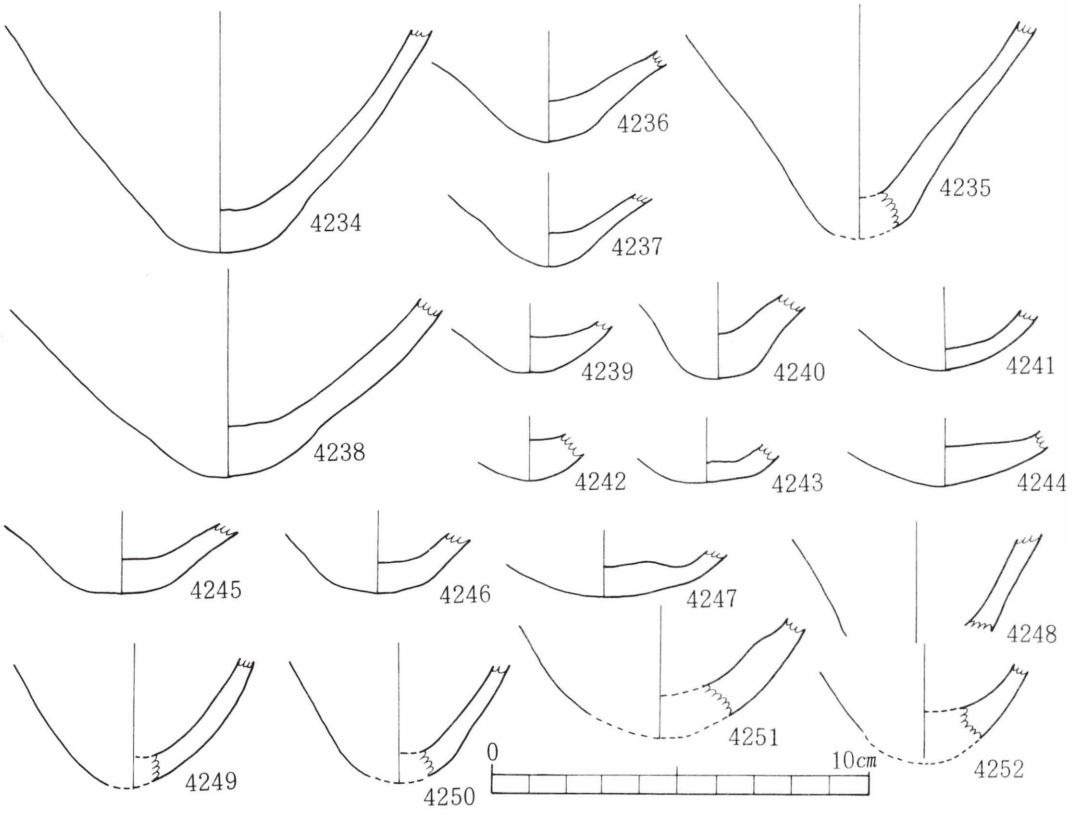
Ⅳ類　Ⅳ類は沈線文を施す土器群である。4209～4212は壺形土器の頸部片である。4209・4210には横位の羽状文を施す。4211・4212は無文である。4213は山形隆起の口縁部である。直口気味の口縁に粘土をさらに追加して厚味を増し斜位の短沈線を施し，なで肩状に広がる部分には縦の沈線と斜位の沈線を交錯させている。4214～4226は口縁部を肥厚させて，羽状の沈線文を施すもので，4216・4219は口唇部に刻みを施す。4227～4229は2本の沈線を「四角形状」



第58図　第4貝塚出土土器（西洞部－5）

に施すものである。4230～4232は短沈線を若干複雑に施すものである。4233は4227～4229と同様の構図であるが沈線が太く，やや長いものである。

4234～4252は，底部片である。これらは乳房状尖底と丸底に近い尖底とがあり，前者はⅢ類に属するものである。他はⅢ類ないしはⅣ類に属するものと考えられるものである。



第59図　第4貝塚出土土器（西洞部－6）

Ⅴ類　Ⅴ類は器面に押し引き文を編籠のモチーフ状に施すものである。4253～4269が口縁部である。口唇部がかまぼこ状をなすもの（4254～4256）と平坦になるものがある。4265は山形に隆起する。4253～4264が「流水文」様に，4265が羽状に，4266・4267は複雑なモチーフである。器厚は1㎝前後であるが4263は他に比べやや薄いものである。

Ⅵ類　4270～4274は口縁部の断面が三角形を呈し，Ⅴ類と同様の押し引き文を施すものである。4273は口縁がやや肥厚しているもの，4274はやや広い文様帯をもつ。4270～4271はやや小形のもので，4271は内面にも押し引き文を施している。

Ⅶ類　Ⅶ類は外反する口縁部を肥厚させ，内面ではやや凹みをもち浅い凹線状となる。4275には押し引き文を編籠のモチーフで，4276は短沈線ないしは連点文を羽状に施し，下位に沈線を施している。4277・4278は沈線を施すものである。

Ⅷ類　Ⅷ類は若干肥厚した口縁部に短沈線（4279），連点文（4280・4281）を施すもので

第 60 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 7）

ある。4281の外面には貝殻条痕文を施している。4272は4ケ所の山形隆起をもつと思われる破片で，口唇部と外面に横位の連点文を施している。

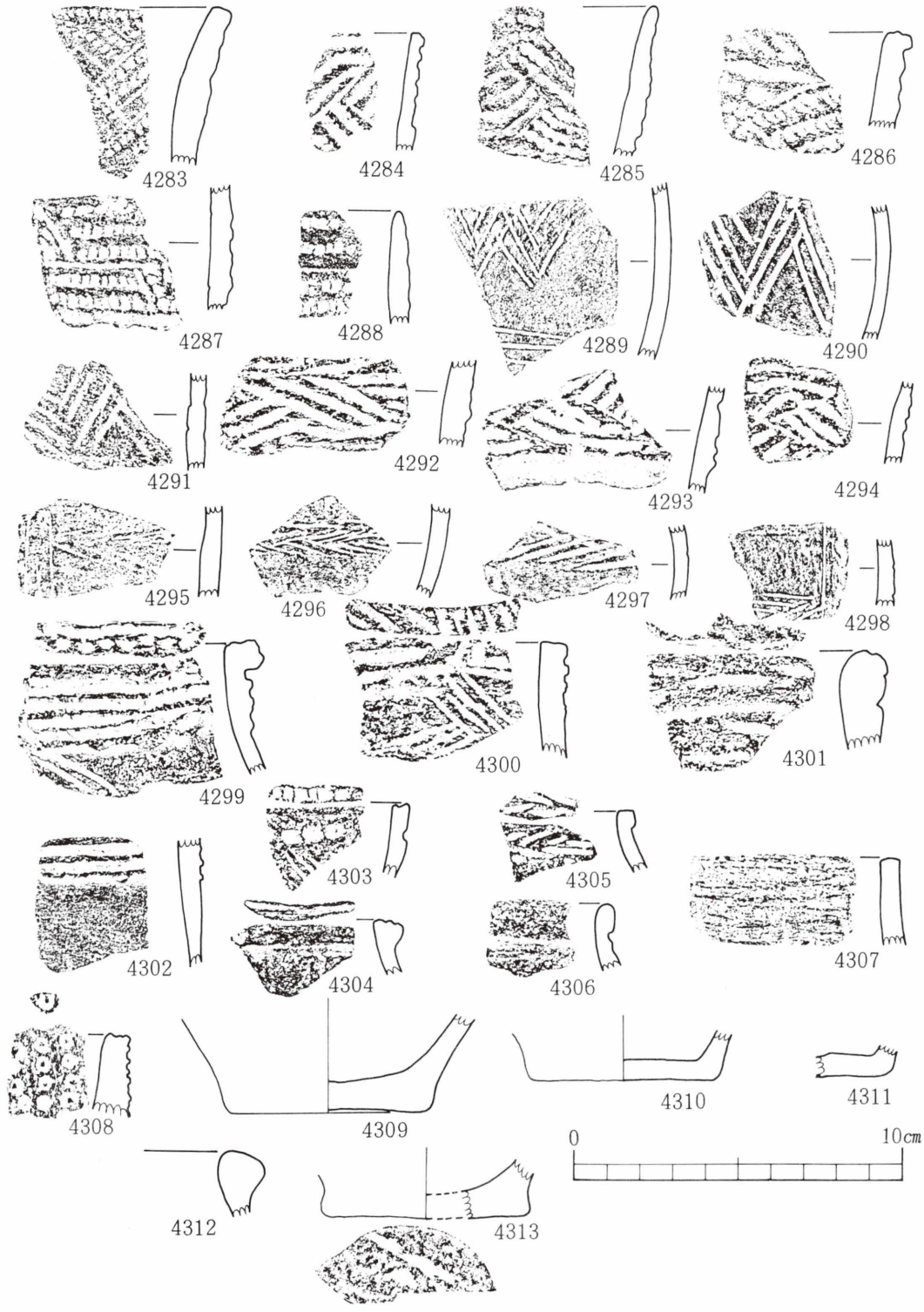
Ⅸ類　Ⅸａ類（4283～4288）とⅨｂ類（4289～4291）とに細分できる。4283が若干外反し，4284～4288は直口気味の口縁部片である。押し引きによる凹線文を編籠状のモチーフで施すのはⅤ類と類似しているが，押し引き文間に沈線を施すものである。4283～4286が羽状に，4287・4288が平行状となっている。4289・4290は沈線による複合鋸歯文を施す胴部片である。

Ｘ類　Ｘａ類（4292～4294）とＸｂ類（4295～4298）とに細分できる。4292～4294は口唇部を欠く口縁部片である。文様は凹線により編籠状のモチーフを施す。4295～4298は沈線文を施すもので，縦位の2～3条の沈線の両側へ羽状文を施している胴部片である。

Ⅺ類　Ⅺ類はその他の土器である。4299は内傾する口縁部片である。口縁部近くは粘土を加えて肥厚させ，押し引きによる凹線文を施している。口唇部には押し引き文による凹線文と連点文を施している。頸部以下は斜位の沈線を施す。4300は直口の口縁部片で，口唇部に沈線を施し，口縁上位に2条の押し引きによる凹線文を施し，その下位に4条の羽状文を施している。4301は若干内傾する口縁部片で肥厚部である。口唇部と肥厚部に横位の沈線を施している。4302は口縁部近くの破片で，肥厚部に沈線を施している。4303は内湾しながら外に開く口縁部片で，口唇部と口縁部近くに四角形の連点文を施し，その下位に右傾の沈線を施している。4304は内傾する口縁部片である。肥厚することにより口唇部は水平となり，ここに短沈線による羽状文を施し，口縁部に羽状の沈線を施している。4305も同様である。4306は口縁部を肥厚させ，内傾する口縁部片である。4307は若干内傾気味の口縁部片で，口唇部は水平となる。4308は口縁部片で，縦位の肥厚帯に竹管文を施すものである。4309～4311は底部片である。4309は復元径6.0㎝の若干あげ底気味の平底，4310が復元径5.6㎝の平底である。4312は玉縁状に肥厚する内傾気味の口縁部片である。4313は木葉痕を底部に付す平底の破片で，復元径は6.2㎝である。

第7表　西洞部出土土器一覧表

No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調	No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調
4085	W－Ⅰ	A－3	Ⅶ	砂粒,サンゴ砂,小礫	良	淡茶褐色	4095	W－Ⅲb	A－3	Ⅶ	細砂,サンゴ砂	やや悪	茶褐色
4086	〃	A－2	Ⅵ下	〃　〃	〃	外:茶褐色 内:暗茶褐色	4096	〃	A－3	Ⅳ	砂粒　〃　雲母	良	〃
4087	W－Ⅱ	A－7	Ⅲ	〃　〃　雲母	〃	茶褐色	4097	〃	A－7	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃
4088	〃	A－3	Ⅶ	〃　〃　〃	脆弱	〃	4098	〃	A－3	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	〃
4089	〃	A－0	Ⅸ	〃　〃　〃	良	〃	4099	〃	A－2	Ⅶ	〃　〃　〃	〃	〃
4090	〃	〃	Ⅹ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	4100	〃	A－0	Ⅰ	〃　〃　〃	〃	〃
4091	W－Ⅲa	A－2	Ⅶ下	〃　〃　〃	脆弱	茶褐色	4101	〃	A－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃
4092	W－Ⅲb	A－3	Ⅳ下	細砂　〃　〃	〃	淡茶褐色	4102	〃	A－2	Ⅲ下	〃　〃　〃	〃	〃
4093	〃	A－2	Ⅳ，Ⅲ	砂粒　〃　〃	良	暗茶褐色	4103	〃	A－2	Ⅵ	〃　〃	〃	黒褐色
4094	〃	A－3	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	淡茶褐色	4104	W－Ⅲc	A－3	Ⅳ	〃　〃	〃	暗茶褐色



第 61 図　第 4 貝塚出土土器（西洞部－ 8 ）

No	類	区	層	胎土	焼成	色調	No	類	区	層	胎土	焼成	色調
4105	W－Ⅲc	A－3	Ⅲ下	細砂,サンゴ砂,雲母	良	黒褐色	4139	W－Ⅲ	A－2	Ⅲ	細砂,サンゴ砂,雲母	良	黒褐色
4106	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	4140	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色
4107	〃	〃	Ⅳ	〃 〃	〃	茶褐色	4141	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4108	〃	A－2	〃	〃 〃 雲母	〃	〃	4142	〃	〃	Ⅲ下	〃 〃 〃	〃	灰褐色
4109	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	4143	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色
4110	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	4144	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4111	〃	〃	Ⅲ	〃 〃	やや悪	〃	4145	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	外：黒褐色 内：灰褐色
4112	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 雲母	良	黄褐色	4146	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4113	W－Ⅲ	〃	〃	〃 〃 〃	〃	黒褐色	4147	〃	A－3	Ⅶ下	〃 〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色
4114	〃	〃	〃	〃 〃	〃	茶褐色	4148	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	灰茶褐色
4115	〃	〃	〃	〃 〃 雲母	〃	〃	4149	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	黒褐色
4116	〃	A－7	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	4150	〃	〃	Ⅶ	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4117	〃	A－2	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	4151	〃	採	Ⅰ	〃 〃 〃	〃	外：暗茶褐色 内：黒褐色
4118	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	4152	〃	A－2	Ⅱ	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4119	〃	〃	Ⅲ下	〃 〃	〃	黒褐色	4153	〃	〃	Ⅳ上	〃 〃 〃	〃	暗茶褐色
4120	〃	A－3	Ⅱ	〃 〃 雲母	〃	淡茶褐色	4154	〃	採		〃 〃 〃	〃	茶褐色
4121	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	茶褐色	4155	〃	A－2	Ⅶ	〃 〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色
4122	〃	〃	〃	〃 〃	やや悪	〃 一部暗茶褐色	4156	〃	採		〃 〃	〃	外：暗茶褐色 内：淡茶褐色
4123	〃	〃	Ⅵ	〃 〃 雲母	良	茶褐色	4157	〃	A－3	Ⅱ	〃 〃 雲母	〃	茶褐色
4124	〃	〃	Ⅶ	〃 〃	〃	黒褐色	4158	〃	〃	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	黄褐色
4125	〃	〃	Ⅳ下	〃 〃 雲母	〃	茶褐色	4159	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	黒褐色
4126	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃	4160	〃	A－7	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	外：黒褐色 内：茶褐色
4127	〃	〃	Ⅶ	〃 〃 〃	〃	〃	4161	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4128	〃	〃	Ⅳ下	〃 〃 〃	〃	〃	4162	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4129	〃	A－2	Ⅶ	〃 〃	〃	〃	4163	〃	A－3	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4130	〃	〃	Ⅲ	〃 〃 雲母	〃	〃	4164	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4131	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	黒褐色	4165	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4132	〃	A－3	Ⅳ下	〃 〃 〃	〃	茶褐色	4166	〃	A－3	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4133	〃	〃	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色	4167	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	〃
4134	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐色	4168	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	黒褐色
4135	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色	4169	〃	A－2	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4136	〃	A－2	〃	〃 〃 雲母	〃	茶褐色	4170	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	〃
4137	〃	A－3	〃	〃 〃 〃	〃	〃	4171	〃	A－2	Ⅲ下	〃 〃 〃	〃	〃
4138	〃	A－6	〃	〃 〃 〃	〃	〃	4172	〃	A－2	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	黄褐色

No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調	No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調
4173	W－Ⅲ	A－2	Ⅳ	細砂・サンゴ砂・雲母	良	黒褐色	4207	W－Ⅲ	A－2	Ⅳ	細砂・サンゴ砂・雲母	良	黒褐色
4174	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4208	〃	A－3	Ⅶ下	〃　〃　〃	〃	灰褐色
4175	〃	〃	〃	〃　〃	〃	黄褐色	4209	W－Ⅳa	A－2	Ⅳ	〃　〃	〃	茶褐色
4176	〃	〃	〃	〃　〃　雲母	〃	暗茶褐色	4210	〃	A－3	Ⅶ	〃　〃	〃	〃
4177	〃	A－3	〃	〃　〃　〃	〃	黄褐色	4211	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　雲母	〃	〃
4178	〃	A－2	〃	〃　〃　〃	〃	黒褐色	4212	〃	〃	Ⅶ	〃　〃　〃	〃	〃
4179	〃	A－3	〃	〃　〃　〃	〃	茶褐色	4213	W－Ⅳb	A－3 A－2	Ⅳ Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃
4180	〃	A－2	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4214	W－Ⅳc	A－2	Ⅲ	〃　〃	〃	上部　黒褐色 下部　暗茶褐色
4181	〃	〃	〃	〃　〃	〃	黒褐色	4215	〃	A－3	〃	〃　〃	〃	茶褐色
4182	〃	〃	〃	〃　〃　雲母	〃	茶褐色	4216	〃	A－2	〃	〃　〃	〃	暗茶褐色
4183	〃	A－3	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4217	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃
4184	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4218	〃	〃	〃	〃　〃	〃	黄褐色
4185	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4219	〃	A－3	Ⅲ	〃　〃	〃	〃
4186	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	4220	〃	〃	Ⅲ下	微細砂〃	〃	〃
4187	〃	〃	〃	〃　〃　雲母	〃	黄茶褐色	4221	〃	A－2	Ⅲ	細砂　〃　雲母	〃	黒褐色
4188	〃	A－2	Ⅳ下	〃　〃　〃	〃	〃	4222	〃	A－3	〃	〃　〃	〃	茶褐色
4189	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4223	〃	A－2	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	〃
4190	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4224	〃	A－3	〃	〃　〃　〃	〃	〃
4191	〃	A－3	Ⅶ	〃　〃　〃	〃	〃	4225	〃	A－2	Ⅲ	微細砂〃	〃	〃
4192	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4226	〃	A－3	Ⅳ	細砂　〃	〃	〃
4193	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	茶褐色	4227	W－Ⅳd	A－2	Ⅲ	〃　〃	〃	〃
4194	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	黒褐色	4228	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃
4195	〃	A－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	茶褐色	4229	〃	〃	〃	〃　〃	やや悪	〃
4196	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	4230	〃	〃	〃	〃　〃　雲母	良	暗茶褐色
4197	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	黄褐色	4231	〃	A－3	Ⅱ	〃　〃　〃	〃	〃
4198	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色	4232	〃	A－3	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	〃
4199	〃	A－3	Ⅳ下	〃　〃　〃	〃	茶褐色	4233	〃	A－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃
4200	〃	〃	Ⅶ	〃　〃　〃	〃	〃	4234	底　部	A－2	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	茶褐色
4201	〃	A－2	〃	〃　〃	〃	〃	4235	〃	〃	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	〃
4202	〃	A－3	Ⅲ	〃　〃	〃	〃	4236	〃	A－3	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	灰茶褐色
4203	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	4237	〃	A－2	Ⅲ	〃　〃　〃	〃	茶褐色
4204	〃	A・2・3	Ⅲ	〃　〃　雲母	〃	黄褐色	4238	〃	A－3	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	〃
4205	〃	A－2	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	〃	4239	〃	A－2	Ⅳ	〃　〃　〃	〃	暗茶褐色
4206	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	4240	〃	A－2	Ⅲ	〃　〃	〃	〃

No	類	区	層	胎土	焼成	色調	No	類	区	層	胎土	焼成	色調
4241	底部	A－2	Ⅲ	細砂,サンゴ砂,雲母	良	茶褐色	4275	W－Ⅶa	A－3	Ⅲ	細砂,サンゴ砂	良	暗茶褐色
4242	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	4276	〃	〃	Ⅲ	〃 〃 雲母	〃	〃
4243	〃	A－3	Ⅶ	〃 〃 〃	〃	〃	4277	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	茶褐色
4244	〃	〃	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃	4278	W－Ⅶb	採		〃 〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色
4245	〃	A－2	Ⅳ	〃 〃 〃	〃	外：黒褐色 内：灰茶褐色	4279	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃	〃	暗茶褐色
4246	〃	〃	〃	〃 〃	〃	暗茶褐色	4280	〃	〃	Ⅲ下	〃 〃	〃	外：黒褐色 内：茶褐色
4247	〃	〃	Ⅲ	〃 〃 雲母	〃	〃	4281	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃 雲母	〃	茶褐色
4248	〃	A－3	Ⅶ	〃 〃 〃	〃	〃	4282	W－Ⅶc	A－3	Ⅲ	〃 〃 〃	〃	〃
4249	〃	A－2	Ⅲ下	〃 〃 〃	〃	〃	4283	W－Ⅷ	A－3	Ⅳ	〃 〃	〃	暗茶褐色
4250	〃	A－3	Ⅳ下	〃 〃 〃	〃	茶褐色	4284	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃	〃	茶褐色
4251	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃	〃	暗茶褐色	4285	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃	〃	暗茶褐色
4252	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃	〃	〃	4286	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃
4253	W－Ⅴ	A－0	Ⅱ	〃 〃	〃	〃	4287	〃	A－2	Ⅱ	〃 〃	〃	茶褐色
4254	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃	〃	茶褐色	4288	〃	〃	Ⅲ	〃 〃	〃	〃
4255	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	4289	〃	〃	〃	〃 〃	〃	暗茶褐色
4256	〃	〃	Ⅲ	〃 〃	〃	〃	4290	W－Ⅸ	A－2・3	Ⅰ	〃 〃	やや悪	茶褐色
4257	〃		Ⅰ	〃 〃	〃	外：茶褐色 内：黒褐色	4291	〃	〃	Ⅱ	〃 〃	良	〃
4258	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃	〃	茶褐色	4292	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃	〃	〃
4259	〃	〃	Ⅲ上	〃 〃	〃	〃	4293	〃	A－2	〃	〃 〃	〃	〃
4260	〃	採	Ⅰ	〃 〃	〃	暗茶褐色	4294	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃
4261	〃	A－3	Ⅲ下	〃 〃	〃	〃	4295	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃	〃	〃
4262	〃	A－2	〃	〃 〃	〃	〃	4296	〃	〃	Ⅶ	〃 〃	〃	〃
4263	〃	〃	Ⅱ	〃 〃	〃	茶褐色	4297	〃	A－3	Ⅲ	微砂 〃	〃	暗茶褐色
4264	〃	A－3	Ⅳ	〃 〃	〃	〃	4298	〃	〃	〃	〃 〃	〃	茶褐色
4265	〃	A－3	Ⅲ下	〃 〃	〃	〃	4299	W－Ⅹa	A－2	Ⅲ	細砂 〃	〃	外：茶褐色 内：暗茶褐色
4266	〃	A－2	Ⅲ	〃 〃	〃	黒褐色	4300	〃	A－3	Ⅲ下	〃 〃	〃	暗茶褐色
4267	〃		Ⅰ	〃 〃	〃	茶褐色	4301	〃	A－2	Ⅳ	〃 〃	やや悪	外：暗茶褐色 内：茶褐色
4268	〃	A－3	Ⅲ	〃 〃	〃	〃	4302	〃	A－3	Ⅱ	〃 〃	良	茶褐色
4269	〃	A－3	Ⅵ	〃 〃	〃	〃	4303	〃	A－2	Ⅳ	〃 〃	〃	〃
4270	〃	〃	Ⅳ	〃 〃	〃	〃	4304	W－Ⅹb	A－3	Ⅲ	微砂 〃	〃	暗茶褐色
4271	〃	A－2	Ⅲ	〃	〃	暗茶褐色	4305	〃	A－2	Ⅲ	細砂 〃	〃	茶褐色
4272	〃	A－3	〃	〃	〃	〃	4306	〃	〃	Ⅳ	〃 〃	〃	〃
4273	W－Ⅵ	〃	Ⅰ	〃	〃	外：暗茶褐色 内：茶褐色	4307	W－Ⅹc	A－3	Ⅲ下	〃 〃 小礫	〃	暗茶褐色
4274	〃	〃	〃	〃	〃	灰茶褐色	4308	W－Ⅹd	〃	Ⅲ	〃 〃	〃	茶褐色

No	類	区	層	胎　土	焼成	色　調
4309	W－Xe	A－3	Ⅳ	細砂・サンゴ砂	良	茶褐色
4310	〃	〃	Ⅳ	〃　〃　雲母	〃	暗茶褐色
4311	〃	〃	Ⅲ	〃　〃	〃	茶褐色
4312	W－Xf	A－3	Ⅱ	微　砂	良	茶褐色
4313	W－Xg	〃	Ⅰ	〃	〃	〃

石　器

石斧　4314・4315は頭部を欠く磨製石斧である。研磨は刃部を中心にし，胴部では徹底していない。4314が玄武岩質製，4315が砂岩製である。4316は風化の著しいもので，刃部は磨滅しているが使用のためか判然としない。側縁部は若干の扶りがみられる。4317は扁平な小形の磨製石斧である。頁岩製で，研磨は刃部と側縁及び頭部が中心で，胴部では剝離面を残し研磨が徹底していない。

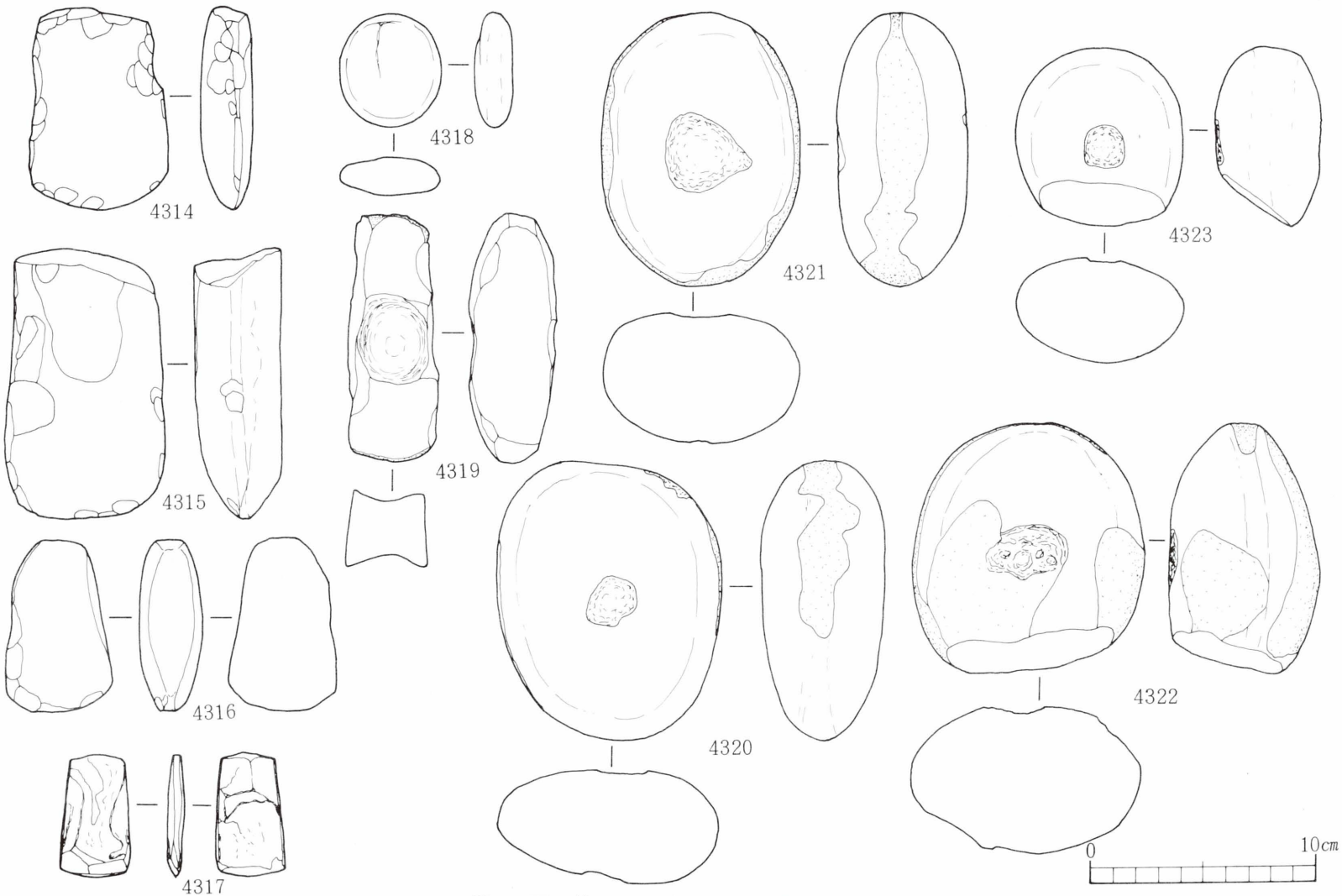
磨石　4318が扁平な磨石と考えられるもので，風化が進んでいるものである。

凹石・敲石　4319～4332が凹石・敲石である。楕円形・長楕円形の中心部が凹んでおり，側縁部の一部ないしは全周（4321）に敲打痕がみられる。4314・4323は破片で凹みのみであるが敲打痕が破損部にあったのかは不明である。石材は砂岩製がほとんどで，4321・4322・4336が火成岩である。4333～4336は側縁部に敲打痕のみられるもので，砂岩製である。4336～4339は破損して石材を再利用したものである。いずれも砂岩製である。

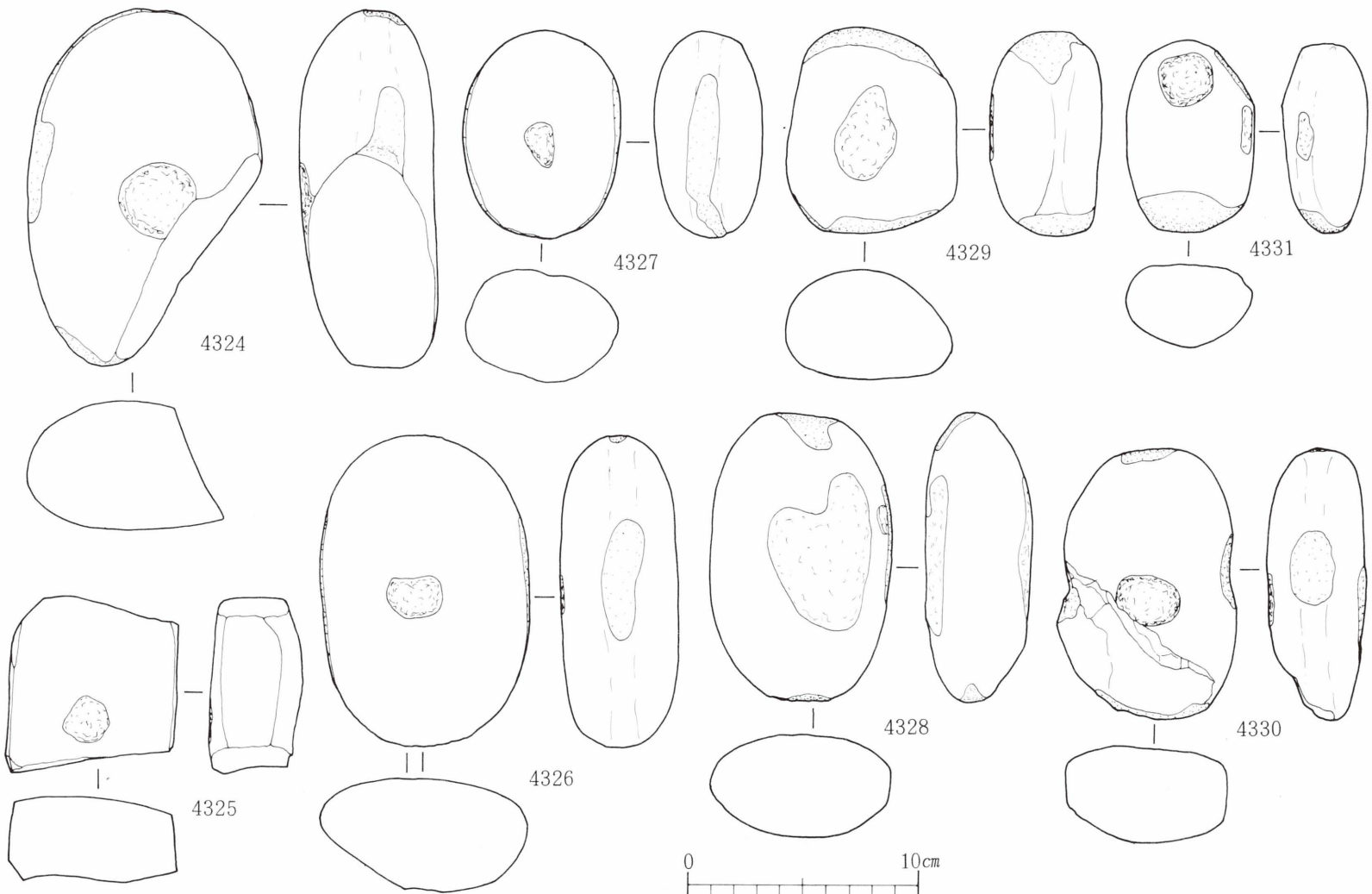
石皿　4340が石皿の破片で，火成岩製である。

第8表　西洞部出土石器一覧表

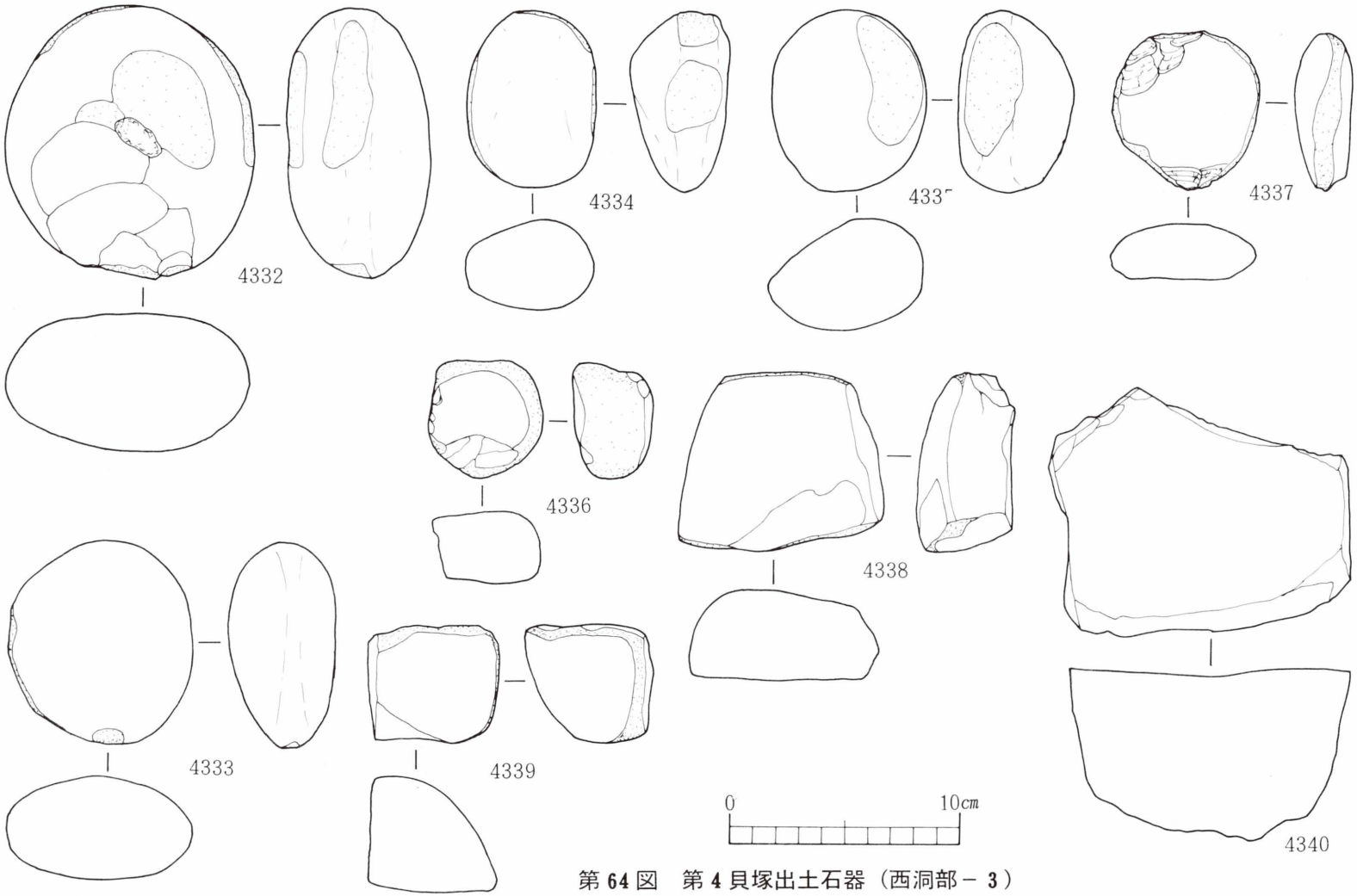
No	器　種	区	層	たてcm	よこcm	厚さcm	重量g	No	器　種	区	層	たてcm	よこcm	厚さcm	重量g
4314	石　斧	A－0	Ⅰ	9.1	6.3	2.4	202.5	4328	凹石・敲石	A－0	Ⅷ	12.6	7.9	4.5	676.0
4315	〃	表　採		12.1	7.3	3.9	522.0	4329	〃	〃	Ⅲ	9.1	7.5	4.7	525.5
4316	〃	A－2	Ⅳ	7.8	4.8	2.9	146.0	4330	〃	〃	〃	11.8	7.7	4.2	496.2
4317	〃	A－3	Ⅶ	5.7	3.2	0.8	19.7	4331	〃	〃	Ⅲ下	8.5	5.6	3.6	248.0
4318	磨　石	A－2	Ⅲ	5.1	4.5	1.7	44.7	4332	〃	〃	Ⅳ	11.9	10.8	6.0	1078.5
4319	凹　石	〃	〃	11.2	4.0	3.5	272.2	4333	敲　石	〃	〃	8.9	8.1	4.5	503.8
4320	凹石・敲石	A－2	Ⅳ	12.5	10.1	5.7	1095.5	4334	〃	A－3	〃	7.7	5.7	4.0	240.3
4321	〃	A－3	Ⅳ	12.7	8.9	5.8	878.0	4335	〃	A－3	Ⅳ下	7.9	6.7	4.9	373.5
4322	〃	A－2	Ⅳ下	11.3	10.3	6.5	928.5	4336	〃	採		5.1	5.6	3.1	146.0
4323	凹　石	A－0	Ⅰ	7.9	7.4	4.7	414.0	4337	〃	A－2	Ⅳ	6.8	6.4	2.5	133.2
4324	凹石・敲石	A－2	Ⅲ	15.1	10.2	5.7	1152.7	4338	〃	A－2	〃	7.8	9.0	3.9	402.0
4325	凹　石	A－3	Ⅲ下	7.3	7.9	3.8	349.2	4339	〃	A－2	Ⅲ	5.2	5.7	5.2	226.5
4326	凹石・敲石	採		13.6	9.2	5.0	936.0	4340	石　皿	A－3	〃	10.9	13.0	7.6	1,445g
4327	〃	採		9.0	6.8	4.9	456.7								



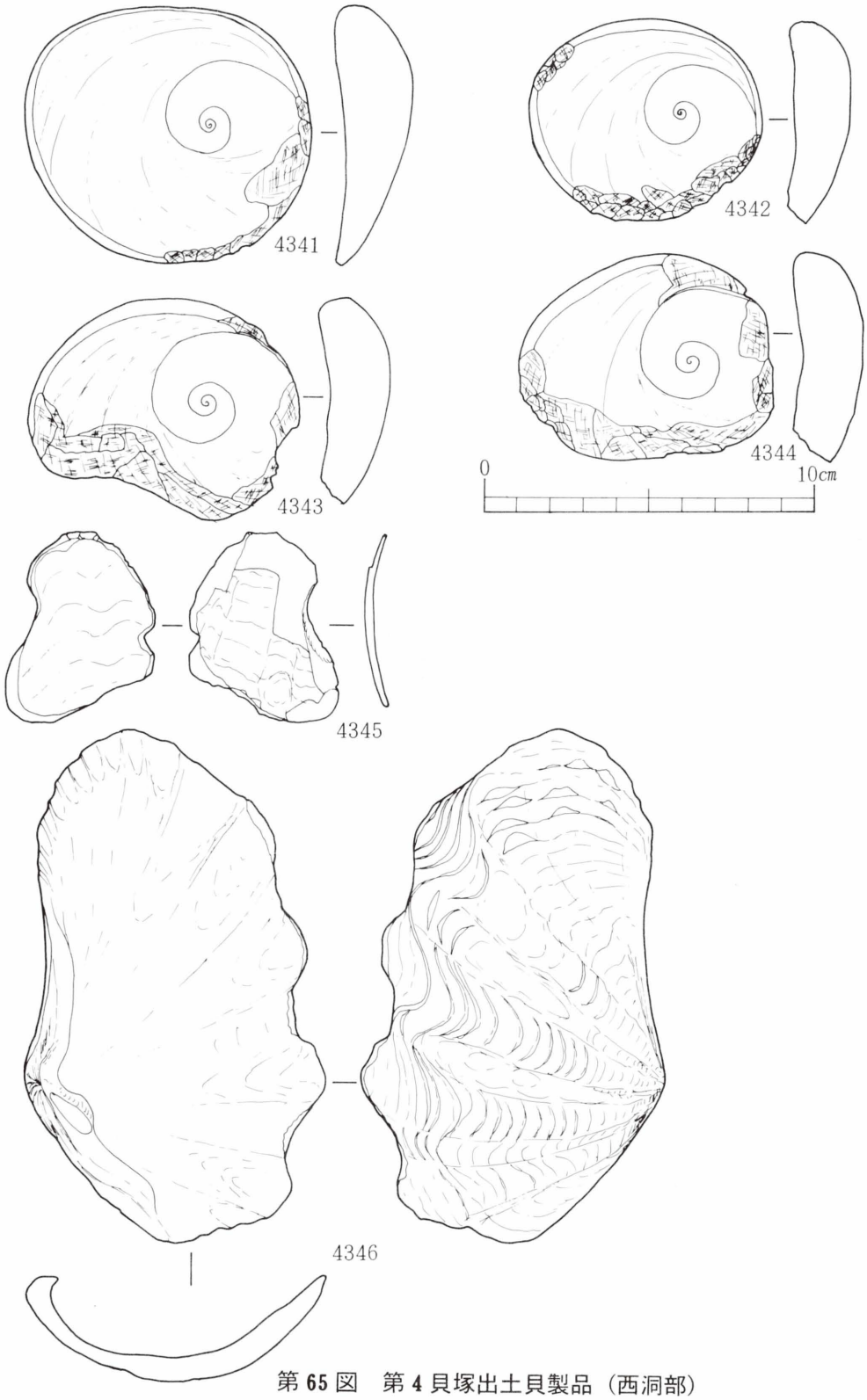
第 62 図　第 4 貝塚出土石器（西洞部－ 1）



第 63 図　第 4 貝塚出土石器（西洞部－ 2 ）



第 64 図　第 4 貝塚出土石器（西洞部－ 3 ）



第 65 図　第 4 貝塚出土貝製品（西洞部）

3　貝製品

螺蓋製貝斧　4341～4344が螺蓋製貝斧である。4341・4342が西洞部内表採，4343・4344がA－6・7トレンチの第Ⅱ層からの出土である。夜光貝の蓋の薄い縁辺部に刃部がみられるものである。

貝匙　4345が夜光貝の体層部を利用したものである。表皮が残っている破片である。

貝容器　4346はシャコガイの腹縁部を折断して平滑にしたものである。

第9表　西洞部出土貝製品一覧表

No	器　種	区	層	たてcm	よこcm	厚さcm	重量g	No	器　種	区	層	たてcm	よこcm	厚さcm	重量g
4341	螺蓋製貝斧	A－0	Ⅰ	7.8	8.7	2.4	204	4344	螺蓋製貝斧	〃	〃	6.2	7.7	2.1	152.5
4342	〃	〃	〃	6.1	7.1	1.9	102.5	4345	貝　匙	採	／	5.8	4.5	0.3	17.4
4343	〃	A－6・7	Ⅱ	6.7	8.2	2.1	138.7	4346	貝容器	A－0	Ⅰ	15.5	9.1	3.2	209.6

第5節　小　　結

今回の調査の結果，西側洞窟前庭部の一部において天地返しや土砂の搬入による撹乱がみられ，両洞窟部ではすでに詳細な調査が行われて表土のみの堆積ではあったが，東側洞窟部・西側洞窟部の両前庭部において良好な包含層が存在していることが確認でき，多くの資料や知見を得ることができた。

以下，若干の考察を行って第4貝塚の小結としたい。なお自然遺物（獣・魚骨・貝等）についての詳細な報告は日程等により今回報告できなかったが，後日機会を得て公表する予定である。

1　出土土器について

東側洞窟部と西側洞窟部とでは個々に分類を行ったが，ここでは繁雑を避けるために共通するものは併記して行いたい。記述は東側洞窟部Ⅰ類をE－Ⅰ類，西側洞窟部Ⅱ類をW－Ⅱ類というふうに略述する。

E－Ⅰ類・W－Ⅰ類は，器面にヘラ状工具による沈線・短沈線文を施すものである。地文に貝殻条痕文を残すものもある。この類は概して器壁が厚く，脆弱である。E・W－Ⅰ類は従来大島郡喜界町赤連出土の土器を標式とする「赤連系土器」と一括して呼称されていたものであるが，その後，沖縄県沖縄市室川貝塚の調査により，最下層に[1]単独で出土することから「室川下層式」の呼称を与えられた一群に比定できるものである。県内では西之表市下剥峯遺跡出土の[2]Ⅳ類土器が類似するものであり[3]，胎土・色調共に似ているとのことである。文様の種類を，高宮氏はヘラと[4]貝殻による施文具から3種に，岸本・山田両氏は刺突文と沈線及[5]短沈線文等の施文から3種に分類を行っている。本貝塚出土の[6]ものには地文に貝殻条痕を施しているものの文様としての貝殻文は[7]みられないが破片のため断定できない。器形は，破片のみの出土のために不明であるが，乳房状尖底の砲弾形をした円筒形土器と考えられ，同様のものが大島郡笠利町高又遺跡より出土している。これらは縄文時前期に属するとされている。**E－Ⅱ類・W－Ⅱ類**は、器面に貝殻条痕文を施すものである。条痕文や胎土の差異から4種に細分できた。器形は深鉢形ないしは円筒形を呈し，底部は尖底状になると考[8]

えられる。これらの一群は，大島郡喜界町赤連出土の土器を標式とする「赤連系土器」[9]に比定できるものであり，沖縄県で呼称されている条痕文土器に対比できるものである。類例としては沖縄県伊平屋村久里原貝塚[10]，同嘉手納町野国遺跡，大島郡笠利町高又遺跡等から出土するものがある。宝島大池遺跡のカーボン[11]測定から4820±95Y.B.P[12]の結果が得られており[13]，貝殻条痕文土器の一群はこの他西之表市下剥峯遺跡をはじめ，県内各地に広く分布[14]するものである。本貝塚出土のものも河口氏のいうように南九州の系列としてとらえ，轟式土器の貝殻条痕文の影響を受けているものと考えることが妥当[15]であり，縄文時代前期に属すると考えられる。**E－Ⅲ類**はキャリパー状を呈する器形であること等から，鹿児島市春日町遺跡出土の土器を標式とする「春日式土器」に比定できるものであり，徳之島では初めての出土である。胎土等から考えて，移入した可能性[16]が強いものである。**E－Ⅳ類**は斜縄文を施すものの小破片である。胎土はE－Ⅲ類と酷似しており，同様の器形をもつとすれば，志布志町野久尾遺跡出土の撚糸文土器にキャリパー状のものがあり，近い形態をもつと考えられるがE－Ⅲ類と共にその移入経路等資料[17]の増加をまって解決していかねばならぬ問題であろう。E－Ⅲ類の春日式土器はE－Ⅱ類の貝殻条痕文土器と共伴関係を示し，成川遺跡でのカーボン測定の結果が4320±40年Y.B.Pであり，宝島大池遺跡の結果とは近い値を示している。鹿児島県本土においては縄文時代前期に属[18]するとされている。**E－Ⅴ類・Ⅳ－Ⅲ類**は面縄第4貝塚前庭部出土の土器を標式とする「面縄前庭式土器」に比定できるものである。西側洞窟前庭部の第Ⅲ・Ⅳ層から中心的に多く出土[19]した土器である。頸部がしまり，肩の張るものである。頸部が強くしまり壺状を呈するものもある。底部は乳房状尖底ないしは尖底状丸底と考えられる。頸部に文様をもたないもの（a類），口唇部近くの刻み突帯を端部に貼り付けるもの（b類），やや下った位置に貼り付けるもの（c類）とに細分できたが，これが時代差をあらわすものかは明確にできなかった。これらの面縄前庭式土器は大島郡笠利町・竜郷町・伊仙町・知名町の他沖縄県内も含めて二十数ケ所の遺跡からの出土が知られている。笠利町高又遺跡において，第Ⅲ層から面縄前庭式が，第Ⅳ層から嘉徳Ⅰ・Ⅱ式を若干伴出しながら[20]条痕文土器が出土[21]している。本遺跡ではA－2・3トレンチにおいて第Ⅶ層から室川下層式土器・貝殻条痕文土器が，第Ⅳ層から面縄東洞式・嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器を若干伴出しながら面縄前庭式土器が第Ⅳ類と共伴しながら中心的に出土している。時期について，牛之浜氏は現行の編年（当時は縄文時代晩期に位置づけられていた。）より古くなると指摘し，神野貝塚においては面縄東洞式土器など後期土器に先行することが確認[22]できたとし，中期頃[23]まで遡らせうるかどうかは問題は生ずるものの可能性は残しており[24]，本貝塚においても面縄東洞式土器よりも古くなる傾向で出土している。**E－Ⅳ類**は羽状の沈線[25]を横位に施すもので，沖縄県恩納村仲泊第4貝塚出土の土器を標式とする「仲泊式土器」の系統と考えられるものである。仲泊式土器は貝殻文と沈線文の2種[26]あり，本遺跡のものは沈線文のみの出土である。この一群の土器片のなかには壺形土器と考えられる[27]ものがあり，沖縄県久里原貝塚[28]でも同様のものが出土している。縄文時代中期初頭に近い時期に位置づけられている。西側洞窟部では共伴状態での出土[29]であり，近い時期のものと考えられる。**E－Ⅵ類・Ⅳ－Ⅴ類**は面縄第4貝塚東側洞窟部出土の土器を標式とする「面縄東洞式土器」に比定できるものである。大島郡笠利町宇宿貝塚[30]をはじめ多くの遺跡で類例[31]がみられる。縄文

時代後期に属する。**E－Ⅵ類**・**W－Ⅶ類**は口縁部の断面が三角形状に肥厚するものである。**W－Ⅵ類**には押し引き文を，**W－Ⅶ類**には連点文・沈線文を施すもので，笠利町宇宿貝塚出土のものに類似したものがあり，熊毛郡上屋久町一湊松山遺跡出土の土器を標式とする「松山式土器」[32]の系統ないしは影響を受けたものと考えられる。縄文時代後期に属すると考えられる。**W－Ⅷ類**は大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡出土の土器を標式とする「嘉徳Ⅰ式土器」に，**W－Ⅸ類**は「嘉徳Ⅱ式土器」[33]に比定できるものである。[34]これらは大島郡笠利町長浜金久遺跡で多量出土しており，細分が可能という。縄文時代後期に属する。**E－Ⅶ類**・**W－Ⅹ類**はその他の土器である。このうち，4307は神野貝塚出土の12類に類似するものである。[35]

以上のE－Ⅰ～Ⅵ類とW－Ⅰ～Ⅹ類土器を，各層における出土頻度数を東側洞窟部のB－3トレンチ，西側洞窟部のA－2・3トレンチについて今回報告の図化したものに限って調べてみると下表のようになった。[36]

東側洞窟部B－3トレンチ　（ ）内数は再掲

層＼類	Ⅰ	Ⅱ	(Ⅱa)	(Ⅱb)	(Ⅱc)	(Ⅱd)	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
1	2	5	(2)			(3)			1	2	1
2		19	(7)	(8)		(4)			2		1
3		7	(1)	(5)		(1)					
4	2	15	(3)	(2)	(7)	(3)	7		1		
5											
6	2							1			

図化できなかった遺物等をも含めて総合的にとらえるならば，東側洞窟部においてはⅡ類が中心的に出土し，西側洞窟部においては第Ⅲ・Ⅳ層を中心に多くの遺物が出土し，第Ⅶ層からはⅢ類が中心的に出土していることがうかがえる。

西側洞窟部A－2・3トレンチ　（ ）内数は再掲

層＼類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	(Ⅲa)	(Ⅲb)	(Ⅲc)	Ⅳ	(Ⅳa)	(Ⅳb)	(Ⅳc)	(Ⅳd)	底部	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	(Ⅸa)	(Ⅸb)	Ⅹ
2			7				1				(1)		1		1		1	1	
3		1	32		(4)	(2)	15		(1)＋接合	(10)	(4)	9	10	2	2	4	2	1	5
4			43		(6)	(7)	6	(2)	(1)	(2)	(1)	8	1	1			3		7
5																			
6	1		1		(1)								1						
7	1	1	12	(1)	(2)		2					2							

2　石器について

東側洞窟前庭部からは，小形磨製石斧・大形磨斧・石皿・凹石それぞれが一点ずつ出土している。この他石器としての出土はなかったが，貝殻条痕文土器に伴ってチャートの剝片が多く出土しており，石器の存在が考えられるものである。西側洞窟前庭部からは，第Ⅲ・Ⅳ層を中心に石斧・叩石・凹石が出土し，叩石が多く出土している。叩き石の中には破損後も再利用されているものも少なくなかった。又東側洞窟部同様チャートの剝片もみられた。

3　貝器について

多くが表採資料であった。犬田布貝塚における貝製品の量との差は時代差によるものか今後検討が必

要であろう。

4　遺跡について

東側洞窟前庭部と西側洞窟前庭部とでは包含層が異なり，それぞれ包含する遺物も様相が異なってはいたものの，東側洞窟部の方が西側洞窟部の方よりやや古い時期に中心となったと考えられようが，今後検討を加えるべきものであろう。又，住居址等の遺構が検出できなかったが，後背地を含めた生活址の検討をさらに進めていく必要があり，春日式土器や貝殻条痕文土器等南九州とのつながりをさらに究明していかねばならないなど問題を多く残す結果となった。

註

1）河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号　鹿児島県考古学会　1974
2）高宮広衛他　「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」『沖国大考古』第4号　1980・3
3）高宮広衛他　「室川貝塚第1～3次発掘調査概報」『沖国大考古』第2号　1978
4）新東晃一他　「下剥峯遺跡」　西之表市埋蔵文化財調査報告書　西之表市教育委員会　1978・3
5）新東晃一氏教示
6）3）に同じ
7）岸本義彦・山田　「糸満市名城前遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』第6号　沖縄考古学会　19
8）白木原…他　「笠利町高又遺跡」　笠利町文化財調査報告書2　笠利町教育委員会　1978・12
9）1）に同じ
10）高宮広衛　「沖縄諸島の土器」『縄文文化の研究』6　雄山閣　1982・11
11）玉城・島袋・岸本他　「久里原貝塚」伊平屋村文化財調査報告書第1集　伊平屋村教育委員会　1981・3
12）岸本　他　「野国」野国貝塚群B地点発掘調査報告書　沖縄県文化財調査報告書　沖縄県教育委員会　1984・3
13）8）に同じ
14）8）に同じ
15）1）に同じ
16）河口貞徳・河野治雄　「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号　鹿児島県考古学会　1955
17）酒匂義明　「野久尾遺跡」　志布志町教育委員会　1979・3
18）出口浩・繁昌正幸・弥栄久志他　「成川遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書㉔　鹿児島県教育委員会　1983・3
19）国分・河口他　「奄美大島の先史時代」『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻　1981
20）牛ノ浜修他　「あやまる第2貝塚」　笠利町文化財報告書№7　笠利町教育委員会　1984・3
21）8）に同じ
22）1）他
23）19）に同じ
24）高宮広衛他　「神野貝塚」『鹿大考古』2号　1984・4
25）高宮広衛　「暫定編年の第2次修正について」　沖縄国際大学文学部紀要社会科学編第11巻第1号　1983
26）10）に同じ
当真嗣一，上原静，「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより』第25号　沖縄県考古学会　1982・3
27）10）・11）他
28）1）に同じ
29）10）に同じ
30）18）に同じ
31）河口貞徳他　「宇宿貝塚」　鹿児島県笠利町文化財報告書　笠利町教育委員会　1979・3
32）30）に同じ
33）出口浩・繁昌正幸　「一湊松山遺跡」　上屋久町埋蔵文化財調査報告書　上屋久町教育委員会　1981・3
34）河口貞徳・上村俊雄他　「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　鹿児島県考古学会　1974
35）弥栄久志他　「長浜金久遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告書　鹿児島県教育委員会　1985・3
36）23）に同じ

図　　版

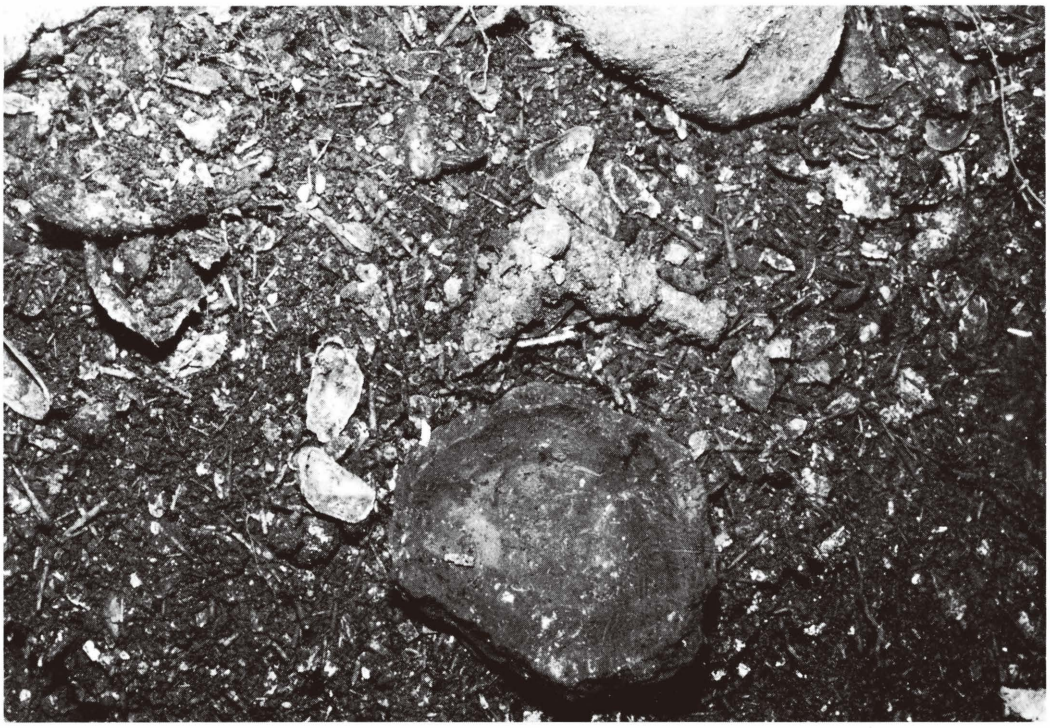
1. 第一貝塚より東を望む

2. B区調査風景

図版 2

1. Aトレンチ西を望む（発掘前）

2. 発 掘 風 景

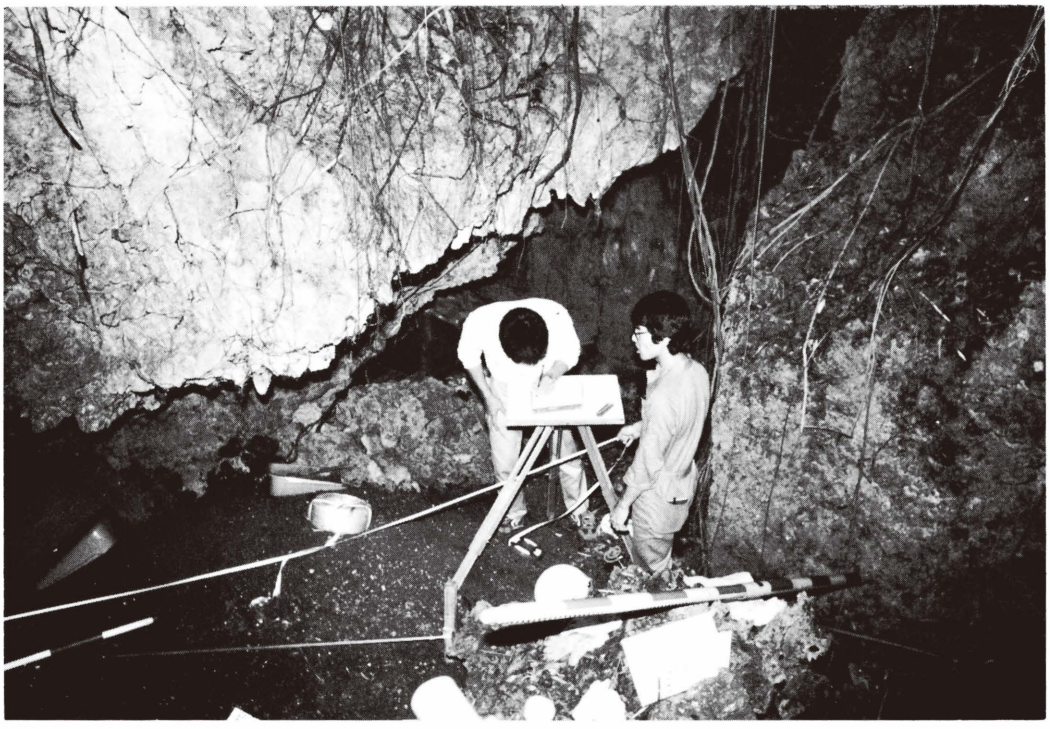


1.　A－0区 鉄製品出土状態

2.　A－0区 古銭（開元通宝）出土状態

図版 4

1. 第 1 洞穴発掘風景

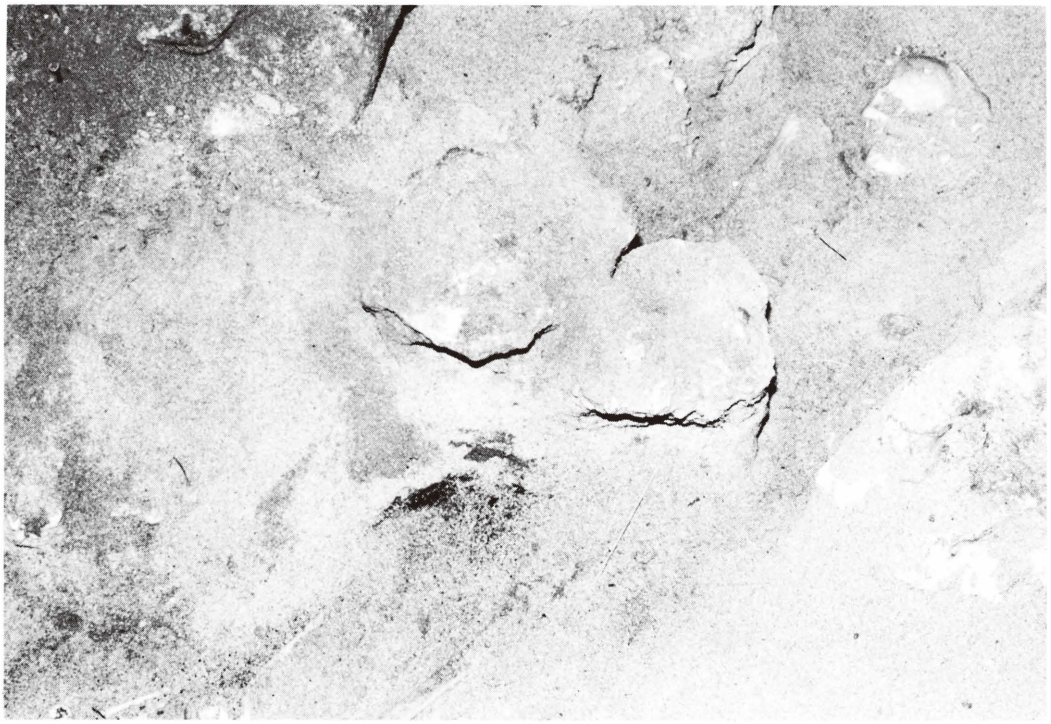


2. 第 1 洞穴測量中

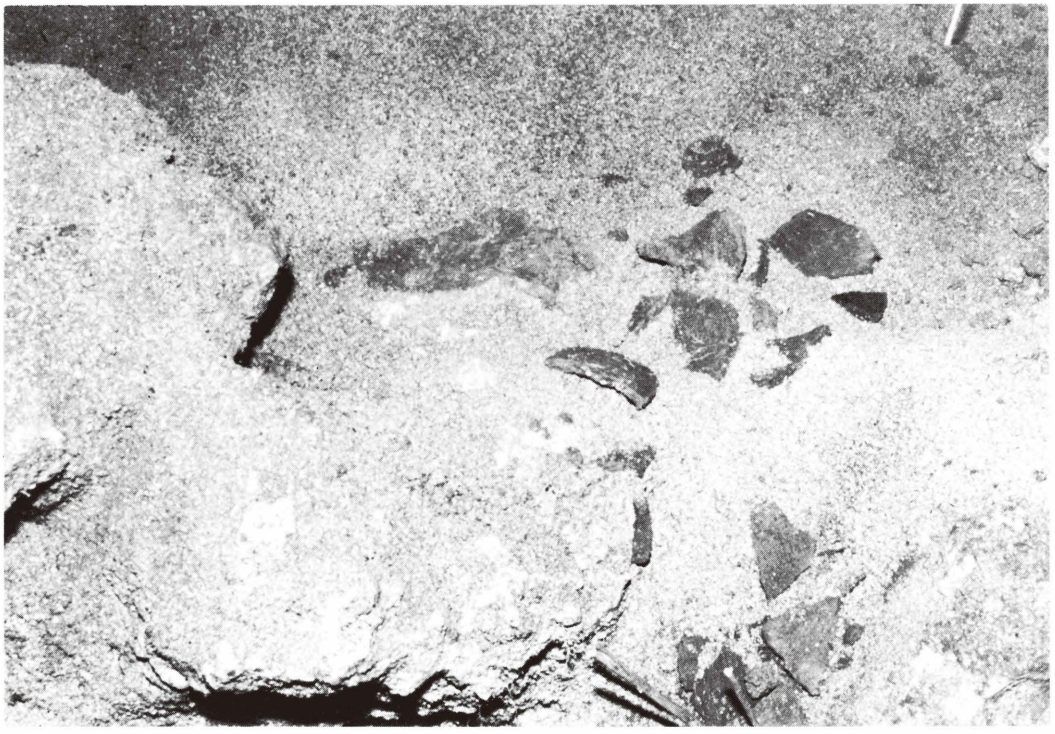
1.　第 1 洞穴兼久式土器出土状況

2.　第 1 洞穴石斧出土状態

図版 6



1. 蓋　　石

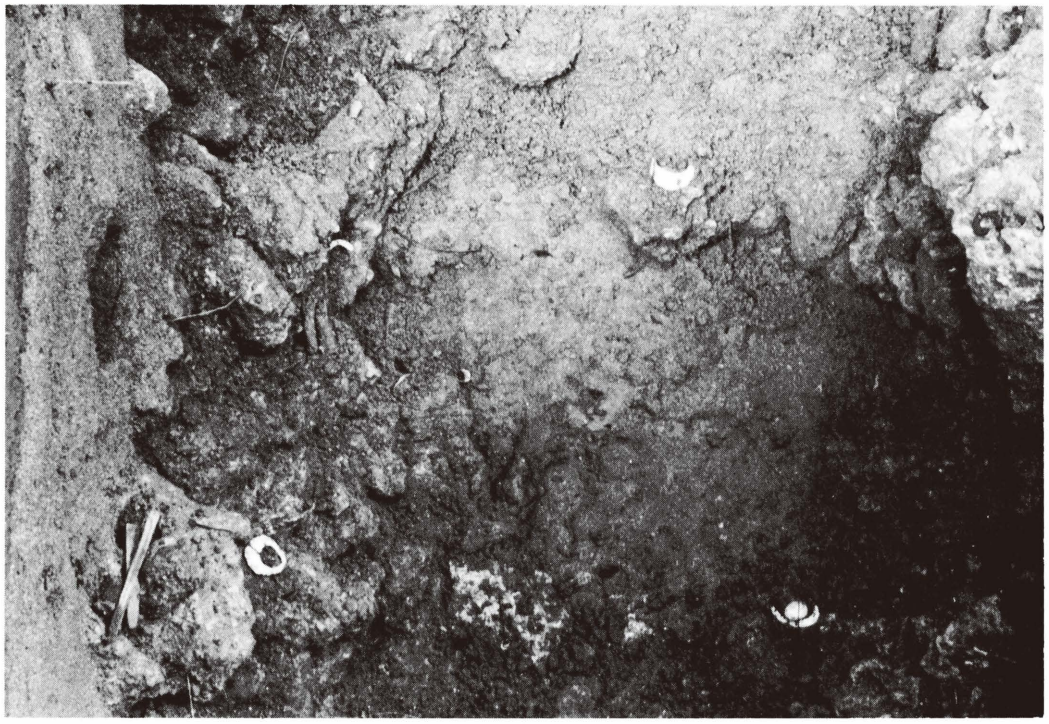


2. 蓋石と供献土器

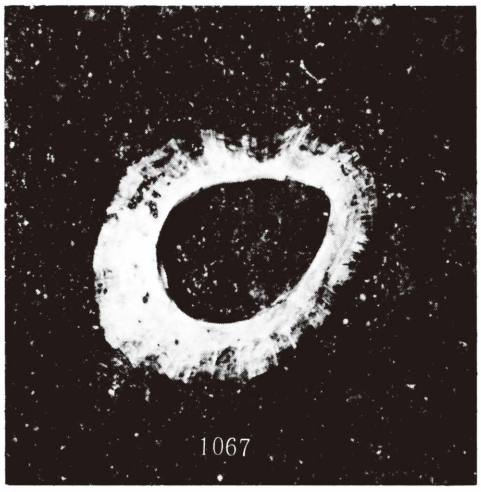
1. 箱式石棺墓

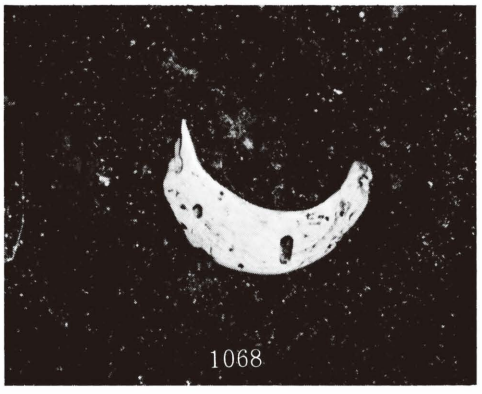
2. 供 献 土 器

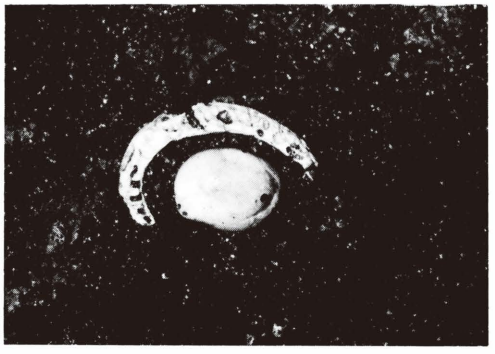
図版 8



1.　貝輪出土状況

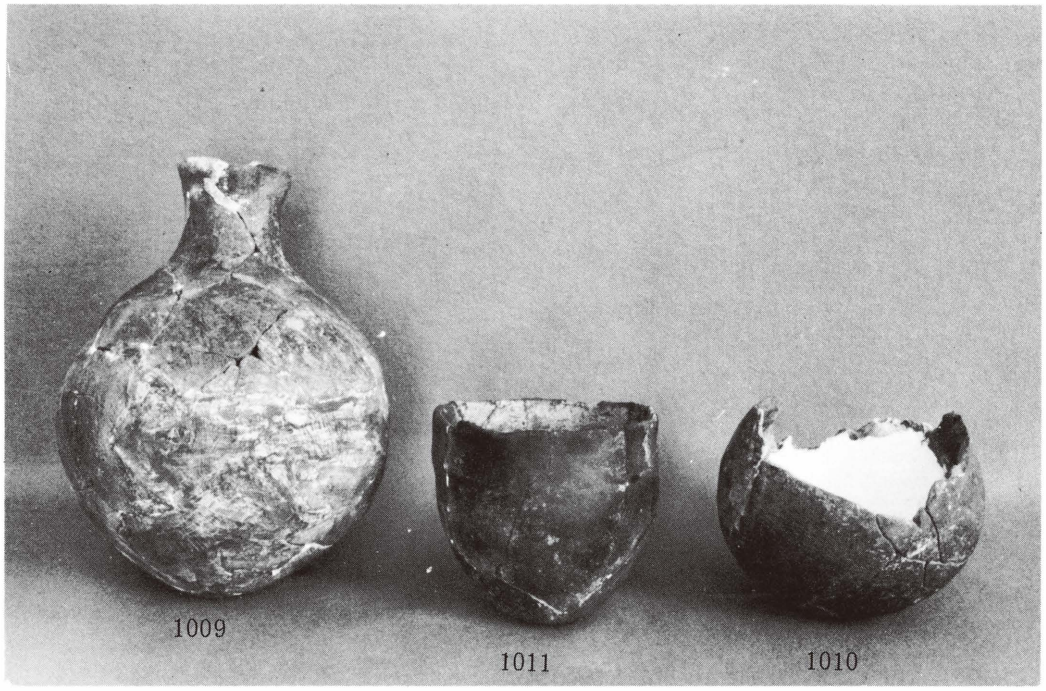




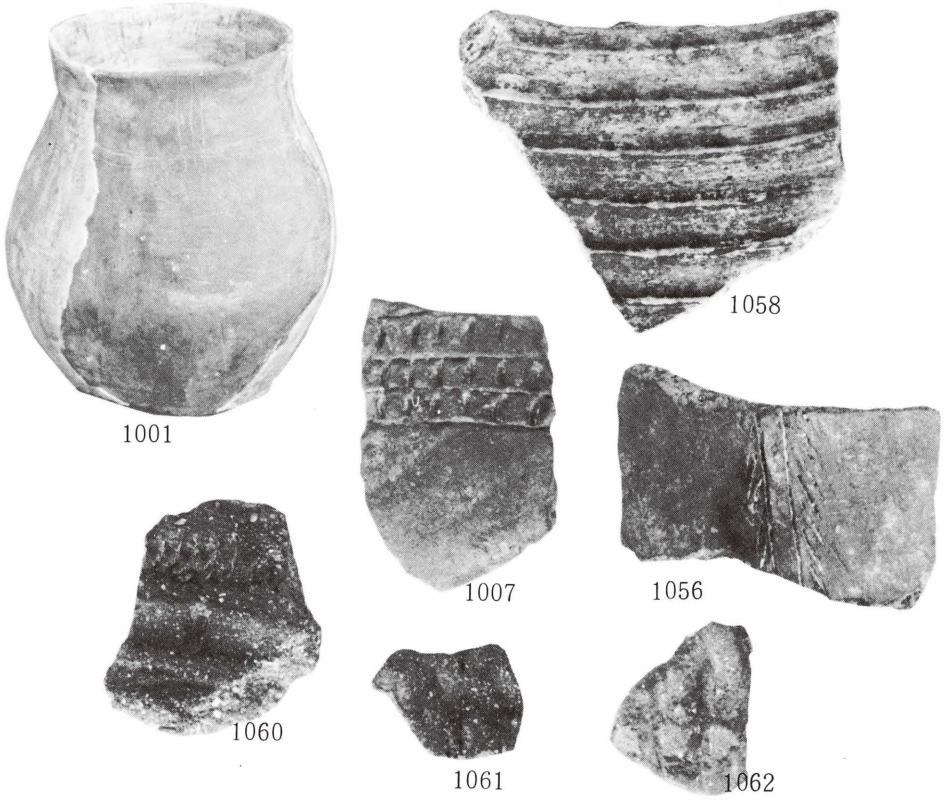


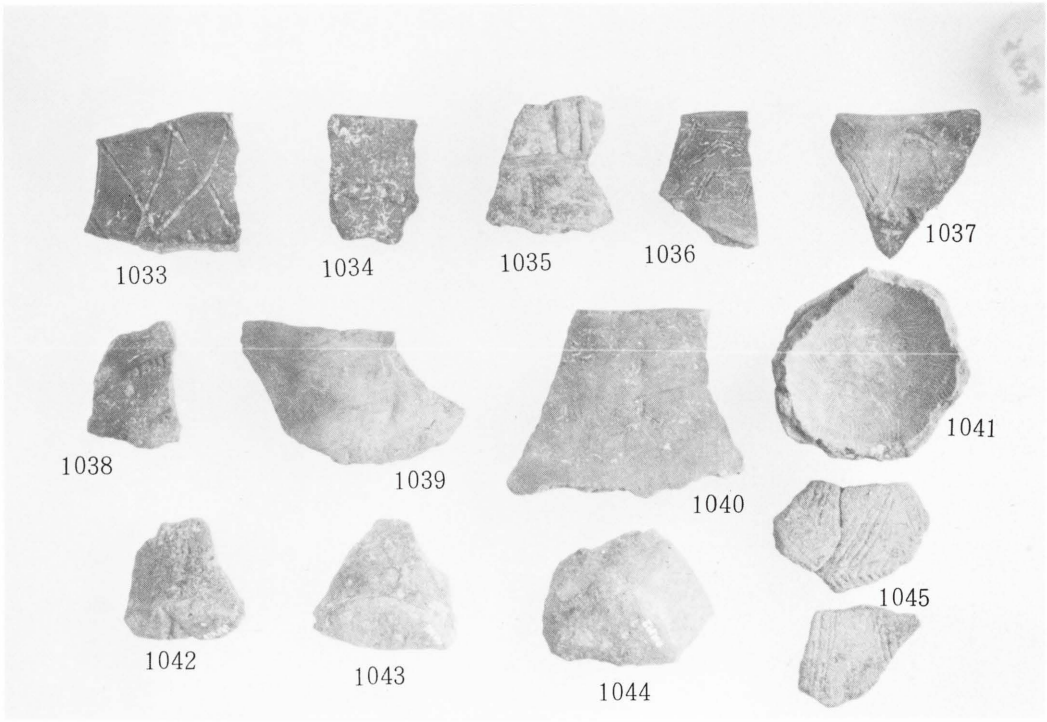
1.　貝輪（1064，1065）出土状況

図版 10

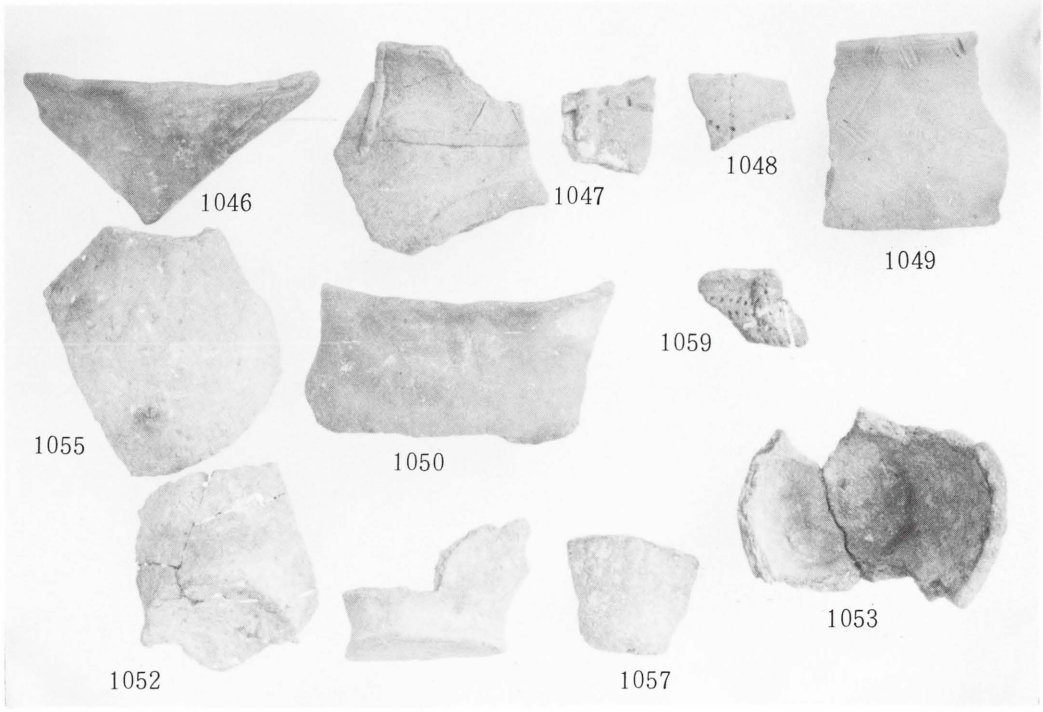


1. 供 献 土 器

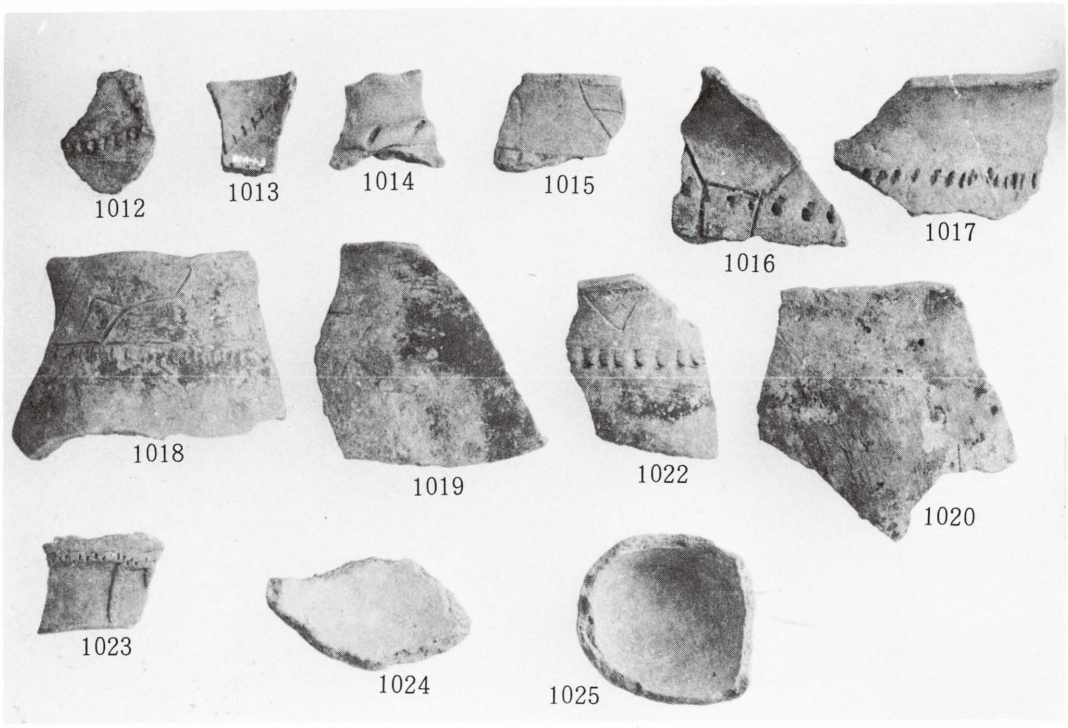




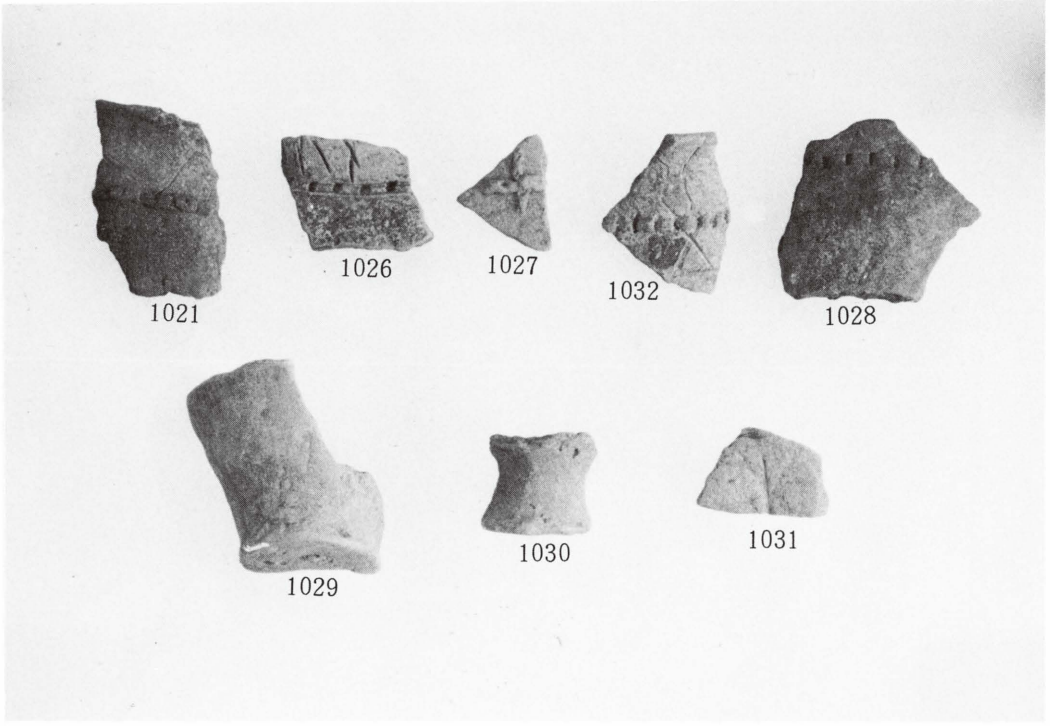
1.　A－0 区出土土器（兼久式・面縄前庭）



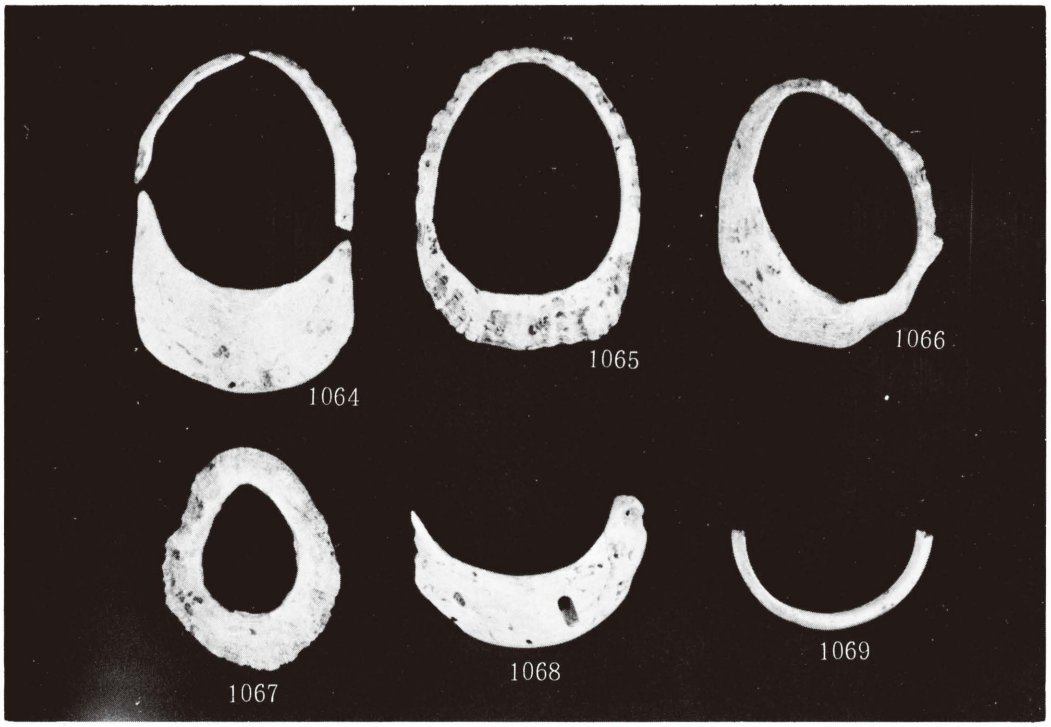
2.　C トレンチ出土土器（兼久式）



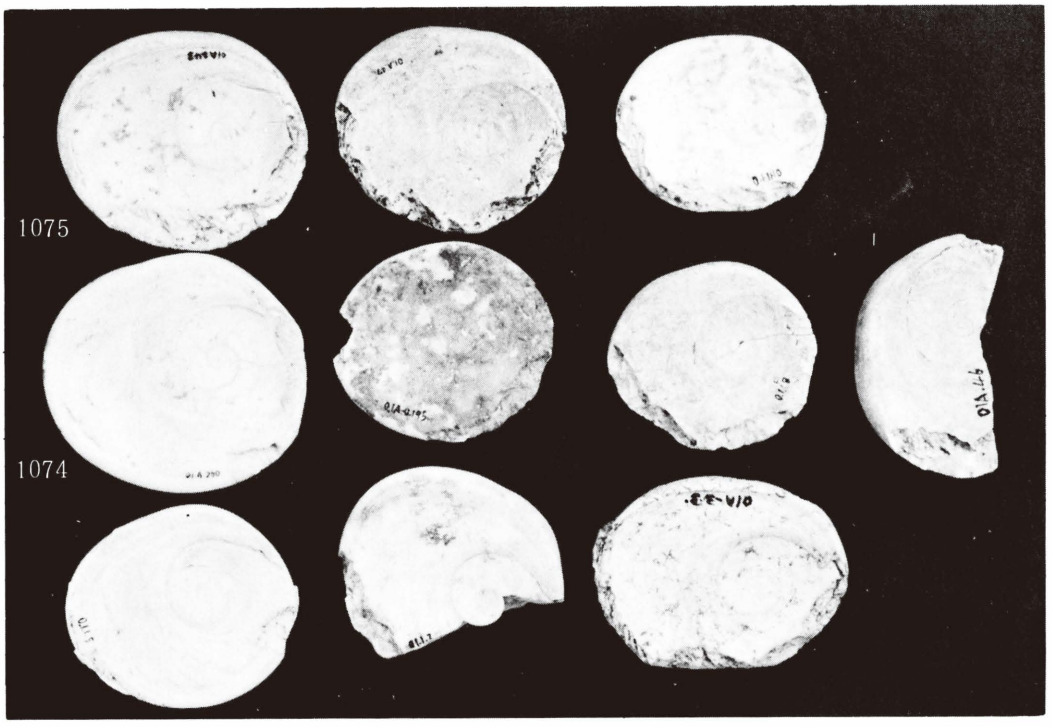
1.　A－3 区出土土器（兼久式）



2.　A－5 区出土土器（兼久式）

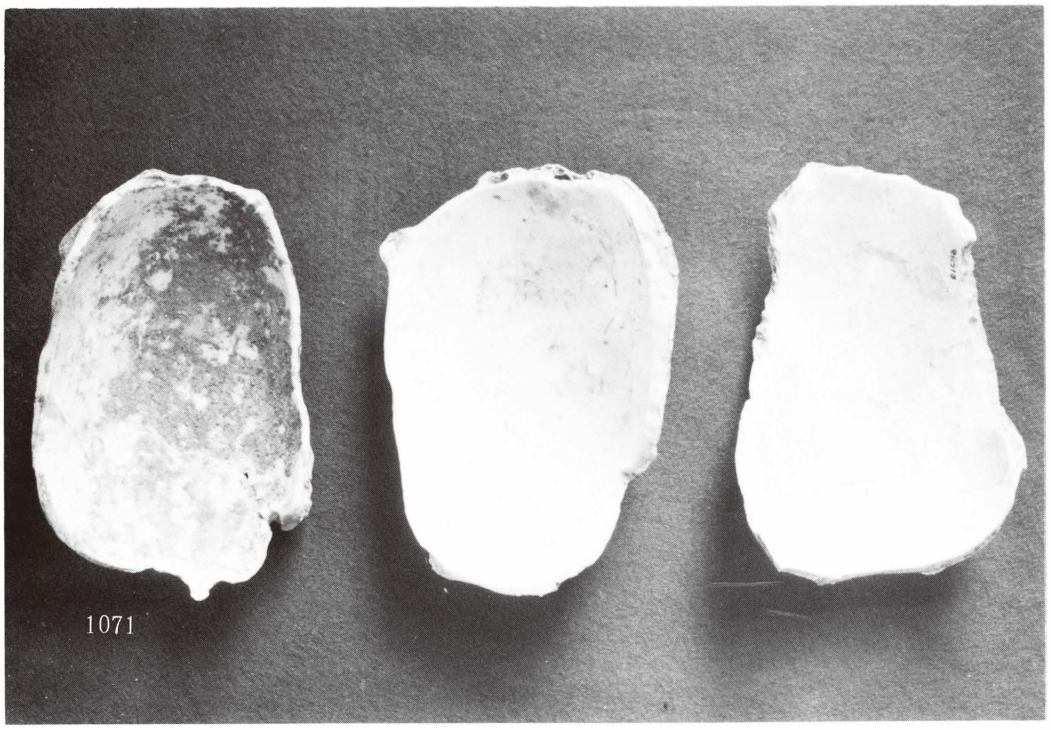


1. 貝　　輪



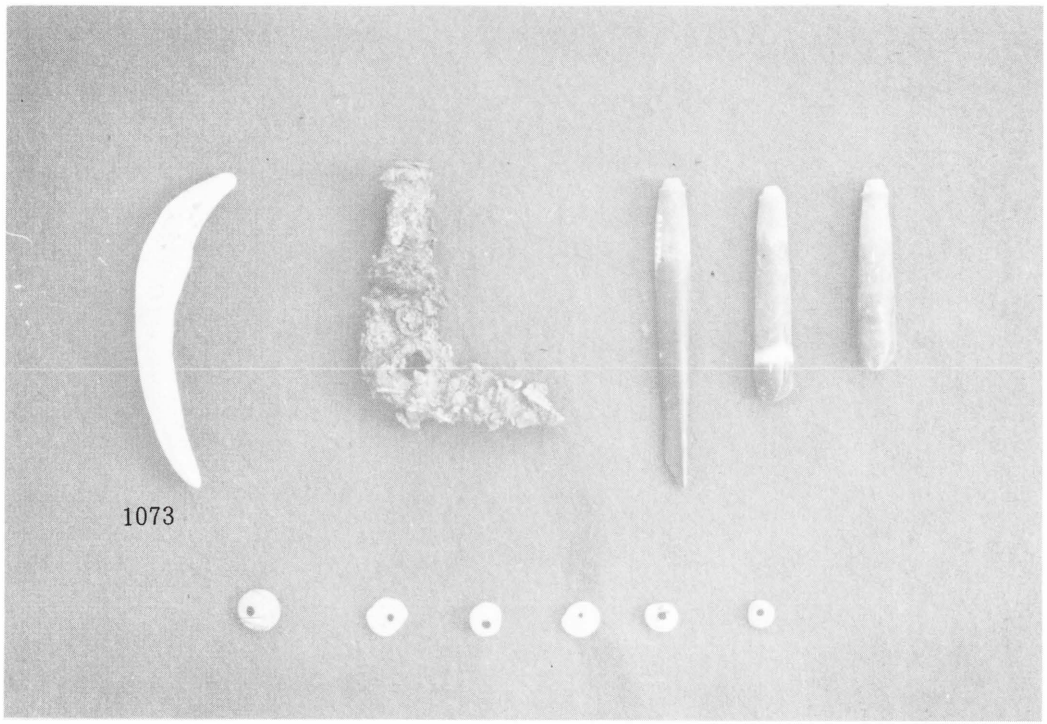
螺蓋製貝斧

図版 14

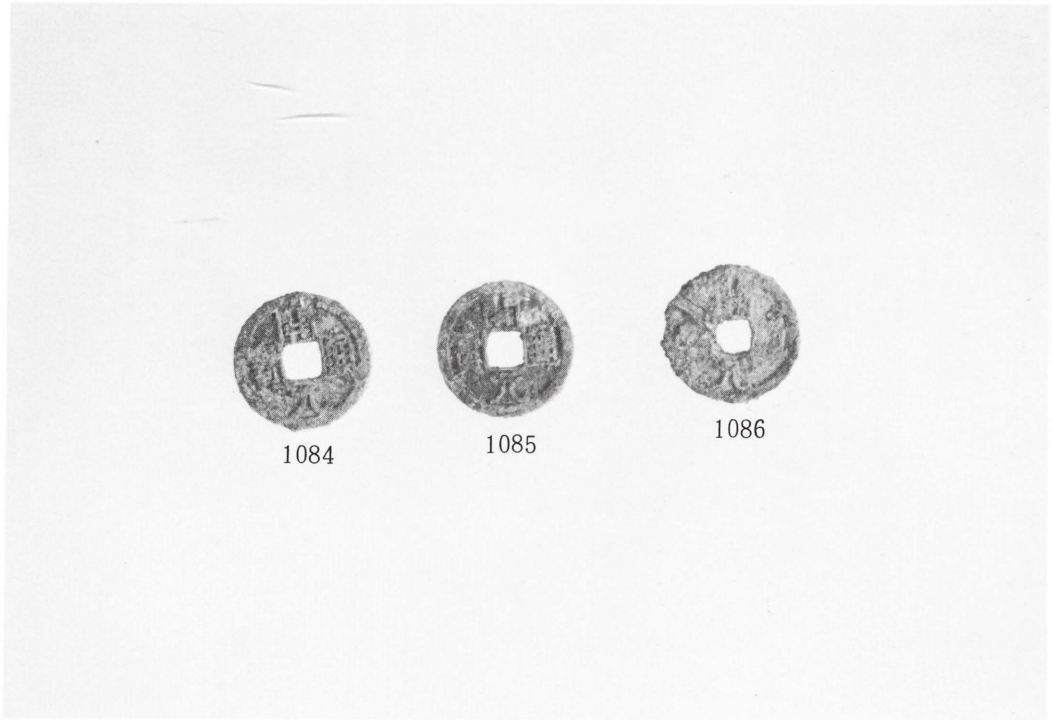


1. 貝 容 器

2. 貝　　匙

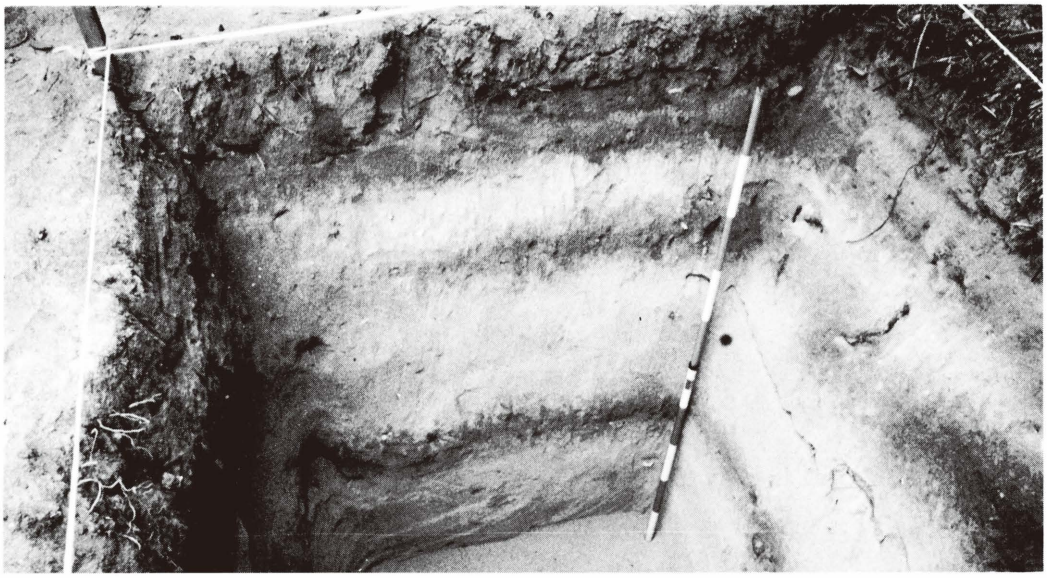


1. 貝製品，鉄製品，パイプウニ，有孔貝



2. 古銭「開元通宝」

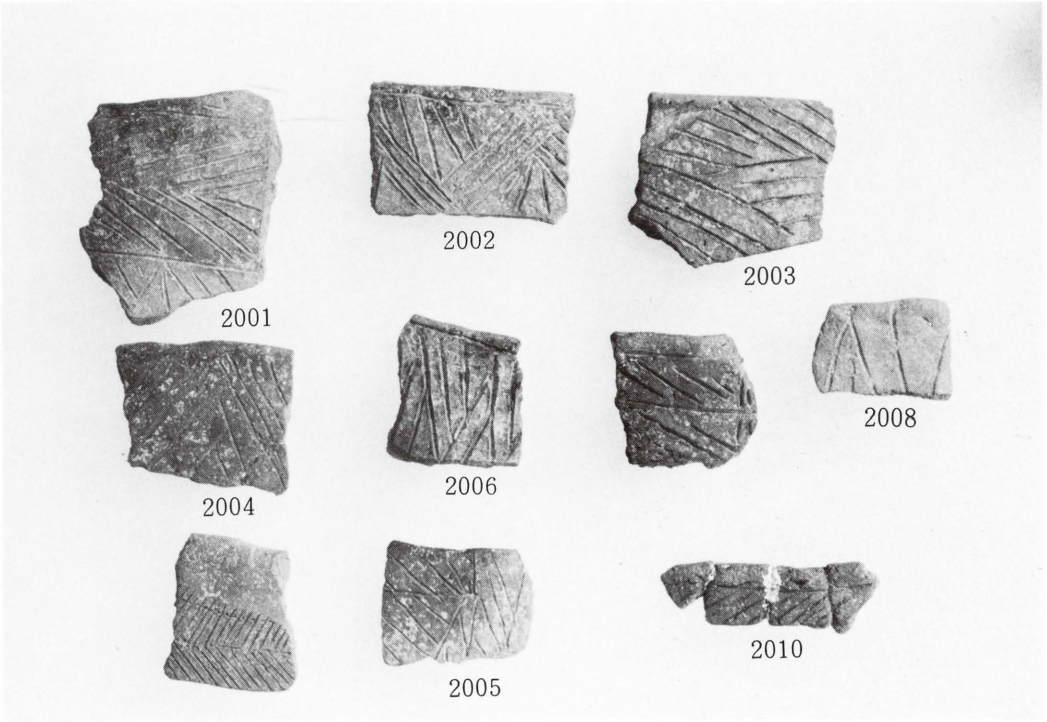
図版 16



1. A－4区断面

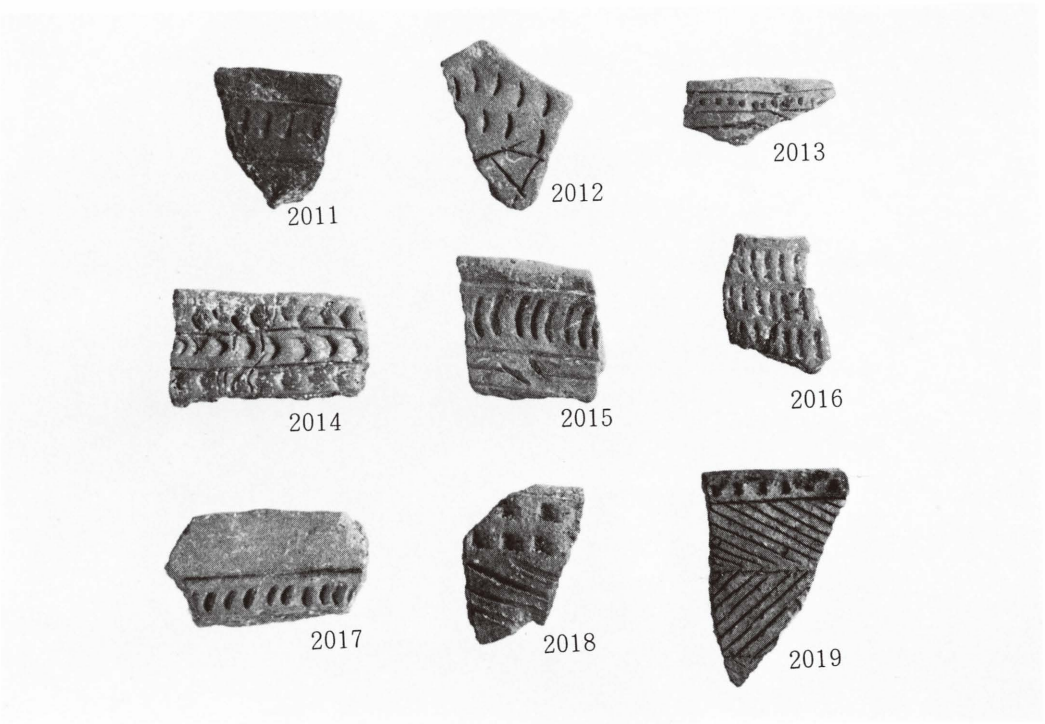
2. 住 居 址

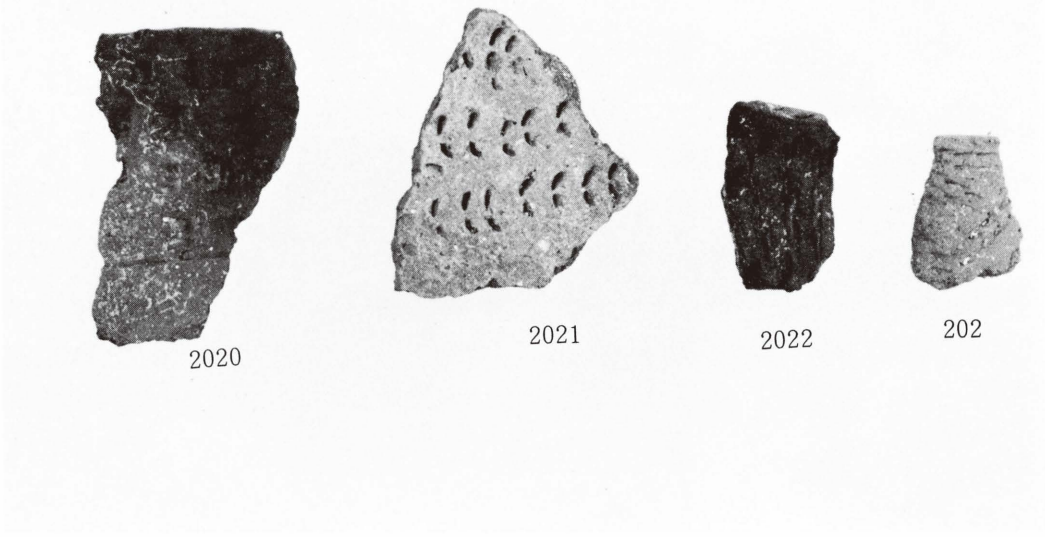
1. 住 居 址



2. 第 2 貝塚出土土器（嘉徳Ⅱ式）

図版 18





第 2 貝塚出土土器

1.　第 3 貝塚遠景（南から）

2.　第 3 貝塚近景（南から）

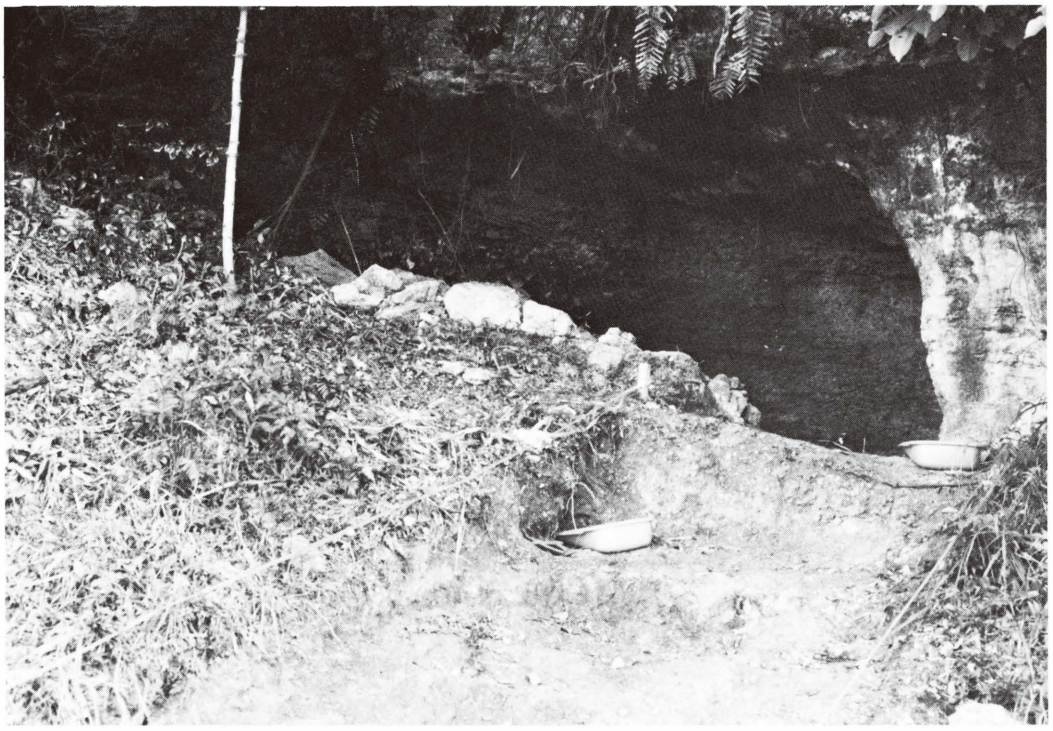
1. 第 3 貝塚近景（東から）

2. 作 業 風 景

1. 第 1 洞穴作業風景

2. A － 2 区作業風景

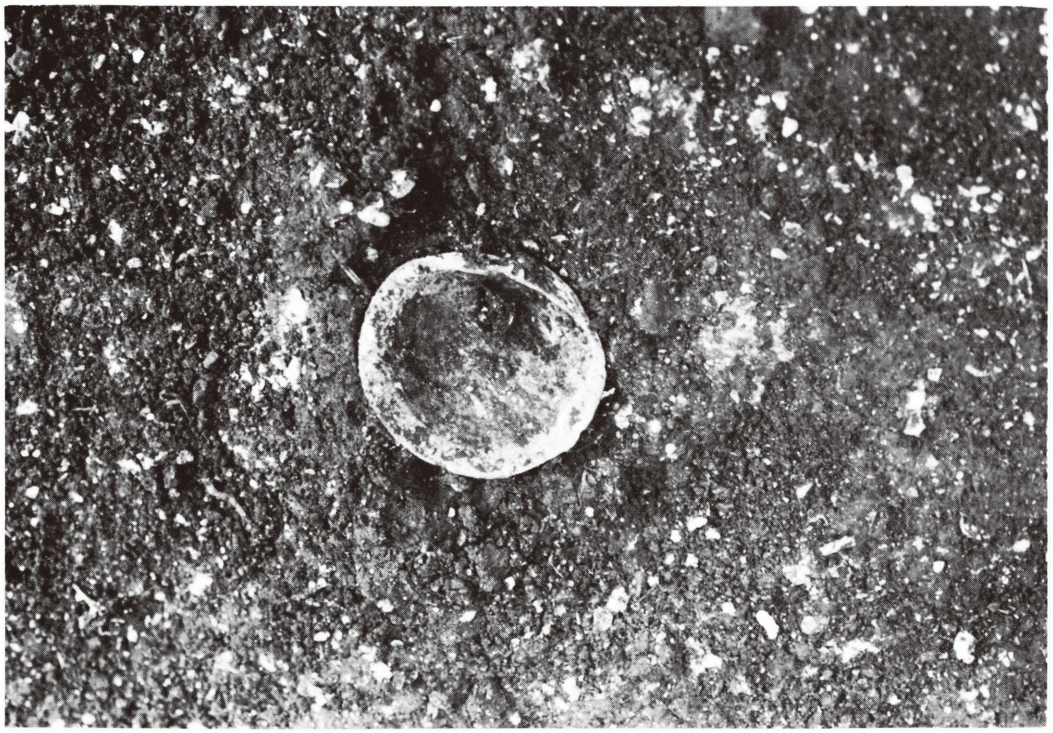
図版 22



第 3 貝塚東側洞穴

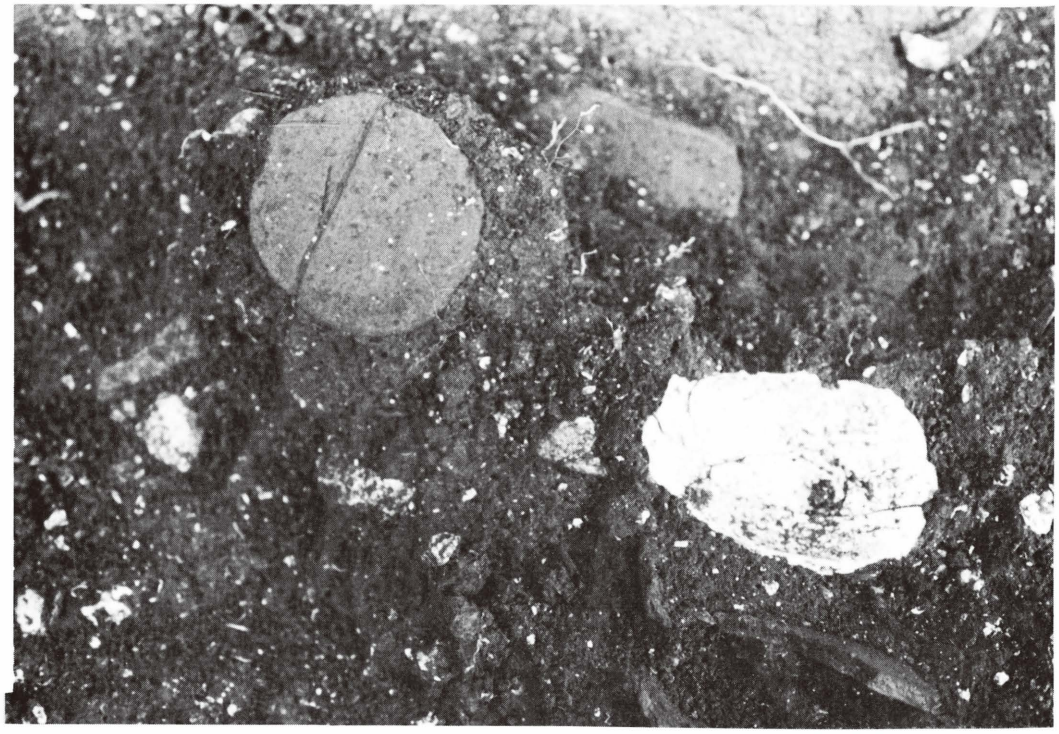
遺 物 出 土 状 況

図版 24



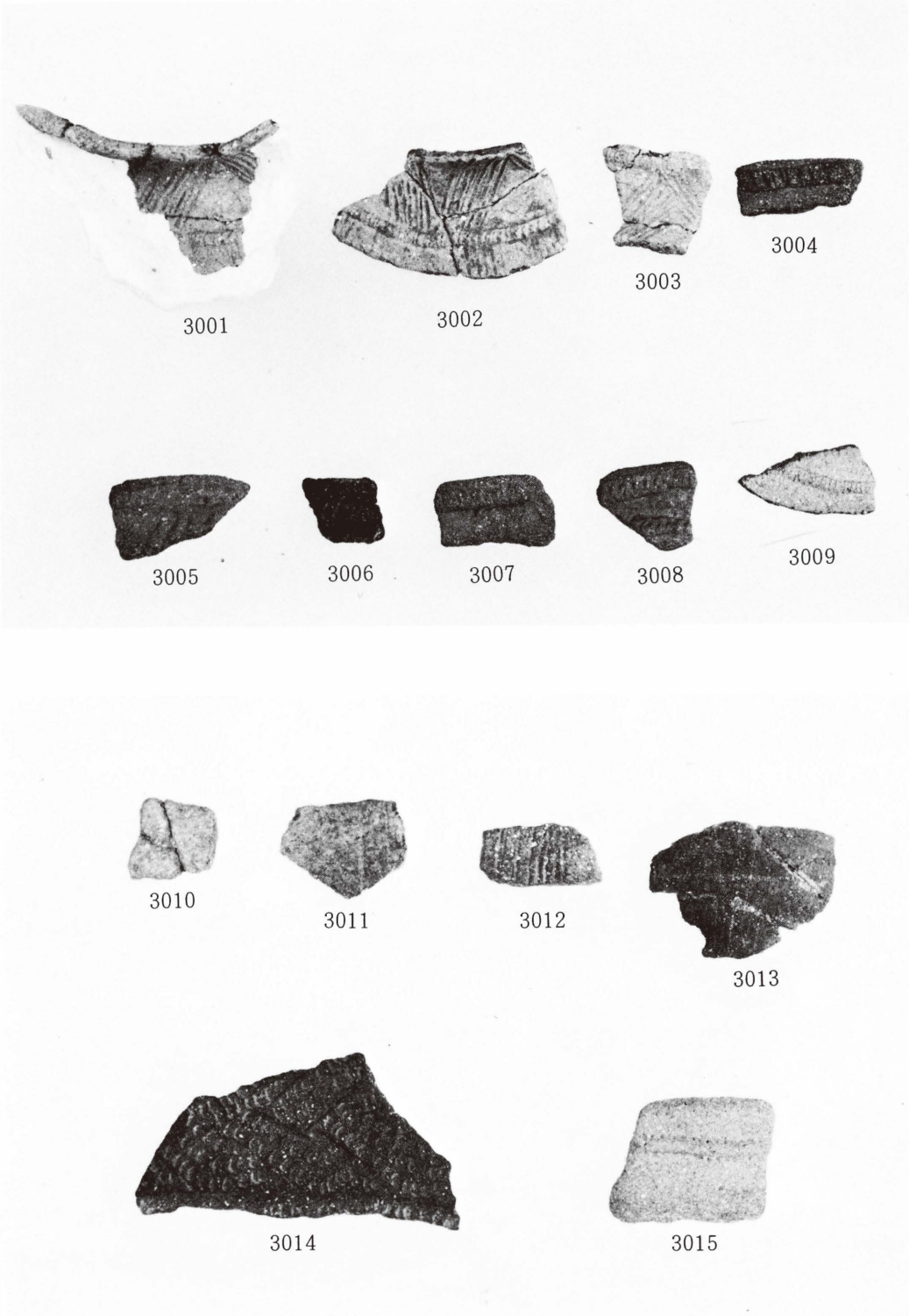
穿 孔 貝 製 品

1. 貝匙出土状況

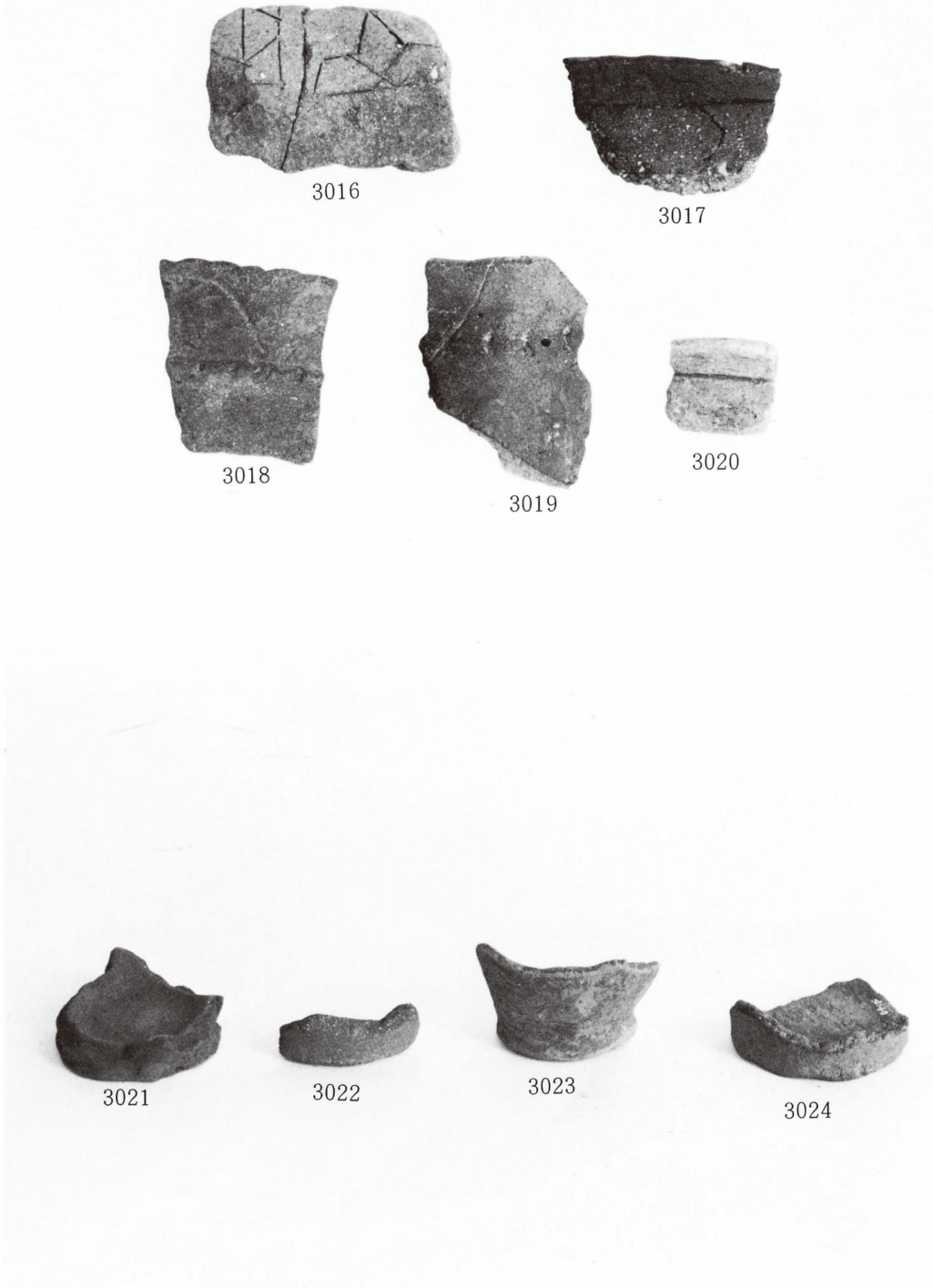


2. 貝容器兼久式土器底部

図版 26

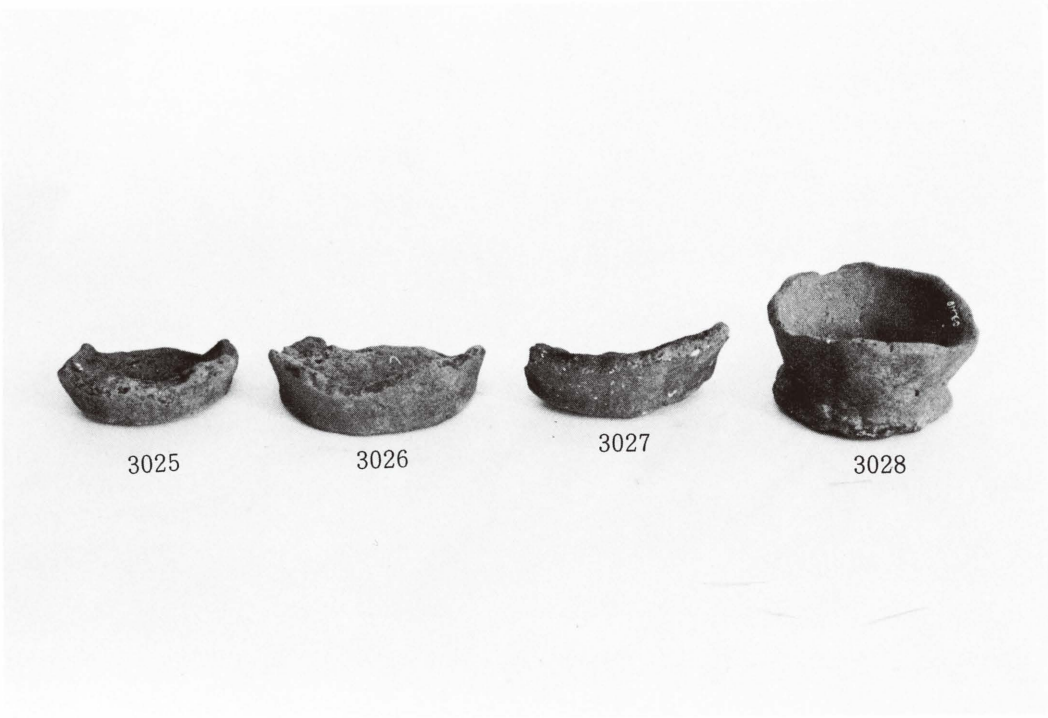


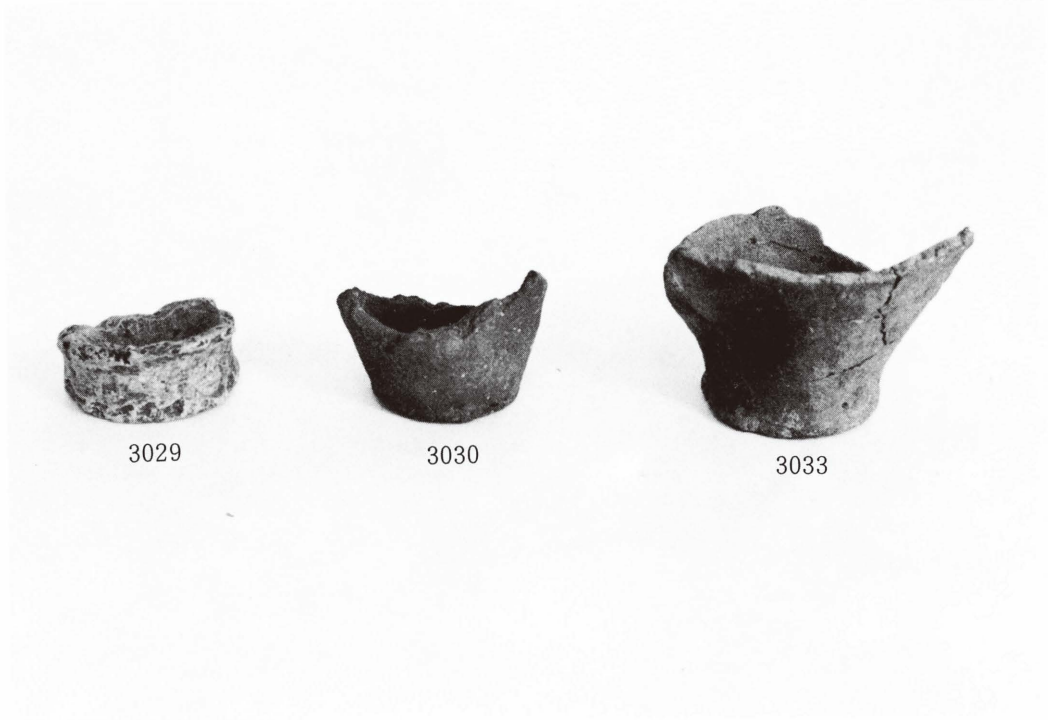
第 3 貝塚 A － 1 区出土土器



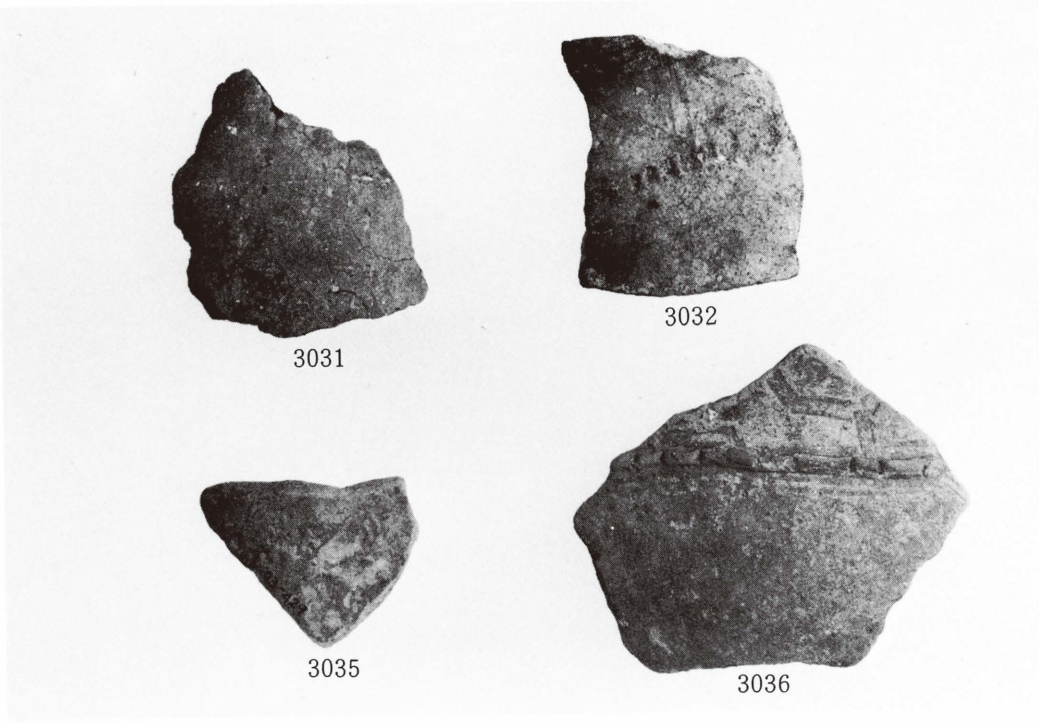
第 3 貝塚 A － 2 区出土土器

図版 28



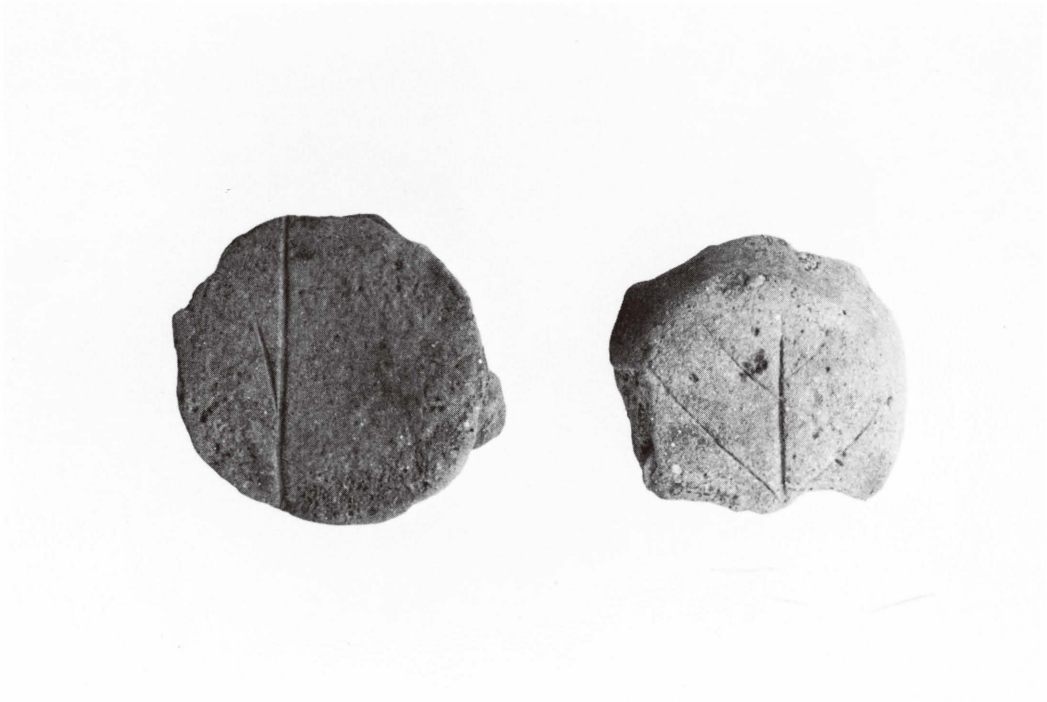


第 3 貝塚 A － 2 区出土土器

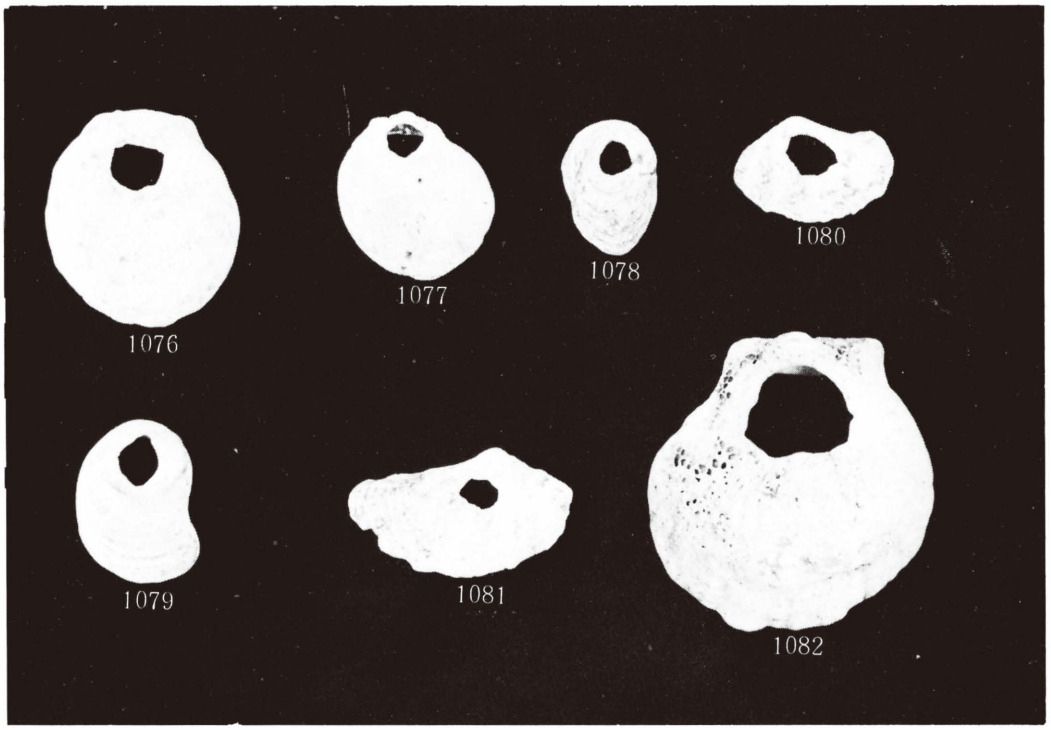


第 3 貝塚 A － 4 区出土土器

図版 30



1. 兼久式土器木葉痕底部



2. 第 1 貝塚穿孔貝

3039

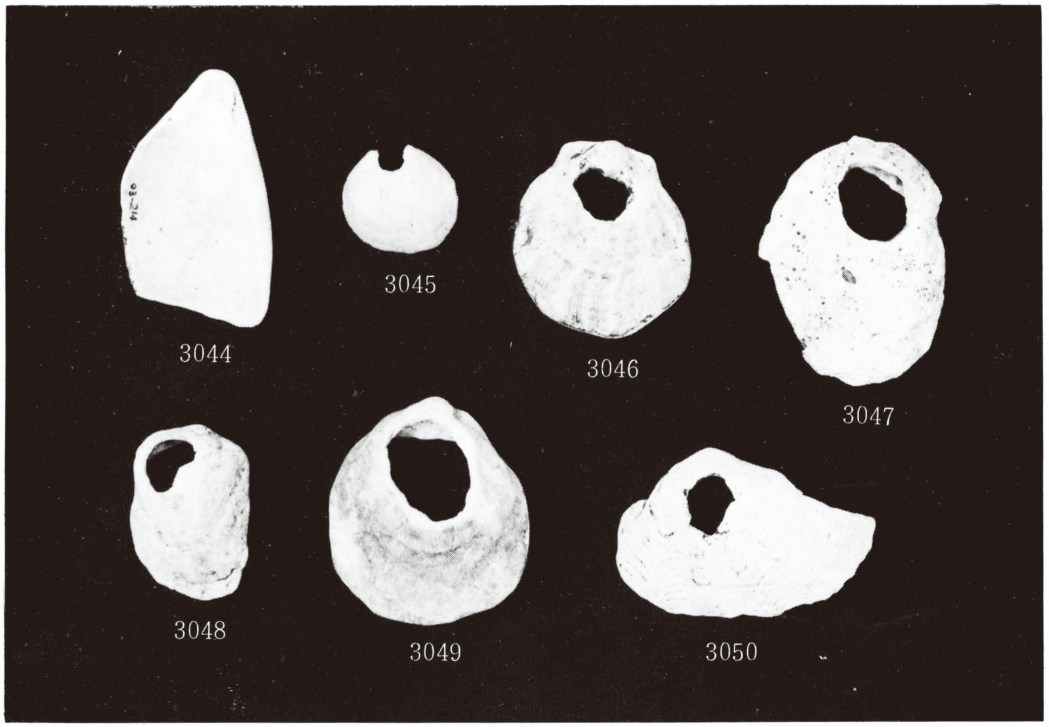
3040

3042

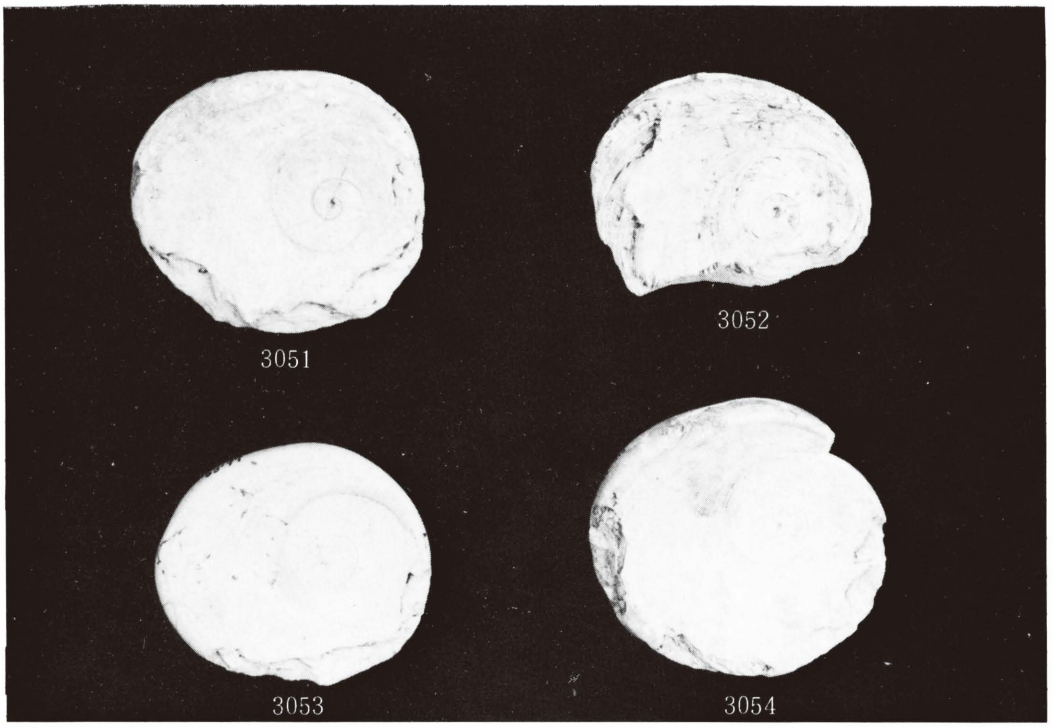
3041

第 3 貝塚出土石器

図版 32



1. 穿孔貝製品



2. 螺蓋製貝斧

1. 第 4 貝塚遠景（第 3 貝塚　　トレンチより）

第 4 貝塚風景　　2. 近景（南西より）

図版 34

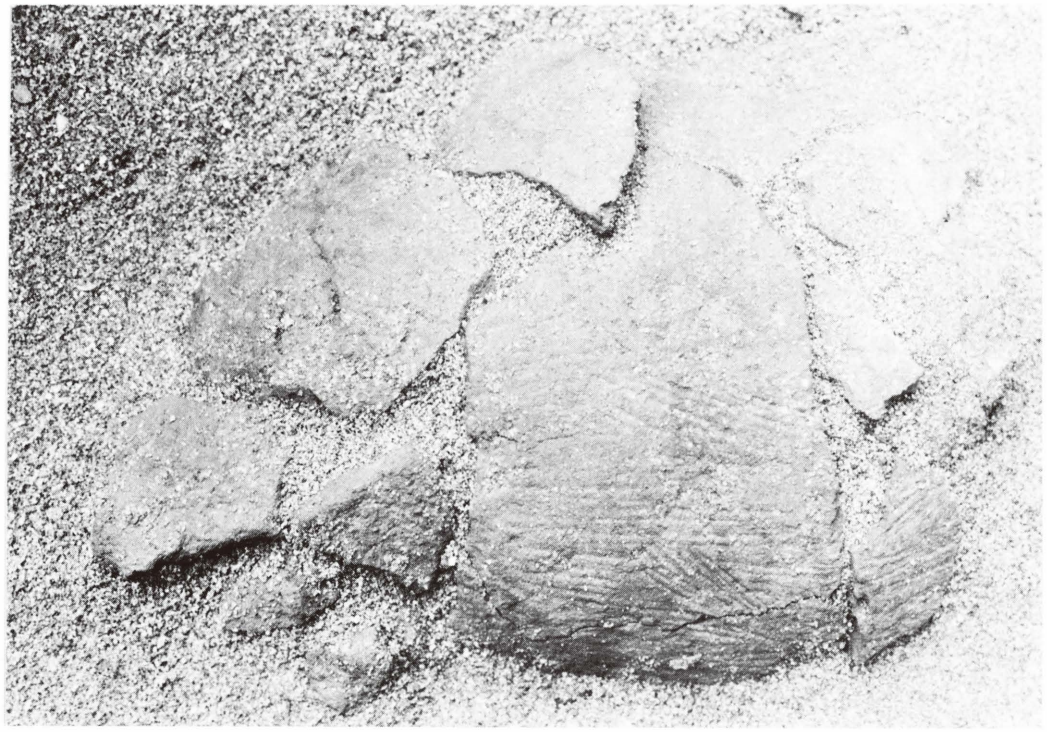
第 4 貝塚発掘風景　　A－2・3 トレンチ

第 4 貝塚東洞部土層　　B－3 トレンチ土層

第 4 貝塚西洞部土層　　1.　A－0 トレンチ土層

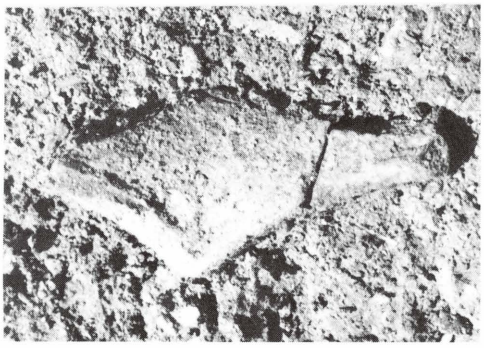
第 4 貝塚西洞部土層　　2.　A－2・3 トレンチ土層

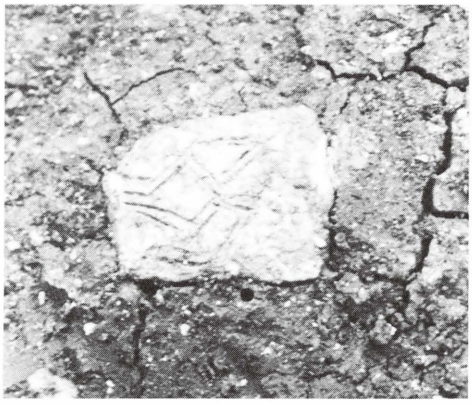
図版 36

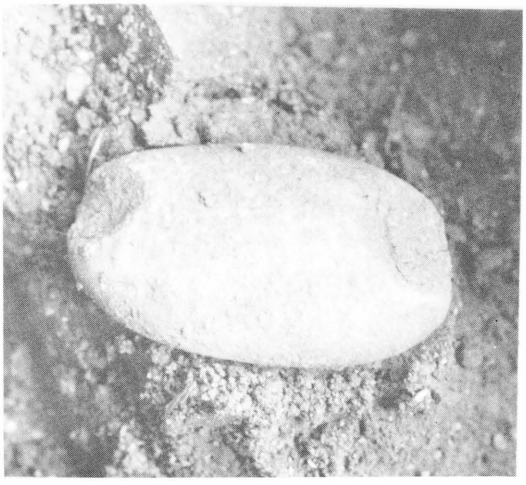


第 4 貝塚遺物出土状況　　東洞部（Ａ－２・３トレンチ）

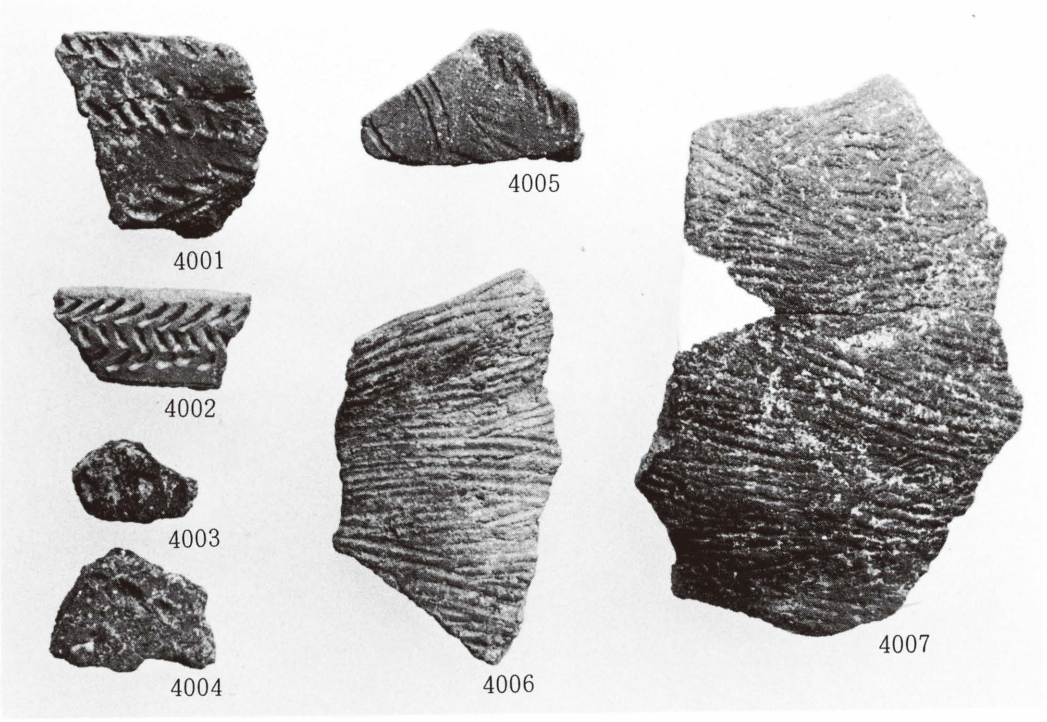
第 4 貝塚遺物出土状況　　西洞部（Ａ－２・３トレンチ）

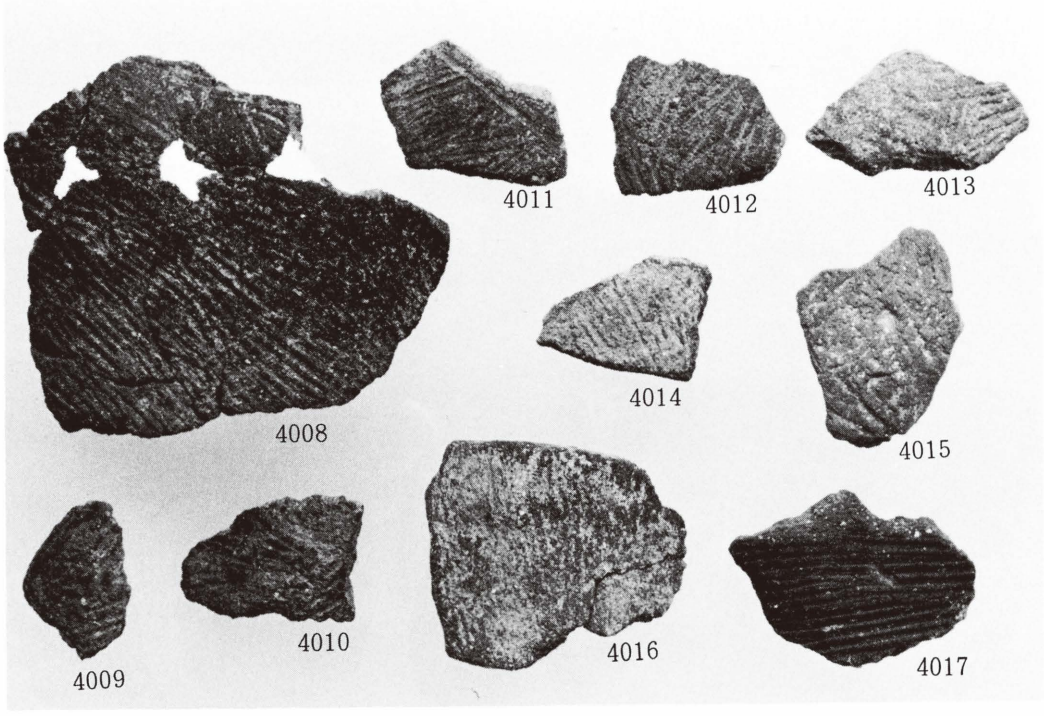




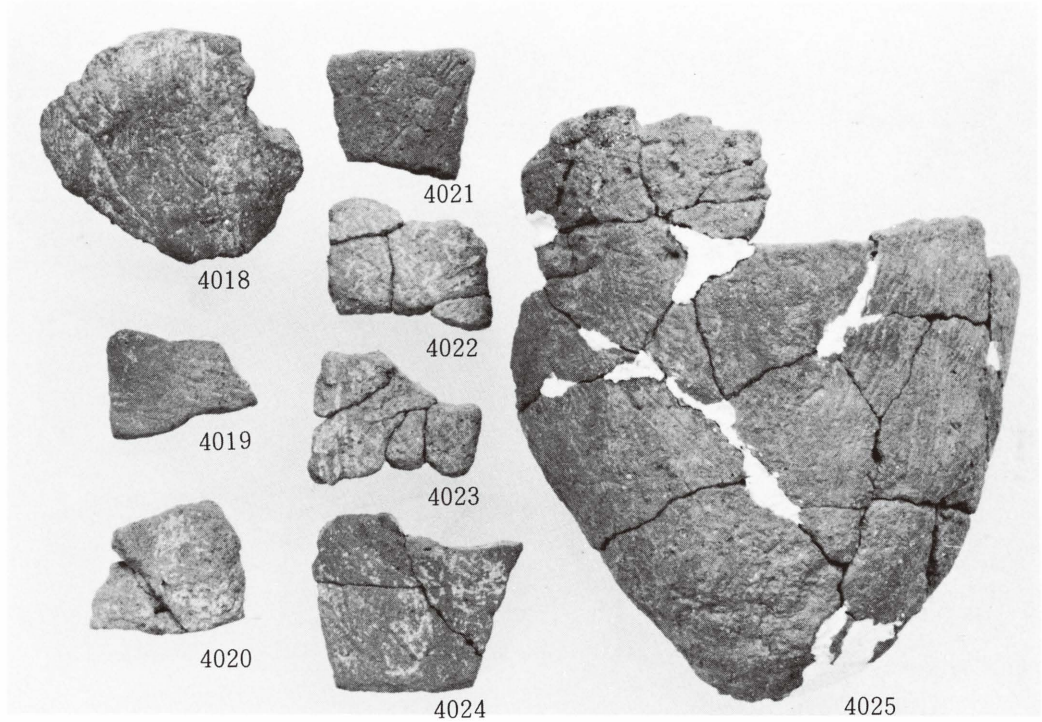


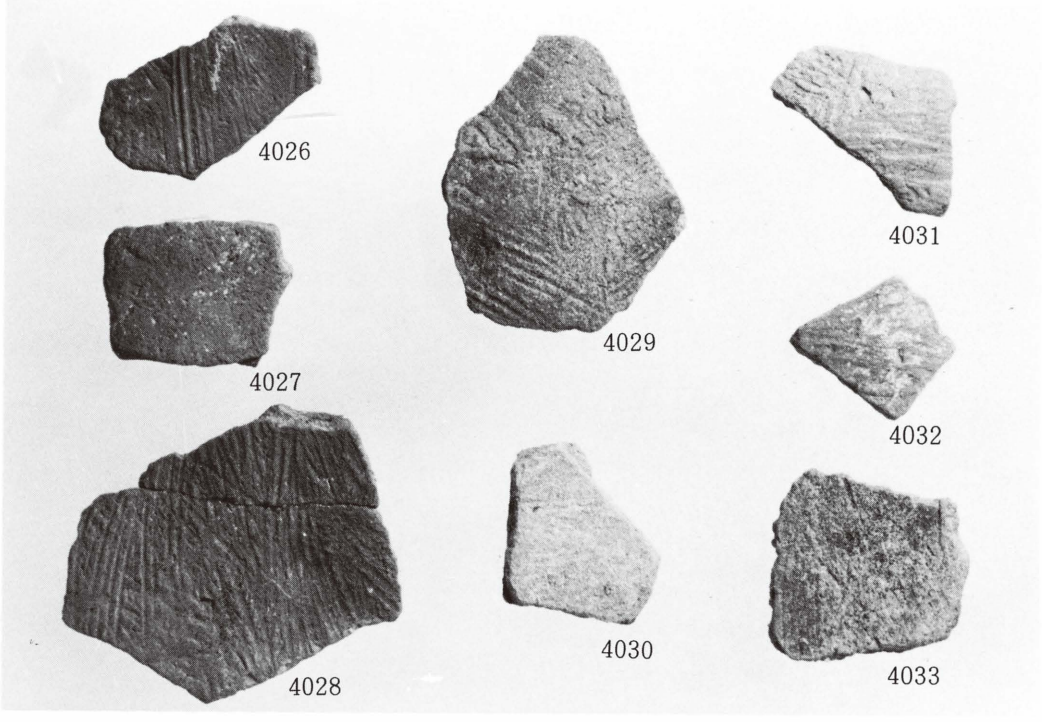
第 4 貝塚西洞部遺物出土状況





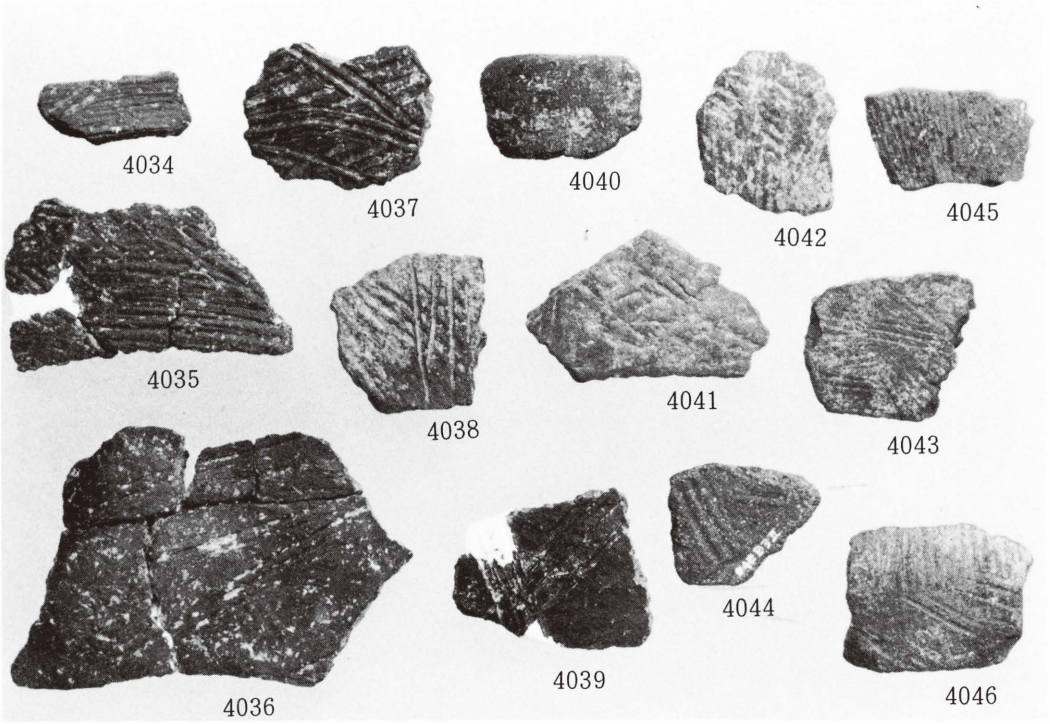
第 4 貝塚東洞部出土遺物(1)

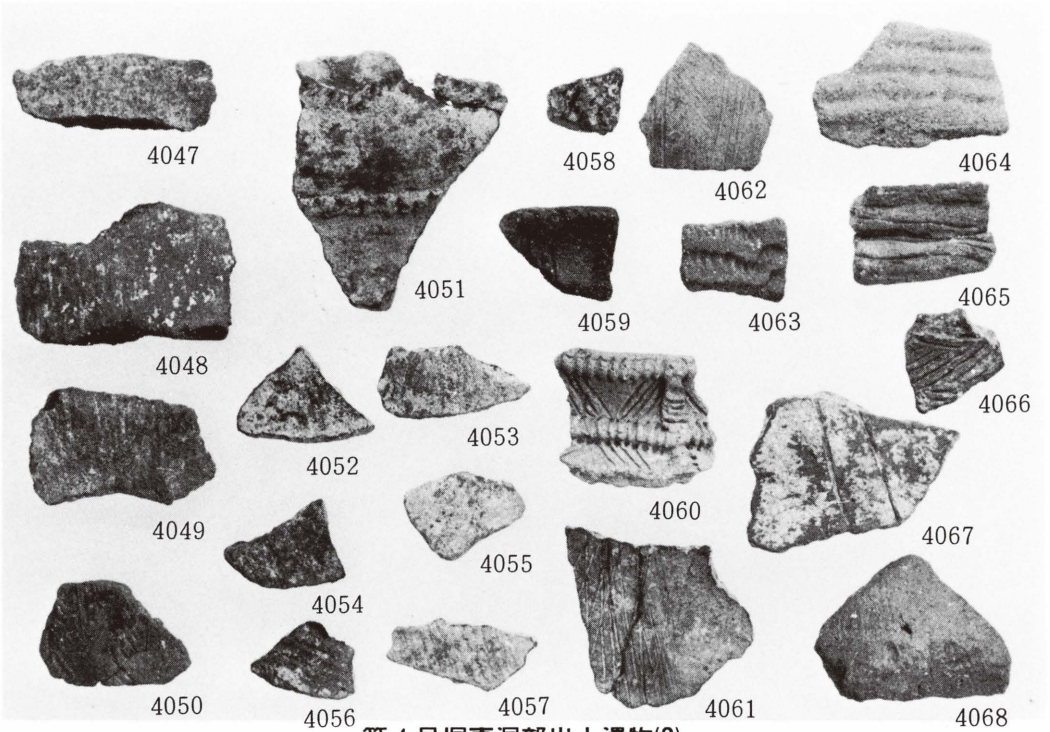




第 4 貝塚東洞部出土遺物(2)

図版 40

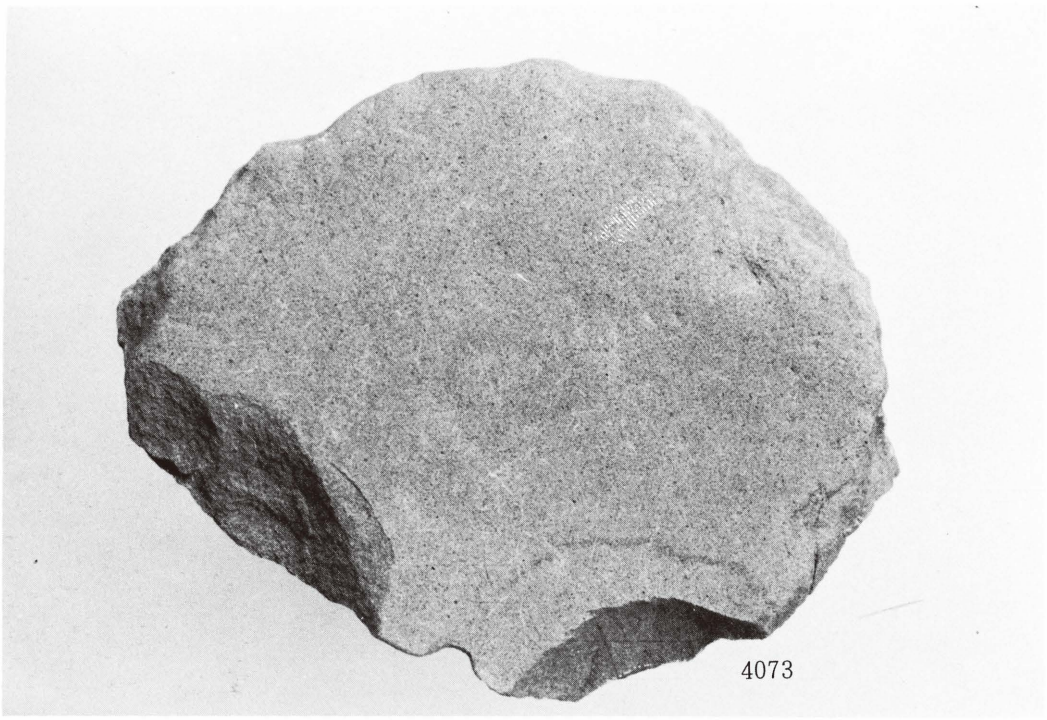


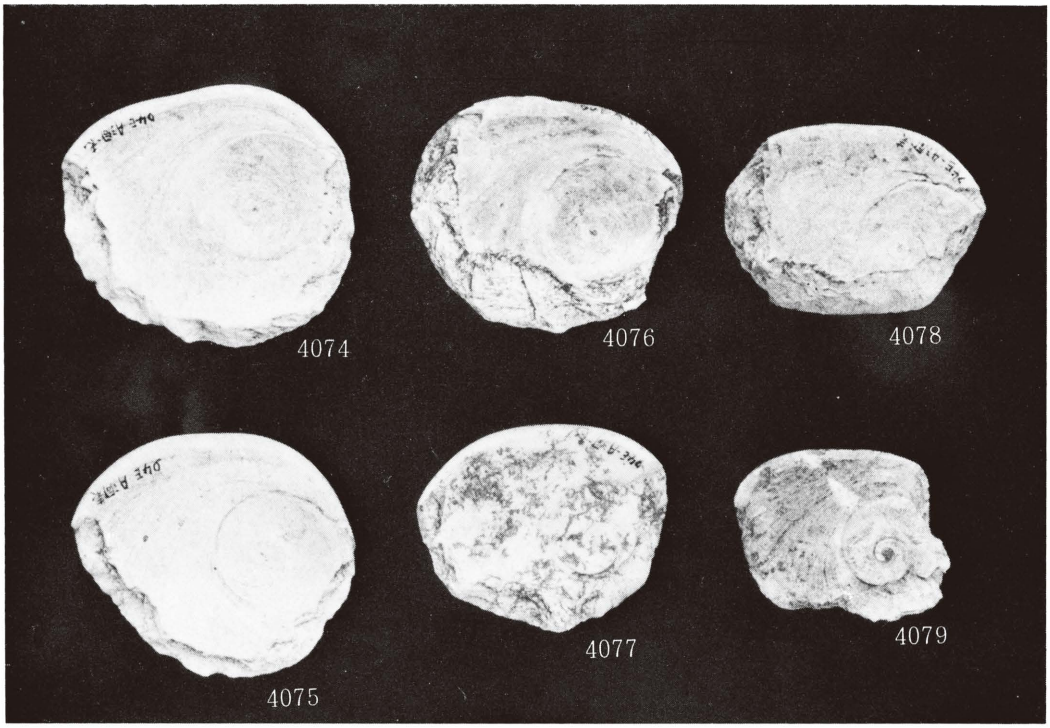


第 4 貝塚東洞部出土遺物(3)

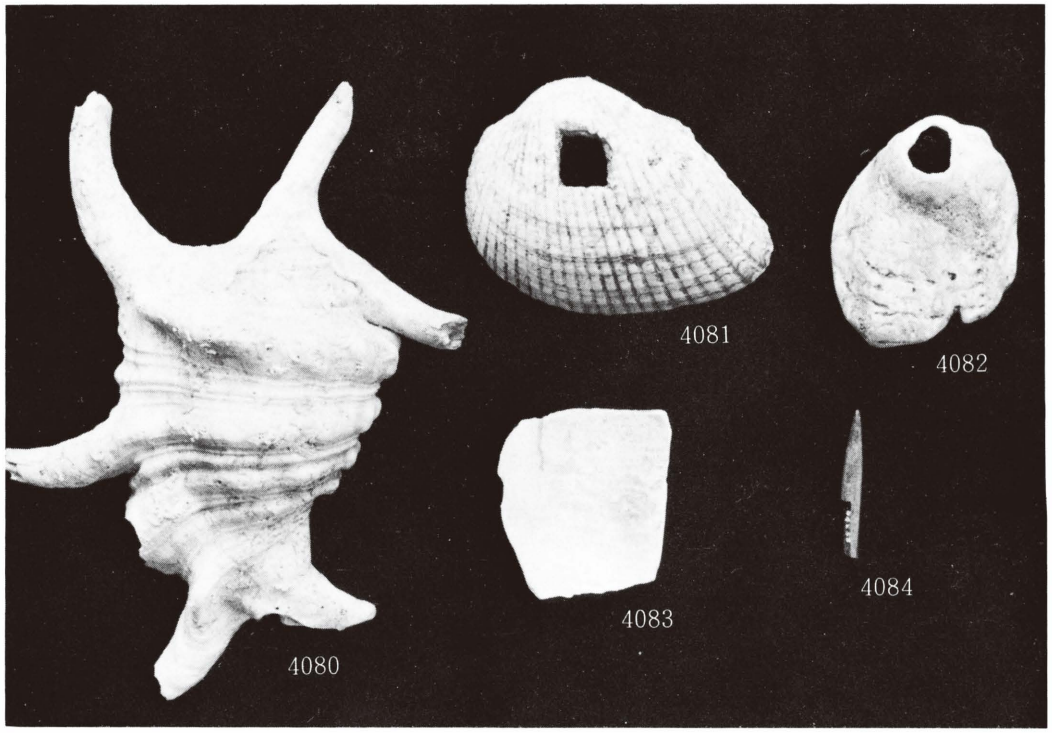
第 4 貝塚東洞部出土遺物(4)

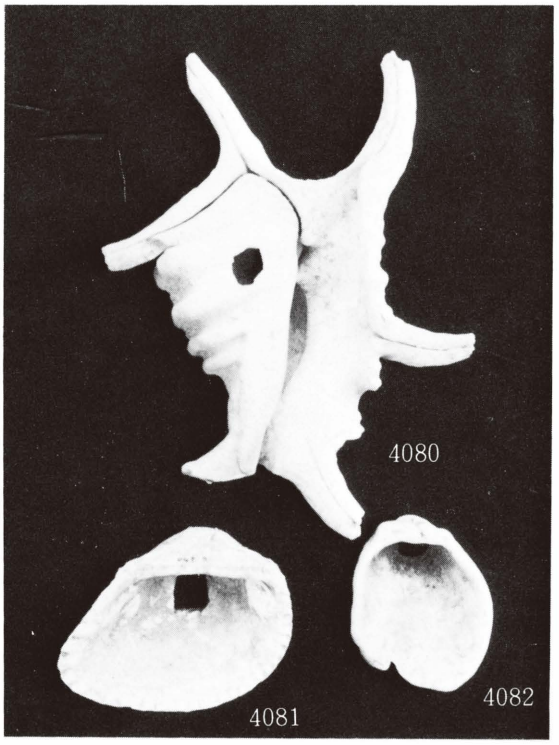
図版 42





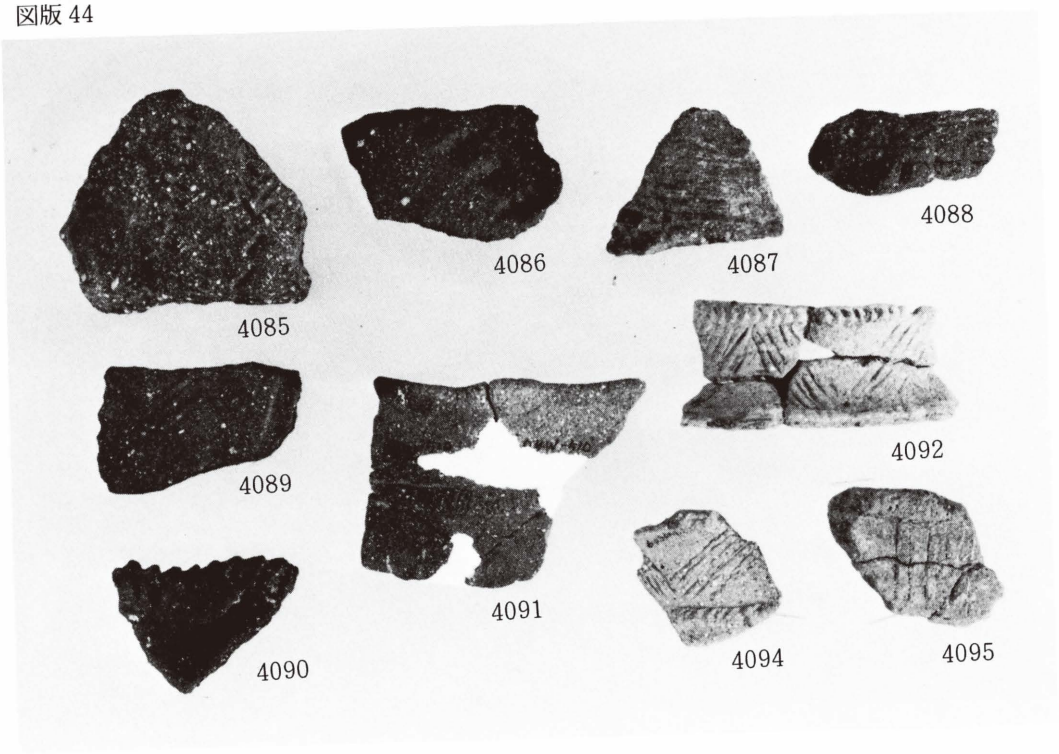
第 4 貝塚東洞部出土遺物(5)

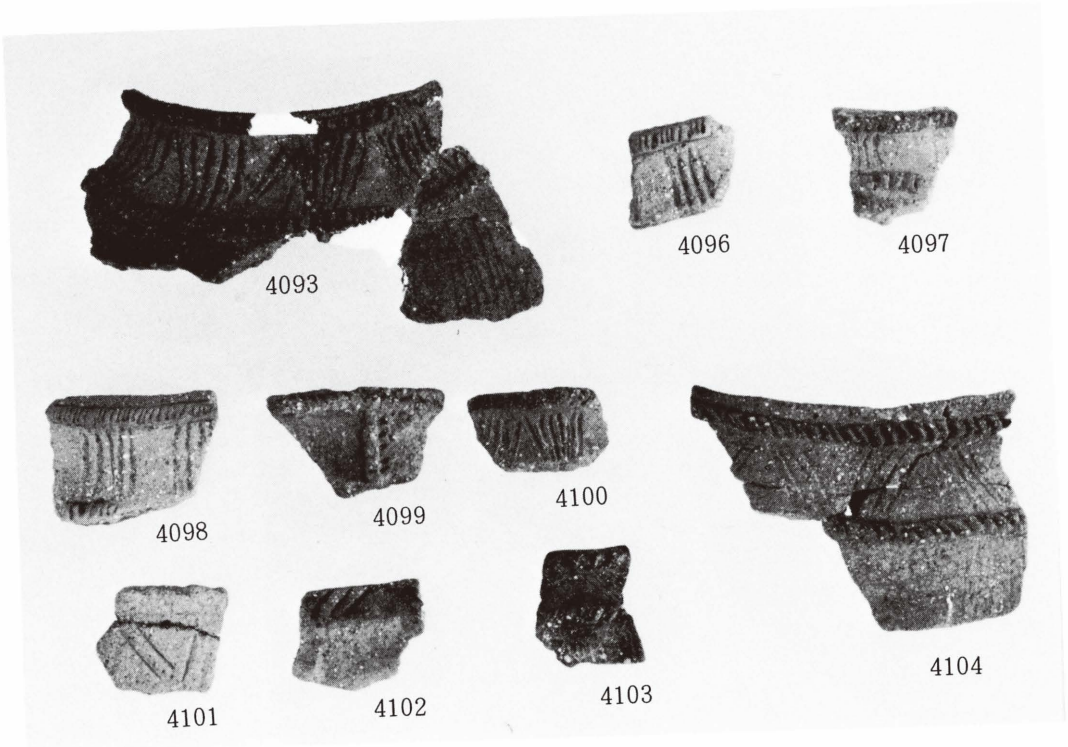




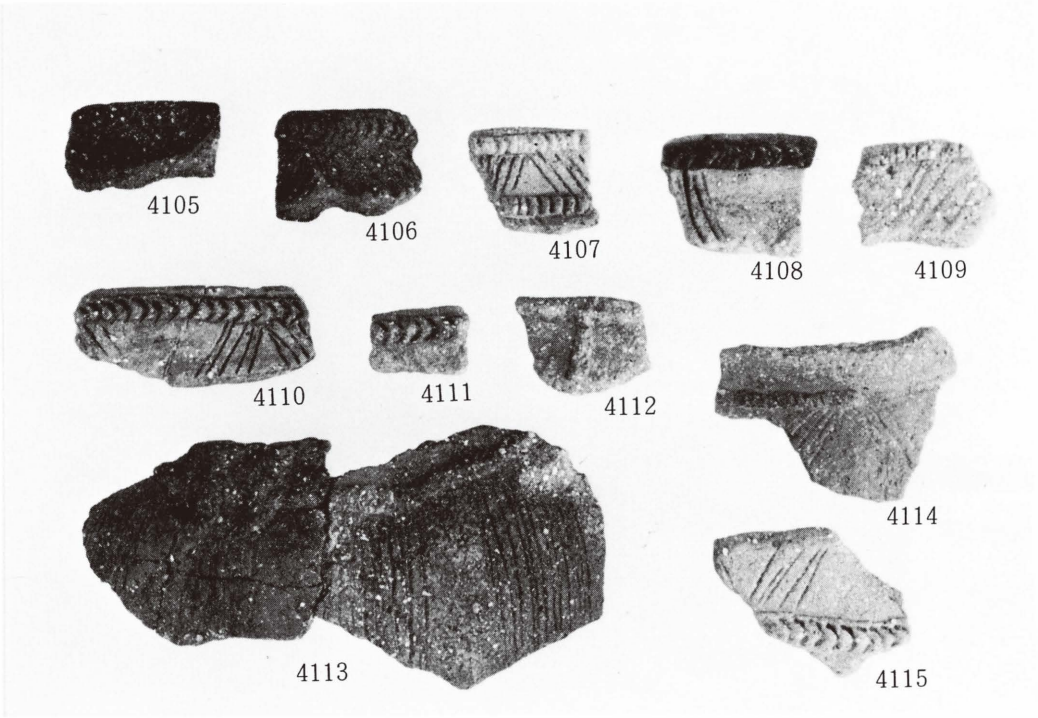
第 4 貝塚東洞部出土遺物(6)

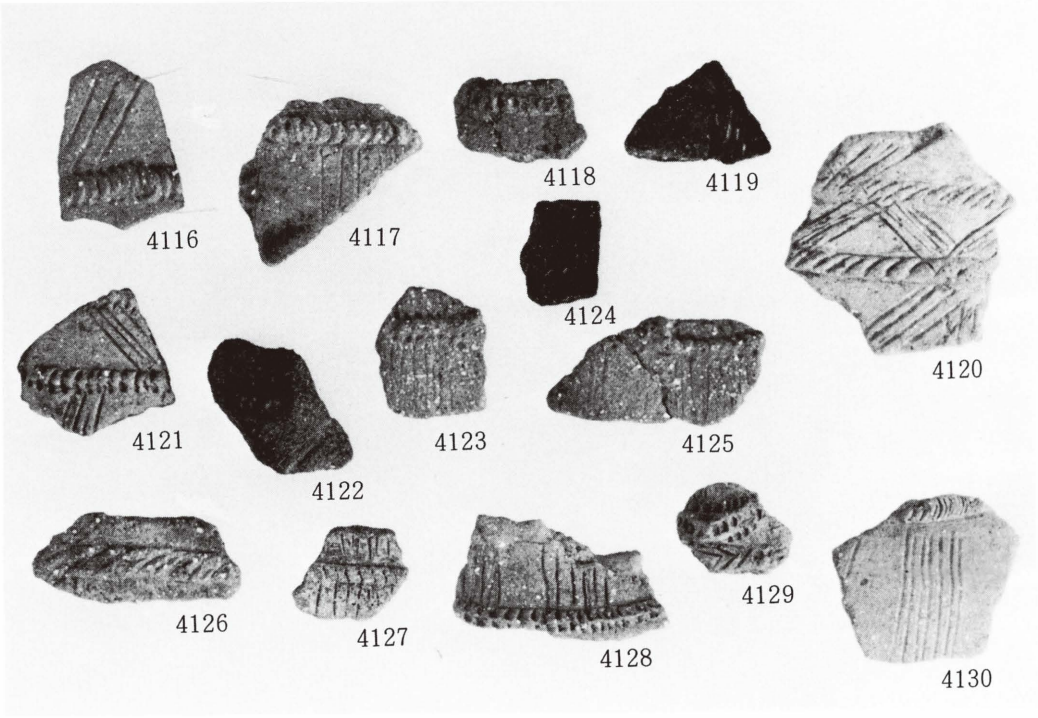
図版 44





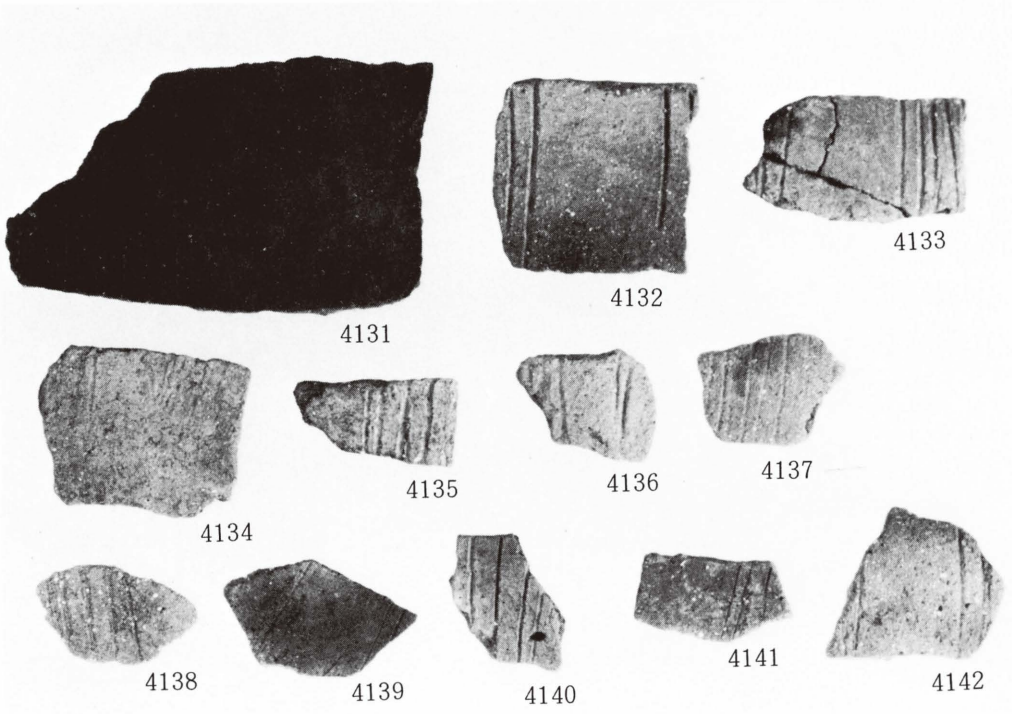
第 4 貝塚西洞部出土遺物(1)

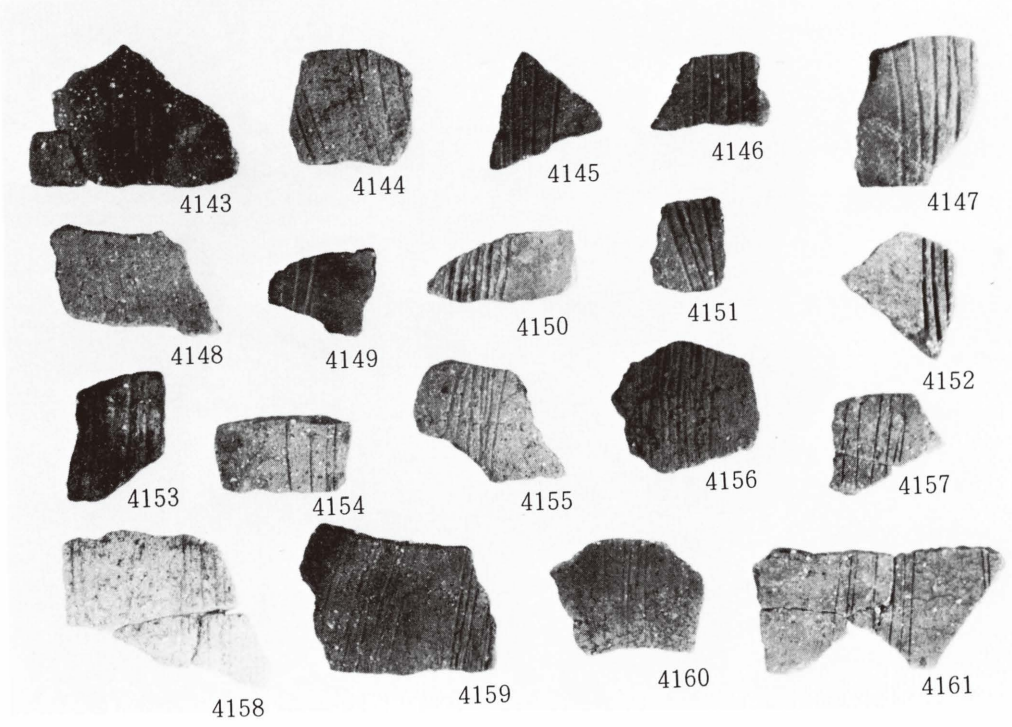




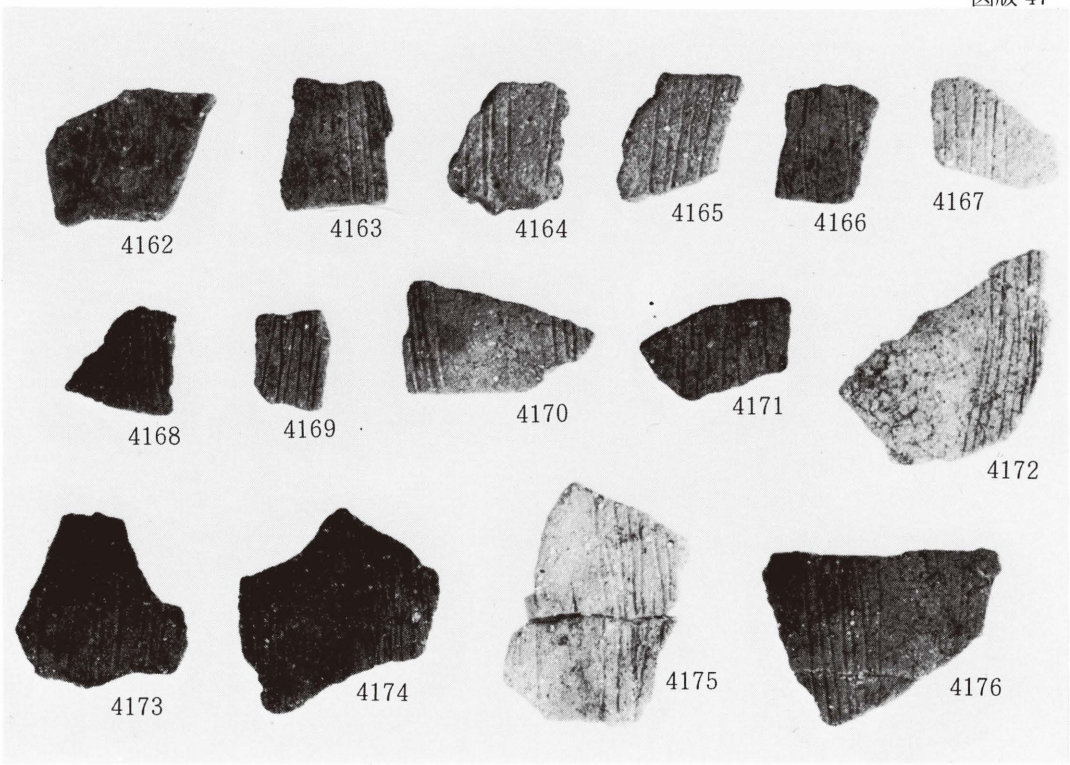
第 4 貝塚西洞部出土遺物(2)

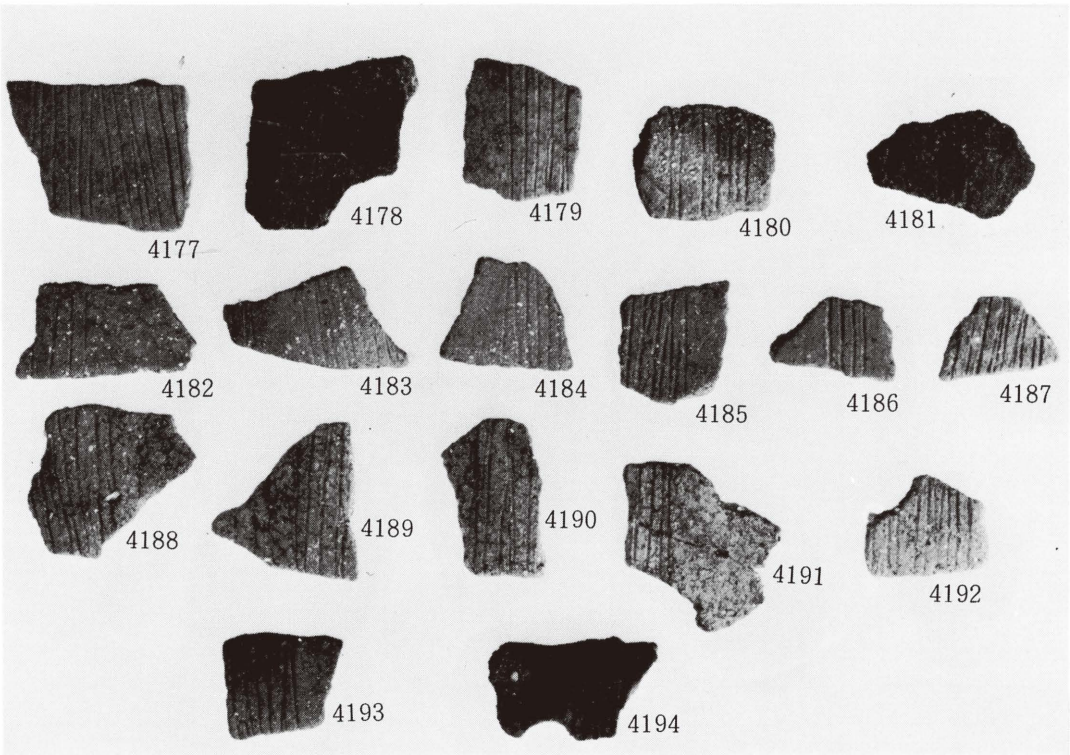
図版 46





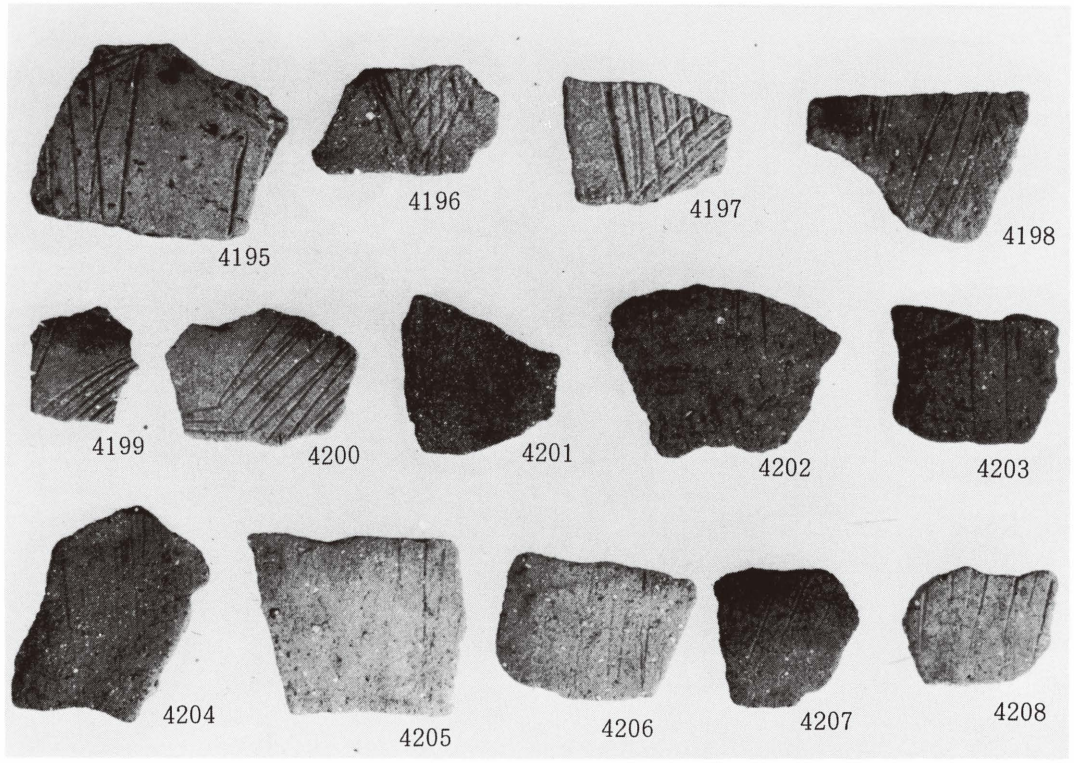
第 4 貝塚西洞部出土遺物(3)

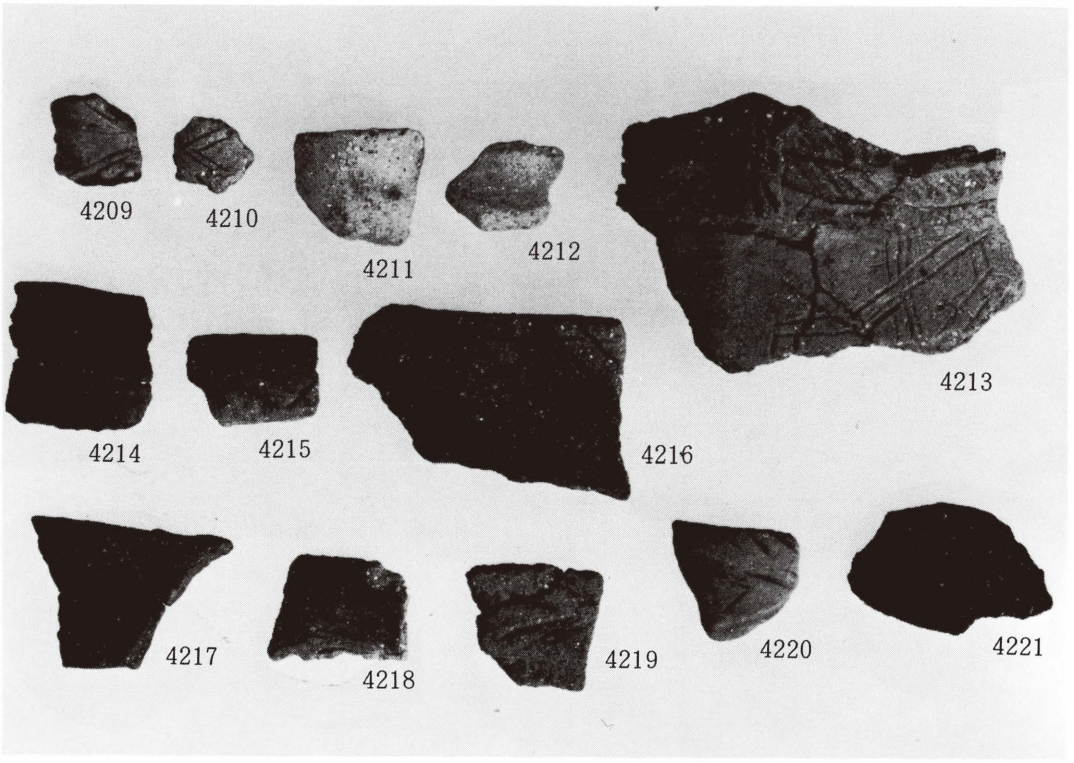




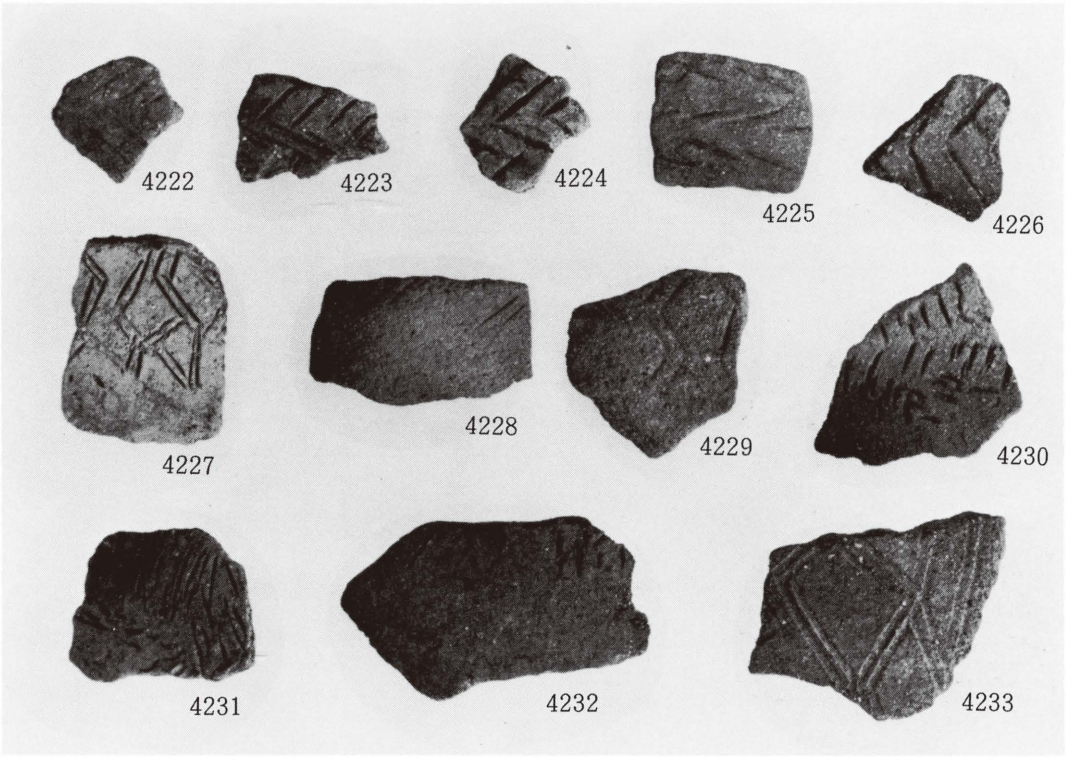
第 4 貝塚西洞部出土遺物(4)

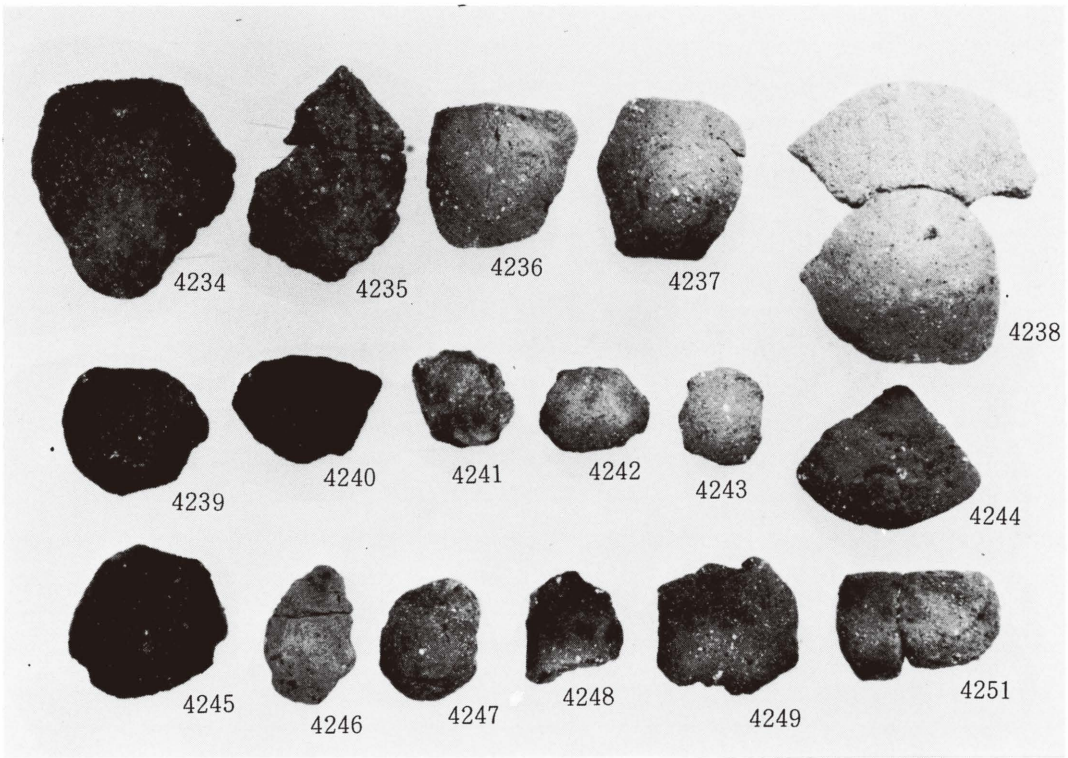
図版 48





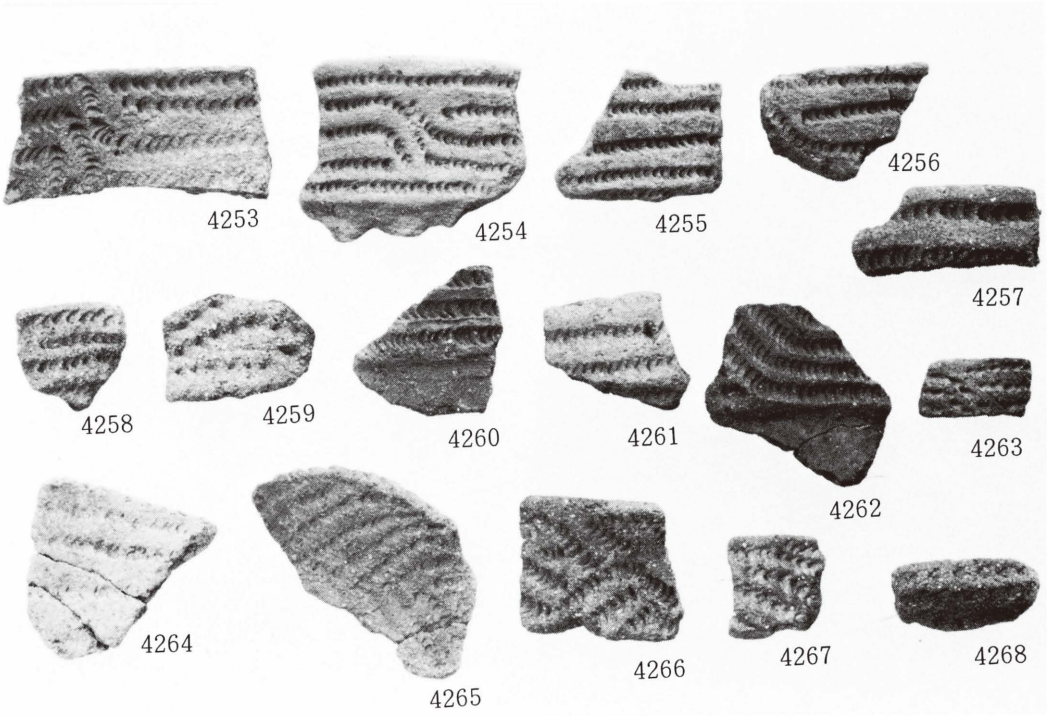
第 4 貝塚西洞部出土遺物(5)

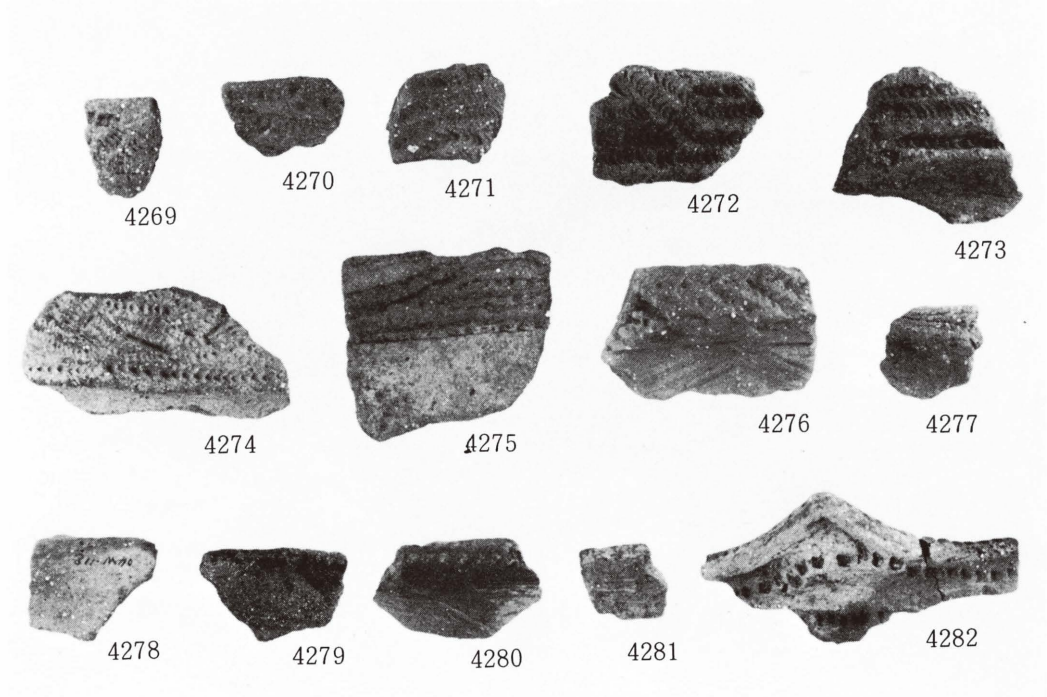




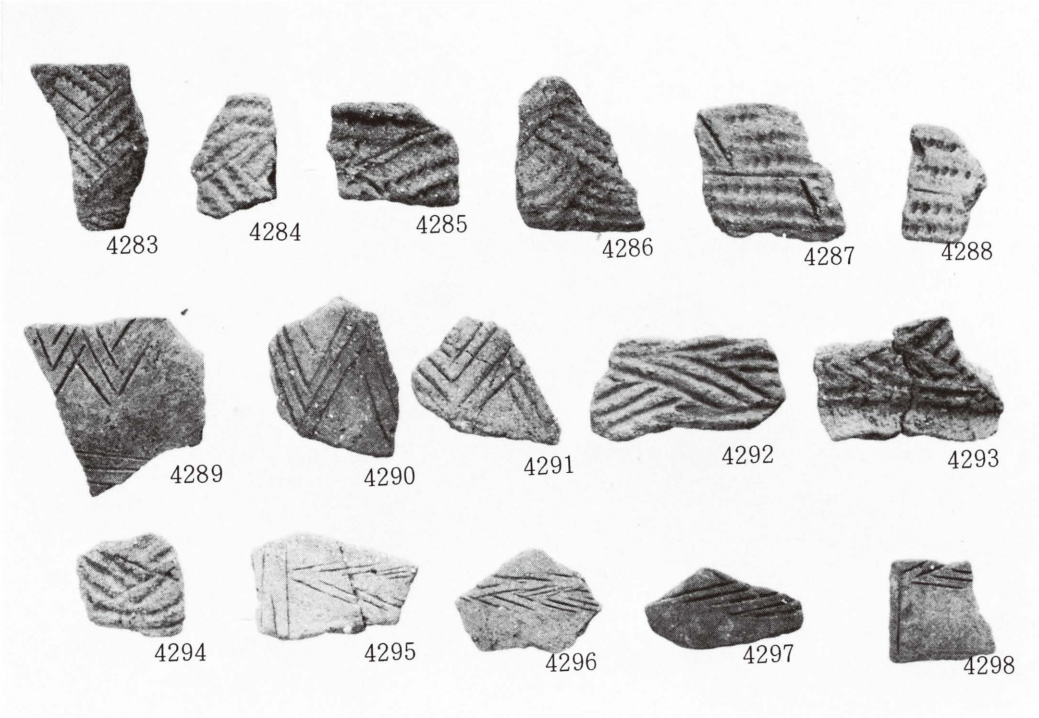
第 4 貝塚西洞部出土遺物(6)

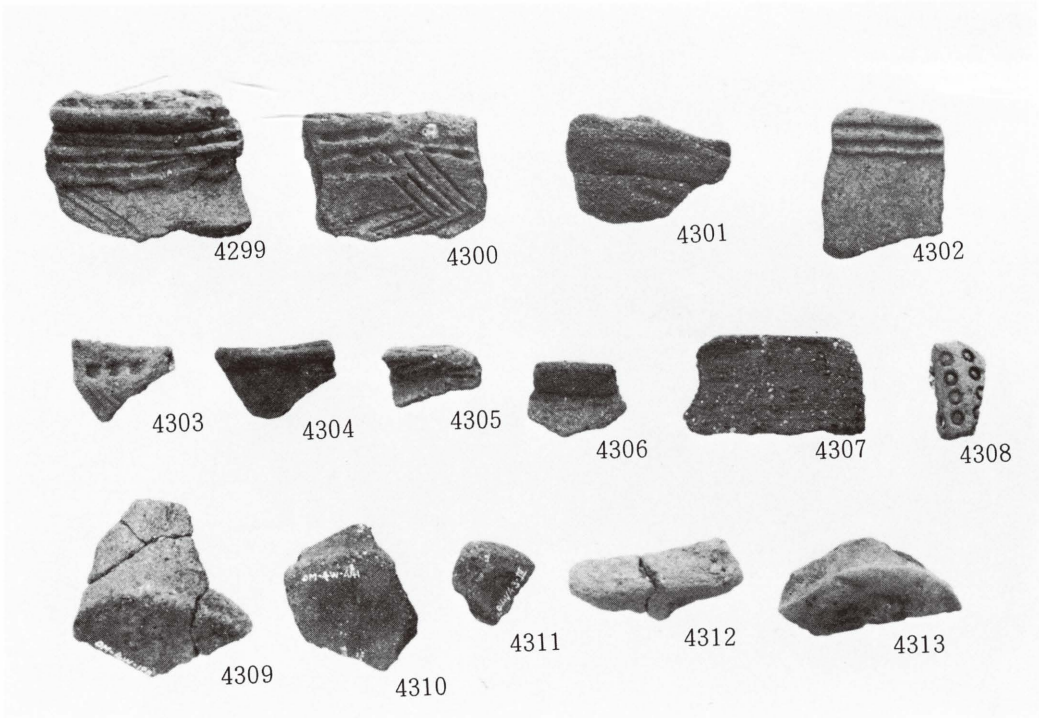
図版 50





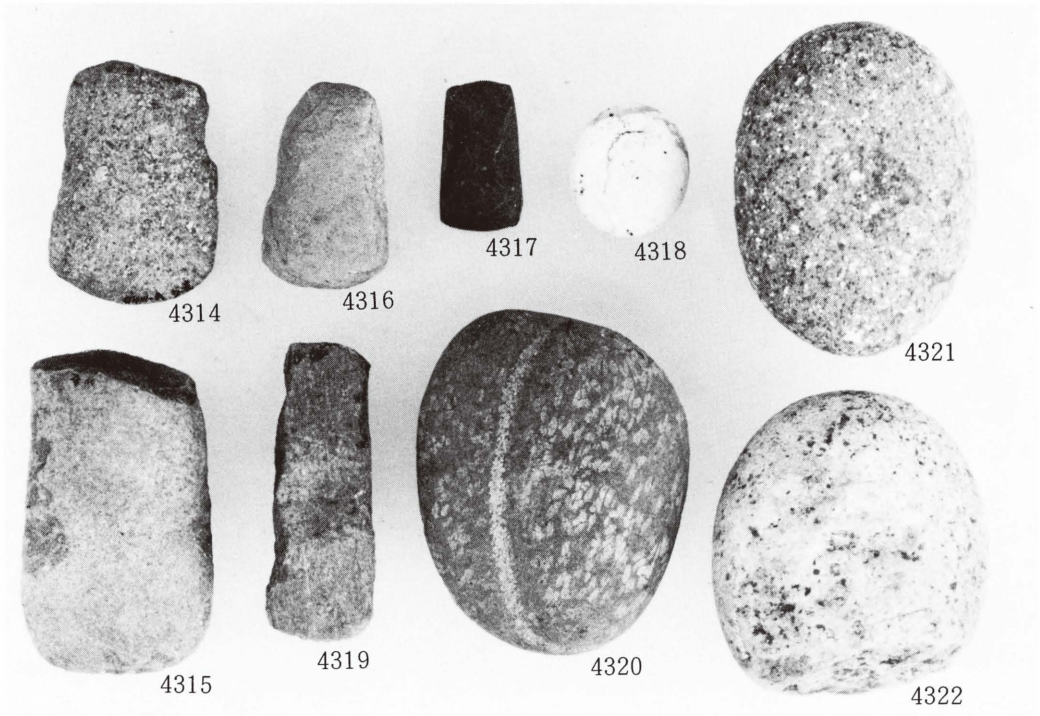
第 4 貝塚西洞部出土遺物(7)



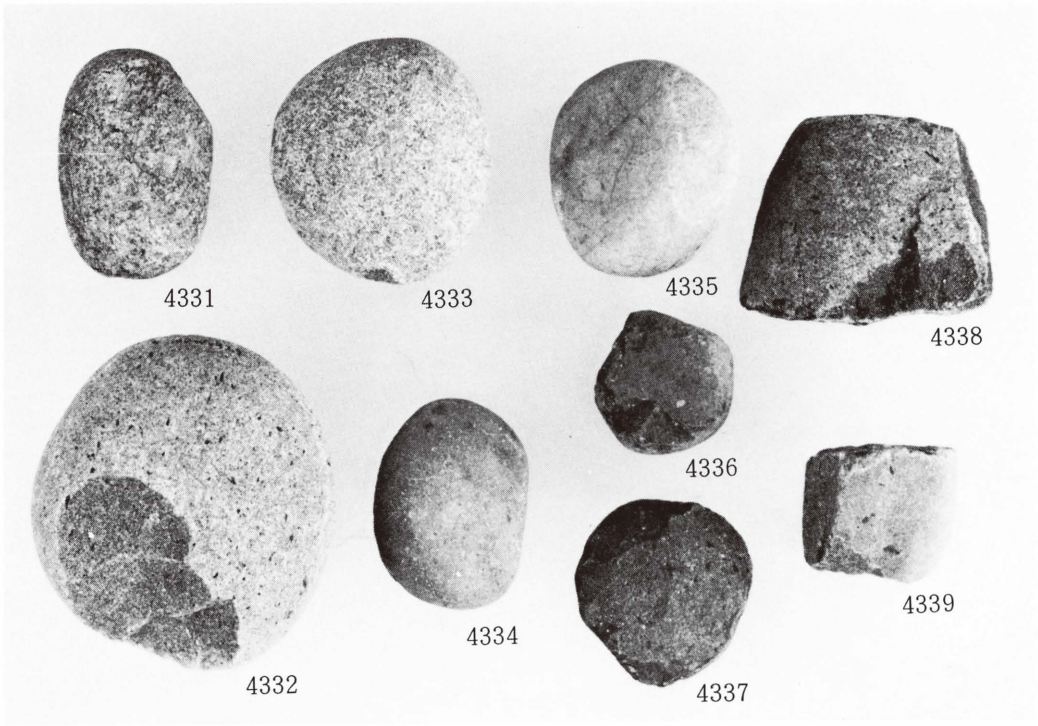


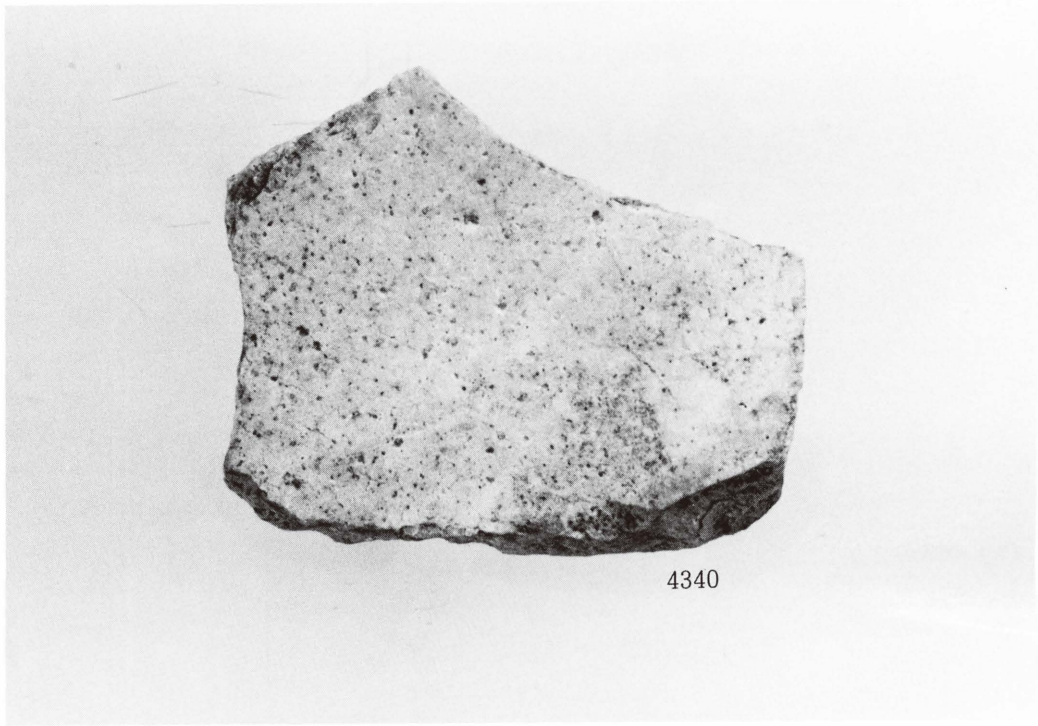
第 4 貝塚西洞部出土遺物(8)

図版 52



第 4 貝塚西洞部出土遺物(9)





第 4 貝塚西洞部出土遺物(10)

図版 54

第 4 貝塚西洞部出土遺物(11)

あ　と　が　き

伊仙町での重要遺跡確認緊急発掘調査は，本年度で３回目となった。

面縄貝塚群の調査が計画された時，遺跡の残存度が少ないのではないかという懸念も少々あったが，予想以上の成果を得ることができた。

調査は，県教育委員会や地元の人々，地主さんの好意により順調に進めることができました。記して感謝の意を表します。

発掘作業員　昭和57年度

伊東光房・中島源吉・伊藤武文・常善孝・四本政栄・有馬徳寿
徳雄一・伊藤米信・吉見テツ・義山秀子・中村富子・上木イワ・
伊集院君江・西シズ子・西山セツ子・稲田美枝子・泉光子・
泉トシ子・有馬喜久美・四本和美・勝原アキ子・永岡トヨ子・
福井静江・川畑ケイ子・富由美子・泉まどか・高野のり子・浜田良子

昭和59年度

嶺山純二・嶺山哲博・常善孝・稲田実三・中島源吉・福田秀光・
伊東武文・牧島世造・嶺山八重子・前田たに子・有馬喜久美・
常よし・荻田信子・東佐江子・徳山房子・高野リエ子・谷村信子・
前和子・池田ハル子・稲田ミヨ子

整理作業員　昭和57年度

河野陽子・橋口紀美子・野口久子・嶺田節子・佐々木優子

昭和59年度

木田安枝・高倉明美・山口富子・大木はるみ・七枝良子・
畑中床子・中原己美子・是枝佐百合

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

面　縄　貝　塚　群

（第１・２・３・４貝塚）

発行日　１９８５年３月
発行者　大島郡伊仙町教育委員会
〒891-82鹿児島県大島郡伊仙町伊仙
印刷所　有限会社　朝日印刷
〒890　鹿児島市上荒田町 854-1
TEL　0992-51-2191